

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第200集

白木野 I・II・III遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

序

本県には縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包含地があり、7,600カ所に及ぶ遺跡が確認されております。これら先人の残した文化遺産を保持し、後世に伝えていくことは、県民に課せられた責務であります。

一方、広大な面積を有する本県の大部分は山地であり、地域開発にともなう社会資本の充実も重要な一施策であります。得にも高速道路網の整備は、産業経済開発の大動脈として、多方面から期待されるところであります。

このような埋蔵文化財の保護、保存と開発との調和も今日的課題であり、当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センターの創設以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、記録保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、東北横断自動車道秋田線建設に関連して、平成4年度に発掘調査した白木野Ⅰ遺跡、白木野Ⅱ遺跡、白木野Ⅲ遺跡の調査結果をまとめたものであります。白木野Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ遺跡は秋田県境に近い鬼ヶ瀬川支流の細内川の西岸に位置し、調査の結果、白木野Ⅰ遺跡では縄文時代前期末から中期初頭にかけての遺構と遺物が、白木野Ⅱ、Ⅲ遺跡では近世初頭から近代にかけての遺構と遺物が発見され貴重な資料を提供することができました。

この報告書が広く活用され、新学の研究のみならず埋蔵文化財に対する理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査及び報告書作成に御協力、御支援を賜りました日本道路公団仙台建設局北上工事事務所、湯田町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より謝意を表します。

平成6年1月

財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 工藤 巖

例 言

1. 本報告書は岩手県和賀郡湯田町第68地割265-5に所在する白木野Ⅰ遺跡と湯田町第67地割150に所在する白木野Ⅱ遺跡、湯田町第67地割6-2に所在する白木野Ⅲ遺跡の発掘調査の結果を取録したものである。

2. 本遺跡の調査は岩手県教育委員会と日本道路公団仙台建設局との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。

3. 岩手県遺跡台帳の遺跡番号及び遺跡略号は以下のとおりである。

白木野Ⅰ遺跡 MD57-2322 SKⅠ-92

白木野Ⅱ遺跡 MD57-2384 SKⅡ-92

白木野Ⅲ遺跡 MD57-2350 SKⅢ-92

4. 発掘調査期間、調査担当者、調査面積は以下のとおりである。

白木野Ⅰ遺跡 平成4年9月1日～9月30日 羽柴直人、鎌田精造 3,000㎡

白木野Ⅱ遺跡 平成4年4月23日～8月31日 羽柴直人、鎌田精造 6,340㎡

白木野Ⅲ遺跡 平成4年10月1日～10月29日 羽柴直人、鎌田精造 1,300㎡

5. 室内整理期間及び整理担当者は以下のとおりである。

白木野Ⅰ遺跡 平成4年12月1日～12月28日 星 雅之、佐瀬 隆

白木野Ⅱ遺跡 平成4年11月2日～5年3月31日 羽柴直人、鎌田精造、山口博英

白木野Ⅲ遺跡 平成5年2月1日～3月31日 羽柴直人、鎌田精造

6. 本報告書の執筆担当者は以下のとおりである。

I 調査に至る経過 三浦謙一

II 立地と環境 佐瀬 隆

III 調査・整理の方法 羽柴直人

IV 白木野Ⅰ遺跡 星 雅之

V 白木野Ⅱ遺跡 羽柴直人

VI 白木野Ⅲ遺跡 羽柴直人

7. 出土遺物の分析、鑑定は以下の方に依頼した。

肥前陶磁器の鑑定 大橋康二 佐賀県立九州陶磁文化館

東北陶磁器の鑑定 檜山泰貴 中新田町立東北陶磁文化館

樹種同定 高橋利彦 木工会「ゆい」

石質鑑定 佐藤次郎 佐藤地質工学研究所

木製品の保存処理 釜石文化財保存処理センター

8. 発掘、整理、執筆にあたっては下記の方々にご指導いただいた。(順不同、敬称略)
- 小原徳精(湯田町白木野)、太田祖電(元沢内村村長)、井上喜久男(愛知県陶磁資料館)、
木村高(青森埋文)、利部修(秋田埋文)、鈴木宏(岩手県立博物館)、熊谷常正、小田野
哲憲(岩手県文化課)、本堂寿一(北上市立博物館)、稲野彰子、浅田知世(北上埋文)
9. 本遺跡の調査で得られた一切の資料は岩手県埋蔵文化財センターが保管している。

凡 例

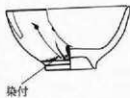
1. 本報告書の実測図の縮尺はそれぞれの図版に記したが、原則として以下のとおりである。
①遺構 建物・溝1/100、竪穴遺構・土坑・池1/60、埋設土器遺構1/15
②遺物 陶磁器・漆器・木製品・ガラス製品1/3、縄文土器1/3、1/4、鉄貨1/1、金属製品・
ガラス製品1/2、石製品1/2、1/3、剥片石器1/2、礫石器1/3
2. 遺物観察表中の()内数値は最大現存値、又は推定値を表す。
3. 陶磁器観察表中の製作地で「肥前」というのは唐津、有田、波佐見等の総称である。「白岩」は秋田県角館町の白岩窯のことを指しているが、その系統の窯も含んだ意味で使用している。また表中の年代は製作年代のことを指している。
4. 陶磁器の鑑定は例言に記したとおり、大橋康二氏、檜山泰貴氏にお願いしたが、全ての陶磁器を鑑定して頂いたのではなく、文献を参考に羽柴がおこなったものもあり、全てが大橋康二氏、檜山泰貴氏の見解ではない。また肥前陶磁等の用語については「国内出土の肥前陶磁」(九州陶磁文化館1984)の170～177頁の用語解説にしたがっている。
5. 写真図版の縮尺は不定である。遺物番号は実測図番号と同一である。
6. 実測図の表現、使用したスクリーントーンの種別は図に示したとおりである。
7. 建物に組みなかつた柱穴状のピットは遺構配置図中に載せてある。



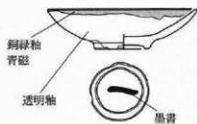
柱状



地山



染付

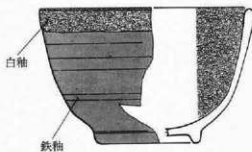


銅緑釉

青磁

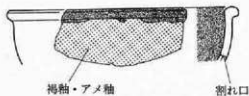
透明釉

墨書



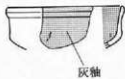
白釉

鉄釉

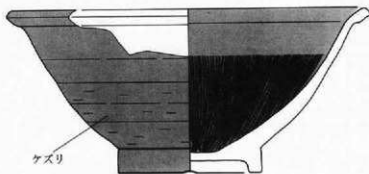


褐釉・アメ釉

割れ口



灰釉



ケズリ

凡例

目 次

序
例言
凡例

[本 文]

I 調査に至る経過	2	(1) 磁器	131
II 遺跡の立地と環境		(2) 陶器	153
1 遺跡の位置	3	(3) 漆器	176
2 遺跡の地形と地質	3	(4) 木製品	176
3 遺跡の基本層序	6	(5) 銭貨	196
4 周辺の遺跡	9	(6) 金属製品	196
III 調査・整理の方法		(7) ガラス製品	197
1 野外調査	12	(8) 石製品	207
2 室内整理	13	(9) 土製品	207
IV 白木野 I 遺跡		(10) 縄文時代の石器	208
1 検出された遺構	19	3 まとめ	216
2 出土遺物	21	(1) 屋敷跡の変遷について	216
(1) 土器	21	(2) 出土陶磁器の時期別の 構成について	220
(2) 土製品	22	(3) 発掘調査以外で得られた知見	227
(3) 石器	22	付編 湯田町白木野 II 遺跡	
3 まとめ	24	出土材の樹種	229
V 白木野 II 遺跡		VI 白木野 III 遺跡	
1 検出された遺構	59	1 検出された遺構	314
(1) 建物	59	2 出土遺物	316
(2) 池	85	(1) 磁器	316
(3) 溝	96	(2) 陶器	316
(4) 杭列	109	(3) 石製品	316
(5) 竪穴遺構	111	3 まとめ	320
(6) 土坑	115		
2 出土遺物	131		

〔図版・表〕

(I~III)

第1図	遺跡位置図……………	1
第2図	平鹿盆地の東西両縁部を含む 東西断面図……………	3
第3図	平鹿盆地付近の地質図……………	4
第4図	鬼ヶ瀬川流域の段丘面分布……………	5
第5図	白木野I遺跡基本層序……………	6
第6図	白木野II遺跡基本層序……………	7
第7図	白木野III遺跡基本層序……………	8
第8図	周辺の遺跡位置図……………	11

(IV白木野I遺跡)

第1図	白木野I遺跡グリッド・遺構 配置図……………	17
第2図	捨て場平面断面図……………	20
第3図	埋設土器……………	26
第4図	土器実測図(1)……………	27
第5図	土器実測図(2)……………	28
第6図	土器拓影図(1)……………	29
第7図	土器拓影図(2)……………	30
第8図	土器拓影図(3)……………	31
第9図	土器拓影図(4)……………	33
第10図	土器拓影図(5)……………	34
第11図	土器拓影図(6)……………	35
第12図	石器実測図(1)……………	37
第13図	石器実測図(2)……………	38
第14図	石器実測図(3)……………	39
第1表	石器観察一覧表……………	40

(V白木野II遺跡)

第1図	白木野II遺跡調査区……………	55
第2図	調査区東側遺構配置図……………	56
第3図	調査区西側遺構配置図……………	57・58
第4図	1号建物……………	61・62
第5図	2号建物……………	63

第6図	3号建物……………	65
第7図	4号建物……………	67
第8図	5号建物……………	69
第9図	6号建物……………	72
第10図	7、8号建物……………	74
第11図	9、10号建物……………	76
第12図	11、12号建物……………	78
第13図	13、14号建物……………	80
第14図	14号建物内おけ埋設……………	81
第15図	15、16号建物……………	82
第16図	17、18、19号建物……………	84
第17図	1号池……………	86
第18図	2、3、4号池……………	89・90
第19図	5号池……………	93・94
第20図	7号池……………	96
第21図	1、2、3、8号溝 1、2、3、4号杭列……………	98
第22図	4、5、6、7、9号溝……………	101・102
第23図	10、11、12、13号溝……………	106
第24図	14、15、16、17号溝……………	108
第25図	1、2号竪穴遺構……………	112
第26図	3号竪穴遺構……………	114
第27図	1号土坑……………	115
第28図	2号土坑……………	116
第29図	3号土坑……………	118
第30図	6、7号土坑……………	119
第31図	8、9号土坑……………	121
第32図	10、11、12、13号土坑……………	123
第33図	14、15、16、17、18号土坑……………	126
第34図	19、20、21、23、24号土坑……………	129
第35図	陶磁器実測図(1) 1~9……………	134
第36図	陶磁器実測図(2) 10~21……………	135
第37図	陶磁器実測図(3) 22~32……………	136
第38図	陶磁器実測図(4) 33~41……………	137
第39図	陶磁器実測図(5) 42~47……………	138
第40図	陶磁器実測図(6) 48~53……………	139
第41図	陶磁器実測図(7) 54~59……………	140
第42図	陶磁器実測図(8) 60~68……………	141

第 43図	陶磁器実測図(9)	69~72.....142
第 44図	陶磁器実測図(10)	73~75.....143
第 45図	陶磁器実測図(11)	76~77.....144
第 46図	陶磁器実測図(12)	78.....145
第 47図	陶磁器実測図(13)	79.....146
第 48図	陶磁器実測図(14)	80.....147
第 49図	陶磁器実測図(15)	81.....148
第 50図	陶磁器実測図(16)	82.....149
第 51図	陶磁器実測図(17)	83~86.....150
第 52図	陶磁器実測図(18)	87~96.....151
第 53図	陶磁器実測図(19)	97~101.....152
第 54図	陶磁器実測図(20)	102~109.....155
第 55図	陶磁器実測図(21)	110~118.....156
第 56図	陶磁器実測図(22)	119~123.....157
第 57図	陶磁器実測図(23)	124~130.....158
第 58図	陶磁器実測図(24)	131~136.....159
第 59図	陶磁器実測図(25)	137~140.....160
第 60図	陶磁器実測図(26)	141~146.....161
第 61図	陶磁器実測図(27)	147~152.....162
第 62図	陶磁器実測図(28)	153~156.....163
第 63図	陶磁器実測図(29)	157~161.....164
第 64図	陶磁器実測図(30)	162~163.....165
第 65図	陶磁器実測図(31)	164.....166
第 66図	陶磁器実測図(32)	165~167.....167
第 67図	陶磁器実測図(33)	168~169.....168
第 68図	陶磁器実測図(34)	170~171.....169
第 69図	陶磁器実測図(35)	172~174.....170
第 70図	陶磁器実測図(36)	175~177.....171
第 71図	陶磁器実測図(37)	178~179.....172
第 72図	陶磁器実測図(38)	180~181.....173
第 73図	陶磁器実測図(39)	182~187.....174
第 74図	陶磁器実測図(40)	186~187.....175
第 75図	漆器実測図	201~206.....178
第 76図	木製品実測図(1)	207~208.....179
第 77図	木製品実測図(2)	209.....180
第 78図	木製品実測図(3)	210~211.....181
第 79図	木製品実測図(4)	212~213.....182
第 80図	木製品実測図(5)	214~215.....183
第 81図	木製品実測図(6)	216~219.....184
第 82図	木製品実測図(7)	220~224.....185
第 83図	木製品実測図(8)	225~226.....186

第 84図	木製品実測図(9)	227~232.....187
第 85図	木製品実測図(10)	233~252.....188
第 86図	木製品実測図(11)	253~256.....189
第 87図	木製品実測図(12)	257~262.....190
第 88図	木製品実測図(13)	263~267.....191
第 89図	木製品実測図(14)	268~270.....192
第 90図	木製品実測図(15)	271.....193
第 91図	木製品実測図(16)	272~273.....194
第 92図	木製品実測図(17)	274.....195
第 93図	銭貨実測図(1)	301~308.....198
第 94図	銭貨実測図(2)	309~316.....199
第 95図	銭貨実測図(3)	317~324.....200
第 96図	銭貨実測図(4)	325~333.....201
第 97図	銭貨実測図(5)	334~342.....202
第 98図	金属製品実測図(1)	343~346.....203
第 99図	金属製品実測図(2)	347~351.....204
第100図	金属製品実測図(3)	352~357.....205
第101図	ガラス製品実測図	358~362.....206
第102図	石製品実測図(1)	363~365.....209
第103図	石製品実測図(2)	366~368.....210
第104図	石製品実測図(3)	369~372.....211
第105図	石製品実測図(4)	373~376.....212
第106図	石製品実測図(5)	377~381.....213
第107図	石製品実測図(6)	382.....214
第108図	土製品、縄文時代の石器実測図	382~390.....215
第109図	屋敷跡の変遷図(1)217
第110図	屋敷跡の変遷図(2)218
第111図	17世紀初~1690年代の陶磁器221
第112図	1690~1780年代の陶磁器(1)222
第113図	1690~1780年代の陶磁器(2)223
第114図	1780~19世紀代の陶磁器(1)225
第115図	1780~19世紀代の陶磁器(2)226

(白木野Ⅲ遺跡)

第 1 図	白木野Ⅲ遺跡グリッド・遺構 配置図313
第 2 図	1号建物315
第 3 図	陶磁器実測図(1)	1~7.....317
第 4 図	陶磁器実測図(2)	8~13.....318
第 5 図	石製品実測図	14~16.....319

写真図版53	遺物㉔	陶器182～187 ……293
写真図版54	遺物㉕	漆器201～206 木製品207～208 ……294
写真図版55	遺物㉖	木製品209～211 ……295
写真図版56	遺物㉗	木製品212～218 ……296
写真図版57	遺物㉘	木製品219～225 ……297
写真図版58	遺物㉙	木製品226～256 ……298
写真図版59	遺物㉚	木製品257～269 ……299
写真図版60	遺物㉛	木製品270～274 ……300
写真図版61	遺物㉜	銭貨301～310 ……301
写真図版62	遺物㉝	銭貨311～320 ……302
写真図版63	遺物㉞	銭貨321～331 ……303
写真図版64	遺物㉟	銭貨332～342 ……304
写真図版65	遺物㊱	金属製品343～353 ……305
写真図版66	遺物㊲	ガラス製品358～362 石製品363～364 ……306

写真図版67	遺物㊳	石製品365～375 ……307
写真図版68	遺物㊴	石製品376～382 ……308
写真図版69	遺物㊵	土製品383～385 石器386～390 ……309

(白木野III遺跡)

写真図版 1	調査前、基本土層 ……323
写真図版 2	1号建物 ……324
写真図版 3	遺物(1) 陶磁器 1～9 ……325
写真図版 4	遺物(2) 陶磁器10～13 石製品14～16 ……326

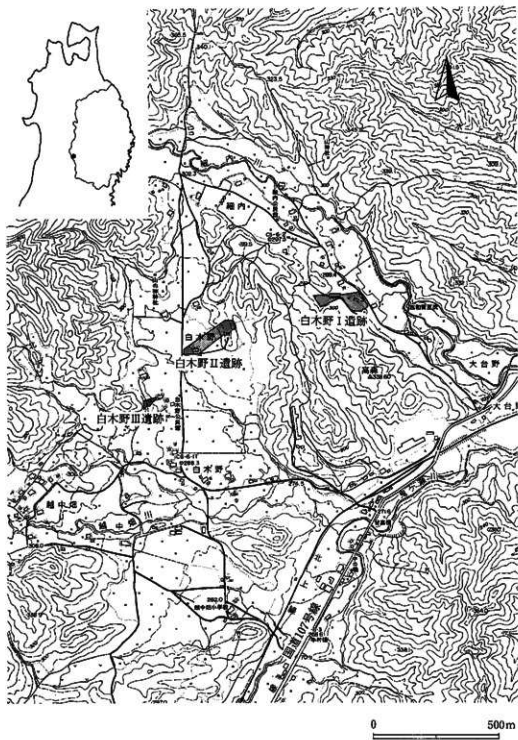
〔写真図版〕

（白木野Ⅰ遺跡）

写真図版 1	全景、埋設土器遺構……………43
写真図版 2	基本層序、捨て場……………44
写真図版 3	出土土器(1)……………45
写真図版 4	出土土器(2)……………46
写真図版 5	出土土器(3)……………47
写真図版 6	出土土器(4)……………48
写真図版 7	出土土器(5)……………49
写真図版 8	出土土器(1)……………50
写真図版 9	出土土器(2)……………51
写真図版 10	出土土器(3)……………52

（白木野Ⅱ遺跡）

写真図版 1	調査区西側屋敷跡……………241
写真図版 2	出土陶磁器 1～29……………242
写真図版 3	出土陶磁器 42～63……………243
写真図版 4	出土陶磁器 64～76、87、 90、97……………244
写真図版 5	出土陶磁器 77～79、82……………245
写真図版 6	出土陶磁器 107～115、 119、134、 137、148……………246
写真図版 7	遺構(1) 調査区遠景他……………247
写真図版 8	遺構(2) 1号建物……………248
写真図版 9	遺構(3) 2、3号建物……………249
写真図版 10	遺構(4) 3、4号建物……………250
写真図版 11	遺構(5) 4、5号建物……………251
写真図版 12	遺構(6) 6～10号建物……………252
写真図版 13	遺構(7) 11～15号建物……………253
写真図版 14	遺構(8) 16～19号建物、 1号池……………254
写真図版 15	遺構(9) 1～4号池……………255
写真図版 16	遺構(10) 5、7号池 1号溝……………256
写真図版 17	遺構(11) 2～5、8号溝 1～4号杭列……………257
写真図版 18	遺構(12) 6、9、10号溝……………258
写真図版 19	遺構(13) 11～17号溝……………259
写真図版 20	遺構(14) 1、2号竪穴遺構……………260
写真図版 21	遺構(15) 3号竪穴遺構 1、15号土坑……………261
写真図版 22	遺構(16) 2、3、6号土坑……………262
写真図版 23	遺構(17) 6～9号土坑……………263
写真図版 24	遺構(18) 11～13号土坑……………264
写真図版 25	遺構(19) 14～17号土坑……………265
写真図版 26	遺構(20) 19～21号土坑……………266
写真図版 27	遺構(21) 23、24号土坑 Pit 261柱根……………267
写真図版 28	遺構(22) 防空壕跡 その他……………268
写真図版 29	遺物(1) 磁器 1～21……………269
写真図版 30	遺物(2) 磁器 22～31……………270
写真図版 31	遺物(3) 磁器 32～41……………271
写真図版 32	遺物(4) 磁器 42～51……………272
写真図版 33	遺物(5) 磁器 52～63……………273
写真図版 34	遺物(6) 磁器 64～73……………274
写真図版 35	遺物(7) 磁器 74～77……………275
写真図版 36	遺物(8) 磁器 78……………276
写真図版 37	遺物(9) 磁器 79……………277
写真図版 38	遺物(10) 磁器 80……………278
写真図版 39	遺物(11) 磁器 81……………279
写真図版 40	遺物(12) 磁器 28～87……………280
写真図版 41	遺物(13) 陶磁器 88～102……………281
写真図版 42	遺物(14) 陶器 103～112……………282
写真図版 43	遺物(15) 陶器 113～121……………283
写真図版 44	遺物(16) 陶器 122～136……………284
写真図版 45	遺物(17) 陶器 137～145……………285
写真図版 46	遺物(18) 陶器 146～152……………286
写真図版 47	遺物(19) 陶器 153～161……………287
写真図版 48	遺物(20) 陶器 162～163……………288
写真図版 49	遺物(21) 陶器 164～169……………289
写真図版 50	遺物(22) 陶器 170～173……………290
写真図版 51	遺物(23) 陶器 174～177……………291
写真図版 52	遺物(24) 陶器 178～181……………292



第1図 遺跡位置図

I. 調査に至る経過

東北横断自動車道秋田線は岩手県北上市から秋田県秋田市に至る総延長107kmの高速道路である。このうち、第9次・第10次施工命区間は北上ジャンクションから秋田県境までの延長33.9kmである。

この区間の埋蔵文化財包蔵地については岩手県教育委員会が昭和56年から分布調査を行ってきたが、日本道路公団仙台建設局からの分布調査結果の照会に対して昭和62年5月に回答している。それに基づいた両者の協議の結果、やむを得ず消滅する遺跡については事前の発掘調査を実施することとした。

昭和63年以降、岩手県教育委員会が日本道路公団仙台建設局に発掘調査事業について照会して回答を得たのち、日本道路公団仙台建設局と岩手県教主委員会、(財)岩手県文化振興事業団の3者の協議を経て、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが発掘調査を実施することとした。

白木野Ⅰ・白木野Ⅱ・白木野Ⅲの3遺跡の調査は、(財)岩手県文化振興事業団が平成4年度埋蔵文化財調査事業の通知を平成4年2月12日付け教文第910号で岩手県教育委員会から受け、同年4月1日付けの委託契約によって着手した。しかし、調査の進捗につれて、白木野Ⅱ遺跡は当初の調査対象面積6,000㎡の範囲よりも南へ遺構や遺物の分布が広がっていることが明らかになり、文化課の調整を受けて計画を変更し、340㎡を追加して調査した。なお、それに伴い、平成4年8月26日付け教文第602号で計画変更の通知を受けた。

II. 立地と環境

1. 遺跡の位置

本遺跡の所在する湯田町は岩手県中央部の西端に位置し、東は北上市、西は秋田県雄勝郡東成瀬村、同県平鹿郡山内村、同県仙北郡六郷村、北は同県仙北郡千畑町、岩手県和賀郡沢内村、南は岩手県胆沢郡胆沢町と境を接している。同町は奥羽山脈の山間部に開けた沢内盆地の中央にあり、周囲を同山脈の山嶺に囲まれている。主な山嶺は、北から女神山(956m)、割倉山(770m)、白木峠(601m)、三森山(1,102m)、蟻巣山(1,155m)、三界山(1,381m)、南本内岳(1,486m)、焼石岳(1,548m)、牛形岳(1,889m)、鷲ヶ森山等である。町の総面積の82%が山林であり、11%が原野で占められている。和賀岳(1,440m)に源を発した和賀川は湯田町中部を南流したのち、川尻付近で直角状に折れて東流する。川尻を中心に、北に湯本、湯田、左草、下前、西に柳沢、新田郷、南に湯川、鷲之巣、大石、草井沢などの集落は、和賀川とその支流である数本の川が開析した段丘の上に散在している。気候は真日本式で、県内では最も雨量が多く、豪雪地帯として知られている。J R北上線が町の中央を横断し、湯田錦秋湖・ほっと湯田・湯田高原の3駅がある。国道107号線(通称平和街道)がほぼこれと並走する。

2. 遺跡の地形と地質

奥羽脊梁山脈は、東北地方を450kmにおよび南北につらなる一大山脈である。それはユーラシアプレートと太平洋プレートの境界である日本海溝にほぼ平行しており、プレート押力の結果として生じた大きな背斜構造としてとらえられるが、細かくみればそれぞれ地形的山脈と対応した雁行配列を示す小単位の背斜構造に分解される。たとえば、遺跡の位置する湯田町が含まれる地域は、南に向かって高度を下げる西側の和賀岳、割倉山背斜から逆に高度を上げる荒沢森背斜への脊梁山脈の移行部にあたる。両背斜間には花山向斜が存在し、平鹿盆地と呼ばれる地形的凹地に対応する(第2図)。なお、このような構造の特徴は、当地域に奥羽脊梁山脈中で

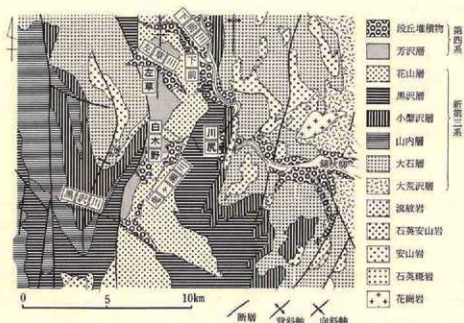
W ——— 割倉山背斜 ——— 平鹿盆地 ——— 脊梁山脈 E



第2図 平鹿盆地の東西両縁部を含む東西断面図(長谷地質調査事務所(1983))

最も低い分水界 (285m) が存在することと無関係ではなからう。河川の流向も地質構造の支配を受けている。北上川の主要支流の一つである和賀川は、その下流部において上記移行部の相対的低地を東西方向に流れる。荒沢森背斜を横切る和賀仙人では先行谷的性格の峡谷を形成している。一方、上流部では構造軸に平行に南流する。

第3図は湯田町付近の地質分布を示す。背斜部は主に第三系中新統下部、大荒沢層、大石層、小繫沢層などのグリーンタフ系の凝灰質岩により構成される。向斜部、平鹿盆地には、前記のグリーンタフ系の凝灰質岩を基盤として、砂岩を主とする中新統上部の黒沢層、同じく砂岩を主とする中新統上部～鮮新統の花山層が堆積する。これらを不整合に被い未固結の砂礫、粘土を主とし亜炭化した泥炭層を伴う第四系の花山層が堆積する。芳沢層は扇状地堆積物の層相を呈する。



第3図 平鹿盆地付近の地質図(長谷地質調査事務所(1981)による)

第4図は、遺跡の位置する鬼ヶ瀬川流域の地形分布図である。段丘は白木野(新称)、越中畑(新称)、大台野 (Toyoshima, 1984)、小繫沢 (Toyoshima, 1984) の4面に区分される。大台野、小繫沢の両面の形成には最終水期後半の気候変動が関係する (Toyoshima, 1984)。すなわち、小雨寒冷気候下で、河川の運搬力を上回り供給された砂礫などから厚い谷堆積物が形成され、その後、気候の温暖湿潤化に伴い、河川の浸食力が増加することで、まず、谷堆積物を構成層とする大台野面の離水が生じた。さらに勾配のより小さい流路にそっては、側方浸食も働いて谷堆積物を浸食面とする小繫沢面が形成されたと考えられている (Toyoshima, 1984)。埋



第4図 鬼ヶ瀬川流域の段丘面分布 (Toyoshima (1984) に一部加筆)

積から浸食への転換期は、約2万年前と推定される (Toyoshima, 1984)。両面は中川ほか (1971) の川尻段丘に相当する。川尻段丘は和賀川下流域の金ヶ崎段丘に対比される (中川ほか, 1971)。細内川と越中畑川に挟まれた約310mの定高性を示す丘陵を白木野面と呼称する。黒沢層、花山層を基盤とし、芳沢層を水平にのせる。未固結の砂礫、粘土を主とする芳沢層は白木野面の構成層と考えられる。同質の地形面は、越中畑川右岸にも残存し、さらに、北方の柳沢、左草地区にも分布が認められる。また、泉境付近の北上線の北方隣接域に約290mの定高性を示す扇状地形が存在する。北上線が通る県境の谷からかつて流出していた鬼ヶ瀬川へ合流していた河川により形成された扇状地と考えられる。この河川は、その上流部を黒沢川の支流である田代沢により奪われ半ば死んでいる。

なお、白木野II遺跡は白木野面と大台野面にまたがり、また、白木野I、III遺跡は大台野面に立地する。

〈地形・地質関係の参考・引用文献〉

Toyoshima, M. (1984) The Sequence of River Terrace Development in the Last 20,000 Years in the Ou Backbone Range, Northeastern Japan. *the Science Reports of the Tohoku University, 7th Series (Geography)*, 34, 88-105.

岩手県 (1979) 北上山系開発地域・土地分類基本調査「川尻」5万分の1・国土調査

中川久夫・石田琢二・大池昭二・小野寺信吾・北崎 修・松山 力 (1971) 北上線沿線の段丘群

東北大学地質古生物研報, No.71, 47-59

長谷地質調査事務所 (1981) 北上川流域地質図 (二十万分の一) 説明書

日本の地質「東北地方」編集委員会 (1989) 日本の地質2・東北地方、共立出版

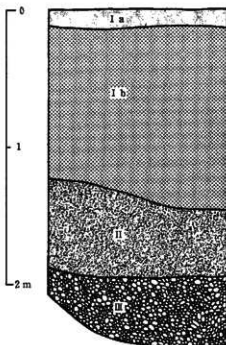
3. 遺跡の基本層序

(1) 白木野 I 遺跡 (第 5 図)

白木野 I 遺跡の現況は水田及び畑地である。調査区西側ほど標高が高くなり、いわゆる段々畑状に水田が開拓されており、旧地形を削平、盛土することによって平坦面としている。よって遺物を包含する土層(II層)は、調査区東側のO48～P48グリッド付近にのみ残存していた。

水田跡及び畑地跡の耕作土を一括して I a 層とした。若干の縄文土器小片・石器が出土した。耕作土の下部に堆積した盛土を、I b 層とした。ビニールなど現代のゴミが混入されており、出土遺物はない。II層は草根を多量に含んだ黒色土で、本遺跡の遺物はほとんどが同層より出土している。III層は円礫を多量に含む砂質土で、人為が介入していない層である。尚土層柱状図はP48グリッド付近で作成したものである。

- | | | |
|-------|-------------------|---------------------|
| I a 層 | 黒褐色土 (10Y R2/1) | 小礫を多量に含む。耕作土。 |
| I b 層 | 黄橙色ローム (10Y R7/8) | 褐灰色砂質土と黒色土が混じる。盛土。 |
| II 層 | 黒色土 (10Y R1.7/1) | 草根を多量に含む。縄文土器、石器出土。 |
| III 層 | 褐灰色土 (10Y R4/1) | 円礫を多量に含む。 |

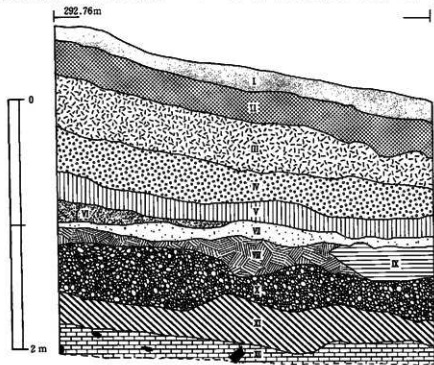


第5図 白木野 I 遺跡基本層序

(2) 白木野II遺跡 (第6図)

白木野II遺跡の土層は調査区中央の水田部分、西側の宅地部分は削平、攪乱が著しく均一な層序を示すことができない。調査区東側の山林部分 (G-53、54) での層序は以下のとおりである。

I層 黒色土 (10Y R1.7/1)	草木根を多量に含みしまりが無い。層厚約20cm
II層 黒褐色土 (10Y R3/2)	I層の土を部分的に混入する。層厚約30cm
III層 黄橙色ローム (10Y R7/8)	小礫を少量混入する。層厚約40cm
IV層 黄橙色ローム (10Y R7/8)	小礫を多量混入する。層厚約40cm
V層 浅黄橙色ローム (10Y R8/4)	小礫を少量混入する。層厚約20cm
VI層 橙色ローム (7.5Y R6/8)	層厚約15cm、部分的に欠如する。
VII層 浅黄橙色ローム (10Y R8/3)	小礫を少量混入する。層厚約15cm
VIII層 浅黄橙色ローム (10Y R8/3)	礫を混入しない。層厚約30cm、部分的に欠如する
IX層 橙色ローム (10Y R7/8)	小礫を少量混入する。層厚約30cm、部分的に欠如する
X層 浅黄橙色礫層 (10Y R8/3)	粒径5mm~3cm、層厚約40cm
XI層 黄橙色ローム (7.5Y R7/8)	部分的に浅黄橙色を呈する、層厚約30cm
XII層 明緑灰色ローム (10G7/1)	ブロック状に黒色の炭化物(亜炭)を含む。層厚不明



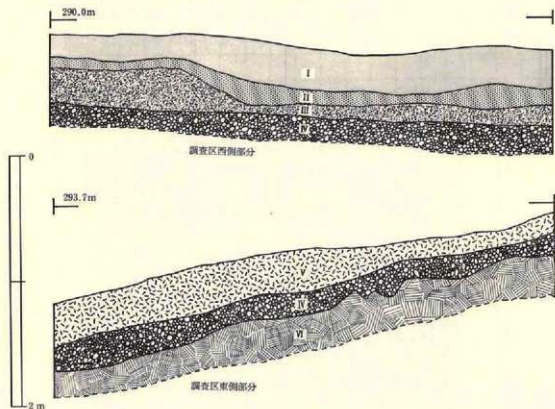
第6図 白木野II遺跡基本層序

(3) 白木野Ⅲ遺跡 (第7図)

白木野Ⅲ遺跡の土層は東側の山林部分と道路を挟んだ西側の水田部分では異なっている。これは水田側が耕地整理のため削平され、盛土が施されたためである。西側水田部分のⅠ層は近年の耕作土、Ⅱ層はⅠ層の耕作面を整えるための盛土層である。Ⅲ層は耕地整理以前の耕作土層である。Ⅳ層からは人為が介入していない層である。

東側山林部分は人為的な盛土等はなく、上から2層目のⅣ層が西側のⅣ層に対応する。以下各土層の特徴を記す。

- Ⅰ層 暗褐色土 (10Y R3/4) 礫少量混入、近年の耕作土
- Ⅱ層 Ⅱ層 黄橙色土 (10Y R6/8)、浅黄橙色土 (10Y R8/4)、暗褐色土 (10Y R3/4) が斑状に混った混土層、盛土層
- Ⅲ層 黒褐色土 (10Y R2/3) 炭化物少量混入、耕地整理前の耕作土
- Ⅳ層 暗褐色土 (10Y R3/3) 黒褐色土少量混入
- Ⅴ層 黒褐色土 (10Y R2/2) 暗褐色土少量混入
- Ⅵ層 褐色土 (10Y R4/6) 黄褐色土少量混入



第7図 白木野Ⅲ遺跡基本層序

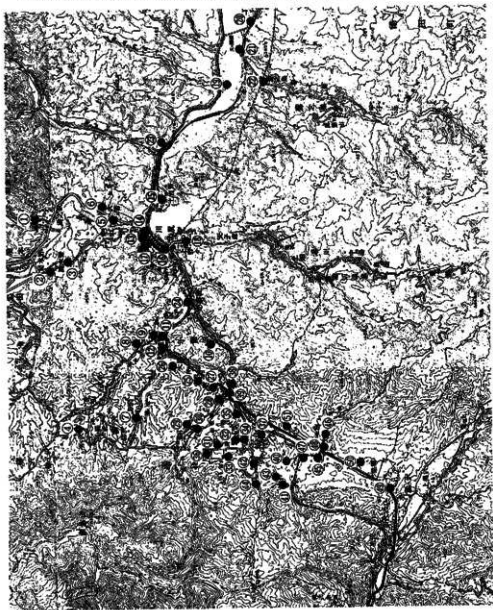
4. 周辺の遺跡（第8図）

岩手県遺跡登録台帳によれば、湯田町では現在までに51の遺跡が登録されている。このうち、発掘調査された代表的な遺跡は大台野遺跡(1)である。大台野遺跡は旧石器時代から弥生時代にかけての複合遺跡であるが、県内において調査された旧石器時代の遺跡の代表的なものである。ナイフ型石器、彫刻刀型石器、掘器など1万余点が出土している。平成2年度には本遺跡も含めて東北横断自動車道秋田線建設関連の遺跡発掘事業が始まり、塚野Ⅰ遺跡(2)・塚野Ⅱ遺跡(3)、大渡遺跡(4)・大渡Ⅱ遺跡(5)、越中畑Ⅳ遺跡(6)・越中畑Ⅴ遺跡(7)が調査されている。

周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	種別	遺構/遺物	所在地	備考
1	編之沢	散布地	縄文土器、石器	編之沢36外	昭59
2	関水野	散布地	旧石器	第30地割24外	昭59
3	関水野	散布地	旧石器	第30地割24外	昭59
4	芳ヶ沢	塚 1基		芳ヶ沢72-51外	昭59
5	大木野	散布地	縄文(中期)土器、石斧、石匙、石鏃、土鏃	第36地割63番地2	
6	大木野	散布地	縄文土器、石器	大木36-27-2外	
7	大木野	散布地	縄文土器	下割70-80-1外	
8	小栗	集落跡	縄文土器	第56地割15番地	
9	小栗	散布地	縄文土器、石器	小栗沢	
10	家野	集落跡	銅片、旧石器	第55地割54番地	
11	家野	散布地	縄文土器	第55地割147	
12	家野	散布地	縄文土器	第55地割151外	
13	家野	集落跡		第40地割149番地	
14	家野	集落跡	石鏃、石斧、縄文(前末~中期)土器、石鏃、石鏃	第40地割166番地5	旧遺
15	川尻	散布地	縄文(中期)土器、石斧、石匙、石鏃	第41地割59番地	旧遺
16	川尻	散布地	縄文土器、石器		
17	川尻	集落跡			
18	上野	散布地	縄文土器片、石匙、銅片石器		
19	安耳	館跡	古代?伝承地		
20	耳取	散布地	縄文土器、石器	耳取	
21	耳取	館跡	古代?、伝承地	41	
22	耳取	散布地	縄文(中期)土器、石匙、石鏃	第50地割101番地	
23	耳取	散布地	縄文(後~中期)土器、石刀、銅片		
24	合野	散布地	銅片石器、土器片	第55地割84外	
25	合野	散布地	縄文土器、石器	68	
26	大木野	キャンプ跡?	旧石器、有舌尖頭器、石斧	大木57	
27	大木野	キャンプ跡?	旧石器、炭化物粒	大木57 40外	
28	大木野	集落跡	縄文土器		
29	大木野	散布地	化石	第69地割66番地	
30	大木野	キャンプ	旧石器		
31	大木野	散布地	銅片石器	第67地割	
32	大木野	散布地	銅片石器	第67地割	
33	大木野	散布地	銅片石器、石刀	第67地割155番地	
34	大木野	散布地	旧石器、石刀	白木野67-262外	
35	大木野	散布地	旧石器、彫刻刀、石刀	白木野67-315外	
36	大木野	キャンプ跡?	旧石器、銅片、炭化物粒	白木野67外	
37	大木野	集落跡	旧石器~弥生土器、石器	第68地割253番地1外	
38	大木野	散布地	縄文土器、石器	下割内	
39	越中畑	散布地	縄文土器	第64地割	
40	越中畑	散布地	旧石器、銅片石器	第64地割外	
41	越中畑	散布地	縄文土器	第64地割	
42	越中畑	散布地	縄文土器	第64地割17番地1	
43	越中畑	散布地	縄文土器、石器、焼土	第64地割133番地外	
44	越中畑	遺跡		第64地割100番地	
45	野々宮	散布地	旧石器、銅片石器	第64地割207番地	
46	野々宮	集落跡	縄文土器、石器	第60地割50番地外	
47	野々宮	散布地	旧石器、銅片石器	第62地割90番地	
48	野々宮	キャンプ跡?	旧石器、銅片石器	第67地割77番地外	
49	桑原	散布地	縄文土器、石器	第63地割	
50	桑原	散布地	旧石器、銅片石器	第63地割10番地外	
51	桑原	散布地	旧石器、銅片石器	第59地割52番地	

- ① 堀之内遺跡 ② 堀之内遺跡 ③ 堀之内遺跡 ④ 堀之内遺跡
 ⑤ 堀之内遺跡 ⑥ 堀之内遺跡 ⑦ 堀之内遺跡 ⑧ 堀之内遺跡
 ⑨ 堀之内遺跡 ⑩ 堀之内遺跡 ⑪ 堀之内遺跡 ⑫ 堀之内遺跡
 ⑬ 堀之内遺跡 ⑭ 堀之内遺跡 ⑮ 堀之内遺跡 ⑯ 堀之内遺跡
 ⑰ 堀之内遺跡 ⑱ 堀之内遺跡 ⑲ 堀之内遺跡 ⑳ 堀之内遺跡
 ㉑ 堀之内遺跡 ㉒ 堀之内遺跡 ㉓ 堀之内遺跡 ㉔ 堀之内遺跡
 ㉕ 堀之内遺跡 ㉖ 堀之内遺跡 ㉗ 堀之内遺跡 ㉘ 堀之内遺跡
 ㉙ 堀之内遺跡 ㉚ 堀之内遺跡 ㉛ 堀之内遺跡 ㉜ 堀之内遺跡
 ㉝ 堀之内遺跡 ㉞ 堀之内遺跡 ㉟ 堀之内遺跡 ㊱ 堀之内遺跡
 ㊲ 堀之内遺跡 ㊳ 堀之内遺跡 ㊴ 堀之内遺跡 ㊵ 堀之内遺跡
 ㊶ 堀之内遺跡 ㊷ 堀之内遺跡 ㊸ 堀之内遺跡 ㊹ 堀之内遺跡
 ㊺ 堀之内遺跡 ㊻ 堀之内遺跡 ㊼ 堀之内遺跡 ㊽ 堀之内遺跡
 ㊾ 堀之内遺跡 ㊿ 堀之内遺跡



第8図 周辺の遺跡位置図

Ⅲ. 調査・整理の方法

1. 野外調査

(1) グリッドの設定

白木野Ⅰ遺跡では平面直角座標（第X系）、 $X=-77200\text{m}$ 、 $Y=-8130\text{m}$ を基準点1、 $X=-77200\text{m}$ 、 $Y=-8300\text{m}$ を基準点2として、この2点を結んだ線を基準線とした。基準線は東西方向に走っている。そしてこの基準線に直行ないし平行する線を、4 m 間隔で調査区全域を網羅するようにメッシュを組んだ。グリッド名は東西方向を数字で表し、南北方向をアルファベット大文字で表した。東に進むにつれて数字が増え、南に進むにつれてABC…となるようにした。基準点1の名称はI-58、基準点2の名称はI-15である。グリッドの南西隅の杭がそのグリッドの名称を表している。

白木野Ⅱ遺跡では平面直角座標（第X系）、 $X=-77380\text{m}$ 、 $Y=-8800\text{m}$ を基準点1、 $X=-77290\text{m}$ 、 $Y=-8660\text{m}$ を基準点2として、この2点を結んだ線を基準線とした。基準線は磁北から約57°東に偏している。そしてこの基準線に直行ないし平行する線を、4 m 間隔で調査区全域を網羅するようにメッシュを組んだ。グリッド名は東西方向を数字で表し、南北方向をアルファベット大文字で表した。東に進むにつれて数字が増え、南に進むにつれてABC…となるようにした。基準点2の名称はG-60である。グリッドの南西隅の杭がそのグリッドの名称を表している。

白木野Ⅲ遺跡では平面直角座標（第X系）、 $X=-77590\text{m}$ 、 $Y=-8990\text{m}$ を基準点1、 $X=-77580\text{m}$ 、 $Y=-8960\text{m}$ を基準点2としてこの点を結んだ線を基準線とした。基準線は磁北から約70°東に偏している。そしてこの基準線に直行ないし平行する線を、4 m 間隔で調査区全域を網羅するようにメッシュを組んだ。グリッド名は東西方向を数字で表し、南北方向をアルファベット大文字で表した。東に進むにつれて数字が増え、南に進むにつれてABC…となるようにした。基準点1の名称はG-12である。グリッドの南西隅の杭がそのグリッドの名称を表している。

(2) 遺構の名称

遺構の名称は各遺跡とも検出順に種別毎に1号建物、3号土坑というように名称を付した。調査や整理の過程で別種の遺構と認められたり、人為的なものでないと判断されたものは欠番となっている。白木野Ⅱ遺跡では調査中、2号版状遺構、3号版状遺構としていたものをそれ

それ2号竪穴遺構、3号竪穴遺構に変更した。出土遺物への注記、写真台帳には旧遺構名を用いている。

(3) 掘掘り・遺構検出・精査

各遺跡とも当初、幅4mのトレンチを地形に応じて入れ遺跡の状況把握につとめ、遺構、遺物の検出された部分はさらに人力で掘掘りを行った。白木野II遺跡では塵土の移動、人力では破壊が困難なコンクリート基礎や道路跡の排除に重機を用いた。

検出された遺構は、土坑、竪穴遺構、池はその大きさに応じて2分法、4分法を用いて、溝は適宜土層観察用ベルトを残して埋土を除去した。掘立柱建物はその柱穴の平面上での柱痕観察を行い、桁行き、梁行きが通るようにエレベーションを計測した。

(4) 実測・写真撮影

各遺跡とも平面実測はグリッド軸に合わせた1mのメッシュを基本とした。原則として1/20の縮尺を用い、必要に応じて任意の縮尺を用いた。写真撮影は35mmモノクロームとカラースライド各1台と6×7cmモノクローム1台を使用した。撮影は埋土堆積状態や遺物の出土状況、遺構の完掘状況などについて行い、白木野II遺跡では調査終了前にラジコンヘリにより空中写真を撮影した。

2. 室内整理

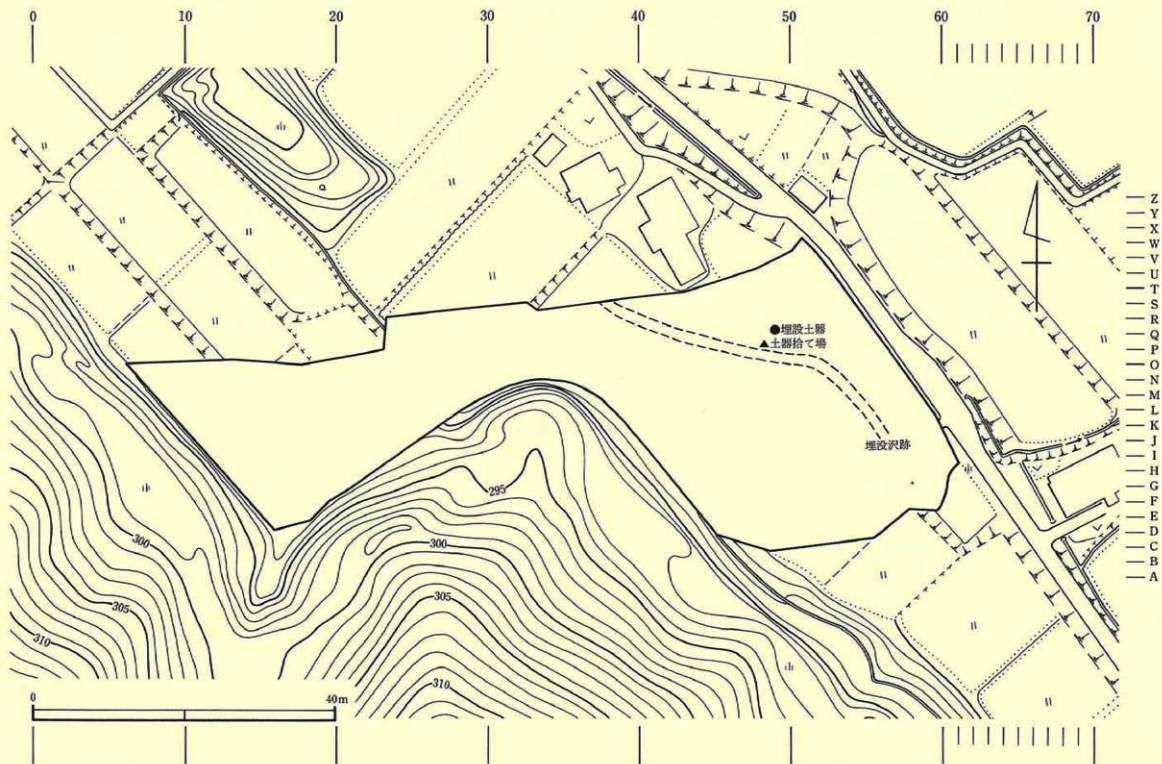
出土遺物は水洗、注記を行い、必要なものは接合、復元作業を実施した。これらの作業終了後、報告書掲載遺物を選びだし登録を行った。遺物実測は原則として実寸で行った。野外調査で実測した実測図は必要なものについては第2原図を作成した。その後これらの遺物、遺構の実測図のトレースを行い、種別ごとに観察表と図版を作成した。撮影したフィルムはネガアルバムにベタ焼き写真と一組にして収納した。カラースライドはスライドファイルに撮影順に収納した。また報告書掲載分の遺物の写真撮影を行い、写真図版を作成した。

その他木製品については樹種同定を行い、保存処理を施した。石器、石製品は石質鑑定を行った。

これらの作業の終了後、原稿の執筆を行い、報告書を編集した。各遺構、遺物の体裁については凡例に記してある。

IV. 白木野 I 遺跡

遺跡台帳番号 ME57-2322
調査略号 SKI-92
調査面積 3,000㎡
調査期間 平成4年9月1日～9月30日
整理期間 平成4年12月1日～12月28日
調査担当者 羽柴直人 鎌田精造
整理担当者 星 雅之 佐瀬 隆



第1図 白木野I遺跡グリッド・遺構配置図

1. 検出された遺構

調査区の大部分が近年の耕地整理のため削平されていたが、埋設土器遺構が1基と小規模な捨場が検出されている。

(1) 埋設土器遺構 (第2、3図、写真図版1)

本遺構は調査区東側に位置するP48グリッドから検出した。土器は地山を掘り込んで正立した状態で埋設されており、底部付近は半分ほど欠損しているが、当初から欠けたまま埋設されたと思われる。口縁部片は付近より出土しており、畑地造成時に削平を受け、破損したものである。周辺からは焼土、柱穴等は検出されなかった。

出土遺物

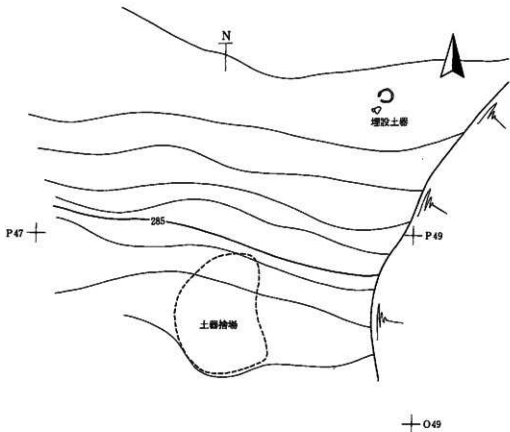
本遺構からの出土遺物は、埋設されていた土器1点である。(第3図1、写真図版3) 深鉢形土器で、底部から体部にかけてはりをもち、頸部が括れ、口縁部が外反する。口縁部は、波状を呈し、縋糸の側面圧痕文を施す。体部は、棒を軸にV字状に原体を巻きつけて縋糸に回転させた、木目状縋糸文を施文する。本稿の土器分類においては大木7a式に併行するものに位置づけしたが(Ⅲ群-H類)、土器の特徴及び後述する近隣の捨場から半円状偏平打製石器が出土していることを加味すると、円筒系土器の影響が考えられる。

(2) 捨場 (第2図、写真図版2)

本遺構は調査区東側の埋没沢付近より検出した(O48グリッド)。南側から北側へ傾く急斜面に形成されている。規模は約3×2mで、遺物を包含するⅡ層の上に土が盛られていた(Ⅰb層)。北側の畑地跡との比高は最大で約3mである。本遺構より、土器、石器、土製品が出土した。

出土遺物

主にⅡ層中より縄文土器がコンテナ(大)2箱、石器は約30点、土製品1点が出土している。他に削平された面の上にかぶせられた耕作土(Ⅰa層)中から縄文土器片や石器等が若干出土している。縄文土器は大木6式～大木7b式の範疇に比定できるものである。石器の器種には石鎌、石匙、石篋、石槍、スクレイパー、磨製石斧、磨石、半円状偏平打製石器が見られる。なお、土器、土製品、石器についての詳細は後述する。



第2図 捨場平面断面図

2. 出土遺物

本遺跡の遺物は若干数を除いて、ほとんどが捨場、及びその周辺より出土した。本稿においては、遺構内、遺構外の出土遺物を一括して記述する。

(1) 土器

本遺跡から出土した土器は、大木6式～大木7b式（縄文時代前期末葉～中期初頭）に比定できるものである。

本報告書では、比較と記載のため、摩滅のひどい小片を除き、従来の型式観や編年観を基本に以下のように分類群を設定した。

大木6式に併行するものをⅠ群、大木6式～大木7a式の範疇に併行するものをⅡ群、大木7a式に併行するものをⅢ群、大木7b式に併行するものをⅣ群とし、それぞれの群の中で任意の分類をした。

<Ⅰ群 大木6式に併行するもの。(A、B、C類)>

A類 口縁部に半截竹管及び棒状工具による平行、波状、鋸歯状の沈線による文様が施文されるもの。(第4、6、7、8図2、3～36、写真図版3、5、6)

B類 口縁部文様帯の幅が狭く、やや肥厚するもの。(第8図37～39、写真図版4、6)

C類 口縁部及び頸部に半截竹管文を施文するもの。(第4、5、8図4、5、40～45写真、図版3、4、6)

<Ⅱ群 大木6式～大木7a式の範疇に併行するもの。(D、E、F、G類)>

D類 口縁部が外反し、口縁部に縄文原体側面圧痕を施文する。(第5、9図6、46～48、写真図版4、5、6)

E類 羽状縄文を施文し、磨消しを施しているもの。(第9図49～51、写真図版6)

F類 体部に摺糸側面圧痕文を施文する。(第9図52～56、写真図版6)

G類 口縁部は波状で、口縁部文様帯に摺糸側面圧痕文を施文する。(第10図57～60、写真図版7)

〈III群 大木7a式に併行するもの(H、I類)〉

H類 口縁部は波状を呈し、頸部が括れ、体部がふくらむ。口縁部に側面瓦痕文を施文する。
(第4図1、写真図版3)

I類 体部が外反もしくは外傾し、結節縄文を施文する。(第10、11図61～75、写真図版7)

〈IV群 大木7b式に併行するもの。(第11図76～79、写真図版7)〉

(2) 土製品 (第14図33、写真図版10)

本遺跡から出土した土製品は紡錘車1点で、出土地点はO48グリッドでII層中からの出土である。径5mm前後の孔があり、無文である。

(3) 石器

本遺跡から出土した石器は、剥片石器類(石鏃、石錐、尖頭器、石槍、石筥、スクレイパー)は25点、礫石器(磨製石斧、磨石、半円状偏平打製石器)は5点である。6点(2、6、8、21、22、23)を除きすべてII層中からの出土である。

a. 石鏃(第12図1～3、写真図版8)

3点出土している。3点とも形状は二等辺三角形で、1、2は基部に大きく弧を描く袂入がある。3は袂入がほぼ直線的である。

b. 尖頭器(第12図4、5、9、写真図版8)

4、5とも刺突具として使用されたものと考え、本稿では尖頭器としておきたい。調整は粗く、4については、背面に自然面を残している。9は尖頭器(石槍?)の中位より先端が欠損したと思われる。

c. 石槍(第12図6、写真図版8)

1点出土している。基部が欠損しているが、最大巾が器体中位にあり、やや偏平な柳葉形を呈していたと思われる。細部に両面押圧剝離加工を施す。

d. 石匙(第12図7、写真図版8)

1点出土している。横長のもので、つまみ部を上にした時、主要な刃部が横となる。身部の形状は隅丸長方形形状を呈する。片面加工で刃部が数カ所欠損する。

e. スクレイパー(第12、13図8、10～19、写真図版8、9)

12点出土している。本遺跡で出土した剥片石器で搔器、削器等と思われ、a～d、fに属さないもの、もしくは欠損等により原形が推測の域であるものを一括した。8は平面形は長方形状で断面形は湾曲する。ほぼ平行な両側縁に刃部を有する。先端部は破損し、基部は欠損している。石筥に位置付けられるものであったと思われる。10は片面加工で、所謂エンドスクレイパー状のものである。欠損しているが基部をもち、周縁に片面加工を施す。右側縁は欠損している。12は尖頭部をもち、片面加工を施す。13は片面加工による平行な両側縁をもち、さらにやや鋭角をなす上縁部に先端を作りだしている。切削具としての用途が考えられる。14はエンドスクレイパー状のもので、片面加工で基部にノッチをもつ。15は三日月状を呈し、刃部は片面加工を施し、基部は欠損している。16は縦長でUフレックに位置付けられる。17は縦長でやや曲線を描く。両側縁に加工を施す。先端部は欠損している。18は片面加工で先端部と基部を欠損している。19は側縁に片面加工を施す。先端部は欠損している。製作途上のものと思われる。

f. 石筥 (第13図20～25、写真図版9)

6点出土している。20、21、24は周縁に両面加工を施す。20は片側の側縁を欠損している。21は基部を欠損している。22、25は周縁に片面加工を施す。基部は欠損しているが石匙的なつまみがあったものと考えられる。23は周縁に片面加工を施す。石筥に分類したものでは、最も厚い。

g. フレック (第14図26、27、写真図版10)

2点掲載した。26は硬質泥岩で、4、7、9、12、15、16、20、23と同石質で他に出土したフレックもほとんどが硬質泥岩である。

h. 磨製石斧 (第14図28、29、写真図版10)

2点出土している。28、29とも両側縁および頭部が研磨され、石斧主面とのあいだに稜を作り断面は隅丸長方形である。刃部は両刃で、29については、「のみ」などの加工具としての用途が考えられる。

i. 磨石 (第14図30、31、写真図版10)

2点出土している。30は、敲石としての用途が考えられる。31は基部に敲打痕があり、明瞭ではないが側面を稜をもつ。

j. 半月状偏平打製石器 (第14図32、写真図版10)

1点出土している。一辺に弧状の辺縁をなし、それに対する辺縁は直線状を呈する。円筒土器に伴う用途不明の打製石器で、打製石斧に代わる石器として、横位に使用したものと思われる。

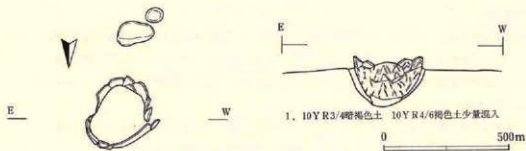
3. まとめ

本遺跡の現状は、調査区の大半が近年の耕地整理のため削平されていた。検出された遺構は、埋設土器遺構1基と捨場だけである。出土した土器群は、大木6～7b式に併行する。本稿でII群G類及びIII群H類に分類した土器においては、円筒下層d2式との類似性が見られる。また本遺跡より1点出土している半円状偏平打製石器は、円筒土器、特に円筒上層式よりも円筒下層式に伴って多く出土している(村越潔氏)。すなわち縄文時代前期末から中期初頭において、この地で大木式土器系と円筒式土器系の文化の交流があったものと考えられる。

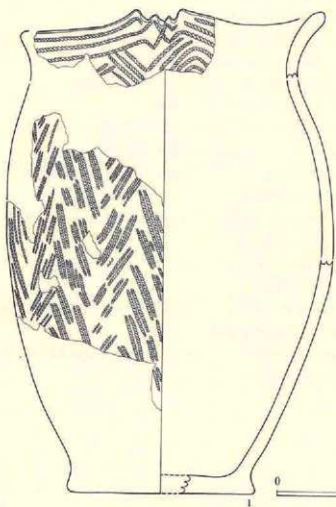
今回の調査で住居跡は検出できず、当時の集落の構成や生活様式は解明できなかったが、この地においても縄文時代の人々が、生活を営んでいたと言える。

参考文献

- 青森県教育委員会（1974年）「中の平遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第25集
- 北上市教育委員会（1983年）「滝ノ沢遺跡（1977～1982年度）」北上市文化財調査報告書第33集
- 岩手県教育委員会（1982年）「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書X-2」岩手県文化財調査報告書第70集
- 宮城県教育委員会（1986年）「中ノ内A遺跡・本原敷遺跡他」宮城県文化財調査報告書第121集
- 宮城県教育委員会（1985年）「小梁川遺跡」宮城県文化財調査報告書第117集
- 小林達雄編集（1989年）縄文土器大観1 小学館
- 秋田県文化財保護協会（1958年）「調査研究報告書」
- 山形県教育委員会（1988年）「吹浦遺跡第3・4次緊急発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財調査報告書
- 村越 潔（1974年）「円筒土器文化」雄山閣
- 村越 潔（1976年）東北考古学会「東北考古学の諸問題」東出版寧楽社
- 江坂 輝彌（1970年）「石神遺跡」ニューサイエンス社
- 工藤 竹久（1977年）「北日本の石槍・石鏃について」北奥古代文化第9号
- 岩手県文化財愛護協会（1976年）「大船渡市潜水員塚発掘調査概報」
- 鉾岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1984年）「長者屋敷遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第77集
- 鉾岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1984年）「和光6区遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第114集
- 鉾岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1986年）「上村貝塚発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第158集
- 鉾岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1992年）「梅ノ木台地I遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第162集
- 鉾岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（1992年）「本郷遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第164集

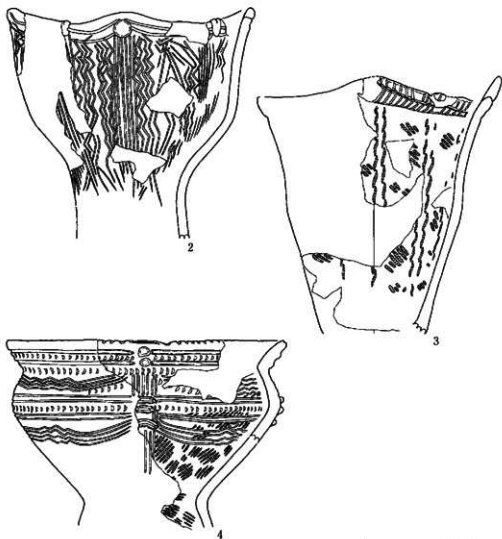


1. 10YR3/4暗褐色土 10YR4/6褐色土少量混入



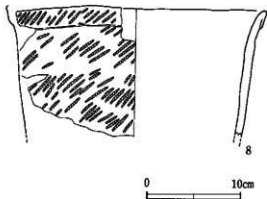
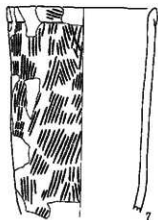
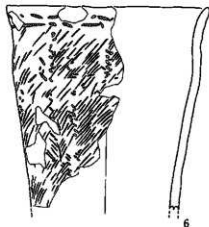
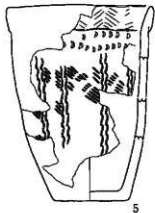
No	器形	部位	胎土	文様・特徴・その他	備考	出土 地点	層位	分期
1	深鉢	完整		波状口縁。波状部は二山状になりさらにその頂を棒状工具で押圧しており、器身の側面を隔す。体部は、棒を軸にV字状に筋脈を巻きつけて縦に折断させ施文する（本目次図あり）。文様の特殊層内陶系土器の影響を受けている。	底の付着なし。	P48	II	前期-中期

第3図 埋設土器



No	器形	部位	胎土	文様・特徴・その他	備考	出土 地誌	層位	分期
2	甗鉢	底部	凝縮質む	波状口縁（花卉状）4個の突起さらに4個の副突起。口縁部に太い沈線。円形の凹。胴部に連続する山形状沈線及び縦位平行沈線。底部下平がくびれる。	底の付着なし。	O48	II	I群-A類
3	甗鉢	ほぼ完成形	凝縮質む	波状口縁。胴部がややふくらみをもつ。波頂部を修飾工具による沈線で直切り。上下に沈線が縦に連続して施される。底部はL-1と縦筋有り層位。	底の付着なし	O48	II	I群-A類
4	甗鉢	口縁部、体部上部	凝縮質む	底部下平が削れ、胴部にはりをもり、底部が削れ、口縁部は肥厚し、外傾する。口縁部に連続する副突起。口縁部は、太の沈線で区画された間に、半環行管文を施文する。胴部は、平行沈線及び半環行管文を施文し、4単位で縦付をもつ。L-1R単位。	底の付着なし。	O48	II	I群-C類

第4図 土器実測図(1)



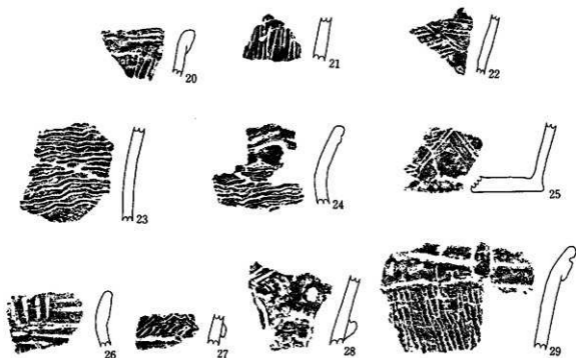
No.	器形	部位	胎土	文様・特徴・その他	備考	出土 層位	分類
5	陶鉢	ほぼ完形	粘質灰む	器形は円筒状を呈し、口縁部に折り返し(重合口縁)をもち、頸部に平紐竹管による刺突文を施す。縹状工具による山形状の太い波線が斜位に施される。体部には、2ヶ所に筋線を作るL-1反斜位。	縹の付着なし。	O48	II 1層-C層
6	陶鉢	口縁部、体部	粘質灰む	知照がわずかにふくれ、口縁部は外反する。口縁部は、底前後反側水嶋地層による菊園比成。体部は、真前後反側位軽く押し付けらる。	縹の付着なし。	O48	II 11層-D層
7	陶鉢	口縁部、体部	粘質少量含む	器形は円筒状を呈し、口縁部に折り返しをもつ。口縁部は底前後反側比成を施文し、体部は、同風体を押し巻き付け縹を施し、施文する。	縹の付着なし。	O48	II 11層-1層
8	陶鉢	口縁部、体部上部	粘質灰む	器形は体部が外反し、口縁部に折り返しをもつ。L-1反斜位。	縹の付着なし。	O48	II 11層-1層

第5図 土器実測図(2)



No.	器形	部位	胎土	文様・特徴・その他	備考	出土 層位	分類
9	甗鉢	体部	細砂質む	L-R縦位、半条竹管による沈線文。	底の付着なし。	O48	II 1群-A類
10	甗鉢	体部	細砂質む	L-R縦位、半条竹管による沈線文、9と同一個体。	底の付着なし。	O47	II 1群-A類
11	甗鉢	体部	細砂質む	L-R縦位、半条竹管による沈線文、9と同一個体。	底の付着なし。	O48	II 1群-A類
12	甗鉢	体部	細砂質む	L-R縦位、9と同一個体。	底の付着なし。	O47	II 1群-A類
13	甗鉢	体部	細砂質む	L-R縦位、半条竹管による沈線文、9と同一個体。	底の付着なし。	O47	II 1群-A類
14	甗鉢	体部	細砂質む	半条竹管による縦位平行沈線。2と同一個体?	底の付着なし。	P47	II 1群-A類
15	甗鉢	体部	細砂質む	半条竹管による縦位沈線。2と同一個体。	底の付着なし。	P47	II 1群-A類
16	甗鉢	体部	細砂質む	半条竹管による縦位沈線。2と同一個体?	底の付着なし。	P47	II 1群-A類
17	甗鉢	口縁部	細砂質む	弧状および縦の平行沈線。	底の付着なし。	O48	II 1群-A類
18	甗鉢	口縁部		断面がやや折れ、口縁部が凹形し、外縁する。山形状口縁部、4箇の突起(貼付)、縦・斜位の沈線。	内面に底付着。	O47	II 1群-A類
19	甗鉢	口縁部	細砂質む	断面上半がよくろみ、断面が折れ、口縁部が凹形する。口縁部に線状工具による平行沈線を施し、体部上半に線状工具による波線及び縦位山形の沈線が施される。	内面に底付着。	O48	II 1群-A類

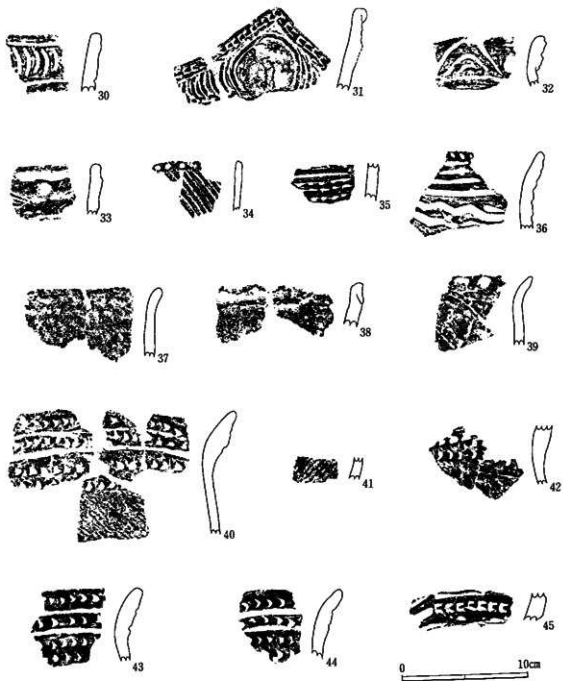
第6図 土器拓影図(1)



0 10cm

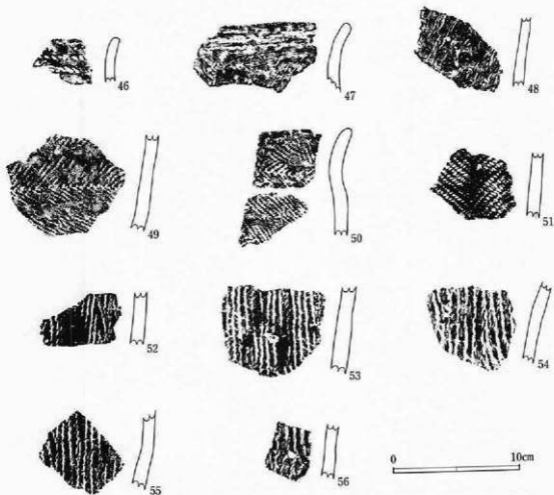
No.	器形	部位	胎土	文様・特徴・その他	備考	出土地点	層位	分類
20	深鉢	口縁部	細碎富む、砂多い	口縁折り返し、R部糸による縦線在横文、外周R部糸縦位。	煤の付着なし。	O48	II	I群-A類
21	深鉢	体部	細碎富む	R部糸縦位。	外面に煤付着。	O48	II	I群-A類
22	深鉢	体部	細碎富む	半截竹管による横位及び斜位沈線。	煤の付着なし。	P47	II	I群-A類
23	深鉢	体部	細碎富む	寛状工具による横位沈線。	煤の付着なし。	O48	II	I群-A類
24	深鉢	口縁・頸部	細碎富む	頸部がやや外反し、口縁部が外反する。口縁部に棒状工具による沈線、頸部から体部にかけて、寛状工具による横位沈線。23と同一体である。	煤の付着なし。	O48	II	I群-A類
25	深鉢	体部下縁、底部	細碎富む	半截竹管による横位及び斜位沈線が、横される。22と同一体。	煤の付着なし。	O47	II	I群-A類
26	深鉢	口縁部	細碎富む	口縁部がやや外反する。口縁部に棒状工具による太めの縦位連続横文及び横位沈線。頸部に横位沈線、体部上半に横線をもち、半截竹管によるものとと思われる沈線が縦に連続して施文される。	外面に煤付着。	O47	II	I群-A類
27	深鉢	口縁部	細碎富む	粘土層による貼付をもち、その上に半截竹管による斜位の沈線(附曲状)を施文する。腹骨の下平に、半截竹管による沈線の沈線が施される。	煤の付着なし。	P48	II	I群-A類
28	深鉢	口縁部	細碎富む	体部に横位貼付及び円形の凹をもち、棒状工具による沈線が施される。	煤の付着なし。	P48	II	I群-A類
29	深鉢	口縁部・頸部	細碎富む、焼成速	口縁部が外反し、肥厚する。折り返しをもち、棒状工具による口縁部と平行する太めの沈線が横かれ、棒状貼付をもち(4単位で貼付られているものと推測される)、体部にR部糸。	煤の付着なし。	P47	II	I群-A類

第7図 土器拓影図(2)



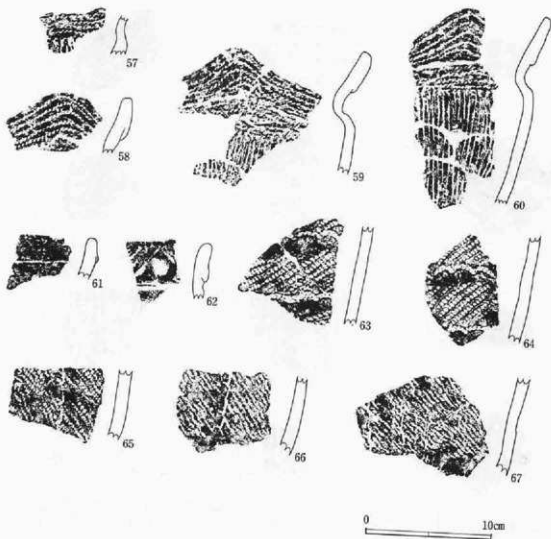
第8图 土器拓影图(3)

No	形状	部 位	材 質	文 様・特 徴・その他	備 考	出土 層位	分 類
30	銅鉢	口縁部		上下2段の平行する沈線が区画された間に、連続する弧状沈線（逆半月型）が、いずれも棒状工具により掘かれる。底縁が後の出土土層と比較して厚い。	底の付着なし。	P48 II	I群-A類
31	銅鉢	口縁部	縦線直む	山形状口縁を呈し、口唇から1cmほど肥厚し、その部分に半截竹管文を施文する。さらにその下部に、棒状工具による弧状沈線が掘かれる。	底の付着なし。	P47 II	I群-A類
32	銅鉢	口縁部	縦線直む	口縁部は外反し、折り返しをもつ。口縁部は棒状工具による弧状沈線が掘かれる。	底の付着なし。	P48 II	I群-A類
33	銅鉢	口縁部	縦線直む	太めの縦帯に、内側の凹をもち、その下部に半截竹管による平行沈線が斜位に掘かれる。	底の付着なし。	O48 II	I群-A類
34	銅鉢	口縁部	縦線直む	口唇部に正直をもち、筒状工具による沈線が斜位にはいる。	底の付着なし。	O48 II	I群-A類
35	銅鉢	口縁部	縦線直む	棒状工具による前めの沈線が口縁と平行して掘かれ、その下部に刺突を施す。	底の付着なし。	O48 II	I群-A類
36	銅鉢	胴部		胴部がやや膨れ、口縁部が外反する。口唇部に正直をもち、棒状工具による太めの沈線が、口縁と平行して掘かれ、胴部から体部にかけて筒状工具による扇歯状の沈線が掘かれる。	底の付着なし。	O48 II	I群-A類
37	銅鉢	口縁部	縦線直む、砂多い	口縁が外反し、口縁部に連続する弧状沈線が施されているが、胴部は半截し、縁部が鋭く突起を呈す。	底の付着なし。	P48 II	I群-B類
38	銅鉢	口縁部	縦線直む	口縁部が外反し、折り返しをもつ。口唇が沈線を呈する。	底の付着なし。	O48 II	I群-B類
39	銅鉢	口縁部		口縁部が外反し、花弁状を呈する。口唇部に交互扇歯状沈線を施し、口縁部は無文。体部に連続する弧状沈線を施している。厚縁が鋭く、胴部は直筒でない。	底の付着なし。	O47 II	I群-B類
40	銅鉢	口縁部	縦線直む	胴部が膨れ、口縁部が肥厚し外反する。口縁部に半截竹管文を施文しその下部に粘土層による粘付をもち、その上下を棒状工具による沈線が区画され、半截竹管を施文する。胴部及び体部上半に半截竹管文を施文し体部に1-1段沈線を施文する。	外面に粘付なし。	O47 II	I群-C類
41	銅鉢	口縁部	縦線直む	1-1段沈線、40と同一個体。	底の付着なし。	O47 II	I群-C類
42	銅鉢	口縁部	縦線直む	半截竹管文を施文する。40と同一個体。	底の付着なし。	O48 II	I群-C類
43	銅鉢	口縁部	縦線直む	半截竹管文を施文する。40と同一個体。	底の付着なし。	O48 II	I群-C類
44	銅鉢	口縁部	縦線直む	半截竹管文を施文する。40と同一個体。	底の付着なし。	O48 II	I群-C類
45	銅鉢	体部	縦線直む	棒状工具による沈線と刺突を施す。	底の付着なし。	O48 II	I群-C類



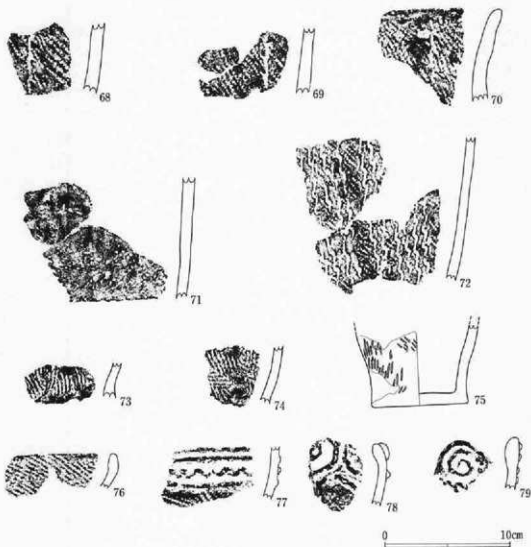
No	器形	部位	胎土	文様・特徴・その他	備考	出土点	層位	分類
46	深鉢	口縁部	細粒富む	口縁部が外反し、R-L側面圧痕文を遺文する。	煤の付着なし。	O48	II	II群-D類
47	深鉢	口縁部、体部	細粒富む	口縁部が外反し、直線段反側未端処理による側面圧痕、体部、直前段反側縁位軽く押しつける。	煤の付着なし。	O48	II	II群-D類
48	深鉢	体部	細粒富む	6と同一個体。	煤の付着なし。	O47	II	II群-D類
49	深鉢	体部	細粒富む	羽状縦文L-R (結痕なし)。	煤の付着なし。	O47	II	II群-E類
50	深鉢	体部		肩部がやや折れ、口縁部が外反する。羽状縦文L-R層位(結痕なし)。	煤の付着なし。	O47	II	II群-E類
51	深鉢	体部	細粒富む	L-R羽状縦文者あり。	煤の付着なし。	O47	II	II群-E類
52	深鉢	体部	細粒富む	斜位点燃ホ。	煤の付着なし。	O48	II	II群-F類
53	深鉢	体部	細粒富む	R燃ホ。	煤の付着なし。	O48	II	II群-F類
54	深鉢	体部	細粒富む	Lの燃ホ。	煤の付着なし。	O47	II	II群-F類
55	深鉢	体部	細粒富む	斜位R燃ホ。	煤の付着なし。	P47	II	II群-F類
56	深鉢	体部	細粒富む	斜位燃ホ (結痕あり)。	煤の付着なし。	O48	II	II群-F類

第9図 土器拓影图(4)



No.	素材	部位	胎土	文様・特徴・その他	備考	出土 地点	層位	分類
57	深鉢	口縁部	細粒富む	口縁部L-1及側面正交文、頸部が括れ体部上部に半截管文を施文する。体部上部から下部にかけて標赤文を施文する。57、58、59、60は同一個体である。	煤の付着なし。	P48	II	II群-G類
58	深鉢	口縁部	細粒富む	頸部が括れ、口縁部が山形状を呈し、折り返しをもつ。口縁部に標赤側面正交文を施文する。	煤の付着なし。	P48	II	II群-G類
59	深鉢	口縁部、体部上部	細粒富む	頸部が括れ、口縁部が山形状を呈し、折り返しをもつ。口縁部及び頸部に標赤側面に正交文を施文する。体部上半に半截管文を施文し、その下部から標赤文を施文する。	煤の付着なし。	P48	II	II群-G類
60	深鉢	口縁部、体部上部	細粒富む	57、58、59と同一個体。	煤の付着なし。	O48	II	II群-G類
61	深鉢	口縁部	細粒富む	口縁部がやや外傾し、折り返しをもつ。口縁部は彫文。	煤の付着なし。	P48	II	II群-I類
62	深鉢	口縁部	細粒富む	口縁部が外反し、肥厚、折り返しをもつ。口縁部に内側の凹角が棒状工具による刻痕の残像が認められる。頸部に棒状工具による沈線が認められる。体部はR-1層位。	煤の付着なし。	P48	II	II群-I類
63	深鉢	体部	細粒富む	R-1初期処理確認。	煤の付着なし。	O48	II	II群-I類

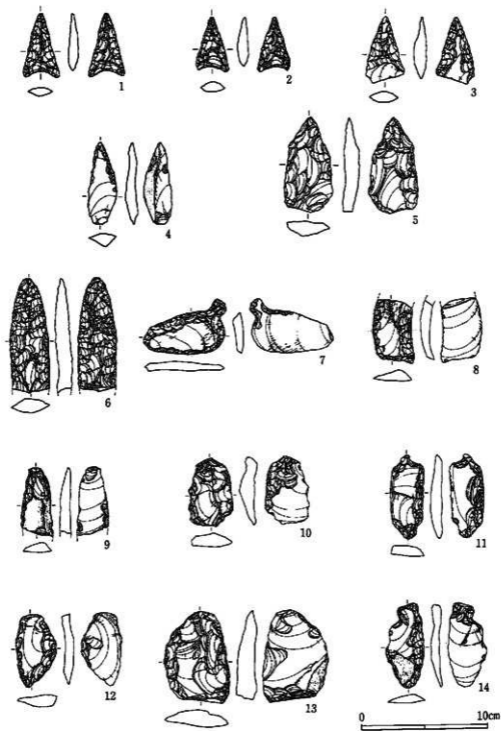
第10図 土器拓影図(5)



No.	器形	部位	胎土	文様・特徴・その他	備考	出土	層位	分類
64	深鉢	体部	細砂質む	R-L末端処理痕位。	傷の付着なし。	O47	II	田群-I類
65	深鉢	体部	細砂質む	L-R末端処理痕位。	傷の付着なし。	O47	II	田群-I類
66	深鉢	体部	細砂質む	L末端処理痕位。	傷の付着なし。	O48	II	田群-I類
67	深鉢	体部	細砂質む	L末端処理痕位。66と同一個体と思われる。	傷の付着なし。	O48	II	田群-I類
68	深鉢	体部	焼成差、編織	R-L末端処理痕位。	傷の付着なし。	O48	II	田群-I類
69	深鉢	体部	細砂質む	L-R末端処理痕位。	傷の付着なし。	O48	II	田群-I類
70	深鉢	口縁部	細砂質む	口縁部が外反する。L-R末端処理痕位。	傷の付着なし。	O47	II	田群-I類
71	深鉢	体部	細砂質む	割位及び割位L-R取附有り、部分的に徳が織い織文が見られる。(底部に近い破片と思われる。)	傷の付着なし。	O48	II	田群-I類
72	深鉢	体部下部	細砂質む	L-R取附、焼結文。	傷の付着なし。	O48	II	田群-I類

第11図 土器拓影(6)

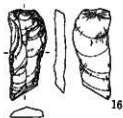
No.	図形	部 位	勘 土	文 様・特 徴・そ の 他	備 考	出土 地点	層位	分 類
73	銅鉢	底部	細線直む	体部上半から体部下半にかけて2ヶ所に筋帯を作るL-Rの 紋位。底面無縁。	傷の付着 なし。	O47	II	III群-1類
74	銅鉢	底部	細線直む	73、74、75は同一個体。	傷の付着 なし。	O47	II	III群-1類
75	銅鉢	底部	細線直む	73、74、75は同一個体。	傷の付着 なし。	O47	II	III群-1類
76	銅鉢	口縁部		R-L末端端地埋接位。口縁部内湾する。縄文中期?	傷の付着 なし。	O48	II	IV群
77	銅鉢	口縁部	細線直む	上下の胎帯に区画され折り返しのある波状貼付残線（器状区 画線縄文）L-R紋位。	傷の付着 なし。	O48	II	IV群
78	銅鉢	体部		口縁部に貼付文を施す。	傷の付着 なし。	O48	II	IV群
79	銅鉢	口縁部	細線直む	山形状口縁。粘土紐による貼り付け文、折り返し波状貼付文	傷の付着 なし。	O48	II	IV群



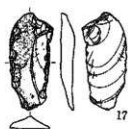
第12图 石器实测图(1)



15



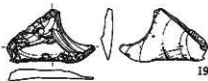
16



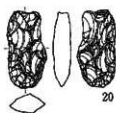
17



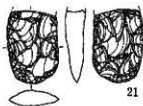
18



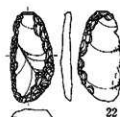
19



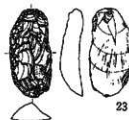
20



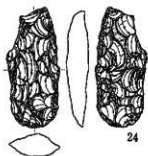
21



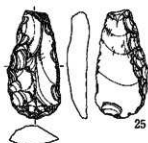
22



23



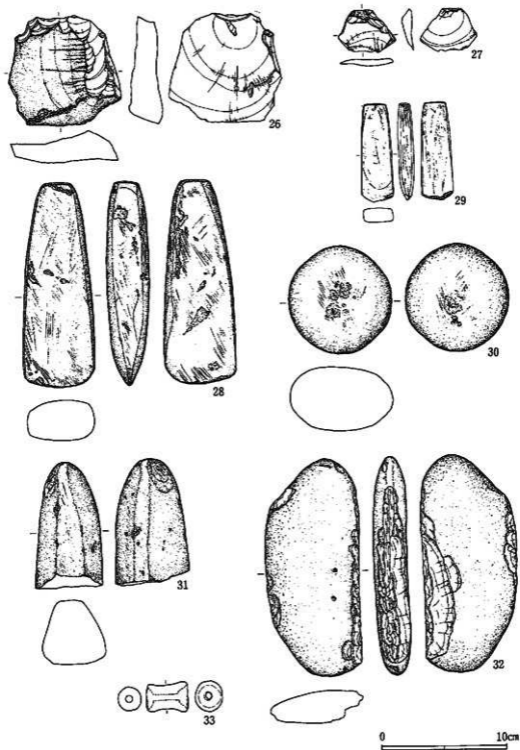
24



25

0 10cm

第13图 石器实测图(2)



第14图 石器实测图(3)

第1表 石器観察一覧表

No	器 種	出土地点	規 模				石 質	産 地	時 代	層位
			最大長	最大幅	最大厚	重量				
1	石 鏃	O48	3.35	1.9	0.5	2.29	埴貫凝灰岩	川尻・横手	中新統 II	
2	石 鏃	Q47	2.9	1.7	0.6	1.93	埴貫凝灰岩	川尻・横手	中新統 I a	
3	石 鏃	Q49	3.55	2.9	0.65	3.33	埴貫凝灰岩	川尻・横手	中新統 II	
4	尖 頭 器	S49	4.3	1.3	0.7	3.31	埴貫泥岩	奥羽山地一帯	中新統 II	
5	尖 頭 器	P48	5.1	2.6	0.9	11.94	埴貫泥岩	川尻・横手	中新統 II	
6	石 槍	P47	9.1	3.1	1.3	35.6	埴貫凝灰岩	川尻・横手	中新統 I a	
7	石 匙	O48	4.4	6.1	0.8	20.00	埴貫泥岩	川尻・横手	中新統 II	
8	スクレイパー	P47	5.15	3.3	1.0	17.24	埴貫凝灰質泥岩	川尻・横手	中新統 I b	
9	スクレイパー	Q46	5.4	2.5	0.9	14.34	埴貫泥岩	川尻・横手	中新統 II	
10	スクレイパー	P47	5.4	3.5	1.5	20.51	埴貫凝灰岩	川尻・沢内・横手	中新統 II	
11	スクレイパー	O48	6.7	2.75	0.95	20.8	埴貫凝灰質泥岩	川尻・横手	中新統 II	
12	スクレイパー	R47	5.8	3.2	1.0	17.39	埴貫泥岩	川尻・横手	中新統 II	
13	スクレイパー	P47	7.3	5.3	1.7	64.78	埴貫凝灰岩	川尻・沢内・横手	中新統 II	
14	スクレイパー	P48	5.75	3.05	0.8	15.78	埴貫泥岩	川尻・横手	中新統 II	
15	スクレイパー	R47	5.5	2.4	0.5	6.72	埴貫泥岩	奥羽山地一帯	中新統 II	
16	U フ レ ー ク	P48	7.3	3.1	1.0	19.61	埴貫泥岩	奥羽山地一帯	中新統 II	
17	サイドスクレイパー	S47	7.8	3.5	1.2	31.85	埴貫泥岩	奥羽山地一帯	中新統 II	
18	スクレイパー	T50	5.1	4.7	1.15	29.09	埴貫凝灰岩	川尻・横手	中新統 II	
19	スクレイパー	P48	4.3	7.0	0.95	22.09	埴貫凝灰岩	川尻・横手	中新統	
20	石 筥	Q49	6.1	3.1	1.5	30.88	埴貫泥岩	川尻・横手	中新統 II	
21	石 筥	S48	5.85	4.1	1.7	39.70	埴貫凝灰岩	川尻・沢内・横手	中新統 I a	
22	石 筥	S48	7.2	3.5	0.9	24.72	埴貫凝灰質泥岩	川尻・横手	中新統 I a	
23	石 筥	T48	7.1	3.4	1.9	42.84	埴貫泥岩	川尻・横手	中新統 I a	
24	石 筥	O47	9.6	4.2	1.8	75.56	埴貫凝灰岩	川尻・沢内・横手	中新統 II	
25	石 筥	Q49	8.7	4.3	1.8	58.96	埴貫凝灰岩	川尻・沢内・横手	中新統 II	
26	フ レ ー ク	O48	8.7	8.9	2.7	197.20	埴貫泥岩	奥羽山地一帯	中新統 II	
27	フ レ ー ク	O48	3.4	4.5	0.9	10.38	細粒凝灰岩	奥羽山地一帯	中新統 II	
28	磨 製 石 斧	O48	16.2	5.7	3.4	480.00	緑色凝灰岩	奥羽山地一帯	中新統 II	
29	磨 製 石 斧	O48	7.8	2.5	1.2	46.02	緑色凝灰岩	奥羽山地一帯	中新統 II	
30	磨 石 (敲 石)	P48	8.6	8.2	5.1	486.00	花崗閃緑岩	奥羽山地(沢内・川尻)	中新統 II	
31	磨 石	O48	10.0	5.9	5.4	415.00	緑色凝灰岩	奥羽山地一帯	中新統 II	
32	半円状扁平打製石槌	O48	17.4	7.5	2.7	457.00	緑色凝灰岩	奥羽山地一帯	中新統 II	

写 真 图 版



調査前風景

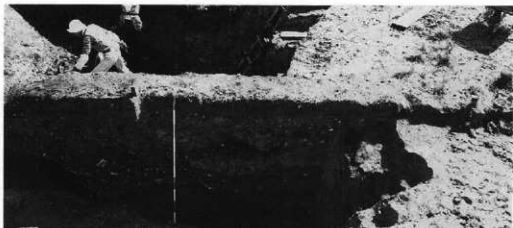


埋設土器遺構平面



埋設土器遺構断面

写真図版1 全景



基本層序



捨場断面

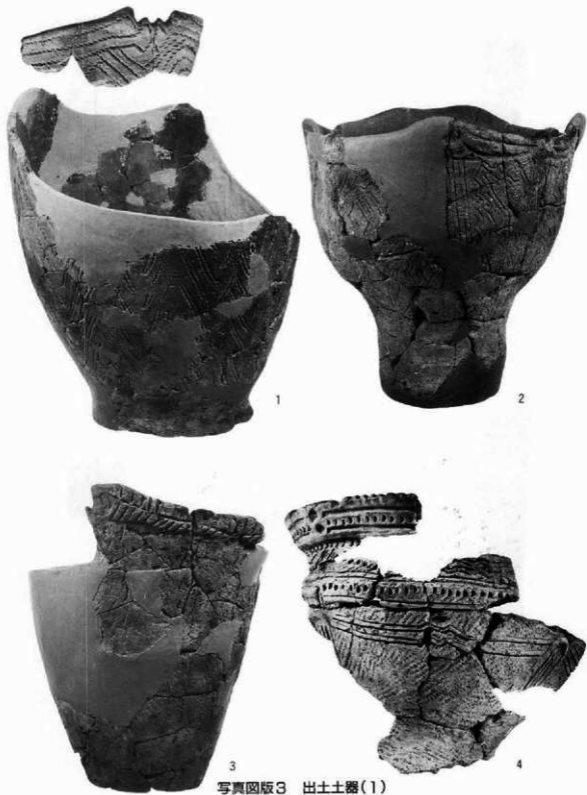


遺物出土状況



遺物出土状況

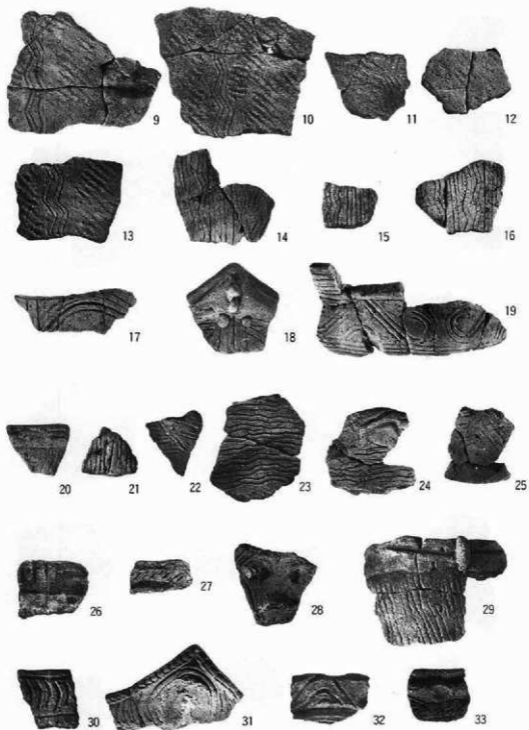
写真図版2 基本層序、捨場



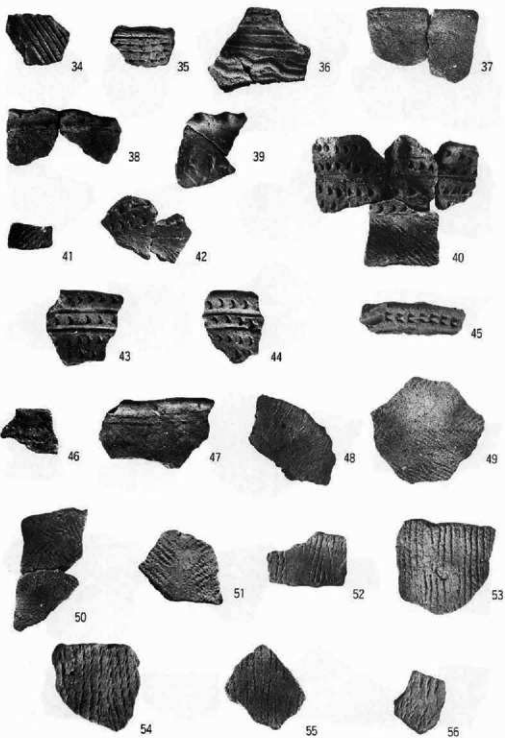
写真图版3 出土土器(1)



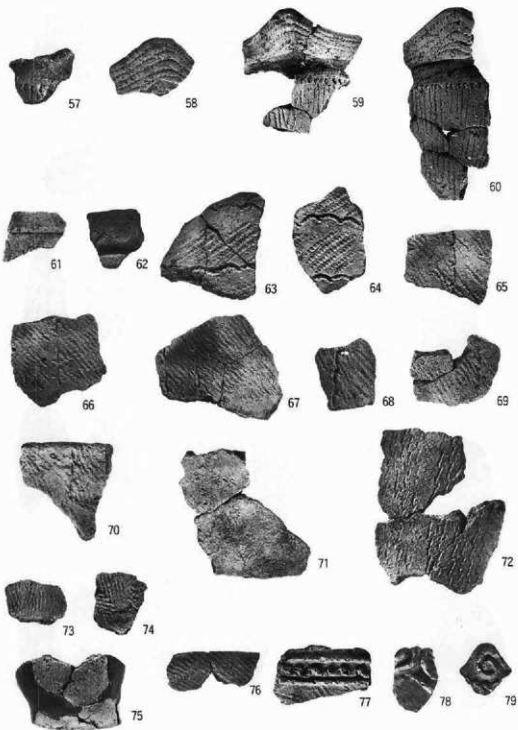
写真図版4 出土土器(2)



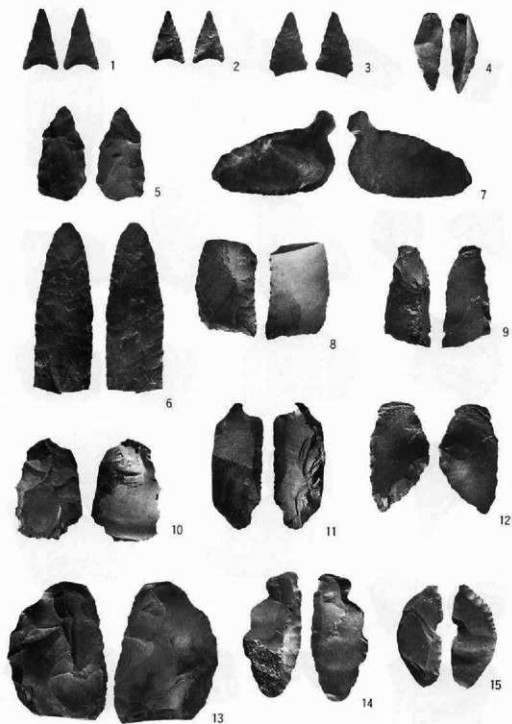
写真図版5 出土土器(3)



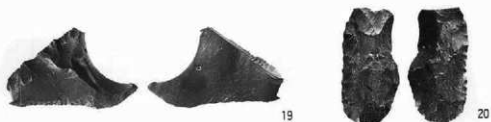
写真図版6 出土土器(4)



写真图版7 出土土器(5)



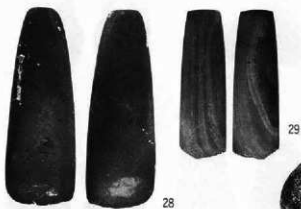
写真図版8 出土石器(1)



写真図版9 出土石器(2)



26



29

28



27



30



31



33

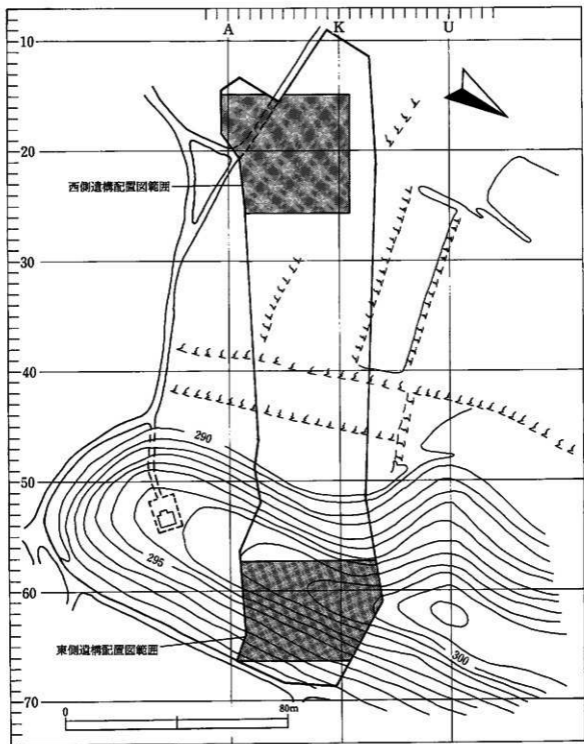


32

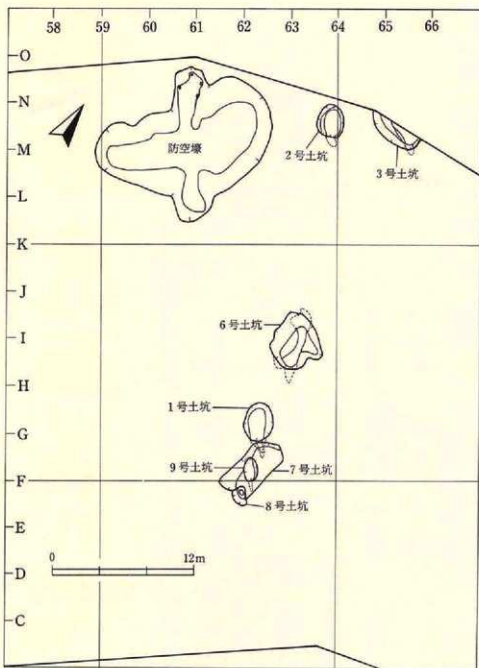
写真图版10 出土石器(3)

V. 白木野Ⅱ遺跡

遺跡台帳番号	MD57-2384
調査略号	SK II-92
調査面積	6,340㎡
調査期間	平成4年4月23日～8月31日
整理期間	平成4年11月2日～平成5年3月31日
調査担当者	羽柴直人 鎌田精造
整理担当者	羽柴直人 鎌田精造 山口博英



第1図 白木野II遺跡調査区



第2図 調査区東側遺構配置図

1. 検出された遺構

本遺跡から検出された遺構は、調査区西側の近世から現代にいたる屋敷跡地で建物19棟、池6基、溝17条、杭列4条、堅穴遺構3基、土坑14基が、調査区東側では何らかの採掘坑と思われる土坑が7基検出された。以下遺構別にその内容を述べていく。

(1) 建物

1号建物（第4図、写真図版8）

〔位置〕 F-18~24、G-18~23、H-19~23に位置する。

〔重複〕 2、3、4、5、6号建物、6号溝、2、3号堅穴遺構、12、19、20号土坑と重なっているが、いずれの遺構より1号建物が新しい。

〔規模〕 延床面積は271.7㎡（約84坪）である。

〔平面形式〕 礎石建物である。南側の礎石は取り除かれていたが、小原徳精氏の記憶からそのプランを復元した。部屋の名称も小原徳精氏による。主屋部は6間×11間で三方に約半間の下屋がついている。また2間×2間半の水屋の突出と1間×2間の入口の突出がついている。

〔建物方位〕 梁行きの軸方向はN-11°-Eである。

〔柱穴・礎石〕 礎石は最大で110×65cm、最小で31×42cmのものがみられる。いずれの礎石も加工した痕跡はみられない。これらの礎石は、10Y R5/4にぶい黄褐色土に礫が多量に混じった土で構築された整地層の上に据えられている。また水屋の部分は孤立柱である。掘り方の径は25cmほどである。

〔柱間寸法〕 梁行きは5尺8寸（174cm）、桁行きは6尺（180cm）を基準にしている。下屋は4尺（123cm）程度である。

〔出土遺物〕 水屋付近から多量の陶磁器片、アルミニウム製の鍋、ガラス器が出土した。陶磁器のほとんどは20世紀になってからのごく新しいものであるため、その全部は図示しておらず、特徴的なもの、製作年代が古いもののみを図示した（77、78、79、80、81、83、84、94、95、154、155、180、181）また石臼（382）、槍先（343）も出土している。これらの遺物はすべて火熱を受けており、ガラス器、アルミニウムの鍋などはその形状を留めていない。また整地層中から多量の遺物が出土しているが、これらはこの建物に伴うものではないのでここではふれない。

〔付属施設〕 厩の凹がみられる。規模は7.00m×3.23mである。また建物の前面に明赤褐色のロームを張りつけた屋外の作業場である「にわ」が検出された5m×15m程の規模である。

〔建物の性格〕 母屋である。

〔年代〕小原徳精氏によるとこの建物は明治26年(1893)に建てられ、昭和39年(1964)1月に火災のため焼失したものだという。存続した期間は67年になる。また「には」の貼り土中から19世紀中頃の平清水産の磁器の皿(68)が出土しており、この「には」も1号建物とともに構築されたことが推定される。

2号建物(第5図、写真図版9)

〔位置〕E-20~23、F-19~24、G-19~23、H-19~22に位置する。

〔重複〕3、4、5、6号建物、6号溝より新しく、1号建物より古い、2号堅穴遺構とも重なっているが前後関係を判断することはできなかった。

〔規模〕この建物は礎石の大半が取りのぞかれており、礎石を据えていたと思われる凹や下屋に使用されていた掘立柱からその存在が推定されたもので、規模や形状は不明な点が多い。一応図示したようなプランを想定したが、さらなる検討を要するものである。この想定プランでの延床面積は204.7㎡(約63坪)である。

〔平面形式〕礎石建物であるが下屋の柱は掘立柱である。前述のようにプランがはっきりしないが、5間×9間程度の直屋と考えられる。前面と後側に下屋がついている。

〔建物方位〕梁行きの軸方向はN-13°-Eである。

〔柱穴・礎石〕礎石は検出されなかったが、礎石を据えるための皿状の凹がみられる。この中には砂利が敷かれたようになっていたものがあるが、これは礎石の座りを良くする目的のものであろう。礎石は1号建物の建築の際に取り払われたのであろう。下屋の掘立柱の規模は表に示してある。

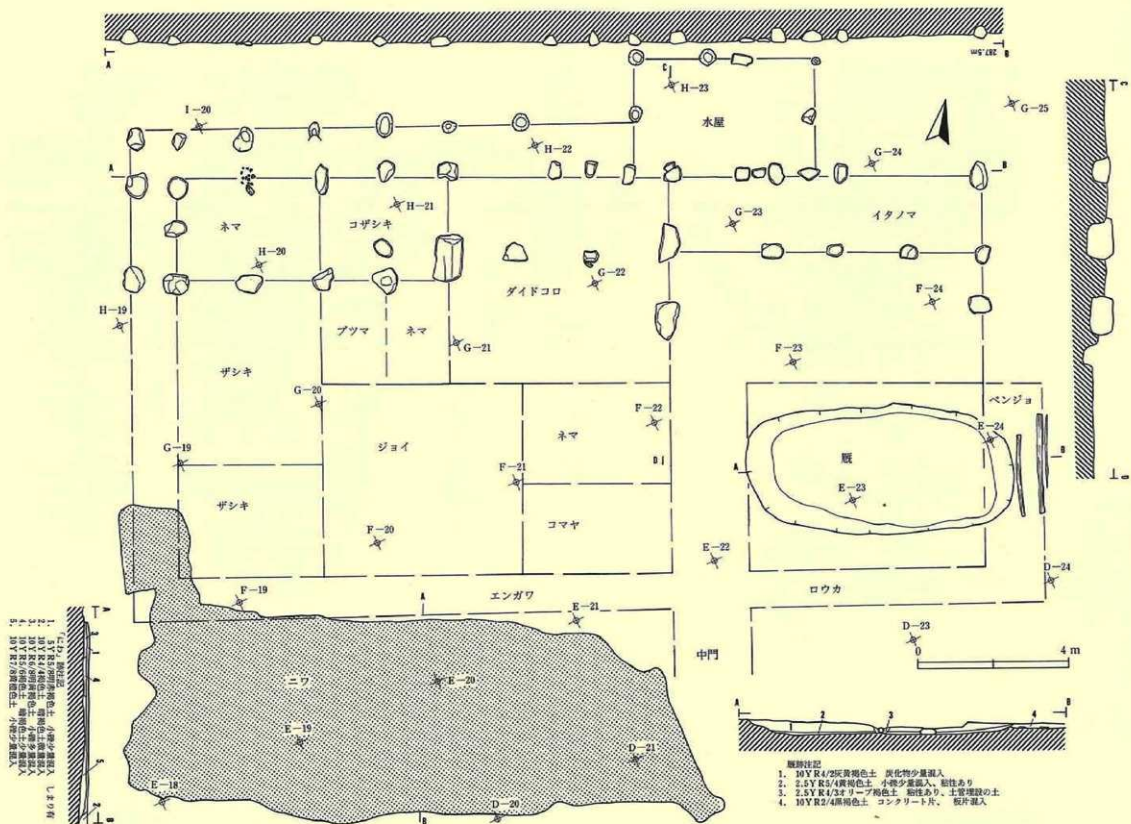
〔柱間寸法〕残された部分からみると、梁行きは5尺8寸(174cm)、桁行きは6尺(180cm)程度であるが詳細は不明である。

〔出土遺物〕P240から硯(377)と素焼きの土器片(182)が出土している。硯の裏面には「白木野小原徳松」と線刻されている。またP217からは陶器の皿(120)が出土している。

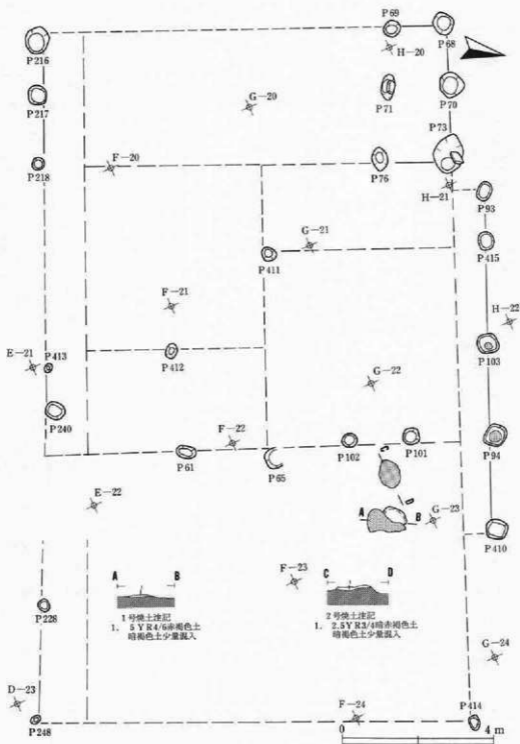
〔付属施設〕F-22、G-22で1号建物整地層の下から焼土が2基検出された。これらは4号建物の柱穴(P203)よりも新しいことから2号建物に伴う可能性が高い。位置から考えてかまどの痕跡と思われる。

〔建物の性格〕規模と位置から考えて母屋と思われる。

〔年代〕存続期間の下限は1号建物の建築時の1893年になる。この建物は礎石建物であるので存続期間が数十年の単位とは考えられないので、建築年代が19世紀初頭を下ることはないだろう。後述する2号建物に先行する3~6号の掘立柱建物の存続年代を考え合わせると18世紀の末から19世紀の初頭の建築と考えるのが妥当であろう。出土した硯の裏面に刻まれた「小原



第4図 1号建物



第5图 2号建物

徳松」という人は慶応年間に生まれ昭和の初年に亡くなったというので、この礎は2号建物の解体時に柱穴に混入したのであろう。

2号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備	考
61	39.0	15.0	礎石痕	
65	45.0	17.0	礎石痕	
68	40.0	14.0	礎石痕	
69	25.0	8.2	礎石痕 黄棕色砂質土混入	
70	50.0	14.5	礎石痕 黄棕色砂質土混入	
71	51.0	5.5	礎石痕 (一部石残りあり)	
73	105.0	15.0	礎石痕 (石残りあり)	
#	105.0	15.0	黄棕色砂質土混入	
76	30.0	7.2	礎石痕 黄棕色砂質土混入	
93	38.0	60.0		
94	39.0	57.0	柱痕あり	
101	32.0	10.0	礎石痕	
102	30.0	23.5	礎石痕	
103	43.0	49.6	柱痕あり、石少量あり	
216	52.0	45.0	石多量にあり上場は黄棕色ローム	
217	43.0	45.0	石多量にあり上場は黄棕色ローム	
218	32.0	40.0	石少量にあり上場は黄棕色ローム	
228	24.0	50.8	柱材一部残りあり	
240	35.0	58.7	石多量あり、混出土	
248	17.0	27.0		
410	42.0	38.0		
411	26.0	10.7	礎石痕	
412	24.0	8.4	礎石痕 黄棕色砂質土混入	
413	11.0	24.2		
414	29.0	10.0	礎石痕 黄棕色砂質土混入	
415	47.0	9.1	礎石痕	

3号建物 (第6図、写真図版9、10)

〔位置〕D-21~22、E-21~24、F-20~23、G-20~21に位置する。

〔重複〕4、5、6号建物より新しく、1、2号建物より古い。

〔規模〕延床面積は122.6㎡(約37坪)である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。3間×6間の直屋で東側と前面下手に下屋がついている。

間取りは下手と真中に梁行きいっばいの部屋を取り、上手には2間×2間と1間×2間の部屋があり、「広間型三間取り」の間取りを呈している。

〔建物方位〕梁行きの軸方向はN-6°-Wである。

〔柱穴・礎石〕各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石がみられるものが多い。柱痕は掘り方の一方に壁に偏するものが多い掘り方の平面形は隅丸方形である。

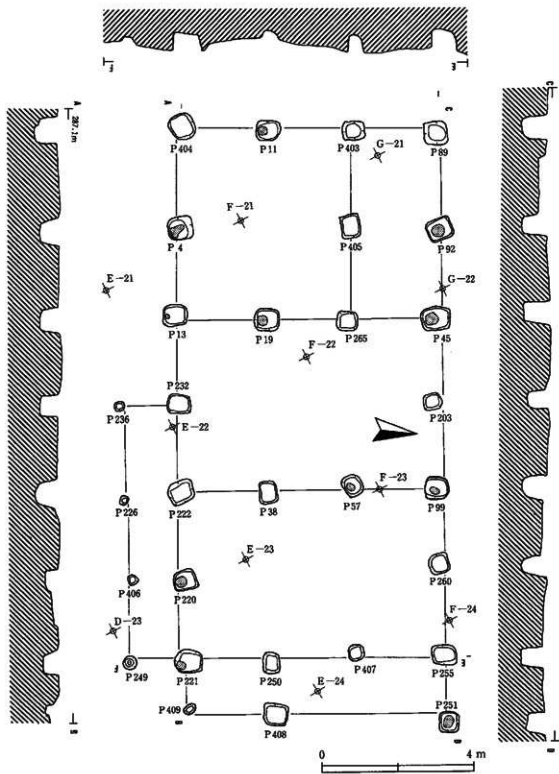
〔柱間寸法〕7尺5寸(225cm)を基調にしている。前面の下屋は4尺6寸(140cm)、東側の下屋は5尺(150cm)である。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕規模と位置から考えて母屋と思われる。

〔年代〕2号建物の年代観と後述する4~6号建物の年代観との関係から、18世紀の後半頃の年代が想定される。



第6图 3号建物

3号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備 考			
4	51.0	55.5	柱痕あり、石あり	226	15.0	38.7
11	54.0	68.0	柱痕あり、石多量にあり	232	51.0	59.2
13	52.0	61.6	柱痕あり、石少量あり	236	12.0	40.0
19	52.0	57.1	柱痕あり、石あり	249	21.0	50.1
38	50.0	30.0	石多量にあり	250	41.0	39.9
45	69.0	74.5	柱痕あり、石多量にあり	251	49.0	54.3
57	45.0	52.0	柱痕あり、石多量にあり	255	54.0	56.0
89	46.5	72.0	石多量にあり	260	43.0	61.7
92	60.0	60.5	柱痕あり、石多量にあり	265	49.5	43.1
99	56.0	64.2	柱痕あり、石多量にあり	403	39.5	61.2
203	51.0	59.2	石多量にあり	404	44.0	62.7
220	55.0	35.7	柱痕あり	405	50.0	49.4
221	56.5	47.0	柱痕あり	406	18.0	62.0
222	52.0	66.3		407	30.0	50.0
				408	49.0	18.7
				409	20.0	21.5

4号建物（第7図、写真図版10、11）

〔位置〕D-21~23、E-20~24、F-20~23、G-20~22に位置する。

〔重複〕5、6号建物より新しく、1、2、3号建物より古い。

〔規模〕延床面積は169.8㎡（約51坪）である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。3間×7間の直屋であり、東側を除く三方に下屋がついている。間取りは下手と真中に梁行きいっばいの部屋を取り、上手には2間×2間と1間×2間の部屋があり「広間型三間取り」の間取りを呈している。

〔建物方位〕梁行きの軸方向はN-5°-Wである。

〔柱穴・礎石〕各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石がみられるものが多い。柱痕は掘り方の一方に壁に偏するものが多い。掘り方の平面形は隅丸方形である。

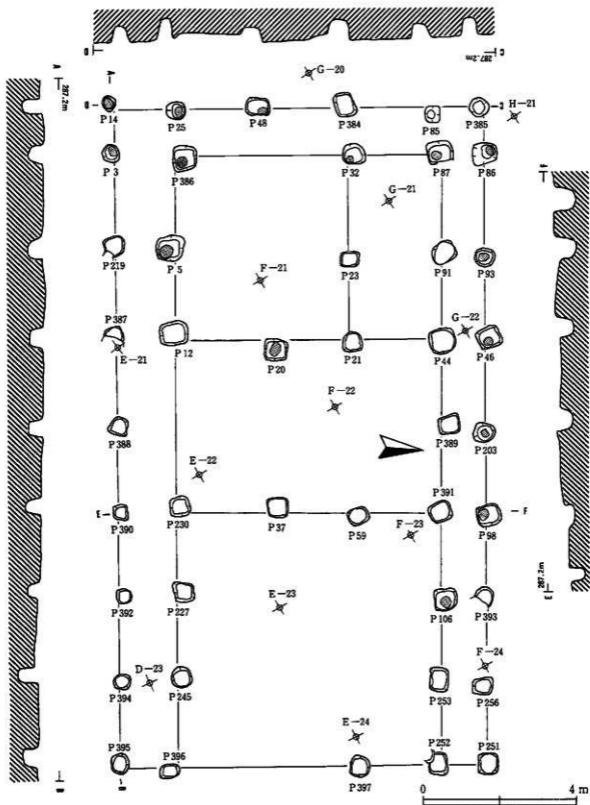
〔柱間寸法〕7尺5寸（225cm）を基調にしている。前面の下屋は5尺（152cm）、西側と後面の下屋は4尺（124cm）である。

〔出土遺物〕P256から陶器の甕（152）と寛永通寶（306）が出土している。甕は白岩窯産のもので18世紀の末から19世紀のものである。寛永通寶は古寛永である。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕規模と位置から考えて母屋と思われる。

〔年代〕3号建物の年代観と後述する5、6号建物の年代観との関係から18世紀の前半頃の年代が想定される。P256出土の甕の年代と合わないが、柱穴に遺物が混入する過程は様々な事が仮定されるのでこのようなこともありえよう。



第7图 4号建物

4号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備 考
3	48.0	36.5	柱痕あり
5	55.0	40.2	柱痕あり
12	60.0	33.1	石多量にあり
14	30.0	46.9	柱痕あり、石多量にあり
20	47.0	51.2	柱痕あり、石多量にあり
21	42.5	33.1	石少量あり
23	38.0	46.8	石あり
25	36.0	36.7	柱痕あり、石少量あり
32	47.0	57.0	柱痕あり、石少量にあり
37	45.0	39.3	石多量にあり
44	58.0	62.4	石多量にあり
46	48.0	72.8	柱痕あり
48	55.0	59.3	柱痕あり、石多量にあり
59	46.0	49.2	石多量にあり
85	33.5	67.0	柱痕あり
86	36.0	52.8	柱痕あり
87	58.0	64.5	柱痕あり
91	62.0	36.0	
93	45.0	50.2	柱痕あり
98	55.0	52.7	柱痕あり、石少量あり
106	54.0	42.9	柱痕あり
203	40.0	57.6	石多量にあり
219	44.0	37.0	石多量にあり
227	39.0	33.4	
230	40.0	32.6	石あり
245	42.0	36.2	
251	50.0	19.3	石あり
252	46.0	47.6	
253	51.0	51.0	
256	42.0	40.0	陶器類(第61図152)出土
384	48.0	41.0	
385	30.5	44.5	
386	52.0	69.3	柱痕あり
387	44.0	38.1	石多量にあり
388	38.0	28.5	
389	47.0	29.7	
390	28.0	42.5	
391	52.0	59.3	
392	32.0	35.5	
393	40.0	29.1	

5号建物(第8図、写真図版11)

〔位置〕D-21~23、E-20~24、F-20~22、G-21に位置する。

〔重複〕1、2、3、4号建物より古い。6号建物とはプラン的に重なっているが切り合っている柱穴が無くその前後関係は不明であるが、間取りの形態から5号建物が古いと考えられる。

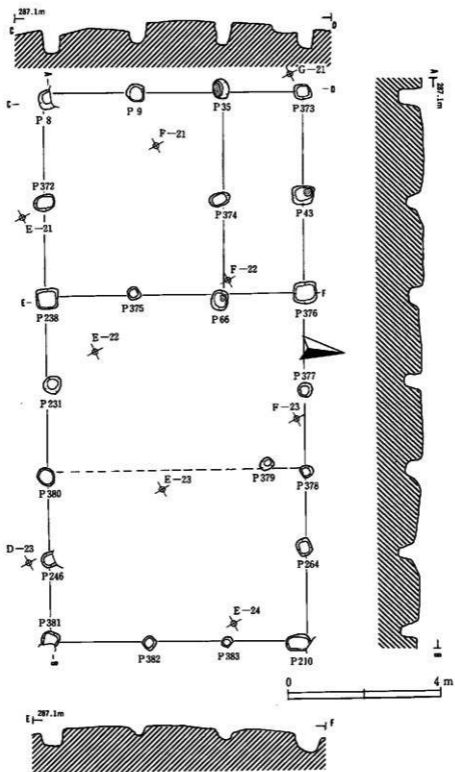
〔規模〕延床面積は98.6㎡(約30坪)である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。3間×6間の直屋であり、間取りは下手と真中に梁行きいっばいの部屋を取り、上手には2間×2間と1間×2間の部屋があるが下手と真中の部屋の間仕切りが明瞭でなく、「広間型三間取り」が完全に成立する前の間取りを呈している。

〔建物方位〕梁行きの軸方向はN-7°-Wである。

〔柱穴・礎石〕各柱穴の規模は観察表に記してある。柱痕は掘り方の一方に壁に偏するものが多い。掘り方の平面形は圓方形である。

〔柱間寸法〕梁行きは7尺5寸(225cm)を基調にしている。桁行きは上手で9尺(271cm)真中の部屋で8尺(243cm)、下手の部屋で7尺5寸(225cm)を数える。



第8圖 5号建物

5号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備考				
8	30.0	63.2	石少量あり	372	47.0	42.6	石少量あり
9	36.5	55.5	石少量あり	373	33.5	47.1	
35	41.0	61.6	柱痕あり	374	39.0	55.6	石少量あり
43	44.0	59.1	柱痕あり	375	21.0	26.0	
66	48.0	30.0	柱痕あり、陶器皿出土(第56図122)	376	53.0	42.2	石少量あり
#			石少量あり	377	26.0	23.3	
210	56.0	45.5	漆器蓋(第75図204)出土石多量あり	378	21.0	18.4	
231	28.0	44.7		379	20.0	20.5	
238	46.0	44.6	石少量あり	380	41.0	54.5	石多量にあり
246	29.0	58.9	石少量あり	381	36.0	46.0	石多量にあり
264	34.0	43.5	播鉢(第66図165)、砥石(第104図372)出土	382	23.0	29.5	
#			石多量にあり	383	18.0	21.3	

〔出土遺物〕 P66から陶器の皿(122)が、北東隅のP210から漆器の蓋(204)が、P264から播鉢(165)と砥石(372)が出土している。122の皿は肥前(唐津)産で18世紀代のものである。165の播鉢も肥前産で17世紀前半代のものである。P210から出土した漆器の蓋は穿孔が4つあり、柱穴の掘り方から内側が上を向いた形で出土したが、P210が北東隅の柱であることと、意味は不明であるが穿孔がなされていることから、何らかの儀礼的な行為が行われた可能性が考えられる。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕規模と位置から考えて母屋と思われる。

〔年代〕5号建物は母屋と考えられる建物の中では一番古いものであり、この屋敷跡で出土している陶磁器で一番古いのは17世紀の前半代のもので、建築年代を17世紀の前半とすることができる。存続した期間を示す直接の資料はないが、掘立柱建物という性質上そんなに長かったとは考えられない。沢内村史上巻(14)に引用されている小田島千富家文書の家屋普請願い届けには「私居宅、四十年以前ニ相調申候而住居仕候所、御存知被成候通殊之外及大破、柱根朽如何様にもすまない成かね申候、依之当秋立替申度奉在候而、乍恐奉願上候」とありこの家は40年ほど建て替えが必要なことから掘立柱建物と推定され、掘立柱建物の存続期間を示している資料といえよう。また宮沢智士(20)によると新潟県小千谷市の大窪栄悦家の普請関係の文書から掘立柱建物と考えられる家が享保14年に建てられ、45年後の安永2年に建て替えのため解体された事がわかるという。これらの事例から母屋として使用された掘立柱建物の存続期間を40～50年間で一応考えたい。そうするとこの建物は17世紀の中頃まで存続していたと考えられる。P264から出土した17世紀前半代の播鉢もこの年代を裏付ける資料となろう。

6号建物（第9図、写真図版12）

〔位置〕D-21～23、E-20～24、F-20～24、G-20～21に位置する。

〔重複〕1、2、3、4号建物より古く、5号建物より新しいと思われる。

〔規模〕延床面積は99.4㎡（約30坪）である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。3間×6間の直屋である。間取りは下手と真中に乗行きいっばいの部屋を取り、上手には2間×2間と1間×2間の部屋があり、「広間型3間取り」の間取りを呈している。

〔建物方位〕乗行きの軸方向はN-5°-Wである。

〔柱穴・礎石〕各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石がみられるものはない。掘り方の平面形は隅丸方形のものと円形のもの混在している。

〔柱間寸法〕乗行きでは8尺（245cm）、桁行きは上手では8尺5寸（約260cm）、真中の部屋と下手では7尺5寸（225cm）を基調にしている。

〔出土遺物〕P100から磁器の皿（42）が出土している。肥前産で17世紀の後半から18世紀前半のものである。

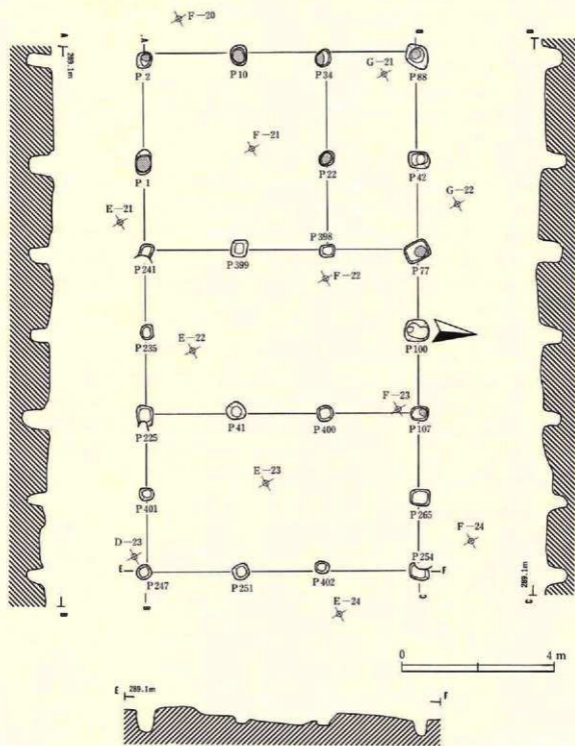
〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕規模と位置から考えて母屋と思われる。

〔年代〕この建物は5号建物と切り合っている柱穴がないので、その前後関係を断言することはできないが、この建物の間取りが完全な「広間型3間取り」であるのに対して5号建物の間取りは下手と真中の部屋の間仕切りがはっきりみられず、「広間型3間取り」が完全に成立する前の形を呈することから、5号建物の方が古いと考えられる。よって前述の5号建物の年代観の17世紀前半に後続する17世紀後半の年代がこの建物には考えられる。

6号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さ	備	考				
					225	35.0	68.5	
1	48.5	65.1	柱痕あり		235	30.0	45.0	
2	32.0	63.0	柱痕あり		241	29.0	51.1	
10	40.0	73.6	柱痕あり		247	26.0	50.3	木片出土
22	35.0	45.4	柱痕あり		251	26.5	28.5	
34	40.0	79.1	柱痕あり		254	37.0	65.5	
41	33.0	67.6			265	41.0	44.8	
42	40.0	74.4	柱痕あり、石少量		398	27.5	36.0	
77	55.0	67.0	柱痕あり		399	38.0	50.0	
88	39.5	61.9	柱痕あり		400	32.0	17.9	
100	56.0	61.0	柱痕あり、磁器		401	24.0	55.7	
107	38.0	50.5	柱痕あり		402	24.5	16.4	



第9图 6号建物

7号建物（第10図、写真図版12）

〔位置〕 A-15~17、B-16~17に位置する。

〔重複〕 23、24号土坑とプランが重なっているが前後関係は不明である。

〔規模〕 延床面積は43.2㎡（約13坪）である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。2間×4間の直屋である。間仕切りはみられない。

〔建物方位〕 桁行きの軸方向はN-2°-Wである。

〔柱穴・礎石〕 各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石がみられるものはない。掘り方の平面形は隅丸方形である。

〔柱間寸法〕 7尺5寸（約225cm）を基調にしている。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 規模と位置から考えて母屋に付属する建物と思われる。

〔年代〕 柱間寸法が7尺5寸で3~6号建物に使われている間尺と共通するので、19世紀に下るとは考えられず、17~18世紀の間に納まるとと思われる。

8号建物（第10図、写真図版12）

〔位置〕 D-17~18、E-16~19、F-16~17に位置する。

〔重複〕 9、11号建物より古い。10号建物とプラン的に重なるが直接切り合っている部分がなく前後関係は不明である。

〔規模〕 延床面積は35.0㎡（約11坪）である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。2間×4間の直屋である。間仕切りはみられない。

〔建物方位〕 梁行きの軸方向はN-6°-Wである。

〔柱穴・礎石〕 各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石がみられるものはない。掘り方の平面形は隅丸方形のものが多い。

〔柱間寸法〕 桁行きは6尺6寸（約202cm）梁行きは7尺（約212cm）である。

〔出土遺物〕 なし

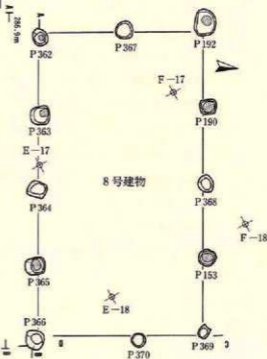
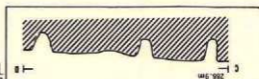
〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 規模と位置から考えて母屋に付属する建物と思われる。

7号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備	考
268	23.0	62.6		
269	19.0	57.7		
270	27.0	42.6		
271	16.0	64.4		
272	24.5	66.8	柱痕あり	
273	24.0	54.6	柱痕あり	
274	24.5	56.0	柱痕あり	
275	25.0	47.5	柱痕あり	
276	28.0	38.5	柱痕あり	
277	24.0	37.0		
371	32.0	34.0	柱痕あり	

0 4 m



8号建物

F-18

8号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備	考
153	35.0	53.5	柱痕あり	
190	36.0	64.0	柱痕あり	
192	58.0	53.2	柱痕あり	
362	28.5	46.0	柱痕あり	
363	39.5	37.7	柱痕あり	
364	35.0	44.2		
365	38.0	39.1	柱痕あり、石少量あり	
366	20.0	52.3		
367	38.0	19.2		
368	31.0	60.0		
369	25.0	69.3		
370	33.0	52.7		

0 4 m

第10図 7、8号建物

9号建物（第11図、写真図版12）

〔位置〕 D-18、E-16~18、F-16~18に位置する。

〔重複〕 11号建物より古く、8号建物より新しい。10号建物とプラン的に重なるが直接切り合っている部分がなく前後関係は不明である。

〔規模〕 延床面積は27.7㎡（約8坪）である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。2間×3間の直屋である。P360、P202は間仕切りのためではなくて束柱と思われる。

〔建物方位〕 梁行きの軸方向はN-8'-Wである。

〔柱穴・礎石〕 各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石がみられるものはない。

〔柱間寸法〕 桁行きは6尺3寸（約193cm）と7尺5寸（約225cm）がみられ、梁行きは7尺5寸（約225cm）である。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 規模と位置から考えて母屋に付属する建物と思われる。

〔年代〕 不明であるが、18世紀以前のものである可能性が高い。

10号建物（第11図、写真図版12）

〔位置〕 E-16~19、F-17に位置する。

〔重複〕 11号建物より古い。8、9号建物とはプラン的に重なるが、直接切り合っている柱穴がなく前後関係は不明である。3、4号杭列とも直接切り合う部分はないが、この建物より新しい11号建物が切り合い関係から3、4号杭列より古いことがわかるのでこの建物も3、4号杭列より古いといえる。

〔規模〕 延床面積は29.8㎡（約9坪）である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。2間×4間の直屋である。

〔建物方位〕 梁行きの軸方向はN-15'-Wである。

〔柱穴・礎石〕 各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石がみられるものはない。

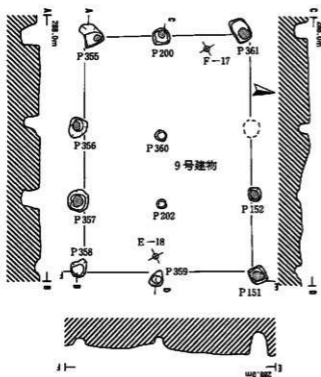
〔柱間寸法〕 桁行きは4尺8寸（約193cm）と7尺5寸（約225cm）がみられる。梁行きは不定であるが平均すると、6尺6寸（約204cm）である。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

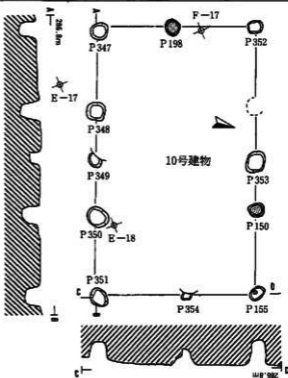
9号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備 考
151	32.0	65.0	柱痕あり
152	31.0	43.4	柱痕あり
200	32.0	43.9	柱痕あり
202	17.0	19.1	
355	46.5	57.6	柱痕あり
356	31.0	49.6	柱痕あり
357	45.0	49.9	柱痕あり
358	33.0	16.0	
359	24.0	19.5	柱痕あり
360	20.0	37.2	
361	58.0	56.1	柱痕あり、石少量あり



10号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備 考
150	34.0	66.3	柱痕あり
155	35.0	67.0	柱痕あり、石少量あり
198	35.0	51.9	柱痕あり
347	34.5	53.0	
348	32.0	55.1	
349	30.5	30.6	
350	44.0	52.0	
351	38.0	55.0	
352	32.0	67.0	
353	40.5	63.6	
354	18.0	47.9	



第11図 9、10号建物

〔建物の性格〕規模と位置から考えて母屋に付属する建物と思われる。

〔年代〕不明であるが、18世紀以前のものである可能性が高い。

11号建物（第12図、写真図版13）

〔位置〕E-17～19、F-17～19に位置する。

〔重複〕8、9、10号建物より新しい。また3、4号杭列よりは古い。

〔規模〕延床面積は36.9㎡（約11坪）である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。2間（3間）×4間の直屋である。西側に1間×2間、東側に2間×3間の2部屋がみられる。

〔建物方位〕梁行きの軸方向はN-25°-Wである。

〔柱穴・礎石〕各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石がみられるものはない。

〔柱間寸法〕桁行きは7尺5寸（約225cm）と6尺6寸（約200cm）がみられる。梁行きは西側で7尺5寸（約225cm）東側5尺（約153cm）である。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕規模と位置から考えて母屋に付属する建物と思われる。

〔年代〕不明であるが18世紀以前のものである可能性が高い。

12号建物（第12図、写真図版13）

〔位置〕F-17～18、G-17～18に位置する。

〔重複〕12、13号土坑より新しい。

〔規模〕延床面積は17.8㎡（約5坪）である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。2間×3間の直屋である。

〔建物方位〕梁行きの軸方向はN-16°-Wである。

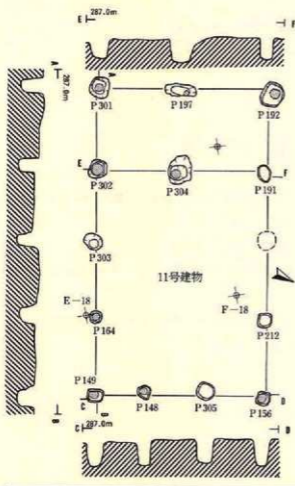
〔柱穴・礎石〕各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石がみられるものがある。P306とP212の間の柱穴は検出できなかった。

〔柱間寸法〕桁行きは5尺8寸（約175cm）で、梁行きは5尺（約153cm）である。

〔出土遺物〕P201から磁器の皿の破片（74）と不明銅製品（351）が出土している。74の皿の破片は1号、2号竪穴遺構から出土したものと接合した。

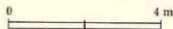
〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕規模と位置から考えて母屋に付属する建物と思われる。



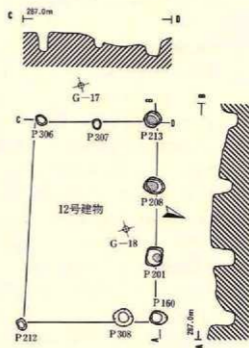
11号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備考
148	32.0	64.0	柱痕あり
149	36.2	60.2	柱痕あり
156	30.0	64.3	柱痕あり
164	25.2	62.2	柱痕あり
191	44.0	56.7	
192	58.0	54.3	柱痕あり
197	50.0	58.2	柱痕あり
212	30.0	65.9	柱痕あり
301	44.0	53.3	柱痕あり
302	42.0	41.7	柱痕あり
303	25.0	60.2	
304	45.0	58.6	柱痕あり
305	38.0	55.0	



12号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備考
190	45.0	27.2	木片あり、柱痕あり
201	50.0	57.0	石多量、柱痕あり、磁器類(第44回74)不明陶製品(第99回351)出土
208	51.0	44.5	石あり 柱痕あり
212	34.0	54.0	
213	44.0	31.5	柱痕あり
306	24.0	51.6	
307	21.0	24.0	
308	43.0	21.0	



第12図 11、12号建物

〔年代〕不明であるが、2号建物に伴い、19世紀代の可能性が考えられる。

13号建物（第13図、写真図版13）

〔位置〕B-19～20、C-18～20、D-19に位置する。

〔重複〕10、13号溝とプラン的に重なるが前後関係を判定することができなかった。

〔規模〕延床面積は37.8㎡（約11坪）である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。2間×4間の直屋である。

〔建物方位〕梁行きの軸方向はN-7°-Wである。

〔柱穴・礎石〕各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石がみられるものはない。P313と315で腐った状態であったが柱材の残存がみられた。

〔柱間寸法〕桁行きは7尺（約215cm）で、梁行きは7尺5寸（約225cm）である。

〔出土遺物〕P178から磁器の皿の破片（70）と磁器の碗（1）が出土している。ともに肥前産で磁器の皿は1630～1640年代、磁器の碗は1670～1690年代のものである。

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕規模と位置から考えて母屋に付属する建物と思われる。

〔年代〕P178から出土した磁器が2点とも17世紀代のものであることから、この建物の存続期間も17世紀代に納まると思われる。

14号建物（第13図、写真図版13）

〔位置〕C-23～24、D-24に位置する。

〔重複〕なし

〔規模〕延床面積は18.6㎡（約6坪）である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。1間×3間の直屋である。

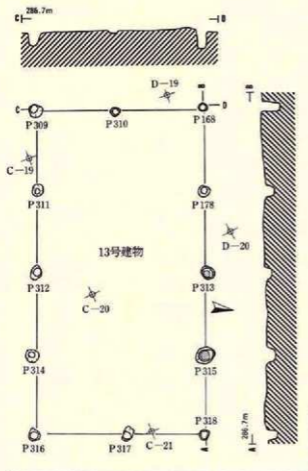
〔建物方位〕桁行きの軸方向はN-4°-Wである。

〔柱穴・礎石〕名柱穴の規模は観察表に記してある。P320とP323の間に柱穴を検出することはできなかった。

〔柱間寸法〕桁行きは8尺3寸（約251cm）と5尺（約150cm）で、梁行きは8尺（約243cm）である。

〔出土遺物〕確実にこの建物に伴うか不明であるが北西に寄った部分に埋設した桶（224）がみられた。またその中から別個体の桶の底板（223）が出土した。

〔付属施設〕出土遺物の項で述べた埋設桶がある。上半部は後世の暗渠により削り取られている。底板は土圧のためか桶の本体より下にはみ出していた。またこの建物の全体のプランに



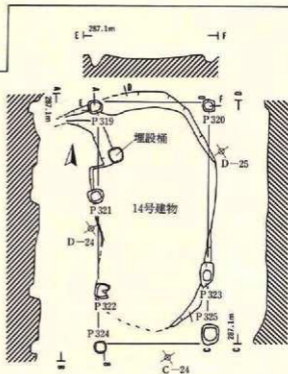
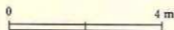
13号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備 考
168	31.0	51.8	石あり
178	30.0	25.0	磁器破(第35回1)磁器皿(第43回70)
309	22.0	33.4	
310	20.0	10.3	
311	14.0	39.4	
312	10.0	27.4	
313	28.0	22.0	柱木残りあり
314	15.0	31.5	
315	38.0	24.1	柱木残りあり
316	22.0	18.0	
317	22.0	38.0	
318	23.0	26.3	



14号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備 考
319	30.0	39.1	
320	22.0	16.0	石少量あり
321	26.0	24.0	
322	33.0	17.7	柱木残りあり
323	29.0	19.7	柱底あり
324	26.0	23.6	木片あり
325	34.0	8.8	



第13図 13、14号建物

ほぼ納まる形で底面が皿状に凹んでいる。

〔建物の性格〕規模と位置から考えて母屋に付属する建物と思われる。埋設桶が伴うのであれば便所の可能性も考えられる。また床面が皿状に凹んでいることから厩の可能性もある。

〔年代〕不明であるが、近代まで下るものとは考え難い。

15号建物（第15図、写真図版13）

〔位置〕I-21、J-21、K-21に位置する。

〔重複〕1号池より古く、プランの半分以上が1号池に切られている。

〔規模〕残存部分の床面積は13.3㎡（約4坪）である。

〔平面形式〕掘立柱建物である。2間以上×3間のプランである。

〔建物方位〕桁？（南北の軸）行きの軸方向はN-8°-Wである。

〔柱穴・礎石〕各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石がみられるものが多い。

〔柱間寸法〕桁行き（南北の軸）は7尺（約212cm）で、梁行き（東西の軸）は6尺3寸（約190cm）である。

〔出土遺物〕なし

〔付属施設〕なし

〔建物の性格〕規模と位置から考えて母屋に付属する建物と思われる。

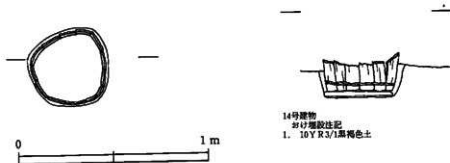
〔年代〕不明であるが、2号建物に伴い19世紀代の可能性が考えられる。

16号建物（第15図、写真図版14）

〔位置〕C-17~18、D-17~18に位置する。

〔重複〕8号建物とプラン的に重なるがその前後関係は不明である。

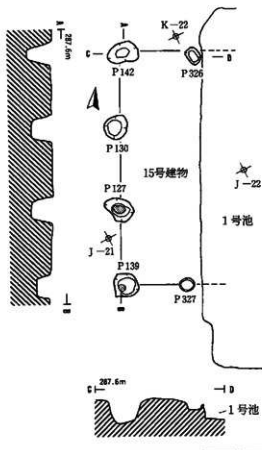
〔規模〕総床面積は17.4㎡（約5坪）である。



第14図 14号建物内おけ埋設

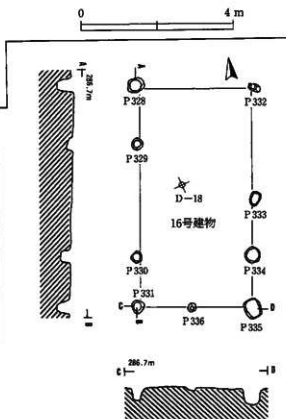
15号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備 考
127	45.0	61.3	柱痕あり、石多量あり
130	40.0	54.3	石少量あり
139	45.0	50.2	柱痕あり
142	37.0	61.8	
326	30.0	23.6	石多量あり
327	35.0	46.0	石多量あり



16号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備 考
328	32.0	27.5	石少量あり
329	24.0	22.0	
330	23.0	29.5	
331	20.0	34.1	
332	12.0	20.6	
333	39.0	15.0	
334	35.0	29.3	
335	45.0	46.1	
336	11.0	10.0	



第15図 15、16号建物

〔平面形式〕 掘立柱建物である。2間×4間の直屋である。

〔建物方位〕 桁行きの軸方向はN-7°-Eである。

〔柱穴・礎石〕 各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石がみられるものはない。

〔柱間寸法〕 桁行きは4尺7寸(約143cm)で梁行きは5尺程度(約150cm)である。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 規模と位置から考えて母屋に付属する建物と思われる。

〔年代〕 不明である。

17号建物(第16図、写真図版14)

〔位置〕 A-15~16、B-15~16に位置する。

〔重複〕 なし

〔規模〕 総床面積は11.1㎡(約3坪)である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。2間×2間の直屋である。

〔建物方位〕 桁行きの軸方向はN-4°-Eである。

〔柱穴・礎石〕 各柱穴の規模は観察表に記してある。南西隅に柱穴は検出されなかったが、この付近は畑の耕作のための攪乱がみられ、そのために柱穴が失われたと思われる。

〔柱間寸法〕 梁行きは4尺8寸(約147cm)で桁行きは6尺(約181cm)である。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 規模と位置から考えて母屋に付属する建物と思われる。

〔年代〕 不明である。

18号建物(第16図、写真図版14)

〔位置〕 B-22~23、C-22に位置する。

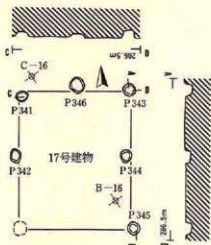
〔重複〕 5号池と重なっているが前後関係をはっきりつかむ事ができなかった。

〔規模〕 不明

〔平面形式〕 掘立柱建物である。プランの大半が調査区外にあるため形状は不明である。検出された軸は3間の間である。

〔建物方位〕 検出された軸の直角方向はN-7°-Eである。

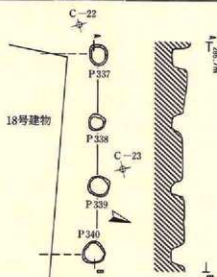
〔柱穴・礎石〕 各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石が検出された



17号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備	考
341	29.0	14.4		
342	26.0	16.3		
343	22.0	25.1		
344	23.0	18.5		
345	22.0	21.1		
346	34.0	11.5	石あり	

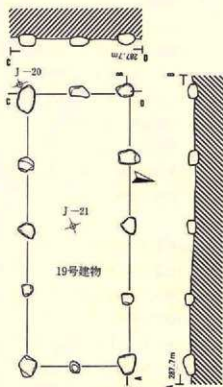
B-15



18号建物柱穴観察表

番号	径cm	深さcm	備	考
337	22.0	31.7		
338	22.0	31.2		
339	25.0	35.2		
340	27.0	41.2		

0 4 m



第16図 17、18、19号建物

ものはない。

〔柱間寸法〕 5尺8寸（約176cm）である。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 規模と位置から考えて母屋に付属する建物と思われる。

〔年代〕 5号池より以前のものであれば17世紀代の年代が考えられる。

19号建物（第16図、写真図版14）

〔位置〕 I-20～21、J-20～21に位置する。

〔重複〕 2、3号池と重なっているが、この建物が新しい。

〔規模〕 総床面積は22.1㎡（約7坪）である。

〔平面形式〕 礎石建物である。2間×4間の重屋である。

〔建物方位〕 梁行きの軸方向はN-12'-Wである。

〔柱穴・礎石〕 西側中央の凹は礎石を起こした痕跡である。

〔柱間寸法〕 梁行き、桁行きともに6尺（約180cm）である。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 規模と位置から考えて母屋に付属する建物である。

〔年代〕 ごく近年まで存在していた建物である。

(2) 池

1号池（第17図、写真図版14、15）

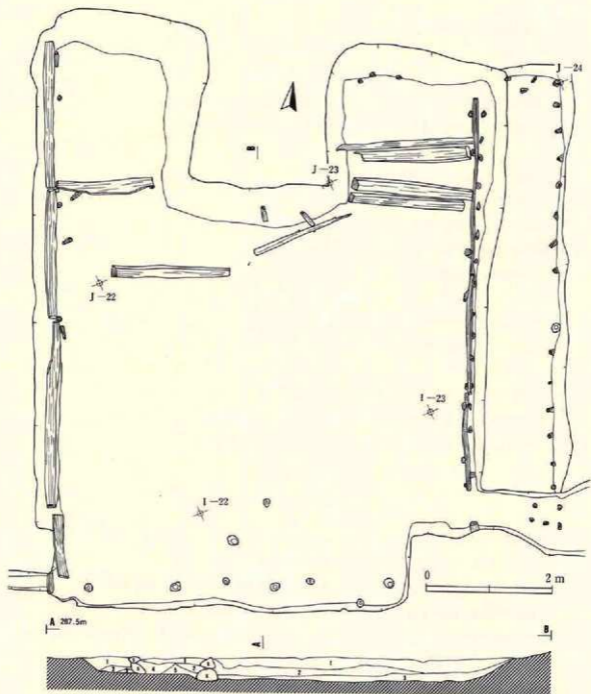
〔位置〕 H-21～23、I-22～23、J-21～23に位置する。

〔重複〕 15号、19号建物と重複している。1号池は15号建物より新しく、19号建物より古い。

〔規模・平面形〕 池の東側を一度縮小している。縮小前は東西8 m44cm、縮小後は東西7 mである。南北は最大で9 m48cm、池の内側に突出した部分で6 m68cmである。西側で1号溝とつながっており、池の水を流し出すようになっている。

〔埋土〕 5層に分けられる。1～2層は1964年の1号建物の火災の際に、後片付けのために瓦礫などを埋め立てて生じた層である。東側の縮小した部分は黄褐色のロームで埋められている。

〔出土遺物〕 1～2層中から多量の陶磁器片や焼けた木片が出土した。大部分は大正、昭和



- 1号池注记
1. 10Y R4/6褐色土 黄褐色土 炭化物少量混入 灰白色土微量混入
 2. 10Y R3/4暗褐色土 炭化物少量混入 灰白色土微量混入
 3. 10Y R2/3暗褐色土 褐色土颗粒混入 炭化物少量混入
 4. 10Y R6/8暗黄褐色土 暗褐色土 炭化物少量混入
 5. 7.5Y R6/2灰褐色土 炭化物少量混入

第17图 1号池

以降のごく新しいもので、図示した遺物は年代が古いものや、特徴的なもののみ取り上げた。磁器の碗(23、31、38、39、40)、磁器の徳利(160)、陶器の皿(128)素焼きの七厘(186、187)、寛永通寶(305、310、320、328)、砥石(373)、鳥型の土製品(383、384)がある。

〔年代〕構築年代は不明であるが、廃絶年代は1964年(昭和39年)とはっきりしている。西側の部分を縮小した年代も不明であるが、1号建物の建築の際(1893)に突出した水屋のすぐ前面に池があることに不都合を感じて、池を縮小した可能性が考えられる。そうすれば池の構築年代は1893年以前という事になる。

2号池(第18図、写真図版15)

〔位置〕J-20に位置する。

〔重複〕3号池と重複している。2号池の方が新しい。

〔規模・平面形〕東西2 m38cm、南北2 m68cmで長方形を呈する。確認面からの深さは約34 cmである。四方を材木で囲んでいる。

〔埋土〕1層に分けられる。人為的に一度に埋めたものと思われる。

〔出土遺物〕底面から磁器の六角大壺の口縁部の破片(87)、植木鉢(162)、播鉢(176)、板に紋を彫りこんだ不明木製品(255)が出土した。87の壺の破片は肥前産で1690～18世紀前半のもの、植木鉢は平清水産で19世紀中以降のもの、播鉢は白岩産で1771～19世紀代のものである。他に図示しなかったが、木製のくさびが底面から数点出土している。

〔年代〕この遺構は小原徳精氏の話によると、池ではなくこの位置にあった板倉の床面の一段下がった「おとし」であるという。この板倉は昭和14年頃に解体し、その際に「おとし」も埋めてしまったという。板倉は礎石建であり、その礎石を取り除いたために発掘調査で検出することができなかったであろう。そうすればこの「2号池」という遺構の名称は不適切なことになる。

3号池(第18図、写真図版15)

〔位置〕J-19、20、K-19、20に位置する。

〔重複〕2号、4号池と重複している。4号池より新しく、2号池より古い。

〔規模・平面形〕東西5 m53cm、南北8 m30cmで長方形を呈する。確認面からの深さは約40 cmである。南西に水を流し出す溝が出ている。

〔埋土〕4層に分けられる。人為堆積の別は判断できない。

〔出土遺物〕底面から磁器の碗(9、30)、磁器の皿(51)、青磁の皿(82)、磁器の杯(93)、磁器の徳利(99)、陶器の皿(129)、陶器の甕(149)、漆器の碗(201)、木製の独楽(253)が出

土した。陶磁器の時期は様々であり30の磁器碗、93の磁器の徳利は明治以降のものである。他に板材や木の枝などが底面に多量にみられた。

〔年代〕出土遺物のなかに明治以降のものがみられ、この池が明治時代に廃絶されたことを示している。構築年代は不明である。

4号池（第18図、写真図版15）

〔位置〕I-19、20に位置する。

〔重複〕2号、3号池、1号溝と重複している。4号池はこれらの遺構より古い。

〔規模・平面形〕東西4 m20cm、南北5 m10cmで長方形を呈する。確認面からの深さは約50cmである。南西で4号溝とつながっており、水が流れ出るようになっている。17号溝の東側のプランがはっきりしないため、直接つながって確認されなかったが、プラン的に考えると本来は17号溝から4号池の東側に水が注ぐようになっていた可能性が考えられる。また3号池と重複している部分に60×75cmの板で囲んだ一段下がった部分が2カ所あるが、土層断面の観察からこの施設が4号池に伴っていることがわかる。

〔埋土〕4層に分けられる。人為堆積、自然堆積の別は判断できない。

〔出土遺物〕材木、自然木が底面にみられたが、他の人工遺物は出土しなかった。

〔年代〕年代を示す出土遺物が無いが、4号池と運動した遺構である4号溝、17号溝の年代観から18～19世紀前半にかけてのものと思われる。

5号池（第19図、写真図版16）

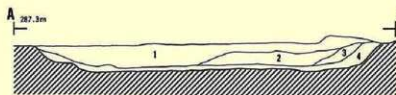
〔位置〕B-21、22、23、C-21、22、23に位置する。

〔重複〕18号建物と重複している。前後関係を確認することはできなかった。

〔規模・平面形〕南側が調査区外にかかり、また東側のプランがはっきりせず規模を明確に示すことができないが、検出された部分の南北長は4 m64cm、東西長は約10m20cmである。C-22の杭の付近に島が2カ所みられ、池が分断されて溝状になっている部分が生じている。また池の西壁と北壁に沿って杭が連続的に打ち込まれている。池の南西側は9号溝とつながっており池から水が流れ出るようになっている。

〔埋土〕2層に分けられる。人為の堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕底面から陶磁器と木製品が出土した。列挙すると陶磁器は磁器の碗（2、6）、磁器の皿（53、56、72）、磁器の水滴（86）、陶器の鉢（143）が、木製品は下駄（207、208）、鉢（209）、柄（210）、鈎状の不明木製品（211）、鍬台（212）、木植（213）、桶の側板（214、215）、樽の蓋板（217）、くさび（257～266）、板材（267～269、271）、杭（270）、不明木製品（256）



3号池剖面

1. 10Y R5/3灰黄褐色土 暗褐色土少量混入
2. 10Y R5/2灰黄褐色土 暗褐色土少量混入
3. 10Y R5/3(2:3)黄褐色土 暗褐色土少量混入
4. 10Y R5/4暗褐色土 L-20、黄褐色土少量混入



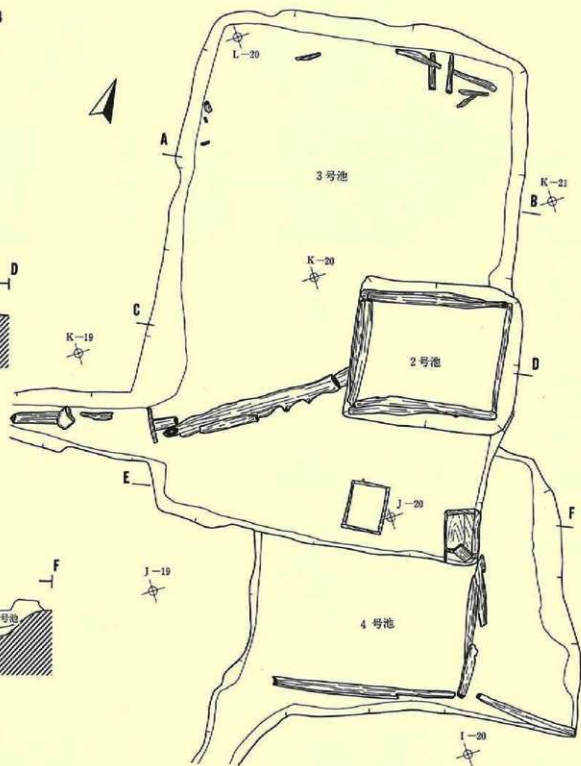
2号池剖面

1. 10Y R7/4(2:1)黄褐色ローム状褐色土少量混入



4号池剖面

1. 10Y R5/4暗黄褐色土、ローム状 黄褐色土少量混入
2. 10Y R5/2暗褐色土 砂粒少量混入
3. 10Y R5/3(2:1)黄褐色土、ローム粒少量混入
4. 10Y R5/1暗褐色土



第18图 2、3、4号池

D-22

D-23

C-20

C-21

C-22

C-23

C-24

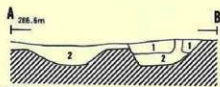
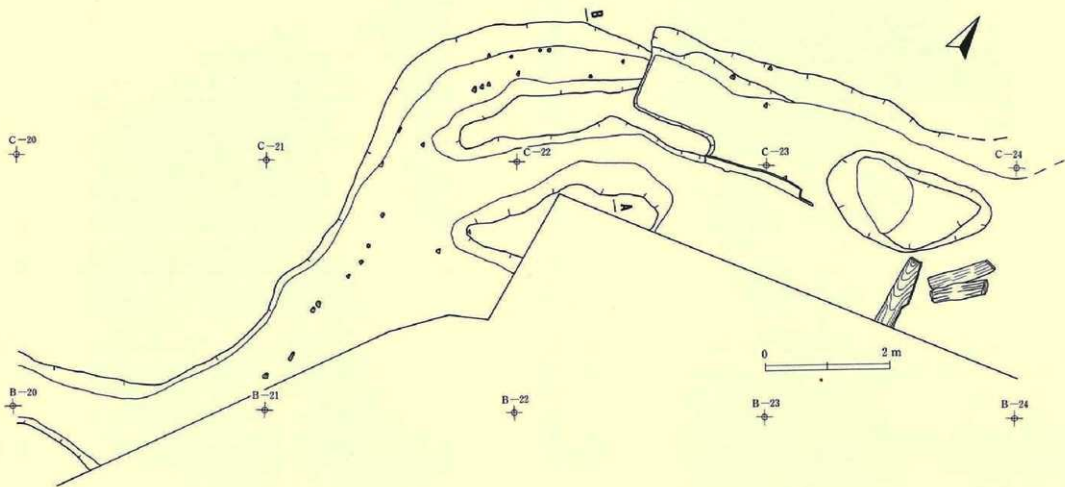
B-20

B-21

B-22

B-23

B-24



S号地層記

1. 30 Y R 2/2 黄褐色土 灰白色土少量混入
2. 30 Y R 5/4 にぶい黄褐色土に 30 Y R 4/6 黄褐色土が少量入りまじる
暗褐色土少量混入

第19図 5号池

が出土している。他の人の手が増えられていない枝や木片も出土した。

陶磁器の産地と年代は、2の磁器碗が肥前産で17世紀前半、6の磁器碗、53、56、72の磁器皿、86の水滴は肥前産で18世紀代、143の陶器の鉢は白岩産で1771～19世紀のものである。木製品はそれ自体の形態から年代を求めることはできない。

〔年代〕出土した陶磁器のほとんどが18世紀に納まる年代のものであり、この池の年代も概ね18世紀代と考えることができる。この年代観は5号池と連動する9号溝の年代観とも一致する。出土した木製品も18世紀代のものと考えられよう。

7号池（第20図、写真図版16）

〔位置〕G-23、H-23に位置する。

〔重複〕2号竪穴遺構と重複している。7号池の方が新しい。

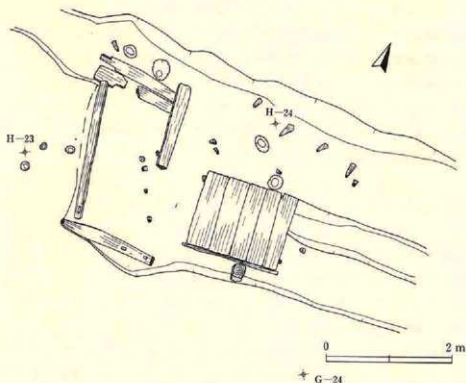
〔規模・平面形〕南北長は3 m46cm、東西長は3 m20cmで方形を呈する。池の東側は15号、16号溝とつながっている。西側は1号池とつながっている。

〔埋土〕土層断面を観察しなかった。

〔出土遺物〕底面と埋土から多量の遺物が出土した。列举すると磁器の碗（40、41）、磁器の皿（50、75）、磁器の水滴（85、86）、磁器の徳利（97、101）、播鉢（178）、漆器の蓋（205）、漆器の皿、鍋蓋（225）、へら（227）、しゃもじ（228）、しゃくし（230）、荷札と思われる墨書した板（254）、寛永通寶（302、319）、明治時代の半銭銅貨（334）、一銭銅貨（335、336）、はさみ（344）、煙管（354）、磁石（374）が出土した。

出土した陶磁器の産地と年代は、40、41の磁器碗が産地は不明で明治以降のもの、50の磁器の皿は肥前産で1690～1780年代のもの、75の磁器の皿は肥前産で19世紀中頃のもの、85、86の磁器の水滴は肥前産で18世紀代のもの、97の磁器の徳利は肥前系で18～19世紀のもの、101の磁器徳利、178の播鉢は産地、年代は不明である。334～336の銅貨は底面から3枚びったり重なって出土している。3枚ともに明治10年の発行で、ほとんど未使用と思われるきれいな状態である。

〔年代〕出土した陶磁器に明治以降のものがみられること、1号池と連動した遺構であることから、1964（昭和39）年の廃絶と考えられる。構築年代は底面から重なって出土した3枚の銅貨を池の構築の際の儀礼的な行為と考え、その銅貨の発行年代の明治10年（1877）の構築の可能性が考えられる。またこれが構築時の行為でないとしても明治10年にはこの池が存在していた証にはなる。



第20図 7号池

(3) 溝

1号溝 (第21図、写真図版16)

〔位置〕 J-18、19、20に位置する。

〔重複〕 4号池と重複している。1号溝の方が新しい。

〔規模〕 幅25cm～45cm、検出した長さは12m90cmであるが、本来は西側にもう少し続いていたようである。検出面からの深さは10～24cmである。

〔平面形式〕 ほぼ真直ぐである。底面の傾斜角方向は東から西で、1号溝から水が流れるようになっている。また2カ所に木製の樋が置かれている。

〔埋土〕 4層に分けられる。

〔出土遺物〕 なし

〔溝の性格〕 1号池からの排水の目的の溝と思われる。

〔年代〕 1号池に伴う施設であり、1号池と同じ年代と考えられる。そうすると鹿絶年代は1964年(昭和39年)ということになる。

2号溝 (第22図、写真図版17)

〔位置〕 F-16、G-16、17、H-17、I-17、J-18、19、K-19、L-20に位置する。

〔重複〕 3号池、4号溝、5号溝と重複している。これらの遺構より2号溝の方新しい。

〔規模〕 幅25cm～85cm、検出した長さは31m80cmであるが、本来は北側にもう少し続いていたようである。検出面からの深さは12～26cmである。

〔平面形式〕 ほぼ真直ぐであるが、部分的に膨隆している。底面の傾斜角方向は北から南である。

〔埋土〕 2層に分けられる。

〔出土遺物〕 なし

〔溝の性格〕 排水の目的の溝と思われる。

〔年代〕 検出面や埋土の状況からごく新しいものと思われる。

3号溝 (第21図、写真図版17)

〔位置〕 D-18、19、20に位置する。

〔重複〕 1号建物に伴う「にわ」と重複している。3号溝が古い。

〔規模〕 幅25cm～30cm、検出した長さは7 m60cmであるが、本来は東側にもう少し続いていたようである。検出面からの深さは約30cmである。

〔平面形式〕 ほぼ真直ぐである。底面の傾斜角はない。

〔埋土〕 3層に分けられる。

〔出土遺物〕 底面から磁器の皿(43)が出土している。18世紀前半の肥前産のものである。

〔溝の性格〕 底面に傾斜角が無く、排水の目的の溝とは考えられない。2号杭列に伴う塀のような施設の痕跡と考えられる。

〔年代〕 1号建物の「にわ」より古いことから1983(明治26年)よりさかのぼる事は確かである。

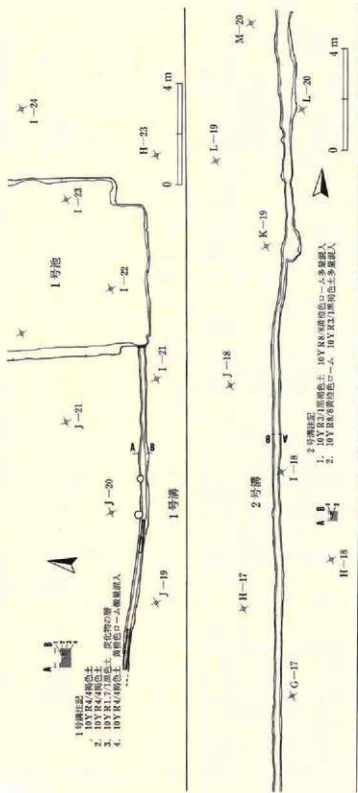
4号溝 (第22図、写真図版17)

〔位置〕 G-16、17、H-17、18、I-18、19に位置する。

〔重複〕 2号溝、3号竪穴遺構、17号土坑と重複する。4号溝は2号溝より古く、3号竪穴遺構、17号土坑より新しい。4号溝から枝分かれする形で5号溝がみられるが、これが同時存在か前後関係があるのか判断できなかった。

〔規模〕 幅75cm～98cm、長さは17m90cmである。検出面からの深さは10～24cmである。

〔平面形式〕 G-17付近でやや西に曲がるが、全体的にみれば真直ぐといえる。底面の傾斜



第2図 1、2、3、8号溝、1、2、3、4号杭列

角方向は北から南で、4号池から水が流れるようになっている。

〔埋土〕2層に分けられる。

〔出土遺物〕埋土中から陶器の甕(151)と摺鉢(175)が出土している。ともに白岩産で19世紀代のものである。また底面から鉄銭の寛永通寶が2枚(330、331)出土した。

〔溝の性格〕4号池からの排水の目的の溝と思われる。

〔年代〕埋土中から出土した摺鉢から19世紀以前のもと思われる。

5号溝(第22図、写真図版17)

〔位置〕G、H-17に位置する。

〔重複〕17号土坑と重複する。5号溝は17号土坑より新しい。また5号溝は4号溝から枝分かれるする形になっているが、これが同時存在か前後関係があるのか判断できなかった。

〔規模〕幅35cm～40cm、長さは4m70cmである。検出面からの深さは8～18cmである。

〔平面形式〕ほぼ真直ぐといえる。底面の傾斜角方向は北から南である。

〔埋土〕調査のミスで埋土を観察しなかった。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕不明である。

〔年代〕不明であるが4号溝と同時存在の可能性もある。

6号溝(第22図、写真図版18)

〔位置〕F-23、G-21、22、23に位置する。

〔重複〕1号、2号建物、2号竪穴遺構、19、20号土坑と重複する。6号溝はこれらの遺構より古い。

〔規模〕幅25cm～135cm、長さは13m70cmである。検出面からの深さは15～25cmである。

〔平面形式〕ほぼ真直ぐである。H-22付近から西で幅が太くなっている。底面の傾斜角方向は西から東である。

〔埋土〕2層に分けられる。

〔出土遺物〕埋土中から磁器の皿(71)と摺鉢(164)が出土している。磁器の皿は肥前産で17世紀後半代のもので、摺鉢は17世紀前半代のものである。

〔溝の性格〕排水の目的の溝と思われる。

〔年代〕出土した遺物の時期から概ね17世紀代におさまるとと思われる。

7号溝 (第22図)

〔位置〕 F-24に位置する。

〔重複〕 1号建物と重複するが、7号溝の方が古い。6号溝から枝分かれした形になっているが、6号溝との前後関係をとらえることはできなかった。

〔規模〕 幅45cm～60cm、検出した長さは5 m95cmであるが、本来は東にもう少しのびていたと思われる。検出面からの深さは15～20cmである。

〔平面形式〕 やや弓形になっている。底面の傾斜角方向は西から東である。

〔埋土〕 2層に分けられる。

〔出土遺物〕 なし

〔溝の性格〕 排水の目的の溝と思われる。

〔年代〕 不明である。

8号溝 (第21図、写真図版17)

〔位置〕 D-19、20に位置する。

〔重複〕 1号建物に伴う「にわ」と重複している。8号溝が古い。

〔規模〕 幅25cm～42cm、検出した長さは5 m15cmであるが、本来は東側にもう少し続いていたようである。検出面からの深さは約18cmである。

〔平面形式〕 ほぼ真直ぐである。底面の傾斜角はない。

〔埋土〕 3層に分けられる。

〔出土遺物〕 なし

〔溝の性格〕 底面に傾斜角が無く、排水の目的の溝とは考えられない。1号、2号杭列に伴う塀のような施設の痕跡と考えられる。

〔年代〕 1号建物の「にわ」より古いことから1983 (明治26年) よりさかのぼる事は確かである。

9号溝 (第22図、写真図版18)

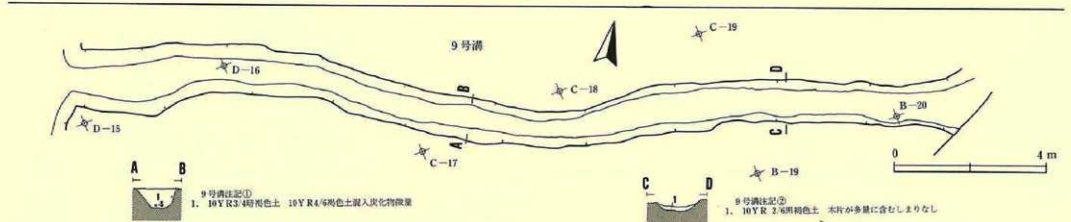
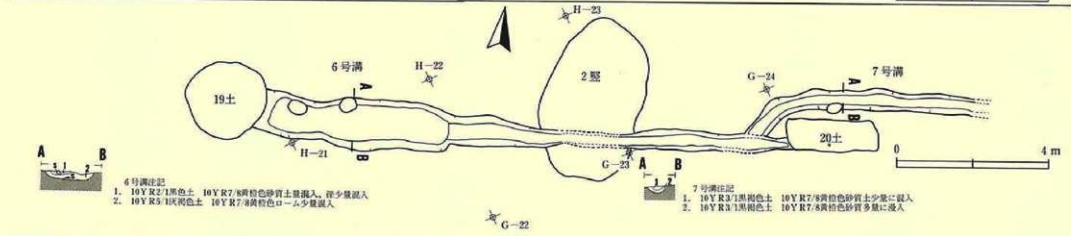
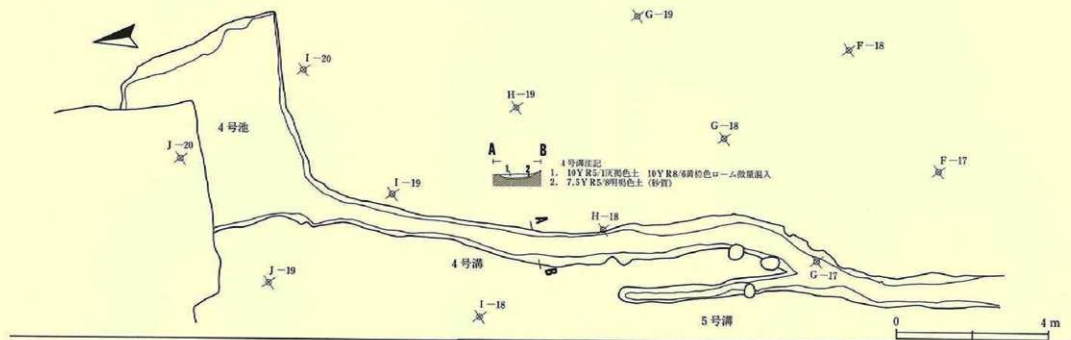
〔位置〕 B-17、18、19、C-15、16、17、D-15に位置する。

〔重複〕 なし

〔規模〕 幅98cm～155cm、長さは24m80cmである。検出面からの深さは30～60cmである。

〔平面形式〕 ほぼ真直ぐである。底面の傾斜角方向は東から西で、5号池から水が流れるようになっている。

〔埋土〕 1層に分けられる。



第22図 4、5、6、7、9号溝

〔出土遺物〕埋土中から磁器の皿(60、61、62)と陶器の皿(119)、陶器の碗(103)が出土している。磁器の皿は3点とも肥前産で1690～1780年のもの、陶器の皿も肥前産で18世紀前半のものである。陶器の碗の産地年代は不明である。

〔溝の性格〕5号池からの排水の目的の溝と思われる。

〔年代〕出土した磁器、陶器の年代から概ね18世紀代に納まると思われる。これは5号池の年代観とも合致する。

10号溝(第23図、写真図版18)

〔位置〕B-19、C-19に位置する。

〔重複〕13号建物とプラン的に重なるが前後関係は不明である。

〔規模〕幅28cm～48cm、検出した長さは5 m20cmであるが、本来は北側にもう少し続いていたようである。検出面からの深さは1～14cmである。

〔平面形式〕ほぼ真直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、9号溝に水が注ぐようになっている。

〔埋土〕1層に分けられる。

〔出土遺物〕埋土中から磁器の碗(12)が出土している。肥前産で1690～1780年にかけてのものである。

〔溝の性格〕排水の目的の溝と思われる。

〔年代〕不明

11号溝(第23図、写真図版19)

〔位置〕F-23～25、E-25に位置する。

〔重複〕12号溝より新しい。

〔規模〕幅45cm～98cm、検出した長さは9 m20cmであるが、本来は東西にもう少し続いていたようである。検出面からの深さは14～26cmである。

〔平面形式〕徐々に南側に曲がっている。底面の傾斜角方向は西から東である。

〔埋土〕1層に分けられる。

〔出土遺物〕埋土中から多量の遺物が出土した。列挙すると、磁器の皿(45、46)、陶器の皿(107、113、115、117、118)、播鉢(170、171)、寛永通寶(301、304、314)、煙管(353)、不明銅製品(355、356、357)である。磁器の皿、陶器の皿はともに肥前産のもので1690～1780年代のものである。播鉢の170は肥前産で18世紀代のもの、171の産地年代は不明である。寛永通寶の301、304は古寛永である。353の煙管は形態から18世紀代のもと考えられる。

〔溝の性格〕排水の目的の溝と思われる。

〔年代〕埋土中から出土した遺物のほとんどが18世紀代のもので、溝の年代も概ね18世紀代に納まると考えられる。

12号溝（第23図、写真図版19）

〔位置〕G-23、F-24～25に位置する。

〔重複〕11号溝より古い。6号溝とも接するが前後関係は不明である。

〔規模〕幅45cm～65cm、検出した長さは9 m90cmであるが、本来は東側にもう少し続いていたようである。検出面からの深さは14～24cmである。

〔平面形式〕ほぼ真直ぐであるが東側で南にやや曲がっている。底面の傾斜角方向は西から東である。

〔埋土〕2層に分けられる。2層のは砂質土でこの溝に水が流れていたことを示している。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕排水の目的の溝と思われる。

〔年代〕18世紀代と考えられる11号溝より古いので、18世紀以前の年代を考えることができる。

13号溝（第23図、写真図版19）

〔位置〕B-19、C-19に位置する。

〔重複〕13号建物とプラン的に重なるが前後関係は不明である。

〔規模〕幅47cm～75cm、検出した長さは5 m70cmであるが、本来は北側にもう少し続いていたようである。検出面からの深さは1～10cmである。

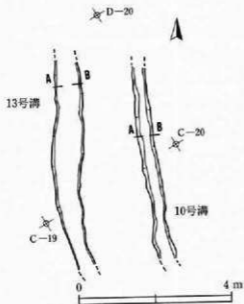
〔平面形式〕ほぼ真直ぐである。底面の傾斜角方向は北から南で、9号溝に水が注ぐようになっている。

〔埋土〕1層に分けられる。

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕排水の目的の溝と思われる。

〔年代〕不明



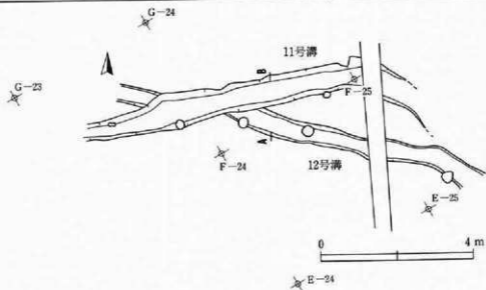
10号溝注記

1. 10Y R3/4暗褐色土、10Y R4/6褐色土少量混入、炭化物少量混入



13号溝注記

1. 10Y R2/3黒褐色土、10Y R5/2灰黄褐色土少量混入、10Y R5/4に赤黄褐色土少量混入



11号溝注記

1. 10Y R2/1黒色土

12号溝注記

1. 10Y R2/1黒色土、10Y R7/6黄褐色ロームがブロックで少量混入
2. 10Y R2/1黒色土、砂質土多量に混入

第23図 10、11、12、13号溝

14号溝 (第24図、写真図版19)

〔位置〕 F-24、G-23~24に位置する。

〔重複〕 なし

〔規模〕 幅19cm~39cm、検出した長さは7 m20cmであるが、本来は東西にもう少し続いているようである。検出面からの深さは7~22cmである。

〔平面形式〕 ほぼ真直ぐである。底面の傾斜角方向は西から東である。

〔埋土〕 1層に分けられる。

〔出土遺物〕 人工的な遺物はないが、埋土中に木の枝や木片がみられた。

〔溝の性格〕 排水の目的の溝と思われる。

〔年代〕 不明

15号溝 (第24図、写真図版19)

〔位置〕 F-25、G-24~25に位置する。

〔重複〕 なし

〔規模〕 幅45cm~195cm、検出した長さは11m50cmであるが、本来は東側にもう少し続いているようである。検出面からの深さは35cm程度である。

〔平面形式〕 ほぼ真直ぐである。底面の傾斜角方向はほとんどない。7号池とつながっている。部分的に杭が打たれている。

〔埋土〕 3層に分けられる。

〔出土遺物〕 なし

〔溝の性格〕 7号池とつながっており池の一部と考えたほうが良いかもしれない。

〔年代〕 7号池からは明治以降の遺物が多く出土しており1号建物(1893~1964)に伴う年代と考えられる。この溝も7号池の一部と考えられるので同じ年代が与えられる。

16号溝 (第24図、写真図版19)

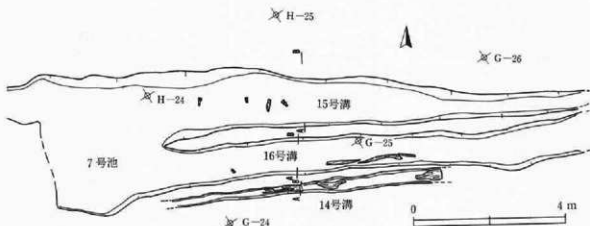
〔位置〕 F-25、G-24~25に位置する。

〔重複〕 なし

〔規模〕 幅88cm~120cm、検出した長さは11m40cmであるが、本来は東側にもう少し続いているようである。検出面からの深さは22cm程度である。

〔平面形式〕 ほぼ真直ぐである。底面の傾斜角方向はほとんどない。7号池とつながっている。部分的に杭が打たれている。

〔埋土〕 1層に分けられる。



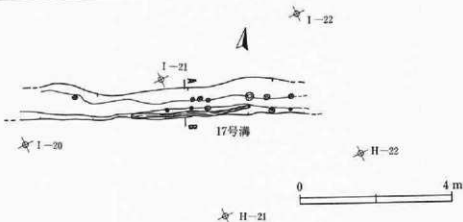
14号沟注记
 1. 10Y R4/6褐色土 10Y R3/4暗褐色土少量混入



15号沟注记
 1. 10Y R5/2灰黄褐色土 暗褐色土少量混入
 2. 10Y R3/4暗褐色土 明黄褐色土少量混入
 3. 10Y R2/3暗褐色土



16号沟注记
 1. 10Y R3/4暗褐色土 明黄褐色土少量混入



17号沟注记
 1. 10Y R3/4暗褐色土 少量混入

第24图 14、15、16、17号沟

〔出土遺物〕なし

〔溝の性格〕7号池とつながっており池の一部と考えたほうが良いかもしれない。

〔年代〕7号池からは明治以降の遺物が多く出土しており1号建物(1893～1964)に伴う年代と考えられる。この溝も7号池の一部と考えられるので同じ年代が与えられる。

17号溝(第24図、写真図版19)

〔位置〕H-20～21、I-20に位置する。

〔重複〕1号建物より古い。

〔規模〕幅56cm～98cm、検出した長さは7 m20cmであるが、本来は東西にもう少し続いていようである。検出面からの深さは7～22cmである。

〔平面形式〕ほぼ真直ぐである。底面の傾斜角方向は東から西である。土留めの木を押さえるための杭の痕跡がみられる。

〔埋土〕1層に分けられる。

〔出土遺物〕土留めの木がみられる。埋土中からは磁器の碗(15、16)、陶器の皿(127)が、確認面からは陶器の片口鉢(137)が、底面からは銅製のかんざし(352)が出土している。磁器の碗は肥前産で1690～1780年代のもの、陶器の皿、片口鉢は白岩産で1771～19世紀代のものである。

〔溝の性格〕排水の目的の溝と思われる。西側でプランがわからなくなるが、4号池に水が注ぎこむようになっていると思われる。

〔年代〕出土遺物の年代から18世紀代から19世紀前半にかけての年代が考えられる。

(4) 杭 列

1号杭列(第21図、写真図版17)

〔位置〕D-19～21、E-18、19に位置する。

〔重複〕1号建物に伴う「にわ」と重複するが1号杭列が古い。

〔規模・形式〕長さは11m90cmを数える。ほぼ真つすぐである。杭の間隔は10cm未満である。

〔埋土〕個々の杭穴について観察しなかったが、土が堆積しておらず、空洞になっているものもみられた。

〔出土遺物〕なし

〔杭列の性格〕棚、塀といったようなものと思われる。

〔年代〕不明である。

2号杭列（第21図、写真図版17）

〔位置〕 D-19～21、E-18に位置する。

〔重複〕 1号建物に伴う「にわ」と重複するが2号杭列が古い。また8号溝とも重複するが前後関係は不明である。同時存在の可能性も高い。

〔規模・形式〕 長さは12m55cmを数える。ほぼ真つすぐである。杭の間隔は10cm未満である。

〔埋土〕 個々の杭穴について観察しなかったが、土が堆積しておらず、空洞になっているものもみられた。

〔出土遺物〕 なし

〔杭列の性格〕 棚、塀といったようなものと思われる。

〔年代〕 不明である。

3号杭列（第21図、写真図版17）

〔位置〕 D-19、E-16～18に位置する。

〔重複〕 1号建物に伴う「にわ」跡、11号建物と重複するが、3号杭列の方が古い。また8号、9号、10号建物ともプラン的に重なるが前後関係は不明である。4号杭列は3号杭列と平行に杭が打たれており、同時存在の可能性が高い。

〔規模・形式〕 長さは14m40cmを数える。やや弓形になっている。杭の間隔は10cm未満である。

〔埋土〕 個々の杭穴について観察しなかったが、土が堆積しておらず、空洞になっているものもみられた。

〔出土遺物〕 なし

〔杭列の性格〕 棚、塀といったようなものと思われる。

〔年代〕 不明である。

4号杭列（第21図、写真図版17）

〔位置〕 D-19、E-16～18に位置する。

〔重複〕 1号建物に伴う「にわ」跡、10号、11号建物と重複するが、3号杭列の方が古い。また8号、9号建物ともプラン的に重なるが前後関係は不明である。3号杭列は4号杭列と平行に杭が打たれており、同時存在の可能性が高い。

〔規模・形式〕 長さは13m50cmを数える。やや弓形になっている。杭の間隔は10cm未満である。

〔埋土〕 個々の杭穴について観察しなかったが、土が堆積しておらず、空洞になっているものもみられた。

〔出土遺物〕 なし

〔枕列の性格〕 柵、塀といったようなものと思われる。

〔年代〕 不明である。

(5) 竪穴遺構

1号竪穴遺構（第25図、写真図版20）

〔位置〕 K-19、L-19に位置する。

〔重複〕 なし

〔規模・平面形〕 削平のため西側が失われている。東壁は496cm、南壁の残存部は98cm、北壁の残存部は62cmである。平面形は方形を呈すると思われる。

〔底面・壁〕 底面は概ね平坦である。壁高は東壁で約20cm、北壁は12～20cm、南壁は8～20cmである。床面から柱穴状のピットが検出されているが、この遺構に伴うものとは思えない。

〔埋土〕 3層に分けられる。2、3層は自然堆積で、1層は人為的に埋めた土と思われる。

〔出土遺物〕 埋土中から磁器の碗（14）、底面から磁器の皿の破片（74）が出土している。ともに肥前産で、1690～1780年代のものである。

〔遺構の性格〕 不明である。

〔年代〕 底面から1690～1780年代の肥前産の磁器の破片が出土しているが、これのみで遺構の時期を決定するのは危険であり、年代は不明とせざるをえない。

2号竪穴遺構（第25図、写真図版20）

〔位置〕 G-22、23に位置する。

〔重複〕 1号、2号建物、7号池、6号溝と重複する。2号竪穴は1号建物、7号池より古く、6号溝より新しい。2号建物との前後関係ははっきりせず同時存在の可能性もある。

〔規模・平面形〕 7号池との重複のため北東部分が失われている。平面形は楕円形を呈しており、長径は424cm、短径は258cmである。

〔底面・壁〕 壁は明確な立ち上がり無く、断面形が皿状を呈している。確認面からの深さは最深部で38cmである。底面を踏みしめた様子はない。

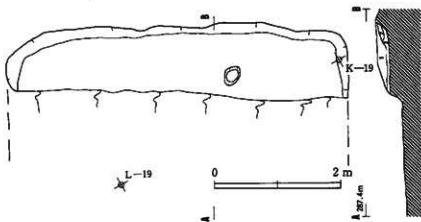
〔埋土〕 2層に分けられる。上部の1層は硬く雑混じりの土で人為的に埋めたものと思われる。

〔出土遺物〕 底面から多量の遺物が出土している。列举すると磁器の碗（20、21、22、28）、磁器の皿（48、49、54、55、57、64、74）、磁器の蓋か仏飯器の類と思われるもの（90、91）、磁器の瓶（98）、陶器の碗（105、106）、陶器の皿（120、123）、陶器の片口鉢（139）、陶器の鉢

✕ L-20



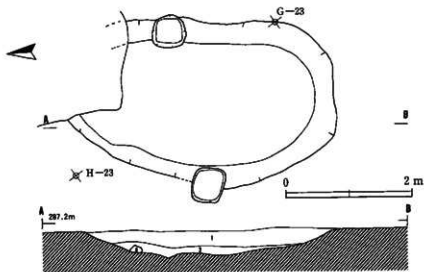
1号壑穴遺構



- 1号壑穴遺構注記
 暗褐色土混入
 1. 10YR4/6暗色土 暗褐色土少量、砂少量混入
 2. 10YR3/6暗色土 10YR4/6暗色土少量混入
 3. 10YR3/1暗褐色土 10YR4/6暗色土混入

✕ H-24

2号壑穴遺構



- 2号壑穴遺構注記
 1. 10YR4/6暗色土、暗褐色土少量、砂少量混入
 2. 10YR2/3暗褐色土 砂少量混入、しまりなし

第25図 1、2号壑穴遺構

(144)、陶器の甕 (147、156)、播鉢 (173、174)、素焼きの皿? (183)、焔炉 (184)、漆器の椀 (202、203)、桶の側板 (216)、樽の蓋 (218)、樽の底板 (219、220、221、222)、へら (226)、しゃもじ (228)、串 (231)、棒状の不明木製品 (232)、はし (232~252)、寛永通寶 (308、309、311、312、316、317、325、329)、不明鉄製品 (345、346)、銅製のしゃくし (347)、銅製のさじ (348、349)、不明銅製品 (350)、砥石 (363~367)、石板 (376)、石製のこうがい (381) が出土した。

陶磁器の産地と年代は不明のものを除くと、磁器は碗の20が肥前産で1690~1780年代、21、22は肥前産で1780~1860年代、28は平清水産で19世紀中頃、皿の48、49、54、55、57、74は肥前産で1690~1780年代、64は平清水産で19世紀の中頃、98の瓶は肥前産で18世紀後半、陶器は碗105と皿120は大堀相馬産で時期不明、碗105、片口鉢139、鉢144、甕147、156は白岩産で1771~19世紀代のものである。

〔遺構の性格〕多量の遺物が出土したことと、人為的に埋められていることからゴミを廃棄して埋めたものと思われる。だが当初からゴミ穴として穴が掘られたのではなく本来は2号建物からの排水をうけるための施設であった可能性も考えられる。

〔年代〕出土遺物の中に19世紀中頃のものがあり、幕末から明治初年に廃絶されたと思われる。この遺構と重複している7号池の構築年代が明治10年 (1877) の可能性が考えられ、この廃絶の年代観と矛盾しない。

3号壜穴遺構 (第26図、写真図版21)

〔位置〕G-18、H-18、19に位置する。

〔重複〕4号溝、15号土坑と重複する。4号溝より古く、15号土坑より新しい。

〔規模・平面形〕4号溝との重複により西側が失われているが、平面形は不整な隅丸方形に近い形と思われる。南北の径は522cm、東西の径は残存部分で462cmである。確認面からの深さは約20cmである。

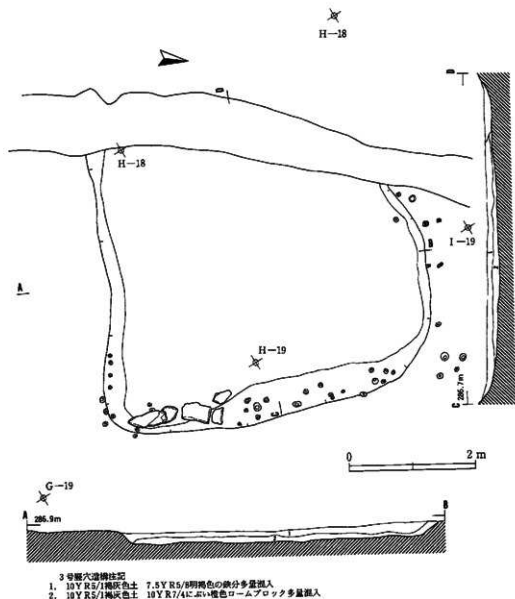
〔底面・壁〕底面は概ね平坦である。壁の立ち上がりは垂直ではなく、なだらかに立ち上っている。南壁、北壁の西側と西壁に杭を打ち込んだ跡がみられる。間隔は整っていないが、遺構の西半分を取り囲む形になっている。また南東隅の壁際に隙が5個検出されたが遺構に伴うものかどうかは不明である。

〔埋土〕2層に分けられる。自然堆積、人為堆積的の別は不明である。

〔出土遺物〕底面から磁器の皿 (69) が出土している。明産の染付で16世紀末から17世紀初めのものである。

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕 底面から16世紀末～17世紀初めの明産の磁器の破片が出土しているが、これのみで遺構の時期を決定するのは危険であり、17世紀代の可能性は高いものの、年代は不明とせざるをえない。



第26図 3号竪穴遺構

(6) 土 坑

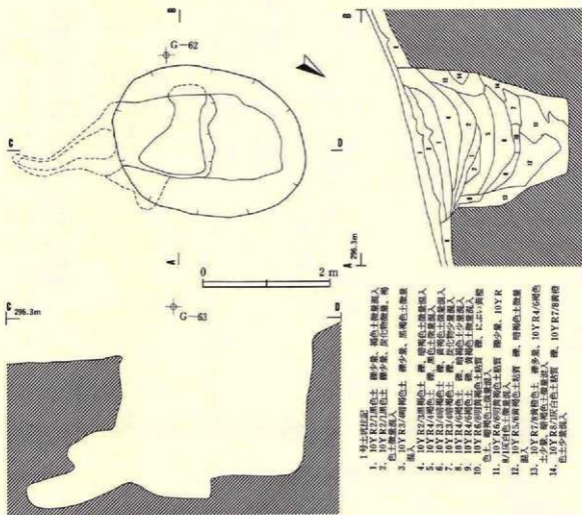
1号土坑 (第27図、写真図版21)

〔位置〕 F-62、G-62に位置する。

〔重複〕 なし

〔規模・平面形〕 開口部では284×232cmの楕円形を呈する。確認面から北側の底面までの深さは222cmである。

〔底面・壁〕 底面は北側に比べ南側が一段低くなっている。さらに南側になだらかな傾斜を持ちながら1 m70cmほど横穴が掘込まれている。堀込みは基本土層の XII層まで達している。



第27図 1号土坑

〔埋土〕14層に分けられる。自然堆積の可能性が高い。土坑の掘込みは基本土層のII層より上から行われている。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕横穴の掘込みが亜炭を含有する基本土層 XII 層まで達していることから、亜炭の採掘坑（または試掘坑）と考えられる。

〔年代〕出土遺物がなく年代を示す資料が全くないが、掘込み面を考えるとそう古いものとは思えない。しかし、大正3年生まれの小原徳精氏はこの土坑について全く知らず、またそれについての伝承もないというので明治以降に下るものではないと考えられる。これらのことから概ね近世のもと考えたい。

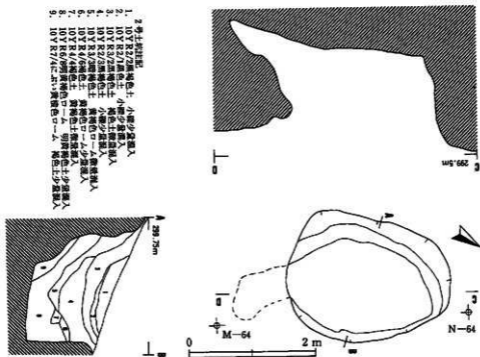
2号土坑（第28図、写真図版22）

〔位置〕M-63、64に位置する。

〔重複〕なし

〔規模・平面形〕開口部では264×202cmの楕円形を呈する。確認面から北側の底面までの深さは182cmである。

〔底面・壁〕底面は北側から南側にむかって緩やかに傾斜している。さらに南側になだらか



第28図 2号土坑

な傾斜を持ちながら90cmほど横穴が掘込まれている。掘込みは基本土層のVII層に達している。

〔埋土〕9層に分けられる。自然堆積したものと考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕横穴の掘込みが亜炭を含有する基本土層XII層まで達していないが、1号土坑とその形状が類似することから亜炭の採掘坑（または試掘坑）と考えられる。

〔年代〕1号土坑と同様に概ね近世のもと考えたい。

3号土坑（第29図、写真図版22）

〔位置〕M-64、65に位置する。

〔重複〕なし

〔規模・平面形〕ほぼ半分が調査区域外にあるため正確な規模は不明であるが、開口部で東西の径が445cm、南北の検出部分の径136cmである。平面形は楕円形を呈すると思われる。確認面からの深さは185cmである。

〔底面・壁〕底面は西側が東側より一段高くなっている。さらに南東側になだらかな傾斜を持ちながら95cmほど横穴が掘込まれている。掘込みは基本土層のVII層まで達している。

〔埋土〕9層に分けられる。自然堆積したものと考えられる。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕横穴の掘込みが亜炭を含有する基本土層XII層まで達していないが、1号土坑とその形状が類似することから亜炭の採掘坑（または試掘坑）と考えられる。

〔年代〕1号土坑と同様に概ね近世のもと考えたい。

6号土坑（第30図、写真図版22、23）

〔位置〕H-62、63、I-62、63に位置する。

〔重複〕なし

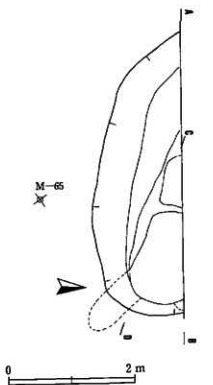
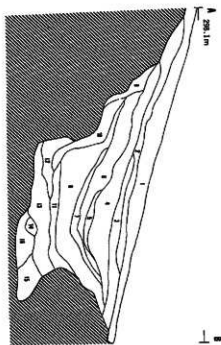
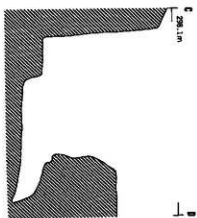
〔規模・平面形〕開口部は東西径472cm、南北径444cmの不整な形を呈する。確認面から底面中央までの深さは145cmである。

〔底面・壁〕底面は中央部から西側と東側にむかって緩やかに傾斜している。さらに西側と東側になだらかな傾斜を持ちながら各々140cmほど横穴が掘込まれている。掘込みは基本土層のXII層に達している。

〔埋土〕7層に分けられる。自然堆積したものと考えられる。

〔出土遺物〕なし

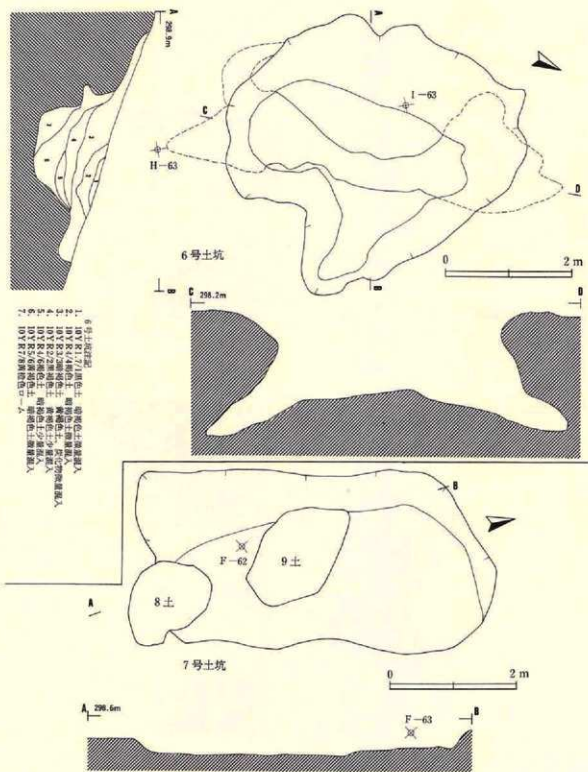
〔遺構の性格〕横穴の掘込みが亜炭を含有する基本土層XII層まで達していることと、1号



M-66

- 3号土坑剖面
1. 10YR2/1褐色土 黄褐色夹黑斑 (夹土)
 2. 10YR2/2暗褐色土 灰白夹黑斑
 3. 10YR1/7/1棕色土 灰白夹黑斑
 4. 10YR2/2暗褐色土 黑色土夹黑斑
 5. 10YR1/7/1棕色土 灰白夹黑斑
 6. 10YR2/2暗褐色土 灰白夹黑斑
 7. 10YR1/7/1棕色土 灰白夹黑斑
 8. 10YR2/2暗褐色土 灰白夹黑斑
 9. 10YR2/2暗褐色土 灰白夹黑斑
 10. 10YR2/2暗褐色土 灰白夹黑斑
 11. 10YR2/2暗褐色土 小暗夹黑斑
 12. 10YR2/4暗褐色土 黑色土夹黑斑
 13. 10YR2/2暗褐色土 灰白夹黑斑
 14. 10YR2/1棕色土 灰白夹黑斑
 15. 10YR2/2暗褐色土 灰白夹黑斑
 16. 10YR1/8棕色土 灰白夹黑斑

第29图 3号土坑



第30图 6、7号土坑

土坑とその形状が類似することから垂炭の採掘坑（または試掘坑）と考えられる。

〔年代〕1号土坑と同様に概ね近世のもと考えたい。

7号土坑（第30図、写真図版23）

〔位置〕E-61、62、F-61、62に位置する。

〔重複〕8号、9号土坑と重複するが、これらの遺構より新しい。

〔規模・平面形〕東西径532cm、南北径268cmの長方形に近い形を呈する。確認面から底面中央までの深さは18cmである。

〔底面・壁〕底面は概ね平坦である。壁は西壁の高さが約40cm、東壁はその高さをほとんど有していない。

〔埋土〕埋土はほとんど堆積していなかった。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕この遺構は土坑というよりは、山の斜面上になんらかの理由で構築された平場と考えられる。

〔年代〕埋土がほとんどみられないことから、ごく近年のもと考えられる。

8号土坑（第31図、写真図版23）

〔位置〕E-61、62に位置する。

〔重複〕7号土坑と重複するが、7号土坑の方が新しい。

〔規模・平面形〕開口部では124×140cmの不整な円形を呈する。確認面からの深さは152cmである。

〔底面・壁〕底面は中央部がやや深くなっているが、横穴は掘込まれていない。開口部より底面が広がっており「フラスコ型」に近い形態である。

〔埋土〕10層に分けられる。人為的堆積の可能性が高い。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕横穴の掘込みを有しないが、1号土坑と同様に垂炭の採掘坑（または試掘坑）の可能性が考えられる。

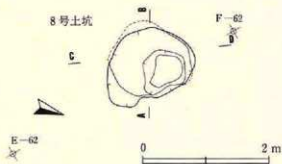
〔年代〕1号土坑と同様に概ね近世のもと考えたい。

9号土坑（第31図、写真図版23）

〔位置〕E-62、F-62に位置する。

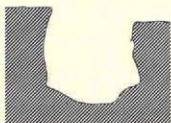
〔重複〕7号土坑と重複するが、7号土坑が新しい。

8号土坑



E-62

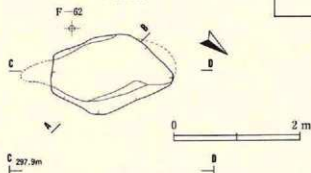
C 297.6m



A 297.3m

- 8号土坑注記
1. 10Y R2/1褐色土 黄色浮石少量混入
 2. 10Y R2/2黑褐色土 黄色浮石少量混入
 3. 10Y R7/3黄褐色土 黑色土少量混入
 4. 10Y R3/4褐色土 黄色土少量混入
 5. 10Y R3/4褐色土 黄色土少量混入
 6. 10Y R6/8明黄褐色ローム 少量少量混入
 7. 10Y R6/8明黄褐色ローム 少量少量混入
 8. 10Y R7/3L黄褐色ローム 少量少量混入
 9. 10Y R7/3L黄褐色ローム 少量少量混入
 10. 10Y R7/3L黄褐色ローム 少量少量混入

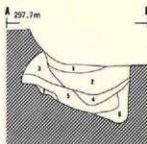
9号土坑



C 297.3m



G-62



- 9号土坑注記
1. 10Y R3/2黑褐色土 黄色浮石微量混入
 2. 10Y R3/2黑褐色土 10Y R2/1黑色土少量混入
 3. 10Y R4/4褐色土 10Y R3/2黑褐色土少量混入
 4. 10Y R6/8明黄褐色ローム 黑褐色土少量混入
 5. 10Y R6/8明黄褐色ローム 浮石微量混入
 6. 10Y R7/3L黄褐色ローム
 7. 10Y R4/4褐色土 10Y R6/8明黄褐色ローム少量混入

第31图 B、9号土坑

〔規模・平面形〕 開口部では184×122cmの不整な楕円形を呈する。確認面から底面中央までの深さは72cmである。

〔底面・壁〕 底面は北側から南側にむかって傾斜している。さらに南側にも傾斜を保ちながら60cmほど横穴が掘込まれている。掘込みは基本土層のⅦ層に達している。

〔埋土〕 7層に分けられる。自然堆積したものと考えられる。

〔出土遺物〕 なし

〔遺構の性格〕 横穴の掘込みが垂炭を含有する基本土層 XII層まで達していないが、1号土坑とその形状が類似することから垂炭の採掘坑（または試掘坑）と考えられる。

〔年代〕 1号土坑と同様に概ね近世のものと考えたい。

10号土坑（第32図）

〔位置〕 I-21、J-21に位置する。

〔重複〕 15号建物とプラン的に重複するが、前後関係は不明である。

〔規模・平面形〕 東西径184cm、南北径156cmの不整な楕円形を呈する。確認面から底面最深部までの深さは24cmである。

〔底面・壁〕 底面は西側が一段低くなっている。壁は明瞭な立ち上がりをもたない。

〔埋土〕 1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし

〔遺構の性格〕 不明である。

〔年代〕 不明である。

11号土坑（第32図、写真図版24）

〔位置〕 K-21、L-21に位置する。

〔重複〕 なし

〔規模・平面形〕 東壁184cm、西壁184cm、南壁164cm、北壁162cmの方形を呈する。確認面からの深さは8cmである。

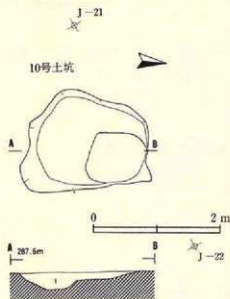
〔底面・壁〕 底面は概ね平坦である。壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

〔埋土〕 1層に分けられる。埋土は灰白色の粘土で人為的に埋められたものである。

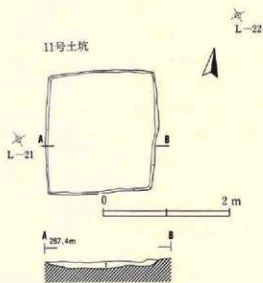
〔出土遺物〕 なし

〔遺構の性格〕 土坑としての使用ではなく、埋土の灰白色粘土が「貼り床」、「三和土」といったもので、その上面を何らかの目的に使用した可能性が考えられる。

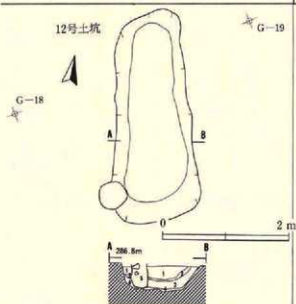
〔年代〕 不明である。



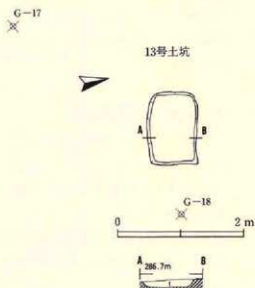
10号土坑注記
L. 10Y R3/4暗褐色土 褐色土混入 (底部に少し)



11号土坑注記
I. 10Y R7/1灰白色粘土 10Y R8/6黄棕色ローム、
粒微量混入しより長し



12号土坑注記
1. 10Y R3/2黒褐色土 ローム粒微量混入
2. 10Y R7/8黄褐色ローム 黒褐色土微量混入
3. 10Y R2/1黒色土
4. 10Y R5/1灰褐色土 ロームブロック微量混入
5. 10Y R3/2黒褐色土 12号土坑より新しい柱穴



13号土坑注記
1. 10Y R5/1地灰色土 黄白色
ロームブロック微量混入

第32図 10、11、12、13号土坑

12号土坑（第32図、写真図版24）

〔位置〕 G-18、F-18に位置する。

〔重複〕 12号建物と重複するが、12号建物が新しい。

〔規模・平面形〕 南北径338cm、東西径108cmの楕円形を呈する。確認面からの深さは42cmである。

〔底面・壁〕 底面は概ね平坦である。壁の立ち上がりはやや角度をもっている。

〔埋土〕 4層に分けられる。5層は12号建物の柱穴である。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 磁器の皿（47）が底面から、播鉢の破片（166）が埋土中から出土した。磁器の皿肥前産で18世紀前半のもの、播鉢も肥前産で17世紀後半のものである。

〔遺構の性格〕 不明である。

〔年代〕 出土遺物から18世紀代の年代が想定される。

13号土坑（第32図、写真図版24）

〔位置〕 G-17に位置する。

〔重複〕 12号建物と重複するが、12号建物が新しい。

〔規模・平面形〕 東壁76cm、西壁76cm、南壁112cm、北壁110cmの長方形を呈する。確認面からの深さは12cmである。

〔底面・壁〕 底面は概ね平坦である。壁の立ち上がりはやや角度をもっている。

〔埋土〕 1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし

〔遺構の性格〕 不明である。

〔年代〕 不明である。

14号土坑（第33図、写真図版25）

〔位置〕 G-18に位置する。

〔重複〕 3号竪穴遺構と重複するが、3号竪穴遺構が新しい。

〔規模・平面形〕 北側が3号竪穴遺構との重複により失われているが、径224cmほどの円形を呈すると思われる。確認面からの深さは8cmである。

〔底面・壁〕 底面は概ね平坦である。壁の立ち上がりはやや角度をもっている。

〔埋土〕 2層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

15号土坑（第33図）

〔位置〕G-18に位置する。

〔重複〕なし

〔規模・平面形〕径84cmほどの円形を呈する。確認面からの深さは32cmである。

〔底面・壁〕壁はなだらかに立ち上がっている。

〔埋土〕2層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

16号土坑（第33図、写真図版25）

〔位置〕G-19に位置する。

〔重複〕なし

〔規模・平面形〕径98cmほどの円形を呈する。確認面からの深さは12cmである。

〔底面・壁〕壁はなだらかに立ち上がっている。

〔埋土〕1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

17号土坑（第33図、写真図版25）

〔位置〕H-17に位置する。

〔重複〕4号、5号溝と重複する。17号土坑はこれらの溝より古い。

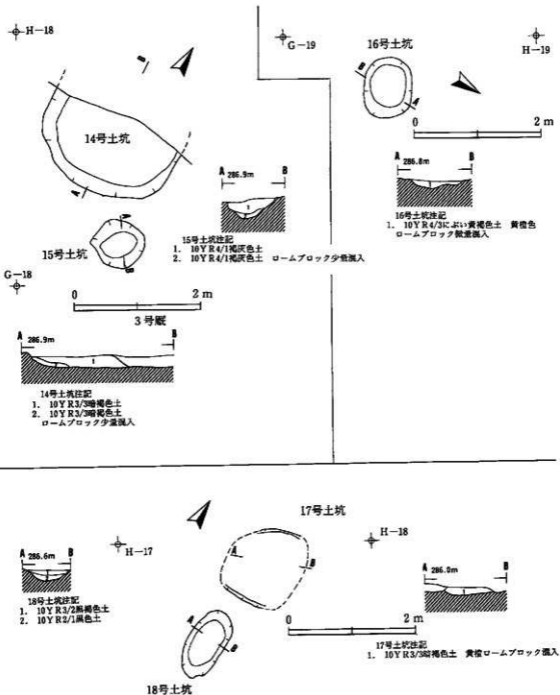
〔規模・平面形〕4号、5号溝との重複により、東側と西側が失われているが径124cmほどの円形を呈すると思われる。確認面からの深さは16cmである。

〔底面・壁〕壁はなだらかに立ち上がっている。

〔埋土〕1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。



第33図 14、15、16、17、18号土坑

〔年代〕不明である。

18号土坑（第34図）

〔位置〕H-17に位置する。

〔重複〕なし

〔規模・平面形〕長径116cm、短径62cmほどの楕円形を呈する。確認面からの深さは15cmである。

〔底面・壁〕壁はなだらかに立ち上がっている。

〔埋土〕2層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

19号土坑（第34図、写真図版26）

〔位置〕H-20に位置する。

〔重複〕1号建物、6号溝と重複しているが、1号建物より古く、6号溝より新しい。

〔規模・平面形〕削平により北西側のプランがはっきりしないが、径216cmほどの円形を呈すると思われる。確認面からの深さは22cmである。

〔底面・壁〕底面は概ね平坦である。壁はやや角度を持って立ち上がっている。

〔埋土〕2層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

20号土坑（第34図、写真図版26）

〔位置〕F-24に位置する。

〔重複〕1号建物、6号溝と重複しているが、1号建物より古く、6号溝より新しい。

〔規模・平面形〕東壁84cm、西壁76cm、南壁132cm、北壁130cmの長方形を呈する。確認面からの深さは16cmである。

〔底面・壁〕底面は概ね平坦である。木の皮を底面に敷いている。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

〔埋土〕3層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

21号土坑（第34図、写真図版26）

〔位置〕F-16に位置する。

〔重複〕8号、9号、10号、11号建物とプラン的に重なるが、前後関係は不明である。

〔規模・平面形〕近年の水道管の埋設工事により西側部分が失われているが南北径126cm、東西径の残存部84cmである。平面形は楕円形と思われる。確認面からの深さは24cmである。

〔底面・壁〕底面は概ね平坦である。壁はやや角度を持って立ち上がっている。

〔埋土〕4層に分けられる。人為堆積と思われる。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

23号土坑（第34図、写真図版27）

〔位置〕A-15に位置する。

〔重複〕7号建物とプラン的に重なるが前後関係は不明である。

〔規模・平面形〕東壁116cm、西壁96cm、南壁108cm、北壁96cmの不整な方形を呈する。確認面からの深さは12cmである。

〔底面・壁〕底面は概ね平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

〔埋土〕1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕なし

〔遺構の性格〕不明である。

〔年代〕不明である。

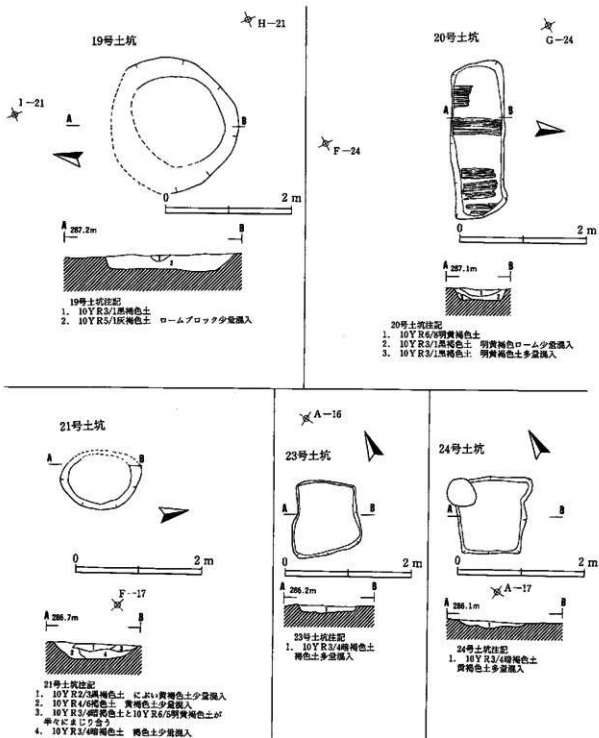
24号土坑（第34図、写真図版27）

〔位置〕A-16に位置する。

〔重複〕7号建物とプラン的に重なるが前後関係は不明である。

〔規模・平面形〕東壁124cm、西壁112cm、南壁92cm、北壁112cmの不整な方形を呈する。確認面からの深さは8cmである。

〔底面・壁〕底面は概ね平坦である。壁はなだらかに立ち上がっている。



第34図 19、20、21、23、24号土坑

〔埋土〕 1層に分けられる。自然堆積、人為堆積の別は不明である。

〔出土遺物〕 なし

〔遺構の性格〕 不明である。

〔年代〕 不明である。

2. 出土遺物

今回の調査では17世紀代から現代にかけての遺物が多量に出土した。出土した遺物の中で明らかに大正、昭和以降のものは報告の対象から省いたものが多い。図示した遺物は陶磁器187点、漆器6点、木製品68点(柱根も含む)、銭貨42点、金属製品15点、ガラス製品5点、石製品19点、土製品3点、縄文時代の石器5点、計350点である。以下各器種毎にその特徴を述べていくが、法量や出土位置など一応のデータは観察表中に記しているので、文中では個々の遺物についてあまり細かく触れていない点もある。なお文中で言う遺物の年代というのは、その製作年代のことを言っている。

(1) 磁器

a. 碗 (第35～38図、写真図版29、30、31)

磁器碗は17世紀～1860年代の肥前産のものと、19世紀中頃の山形県平清水産のもの、明治以降の産地不明のものに分けられる。

肥前産のものと明らかに17世紀代の碗は1と2のみである。出土量が多いのは大橋康二編年^甲のIV期1690～1780年代のもので3～20が当てはまると思われる。長崎県の波左見諸窟で生産された「くわらんか碗」とよばれる日常雑器である。草花文のもの、二重網目文のものが多い7～11は底部に判読不明の銘をもつ。大橋編年のV期1780～1860年代のものは、V期のものより少ないが21～25が当てはまる。丸腰の碗で、24は口縁部内面に花菱文を持っている。底面に銘をもつものはない。

19世紀中頃の平清水産のものは26～29が当てはまる。26、27、29は文様構成が同じでセットになるものであろう。

30、33～41は型紙刷りで明治以降の碗である。30、33～37は内面に目跡を持っている。また33～37はセット関係にあるものである。これらの型紙刷りの碗の産地は不明である。31、32は色絵の碗である。明治以降のものと思われ産地は不明である。

b. 皿 (第39～50図、写真図版32、33、34、35、36、37、38、39、40)

磁器皿は口径4寸以下の小型の皿、5～6寸の中型の皿、8寸以上の大型の皿がある。

小型の皿は皿の中で最も出土量が多く、肥前産のもの41～63、山形県平清水産の型おこしの皿64～68がある。肥前産のものは全て見込み蛇の目軸はぎである。42～47は18世紀前半のものである。その中で44～47は高台無軸で、見込みの蛇の目軸はぎの部分に少量の砂が付着している。48～57は格子目文を持つ皿で大橋編年のIV期のものである。58、59、63も大橋編年のIV期のものである。平清水産の64～68は型おこしの皿で、全て同じ型から製作したものである。内

面に目跡を4つもっている。19世紀の中頃のものである。

中型の皿は8点出土している。69は中国明産で、16世紀末から17世紀前半のものである。景德鎮の民窯の製品と思われる。高台部に大粒の砂が付着している。なお本遺跡から出土した鉛或陶磁器はこの個体のみである。70は大橋編年のII期1630~1640年代のものである。71は蛇の目高台で疊付のみが無釉である。17世紀後半代のものである。73~75は身の深い皿である。73と74は大橋編年IV期で74の見込みには五弁花のコンニャク印判がみられる。75は佐賀県塩田町の志田窯産で19世紀中頃のものである。76は大橋編年IV期のものと思われる。77は墨弾き技法を用いており、出土した他の皿よりは高級品といえる。底面にはハリ支えの痕跡がみられる。18世紀後半のものと思われる。なお、この皿は1号建物の焼失面から出土しており、18世紀後半から1964年まで伝世されていたことになる。

大型の皿は4点ある。78は18世紀後半のもので見込みの文様は松竹梅で、回りを墨弾きの文様で飾っている。底面の銘は富貴長春でハリ支え痕がみられる。この皿も77と同様1号建物に伴って出土したもので、1964年まで伝世されていたことになる。79、80は同じ絵柄の皿で19世紀中頃のもので、塩田町志田窯産である。白化粧をした上に絵付けを行っている。底面にはハリ支え痕がみられる。これも1号建物に伴うもので1964年まで伝世されたものである。81は20世紀以降の新しいものと思われる。産地は不明である。82は青磁の皿である。須具で染め付けをおこなった後、青磁釉をかけている。底面には足が三つ付き、疊付きの部分は赤く塗られている。1640~1670年代のものである。割れた後に漆継ぎをおこなっている。外面の青磁釉の発色が悪い。

c. 段重・段重の蓋 (第51図、写真図版40)

段重(83)と段重(84)が1点ずつ出土している。これらは絵柄から組み合わせになるものと思われる。竜と宝珠の絵柄である。肥前産で大橋編年V期のものである。

d. 水滴 (第51図、写真図版40)

85、86の2点が出土している。共に型おこしで、18世紀の肥前産のものである。

e. 壺 (第52図、写真図版41)

87は壺の口縁部で、残存している部分の角度から、口縁部を上から見た形が六角形を呈していると考えられ、「六角大壺」とよばれる器種と考えられる。口唇部と口縁部内部が無釉で本来は蓋が付いていたことがわかる。また、口縁部と胴部の境の割れ口には漆継ぎの痕跡がみられる。肥前の有田産で1690~18世紀前半代のものである。「六角大壺」は器高が50~70cmもあるものが多く、主に海外輸出品として作られる高級品であるという。どのような経緯で本遺跡にもたらされたのか興味深い。

f. 火入れ (第52図、写真図版41)

1点(88)が出土している。肥前産で18世紀代のものと思われる。内面は無釉である。

g. そば猪口 (第52図、写真図版41)

89が1点出土している。肥前産で大橋編年V期のものと思われる。

h. 仏飯器? (第52図、写真図版41)

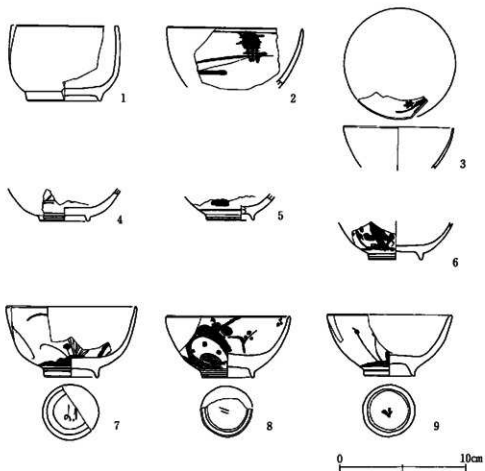
90と91は脚の部分がないので断定できないが、仏飯器の可能性はある。90は肥前産の可能性はあるが91の産地は不明である。共に19世紀のものであろう。

i. 盃・湯呑み? (第52図、写真図版41)

92～94の盃は明治以降のものである。92は日露戦争の凱旋記念、94には「筏仙人講」と書かれている。これは秋田県山内村の筏地区の阿羅羅仙人神社に関するものであろう。95、96は器形から湯呑みと思われるが不明である。ともに明治以降のものであろう。

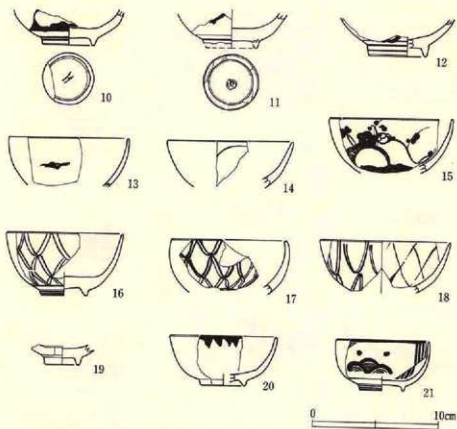
j. 徳利・瓶類 (第53図、写真図版41)

97は肥前系、98は肥前産で18～19世紀代のものである。99は平清水産の徳利で19世紀中頃のものである。100、101は産地不明で明治以降のものであろう。



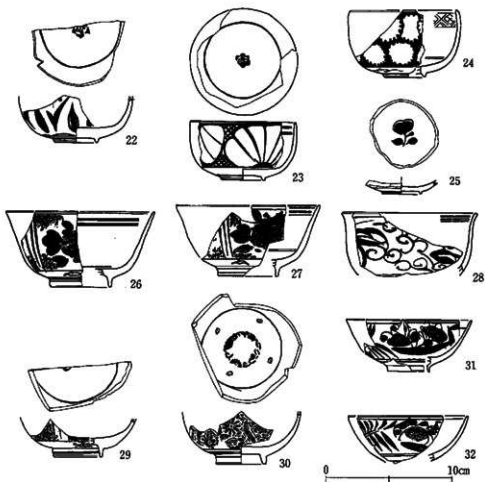
番号	器種	出土位置	器量(cm)			胎土	釉薬・塗付	製作地	年代	備考
			口径	高さ	底径					
1	磁器碗	Pr178埋土 (13号埋物)	8.6	6.0	5.9	白色	透明釉	肥前	1670 ~1690	
2	磁器碗	5号埋土	11.0	(4.8)	—	白色	染付(青)	肥前	17c 中	
3	磁器碗	Pr100埋土 (6号埋物)	8.8	(3.1)	—	白色	染付(青)	肥前	18c 前	42号出土
4	磁器碗	C-20表土	—	(2.5)	4.1	白色	染付(青)	肥前	18c 前	
5	磁器碗	E-20表土	—	(2.1)	3.8	白色	染付(青)	肥前	1690 ~1760	
6	磁器碗	5号埋土 C-22表土	—	(3.0)	4.2	白色	染付(青)	肥前	18c 前	
7	磁器碗	1号埋物 埋地層	10.5	5.6	4.2	白色	染付(青)	肥前	1690 ~1780	
8	磁器碗	1号埋物 埋地層	10.0	4.9	4.2	灰白色	染付(紺)	肥前	1690 ~1760	
9	磁器碗	3号埋物	9.9	4.9	4.1	灰白色	染付(紺)	肥前	1690 ~1780	

第35図 陶磁器実測図(1)



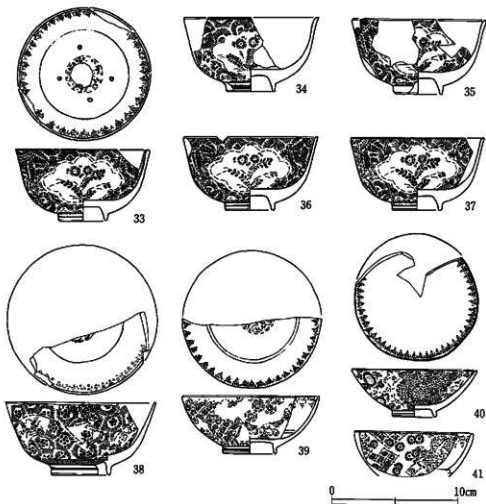
番号	器種	出土位置	法量(cm)			胎土	胎薬・絵付	製作地	年代	備考
			口径	高さ	底径					
10	磁器碗	1号建物敷地層	—	(2.7)	4.2	白色	染付(青)	肥前	1690 ~1790	
11	磁器碗	1号建物敷地層	—	(2.2)	4.5	灰白色	染付(青)	肥前	1690 ~1790	
12	磁器碗	10号溝埋土 1号建物敷地層	—	(2.9)	4.5	白色	染付(青)	肥前	1690 ~1790	
13	磁器碗	Platoge埋土 (P24)	9.6	(3.9)	—	灰白色	染付(青灰)	肥前	1690 ~1790	
14	磁器碗	1号型穴埋土	11.0	(3.8)	—	灰白色	染付(青)	肥前	1690 ~1790	
15	磁器碗	17号溝底面	10.1	(4.4)	—	白色	染付(空色)	肥前	1690 ~1790	
16	磁器碗	17号溝底面	9.1	5.0	3.6	白色	染付(空色)	肥前	1690 ~1790	
17	磁器碗	K-24表土	9.1	(4.3)	—	灰白色	染付(紺)	肥前	1690 ~1790	漆跡をおこなっている
18	磁器碗	1号建物敷地層	11.4	(4.1)	—	灰白色	染付(紺)	肥前	1690 ~1790	
19	磁器碗	1-18表土	—	1.6	2.8	白色	透明釉	肥前	不明	
20	磁器碗	2号型穴表面	8.6	4.0	3.9	白色	染付(青灰)	肥前	1690 ~1790	
21	磁器碗	2号型穴底面	7.3	4.0	3.6	白色	染付(紺)	肥前	1790 ~1890	

第36図 陶磁器実測図(2)



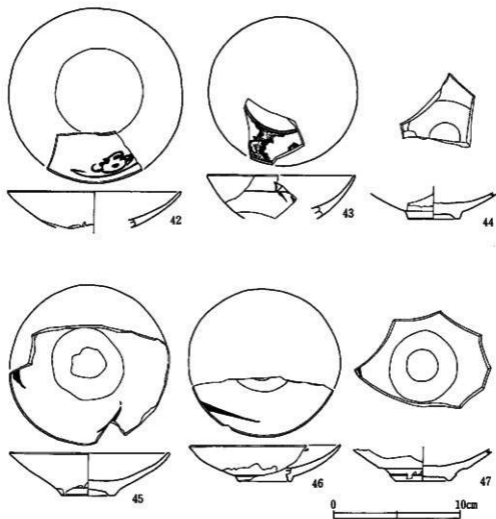
番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	釉薬・絵付	製作地	年代	備 考
			口径	高さ	底径					
22	磁 器 碗	2号墓穴底面	—	(3.6)	3.4	灰白色	染付(青灰)	肥 前	1790 ~1860	
23	磁 器 碗	1号池2層	7.5	4.7	3.6	白 色	染付(紺)	肥 前	1790 ~1860	
24	磁 器 碗	K-24出土	8.4	5.4	3.2	白 色	染付(紺)	肥 前	1790 ~1860	縁部を欠けている
25	磁 器 碗	7号池出土	—	(0.7)	3.2	灰白色	染付(紺)	肥 前	1790 ~1860	
26	磁 器 碗	C-21出土	11.8	6.0	5.0	白ガラス質	染付(青)	平瀬水	19c 中	
27	磁 器 碗	H-18出土	11.8	5.6	5.0	白ガラス質	染付(青)	平瀬水	19c 中	
28	磁 器 碗	2号墓穴底面	10.8	(4.9)	—	白ガラス質	染付(青)	平瀬水	19c 中	
29	磁 器 碗	3号池底面	—	(3.1)	4.0	白ガラス質	染付(青)	平瀬水	19c 中	
30	磁 器 碗	3号池底面 H-18出土	—	(4.2)	4.0	白 色	染付(青)	不 明	明治以降	型紙取り内面目録
31	磁 器 碗	1号池2層	10.0	4.1	3.4	白ガラス質	色絵 (赤黄緑青)	不 明	明治以降	
32	磁 器 碗	1号池2層	9.6	(3.6)	—	白ガラス質	色絵 (赤黄緑青)	不 明	明治以降	

第37図 陶磁器実測図(3)



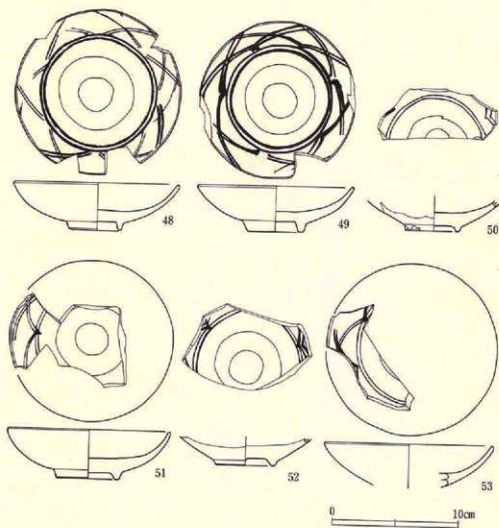
番号	器種	出土位置	量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考
			口径	高さ	底径					
33	磁器碗	H-22表土	10.6	5.6	3.8	白 ガラス質	絵付 (コバルト)	不明	明治以降	内面目跡、墨紙覆り
34	磁器碗	H-22表土	10.6	5.6	3.8	白 ガラス質	絵付 (コバルト)	不明	明治以降	内面目跡、墨紙覆り
35	磁器碗	1号池2層	10.6	5.8	3.8	白 ガラス質	絵付 (コバルト)	不明	明治以降	内面目跡、墨紙覆り
36	磁器碗	H-22表土	10.6	5.7	3.8	白 ガラス質	絵付 (コバルト)	不明	明治以降	内面目跡、墨紙覆り
37	磁器碗	I-21表土	10.6	5.7	3.8	白 ガラス質	絵付 (コバルト)	不明	明治以降	内面目跡、墨紙覆り
38	磁器碗	1号池2層	12.0	5.9	4.8	白 ガラス質	絵付 (コバルト)	不明	明治以降	墨紙覆り
39	磁器碗	1号池2層	11.0	4.7	4.2	白 ガラス質	絵付 (コバルト)	不明	明治以降	墨紙覆り
40	磁器碗	1号池2層 7号池埋土	10.0	3.7	3.8	白 ガラス質	絵付 (コバルト)	不明	明治以降	墨紙覆り
41	磁器碗	7号池埋土	9.6	(3.5)	—	白 色	絵付 (コバルト)	不明	明治以降	墨紙覆り

第38図 陶磁器実測図(4)



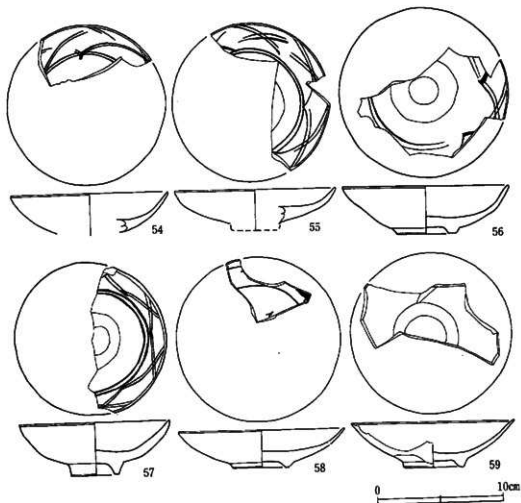
番号	器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備 考
			口径	高さ	底径					
42	磁器皿	Pa100堀土 6号庭前	13.8	(2.8)	—	白 色	染付(青)	肥前	17c 後 ~18c 前	
43	磁器皿	3号溝庭前	11.8	(3.4)	—	灰白色	染付(青灰)	肥前	18c 前	
44	磁器皿	D-23表土	—	(2.1)	4.1	灰白色	透明釉	肥前	18c 前	高台無釉
45	磁器皿	11号溝堀土	12.4	3.4	4.4	灰白色	染付(紺)	肥前	18c 前	高台無釉
46	磁器皿	K-20表土	12.3	2.9	4.2	白 色	染付(紺)	肥前	18c 前	高台無釉
47	磁器皿	12号土坑庭前	—	(2.5)	4.4	白 色	染付(紺)	肥前	18c 前	高台無釉

第39図 陶磁器実測図(5)



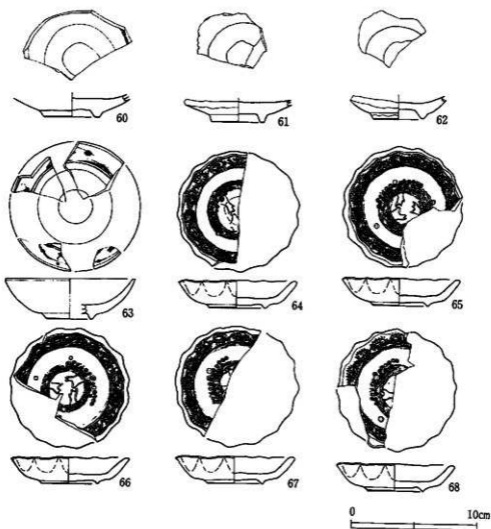
番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	釉薬・絵付	製作地	年代	備 考
			口径	高さ	底径					
48	磁 器 皿	1号埴野原遺跡 2号基C-C断面	13.4	3.8	4.4	白 色	染付(空色)	肥 前	1690 ~1780	
49	磁 器 皿	2号基穴底面	12.6	3.7	4.7	白 色	染付(青灰)	肥 前	1690 ~1780	
50	磁 器 皿	7号池底面	—	2.2	4.4	白 色	染付(空色)	肥 前	1690 ~1780	
51	磁 器 皿	3号池底面	13.0	3.9	5.1	灰 白 色	染付 (オリーブ色)	肥 前	1690 ~1780	
52	磁 器 皿	G-22表土	—	(2.2)	4.4	白 色	染付(青灰色)	肥 前	1690 ~1780	
53	磁 器 皿	3号池埋土 P4.22.3埋土	13.6	(3.0)	—	灰 白 色	染付 (オリーブ色)	肥 前	1690 ~1780	

第40図 陶磁器実測図(6)



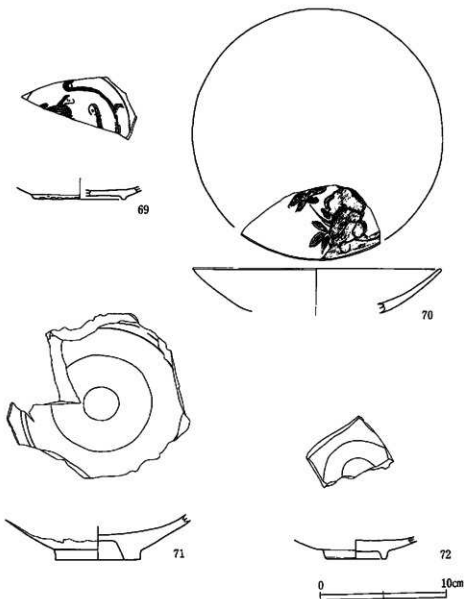
番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	軸 葉・絵付	製作地	年 代	備 考
			口径	高さ	底径					
54	磁 器 皿	1号埴原遺跡 2号第六底層	12.6	(3.1)	—	灰白色	染付(青灰色)	肥 前	1690 ~1780	
55	磁 器 皿	2号第六底層 D-19出土	13.0	(2.8)	—	灰白色	染付(空色)	肥 前	1690 ~1780	
56	磁 器 皿	5号埴原土 11号埴原土	13.1	3.8	—	白 色	染付 (イロノゾク)	肥 前	1690 ~1780	
57	磁 器 皿	2号第六底層	12.1	3.8	4.0	白 色	染付(空色)	肥 前	1690 ~1780	
58	磁 器 皿	Ph233埋土	13.4	3.0	4.6	白 色	染付(青色)	肥 前	1690 ~1780	
59	磁 器 皿	11号埴原土	13.0	3.7	4.6	淡黄褐色	透明釉	肥 前	1690 ~1780	高台製物、釉の黄色が悪い

第41図 陶磁器実測図(7)



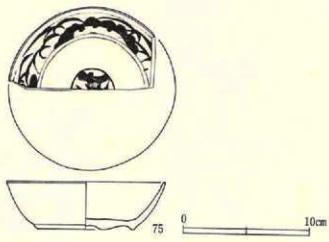
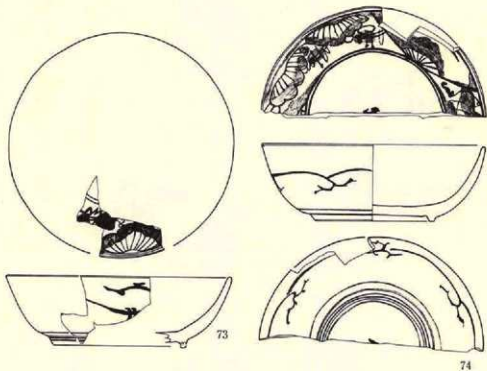
番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	釉薬・絵付	製作地	年 代	備 考
			口径	高さ	底径					
60	磁 器 皿	9号溝埋土	—	(1.5)	4.4	灰白色	染付(青灰色)	肥 前	1690 ~1780	
61	磁 器 皿	9号溝埋土	—	(1.3)	4.3	灰白色	透明釉	肥 前	1690~ 1780?	
62	磁 器 皿	9号溝埋土	—	(1.9)	4.0	灰白色	透明釉	肥 前	1690~ 1780?	釉の発色が悪い
63	磁 器 皿	G-23表土	10.4	3.2	3.6	灰白色	染付(青灰色)	肥 前	18c?	
64	磁 器 皿	2号壁穴底面	9.8	2.2	4.4	ガラス質	染付(青色)	平清水	19c中	内面目録、型おこし
65	磁 器 皿	1号壁物敷地層	9.8	2.4	4.4	ガラス質	染付(青色)	平清水	19c中	内面目録、型おこし
66	磁 器 皿	E-10埋土 H-18埋土	9.8	2.4	4.4	ガラス質	染付(青色)	平清水	19c中	内面目録、型おこし
67	磁 器 皿	1号壁物敷地層	9.8	2.4	4.4	ガラス質	染付(青色)	平清水	19c中	内面目録、型おこし
68	磁 器 皿	G-6埋土中 (G-18)	9.8	2.2	4.4	ガラス質	染付(青色)	平清水	19c中	内面目録、型おこし

第42図 陶磁器実測図(8)



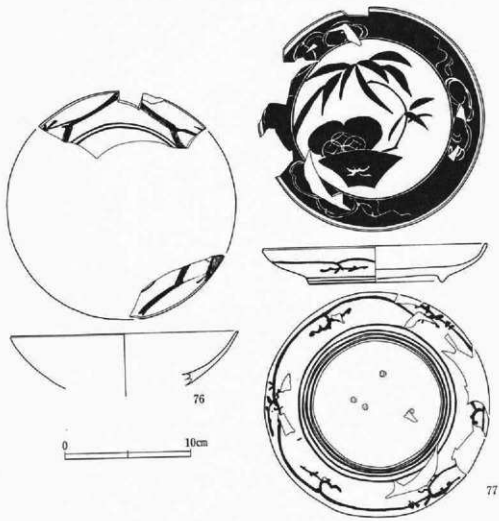
番号	器種	出土位置	法量(cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考
			口徑	高さ	底徑					
69	磁器皿	3号雲穴墓室	—	(0.9)	7.8	白色	染付(青色)	明	16c末~17c前	明産の染付皿
70	磁器皿	Pr174埋土 (13号延焼)	19.8	6.1	9.2	灰白色	染付(青色)	肥前	1630~1640	
71	磁器皿	6号埋土 1号延焼埋土	—	(3.2)	6.8	白色	染付(青色)	肥前	17c後	
72	磁器皿	5号埋土	—	(1.5)	4.8	灰白色	透明釉	肥前	18c?	

第43図 陶磁器実測図(9)



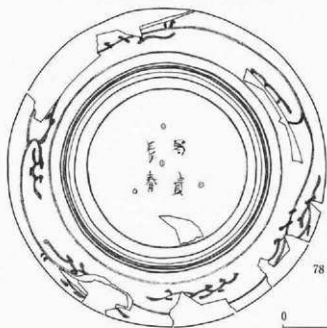
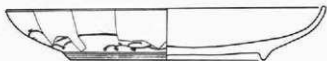
番号	器種	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	釉薬・絵付	製作地	年代	備 考
			口径	高さ	底径					
73	磁 器 皿	「にわ」跡土中 (石-18)	18.0	5.6	10.5	白 色	染付(紺色)	肥 前	1690 ~1780	
74	磁 器 皿	1号堀穴底面 2号堀穴底面 Pc201堀土 (12棟)	17.8	6.1	9.2	白 色	染付(青色)	肥 前	1690 ~1780	
75	磁 器 皿	7号地埋土	12.5	3.8	6.8	灰 白 色	染付(青色)	肥 前	19 c 中	佐賀県塩田町志田家産

第44図 陶磁器実測図(10)



番号	器種	出土位置	法量(cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考
			口径	高さ	底径					
76	磁器 皿	1号建物敷地層	18.2	4.3	—	白色	染付(青色)	肥前	1690 ~1780	
77	磁器 皿	1号建物上面	18.0	2.9	11.1	白色	染付(青)	肥前	18c後	昭和39年(1964)まで伝説、火 熱を受けている範囲「ハリ」跡
78	磁器 皿	1号建物上面	25.6	4.3	15.5	白色	染付(青色)	肥前	18c後	「ハリ」跡あり、真鍮「富貴 長寿」

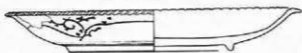
第45図 陶磁器実測図(11)



78

0 10cm

第46图 陶磁器实测图(12)

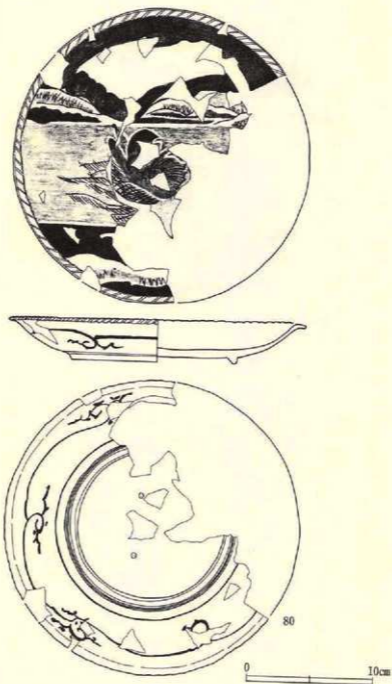


79

0 10cm

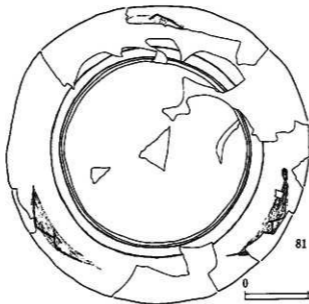
番号	器種	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	繪画・絵付	製作地	年代	備 考
			口径	高さ	底径					
79	磁 器 皿	1号建物上面	23.6	3.2	13.6	白 色	赤付(唐・印) 白化粧	肥 前	19c 中	高田県藤島町 佐賀県塩田町志田山楽亭

第47図 陶磁器実測図(13)



番号	製 種	出土位置	法 量(cm)			胎 土	施 薬・繪 付	製 作 地	年 代	備 考
			口 徑	高 さ	底 径					
98	磁 器 皿	1号建物上層	23.6	3.2	13.6	白 色	赤(朱, 紺) 的化粧	肥 前	19c 中	筑前臼杵 佐賀県福岡市志田廣産

第48図 陶磁器実測図(14)

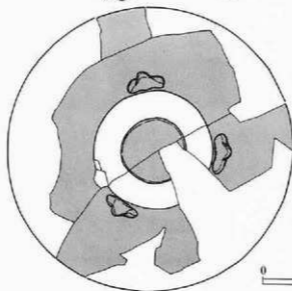
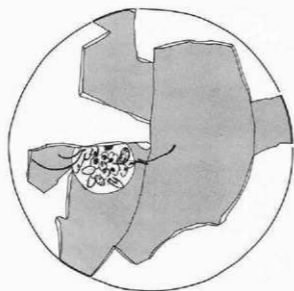


81

0 10cm

番号	器名	出土位置	法 保 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備 考
			口径	高さ	底径					
81	磁器皿	1号建物上面	23.9	3.9	14.5	野 ガラス質	赤 丹付 (コバルト)	不明	20c?	

第49図 陶磁器実測図(15)

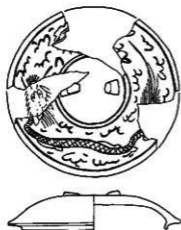


82

0 10cm

番号	器種	出土位置	法量(cm)			胎土	釉薬・繪付	製作地	年代	備考
			口径	高さ	底径					
82	青磁皿	1号建物敷地内 3号地底面 目-18出土	24.6	7.1	10.3	灰白色	繪付(青)	肥前	1640 ~1670	摩滅をおこなっている 外周の釉の角色が濃い

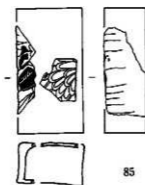
第50図 陶磁器実測図(16)



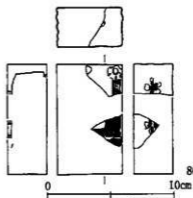
83



84



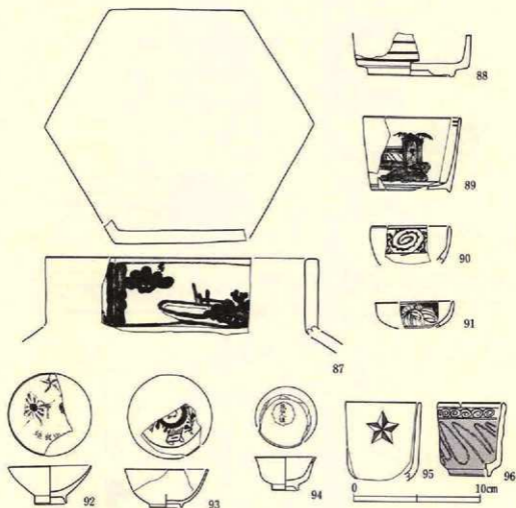
85



86

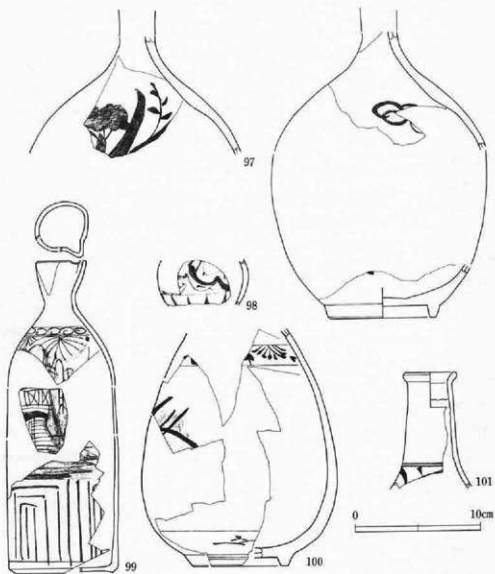
番号	器種	出土位置	法 量(cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備 考
			口径	高さ	底径					
83	磁器蓋	1号建物上面	-	3.2	11.4	白 色	染付(紺)	肥 前	1780 ~1860	84の蓋
84	磁器段蓋	1号建物上面	12.6	5.6	8.8	白 色	染付(紺)	肥 前	1780 ~1860	
85	磁器水罐	7号池壇土	-	-	-	白 色	染付(青)	肥 前	18 c	型おこし
86	磁器水罐	5号池壇土 7号池壇土	-	-	-	白 色	染付(青)	肥 前	18 c	型おこし

第51図 陶磁器実測図(17)



番号	器種	出土位置	法 量(cm)		胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備 考	
			口径	高さ						
87	磁器六角大皿	2号地底面	21.2	(5.6)	—	白 色	染付(青色)	肥 前 (有田)	1690 ~18c 前	摩訶般若經に於ける 口唇、口縁内面無釉
88	磁器火入れ	E-17表土	—	(3.4)	6.6	白 色	染付(藍色)	肥 前	18c	内面無釉
89	磁器 猪口	1号建物敷地層	7.8	5.8	6.3	白 色	染付(青色)	肥 前	1790 ~1860	
90	磁器仏飯器	2号塚穴底面	5.9	(2.8)	—	白 色	染付(青色)	不 明	不 明	
91	磁器仏飯器	2号塚穴底面	6.2	(2.1)	—	白 ガラス質	色絵 (赤、青、黒)	不 明	不 明	
92	磁 器 盃	D-20表土	6.6	3.0	2.6	白 ガラス質	色絵 (赤、黒、金)	不 明	20c 初	日露戦争の鎮魂記念
93	磁 器 茶	3号地底面	6.6	3.1	2.6	白 ガラス質	染付 (コバルト)	不 明	明治以降	
94	磁 器 茶	1号建物上面	4.8	2.6	2.1	白 ガラス質	染付 (コバルト)	不 明	明治以降	
95	磁器湯のみ	1号建物上面	6.0	(6.1)	—	灰 白 色	染付 (コバルト)	不 明	明治以降	
96	磁器湯のみ	H-18表土	5.3	6.3	3.8	白 色	染付 (コバルト) 青磁	不 明	不 明	

第52図 陶磁器実測図(18)



番号	器 種	出土位置	法 量(cm)			胎 土	釉 薬・繪 付	製作地	年 代	備 考
			口 徑	高 心	底 徑					
97	磁器 樽利	7号池埋土 3号池埋土	—	(22.8)	8.6	灰白色	繪付(青色)	肥前系	18c ~19c?	内面無釉
98	磁器 瓶	2号池穴並面 且一區表土	—	(3.5)	—	白 色	繪付(紺色)	肥 前	18c 後	内面無釉
99	磁器 樽利	3号池穴並 1号埋物並地層	5.0	—	7.8	可 少×質	繪付(紺色)	平瀨水	19c 中	内面無釉
100	磁器 樽利	1号池2層	—	(18.6)	7.8	白 色	繪付 (コバルト)	不 明	明治以降	内面無釉
101	磁器 樽利	7号池埋土	4.4	(9.3)	—	灰白色	繪付(青色)	不 明	明治以降	内面無釉

第53図 陶磁器実測図(19)

(2) 陶 器

a. 碗 (第54図、写真図版41、42)

102は肥前産の陶胎染付で、18世紀前半代のものである。漆継ぎを行っている。103は時期産地が不明であるが、18世紀代のもと思われる9号溝から出土しており、18世紀に近い年代が考えられる。104、105は福島県大堀相馬窯産のものである。106は秋田県白岩窯産で1771～19世紀代のものである。

b. 皿 (第54～57図、写真図版42、43、44)

皿は3～4寸の小型のものと6～7寸の中型のものがみられる。

107～118の小型の皿は肥前産で大橋編年のIV期のものである。見込み蛇の目軸はぎで、内面に銅緑釉、外面に透明釉を施した大量生産品である。佐賀県嬉野町内野山窯でこの種の皿が大量に作られたという。124は白岩窯の製品である。

中型の皿の119は肥前産で小型の皿と同様に見込み蛇の目軸はぎで内面銅緑釉、外面透明釉であり18世紀の前半代のものである。120と121は時期、産地不明である。122は肥前(唐津)産で内面に刷毛目装飾がみられる。18世紀代のもので漆継ぎをおこなっている。123は相馬大堀産、125～130は白岩産で1771～19世紀代のものである。主に白釉が使用されており、外面の下半は無釉である。127は見込み蛇の目軸はぎになっている。

c. 鉢・片口鉢 (第58～60図、写真図版44、45)

131、132、134～138は片口鉢である。133、139は片口部分が欠損しているが器形から片口鉢の可能性が高い。140～145も片口がついていた可能性がある。136、144は一種類の釉しか使用していないが、他は二種類の釉をかけ分けている。白釉と鉄釉の組み合わせが多い。145は産地がはっきりしないが、他は白岩産で1771～19世紀代のものである。144、145は漆継ぎをおこなっている。

d. 壺 (第60～62図、写真図版46、47)

形態が壺に近いものも一応壺として扱っている。146は肥前(唐津)産で18世紀代のものである。白化粧の上に鉄釉で文様を描いた二彩手である。147～156は白岩産で1771～19世紀代のものである。147～149は小型のもので底面は回転糸切りである。147、152は鉄釉のみ使用しているが、他は体部下半に鉄釉を上半には白釉、灰釉、褐釉などをかけ分けている。151は漆継ぎをおこなっている。154、155は1号建物に伴って出土したもので火熱を受けている。

e. 土瓶 (第63図、写真図版47)

157と158の2個体が出土している。157は色絵の山水文、158は鮫肌釉で共に大堀相馬の製品に似るが、胎土が大堀相馬のものとは異なっており、大堀相馬の製品をまねた他の窯の製品と思われる。

f. 火入れ (第63図、写真図版47)

159が出土している。外面は鉄軸、内面は無軸である。産地年代は不明である。底面に墨書がみられる。

g. 瓶類 (第63図、写真図版47)

160が出土している。内面は無軸で、産地年代は不明である。

h. 鉢 (第63図、写真図版47)

161が出土している。平清水産で白化粧をした上に呉須で文様を描いている。内面に目跡がみられる。19世紀代のものであろう。

i. 植木鉢 (第64図、写真図版48)

162が出土している。平清水産で白化粧をした上に呉須で文様を描いている。内面の下半部は無軸である。19世紀中以降のものであろう。

j. 便器 (第64図、写真図版48)

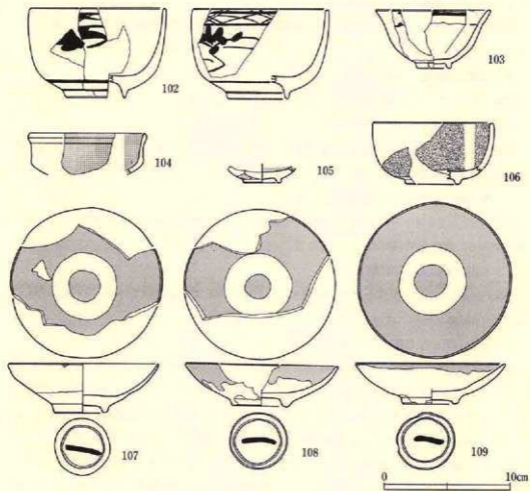
163が出土している。平清水産で白化粧をした上に呉須で文様を描いている。20世紀代のもので、1号建物に伴っていたものである。

k. 攪鉢 (第65～72図、写真図版49、50、51、52)

164は肥前(唐津)産で口縁部のみ鉄軸を流しがけている。他の部分は無軸で胎土は赤褐色を呈している。卸し目の摩滅が著しいが、卸し目の幅はあまり密でない。17世紀前半代のものである。165～167も唐津産である。共に胎土は赤褐色を呈している。165は166、167より卸し目が粗く、17世紀前半と思われる。166、167は17世紀後半と思われる。168は産地年代は不明である。169は口縁部の形態が備前産のものに似るが、産地年代は不明である。170は唐津産である。内外面に鉄軸がかけられており、胎土は赤褐色を呈している。18世紀代のものである。171は産地時代が不明であるが、出土した11号溝の年代観から18世紀頃のものと思われる。外面体部下半にケズリが施されており、内外面に鉄軸がかけられている。172は唐津産の可能性ある。胎土は赤褐色で内外面に鉄軸がかけられている。173は小型のものであるが産地年代は不明である。174も産地年代が不明である。175～177は白岩産で、1771～19世紀代のものである。共に外面体部下半にケズリが施され、内外面に鉄軸がかけられている。178、179は外面体部下半にケズリが施され、内外面に鉄軸がかけられるが、産地年代は不明である。180、181は1号建物に伴って出土したもので20世紀以降のものと思われる。

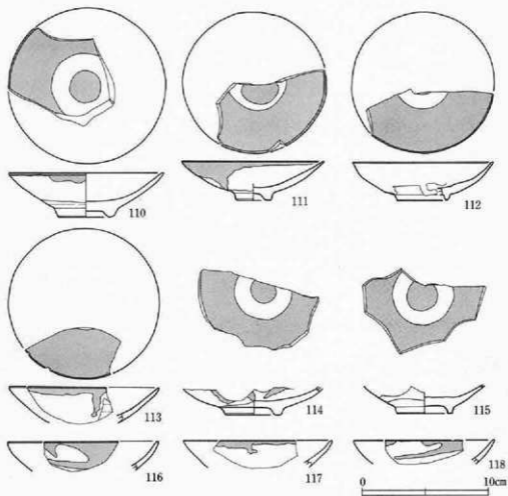
l. 土器類 (第73～74図、写真図版53)

素焼きの軟質ものを土器類とした。182は火消し壺などの蓋と考えられる。183は形態から焙烙と思われる。184、185は煙炉の類であらう。183～185は2号竪穴と1号建物整地層中からの出土であり、19世紀以前のものである。186、187は七厘の類である。20世紀以降と思われる。



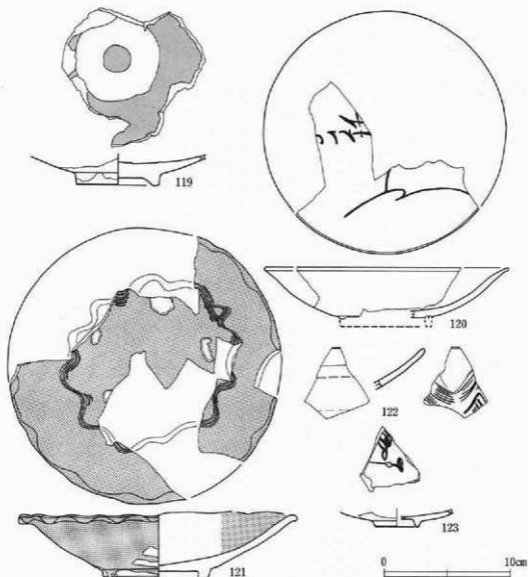
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考
			口徑	高さ	底径					
102	陶器 碗	3号地底面 H-19表土	10.8	7.1	4.9	灰色	染付(紺色)	肥前	18c前	陶胎色付、漆黒がまおこなつてい
103	陶器 碗	9号溝埋土	9.1	4.7	2.8	黄棕色	透明釉 緑色の胎	不明	不明	
104	陶器 碗	「にわ」表土中 (D-20)	9.0	(3.3)	—	黄棕色	灰釉	肥前大塚	不明	
105	陶器 碗	2号裂穴底面	—	(1.1)	3.0	黄棕色	灰釉 (薄緑色)	肥前大塚	不明	
106	陶器 碗	2号裂穴底面	9.8	4.8	4.4	黄棕色	白釉(白色)	白岩	1771 ~19c	
107	陶器 皿	1号建物敷地層 11号溝埋土	12.0	3.9	4.4	浅黄棕色	透明釉 銅緑釉	肥前	1690 ~1760	底面に墨書あり
108	陶器 皿	1号建物敷地層	12.0	3.1	4.4	浅黄棕色	透明釉 銅緑釉	肥前	1690 ~1760	底面に墨書あり
109	陶器 皿	1号建物敷地層	12.1	3.2	4.4	浅黄棕色	透明釉 銅緑釉	肥前	1690 ~1760	底面に墨書あり

第54図 陶磁器実測図(20)



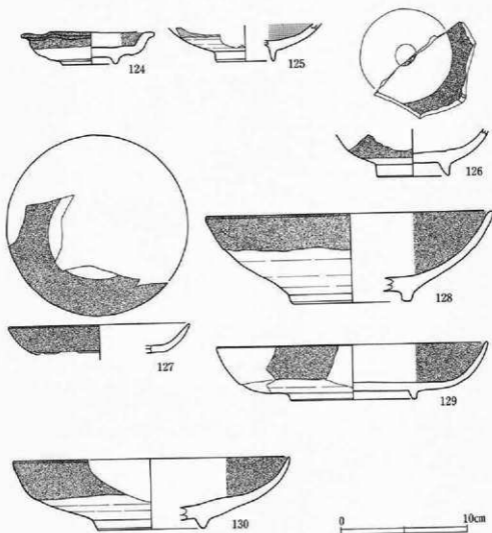
番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	釉薬・絵付	製作地	年 代	備 考
			口径	高さ	底径					
110	陶 器 皿	1号建物影地層	12.2	3.5	4.3	浅黄棕色	透明釉 灰緑釉	肥前	1690 ~1780	
111	陶 器 皿	E-21表土	11.3	3.1	2.8	浅黄棕色	透明釉 灰緑釉	肥前	1690 ~1780	
112	陶 器 皿	Pt267埋土 (P-24)	11.2	3.1	4.2	灰白色	透明釉 灰緑釉	肥前	1690 ~1780	
113	陶 器 皿	11号溝埋土	12.0	(2.8)	—	灰白色	透明釉 灰緑釉	肥前	1690 ~1780	
114	陶 器 皿	1号建物影地層	—	(2.1)	4.4	浅黄棕色	透明釉 灰緑釉	肥前	1690 ~1780	
115	陶 器 皿	11号溝埋土	—	(2.2)	4.4	浅黄棕色	透明釉 灰緑釉	肥前	1690 ~1780	
116	陶 器 皿	Pt266埋土 (P-24)	12.0	(2.4)	—	灰白色	透明釉 灰緑釉	肥前	1690 ~1780	
117	陶 器 皿	11号溝埋土	11.8	(2.2)	—	灰白色	透明釉 灰緑釉	肥前	1690 ~1780	
118	陶 器 皿	11号溝埋土	11.2	(1.9)	—	灰白色	透明釉 灰緑釉	肥前	1690 ~1780	

第55図 陶磁器実測図(21)



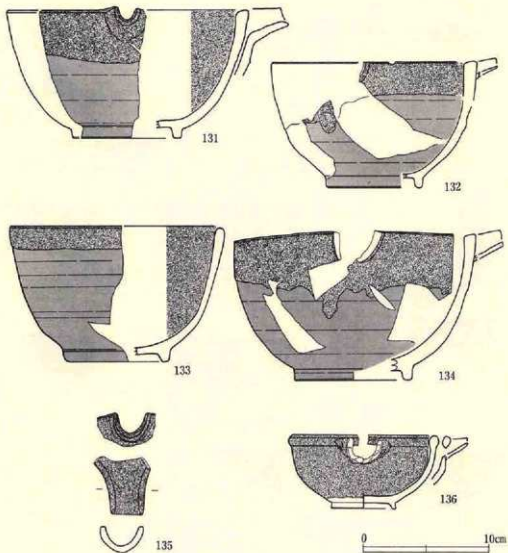
番号	器種	出土位置	法量(cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考
			口徑	高さ	底径					
119	陶器皿	9号溝埋土	—	(2.3)	6.6	灰白色	透明釉 新緑釉	肥前	18c前	
120	陶器皿	Pic217埋土 (2号埋物) 2号壁穴底面	14.4	(4.1)	—	浅黄棕色	浅黄棕色の釉	不明	不明	底面高台内にも施釉
121	陶器皿	1号埋物形地層 目-18(黄土)	22.1	5.2	8.2	灰色	灰釉(緑色)	不明	不明	内面に目跡、横書き文
122	陶器皿	Pic66埋土 (5号埋物)	—	—	—	浅黄棕色	にじい赤褐色の釉	肥前 (豊前)	18c	刷毛目跡、横書きをおこなっている
123	陶器皿	2号壁穴底面	—	1.2	3.4	浅黄棕色	白色の釉	相模大塚	不明	内面に目跡

第56図 陶磁器実測図(22)



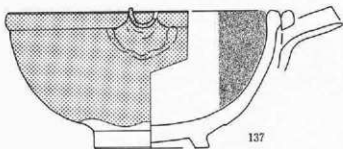
番号	器種	出土位置	法 量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備 考
			口径	高さ	底径					
124	陶器 皿	3号埴原遺跡 E-16表土	11.1	2.5	4.8	棕色	白釉(空色)	白岩	1771 ~19c	
125	陶器 皿	G-17表土	—	(2.9)	4.8	灰色	灰釉(緑色)	不明	不明	
126	陶器 皿	D-21表土	—	(3.5)	5.8	淺黄棕色	白釉(灰白色)	白岩	1771 ~19c	
127	陶器 皿	17号溝埋土	14.5	(2.5)	—	淺黄棕色	白釉(灰白色)	白岩	1771 ~19c	
128	陶器 皿	1号埋土 C-18表土	22.7	7.2	8.8	淺黄棕色	白釉(空色)	白岩	1771 ~19c	
129	陶器 皿	1号建物敷地層 3号地底面	21.4	4.4	10.2	淺黄棕色	白釉(灰白色)	白岩	1771 ~19c	漆跡をおこなっている
130	陶器 皿	1号建物敷地層	21.9	5.5	8.9	灰色	白釉(空色)	白岩	1771 ~19c	

第57図 陶磁器実測図(23)

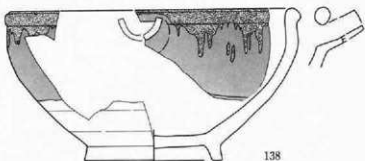


番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	釉薬・絵付	製作地	年代	備 考
			口径	高さ	器径					
131	陶器片口鉢	D-20灰土	19.2	10.2	8.0	灰 色	白釉(白色) 鉄釉	白 岩	1771 ~19 c	
132	陶器片口鉢	C-21灰土	16.3	10.0	7.7	灰 色	白釉(白色) 鉄釉	白 岩	1771 ~19 c	
133	陶器片口鉢	1号建物埋地層 D-20灰土	16.9	10.8	8.3	灰 色	白釉(灰色) 鉄釉	白 岩	1771 ~19 c	
134	陶器片口鉢	H-18灰土	19.7	11.2	9.3	灰 色	白釉(青白色) 鉄釉	白 岩	1771 ~19 c	内面白釉
135	陶器片口鉢	1号建物埋地層	—	—	—	灰 色	白釉(灰白色)	白 岩	1771 ~19 c	
136	陶器片口鉢	17号埋土 (2号建物)	17.0	6.9	5.2	灰白色 褐色土	鉄釉(灰白色)	白 岩	1771 ~19 c	

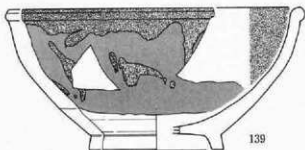
第58図 陶磁器実測図(24)



137



138



139

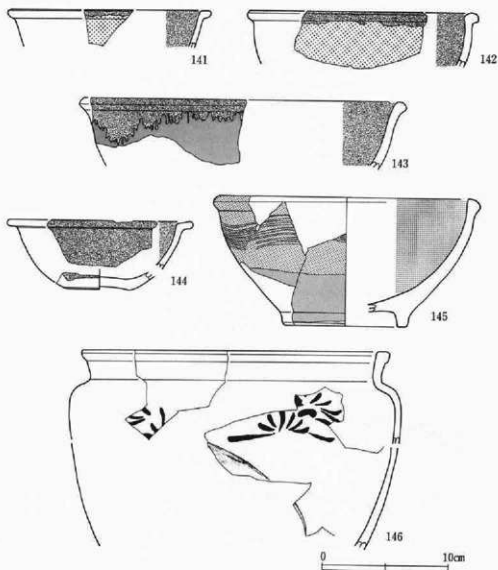


140

0 10cm

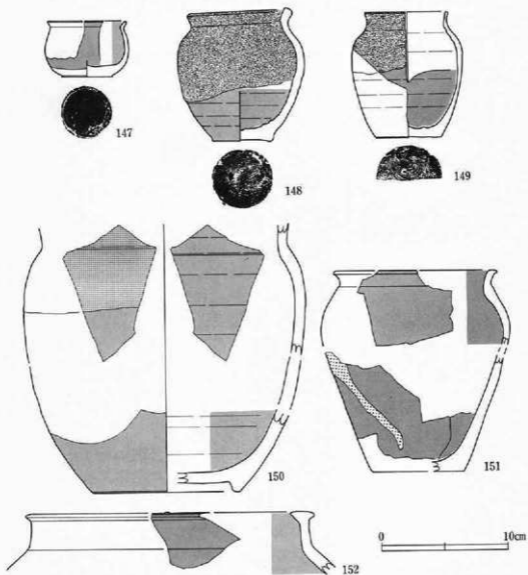
番号	器 種	出土位置	法 量(cm)			胎 土	釉薬・絵付	製作地	年代	備 考
			口径	高さ	底径					
137	陶器片口鉢	17号地上部 K-24灰土	21.8	10.9	9.2	灰 色	了り釉 白釉(白色)	白 岩	1771 ~19c	
138	陶器片口鉢	K-24灰土	22.4	12.1	10.8	灰 色	白釉(白色) 鉄釉	白 岩	1771 ~19c	
139	陶器片口鉢	1号発掘地第 2号掘穴底面	23.8	11.4	10.7	灰 色	白釉(白色) 鉄釉	白 岩	1771 ~19c	
140	陶 器 鉢	C-21表層	—	13.2	8.8	了り釉 色~灰色	白釉(変色) 鉄釉	白 岩	1771 ~19c	

第59図 陶磁器実測図(25)



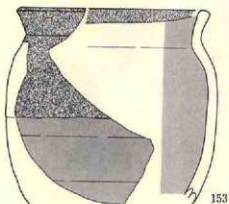
番号	器種	出土位置	法量(cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考
			口径	高さ	底径					
141	陶器鉢	1号建物敷地層	16.2	(2.9)	—	灰色	白釉(薄白色) アノ釉	白岩	1771 ~19c	
142	陶器鉢	1号建物敷地層 C-22灰土	19.8	(4.5)	—	灰白色	白釉(薄白色) アノ釉	白岩	1771 ~19c	
143	陶器鉢	5号埋土	25.2	(5.5)	—	灰白色	白釉(淡白色) 黒色の釉	白岩	1771 ~19c	
144	陶器鉢	2号埋土(底面)	14.8	(5.4)	4.8	灰色	白釉(薄白色)	白岩	1771 ~19c	摩羅ぎをおこなっている
145	陶器鉢	1号建物敷地層 E-19灰土	19.4	10.3	9.6	灰色	灰釉(薄緑色) 鉄釉	白岩?	不明	摩羅ぎをおこなっている
146	陶器甕	1号建物敷地層 E-18灰土	24.4	(15.8)	—	赤褐色	白化粧 鉄釉	肥前 (唐津)	18c	

第60図 陶磁器実測図(26)

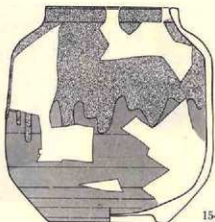


番号	器種	出土位置	法量(cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考
			口径	高さ	底径					
147	陶器 壺	2号壺穴直筒	6.1	4.5	4.0	淡黄色	鉄釉	白岩	1771 ~19c	底部回転糸切り
148	陶器 壺	G-17表土	8.1	10.1	4.5	灰色	白釉(緑色) 鉄釉	白岩	1771 ~19c	底部回転糸切り
149	陶器 壺	3号池底筒	3.3	9.9	2.6	黒~灰色	白釉(緑色) 鉄釉	白岩	1771 ~19c	底部回転糸切り、内面鉄釉
150	陶器 壺	1号建物敷地層 H-17表土	—	21.2	11.9	灰色	灰釉(薄緑色) 鉄釉	白岩	1771 ~19c	
151	陶器 壺	4号溝埋土 G-23表土	13.2	(16.0)	7.3	灰色	アイ釉 鉄釉	白岩	1771 ~19c	縁破ぎをおこなっている
152	陶器 壺	P256埋土 (4号建物)	23.0	(4.5)	—	灰色	鉄釉	白岩	1771 ~19c	

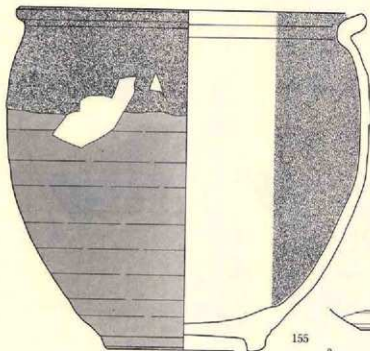
第61図 陶磁器実測図(27)



153



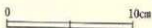
154



155

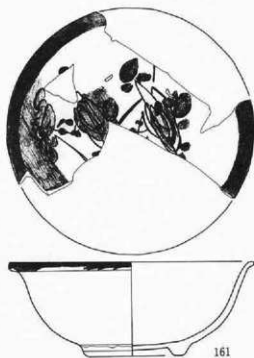
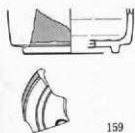
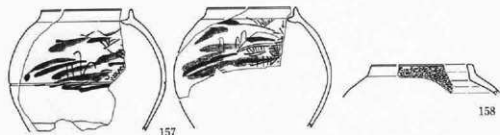


156



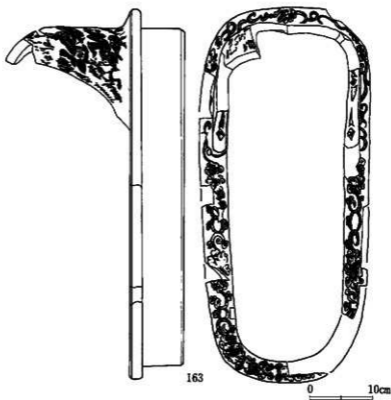
番号	器種	出土位置	汎量(cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考
			口径	高さ	底径					
153	陶器 甕	1号建物敷地	15.6	(15.5)	—	洗練棕色～灰色	白釉(洗練色)鉄軸	白岩	1771～19c	白釉の発色が悪い
154	陶器 甕	1号建物上面	10.8	17.2	9.9	灰色	白釉(薄～空色)鉄軸	白岩	1771～19c	火熱を受けている
155	陶器 甕	1号建物上面	27.0	27.3	12.1	灰色	白釉(青白色)鉄軸	白岩	1771～19c	火熱を受けている
156	陶器 甕	2号壁穴底面	—	(1.6)	3.5	灰色	鉄軸	白岩	1771～19c	

第52図 陶磁器実測図(2B)



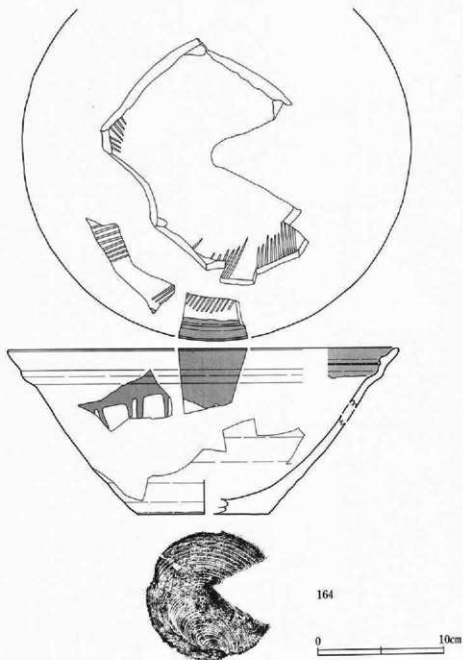
番号	器種	出土位置	法量(cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考
			口径	高さ	底径					
157	陶器土瓶	G-23表土	7.2	(9.6)	—	灰白色	色絵(黒、赤)	不明	明治以降	産地は相馬大塚ではない
158	陶器土瓶	E-17表土	8.1	(2.5)	—	浅黄色	絞肌軸	不明	明治以降	産地は相馬大塚ではない
159	陶器火入れ	M-19表土	—	(3.5)	7.8	黄褐色	鉄軸	不明	不明	底面に墨書あり
160	陶器瓶	H-19表土	—	(2.3)	5.6	灰白色	灰白色の釉	不明	不明	内面無軸
161	陶器鉢	1号建物敷地層	19.4	7.6	7.1	赤褐色	白色釉染付(ゴビタ)	平清水	19c	内面に目録、陶胎染付

第63図 陶磁器実測図(29)



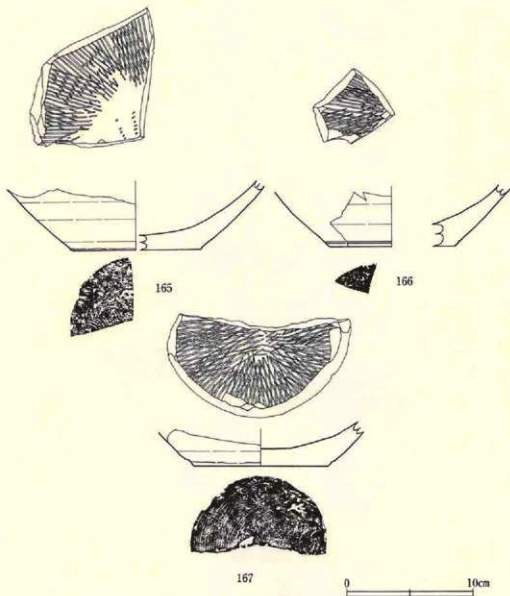
番号	器 名	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	釉薬・絵付	製作地	年代	備 考
			口径	高さ	底径					
162	陶器植木鉢	2号地蔵型 L-20黄土	16.6	(9.9)	—	灰白・褐色	白化粧 絵付(ワビト)	平清水	19c 中以降	内面下半は無釉
163	陶器餐器	D-24黄土	59.8 (湯鉢)	29.1	27.1 (湯)	灰 色	白化粧 絵付(ワビト)	平清水	20 c	

第64図 陶磁器実測図(30)



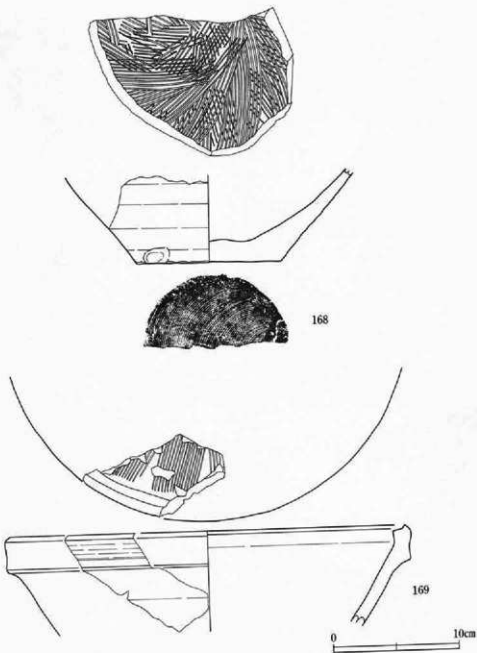
番号	器種	出土位置	法量(cm)			胎土	軸面・絵付	製作地	年代	備考
			口径	高さ	底径					
164	器鉢	6号溝埋土	30.6	(13.2)	10.8	赤褐色	鉄物	肥前(津屋)	17c前	底面が転車切り、脚目の摩滅著しい。

第65図 陶磁器実測図(31)



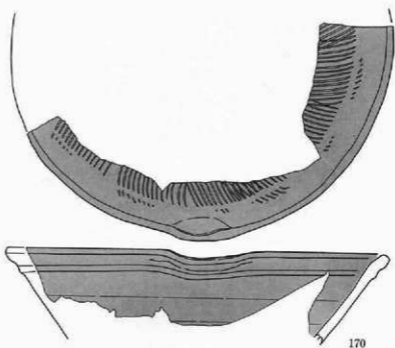
番号	器 種	出土位置	法 量(cm)			胎 土	釉薬・絵付	製作地	年代	備 考
			口径	高さ	底径					
165	深 鉢	PA264埋土 (5号建物)	—	(5.0)	10.6	赤褐色	なし?	肥前 (唐津)	17c 前	底部回転糸切り、脚目の摩滅 著しい。
166	深 鉢	12号土坑埋土	—	(4.4)	9.9	赤褐色	なし?	肥前 (唐津)	17c 後?	底部回転糸切り
167	深 鉢	1号建物敷地層	—	(3.6)	10.6	赤褐色	なし	肥前 (唐津)	17c 後?	底部回転糸切り

第66図 陶磁器実測図(32)

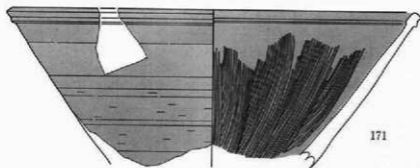


番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)		胎 土	釉薬・絵付	製作地	年代	備 考	
			口径	高さ 底径						
168	深 鉢	F-24表土	—	(6.9) 11.6	灰白色	なし	不明	不明	底部回転糸切り	
169	帯 鉢	I-21表土	31.0	(8.0)	—	赤褐色	なし	不明	不明	織部系のものに似ている

第67図 陶磁器実測図(33)



170

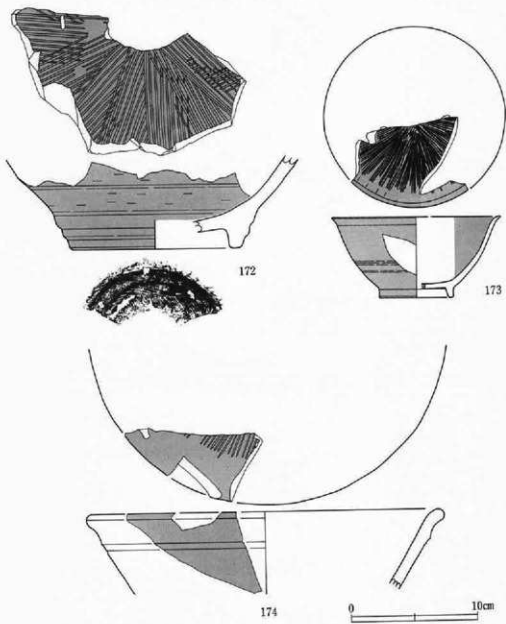


171



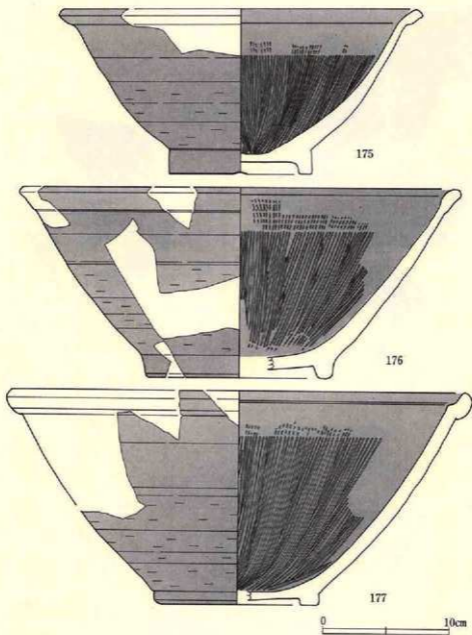
番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	釉高・絵付	製作地	年代	備 考
			口径	高さ	底径					
170	甗 鉢	1号埋物倉地層 11号溝埋土	30.2	(7.1)	—	赤褐色	鉄釉	肥前 (湯津)	18c	
171	甗 鉢	11号溝埋土	32.1	(126)	—	淡黄褐色	鉄釉	不明	不明	外部の下半部ケズリ

第68図 陶磁器実測図(34)



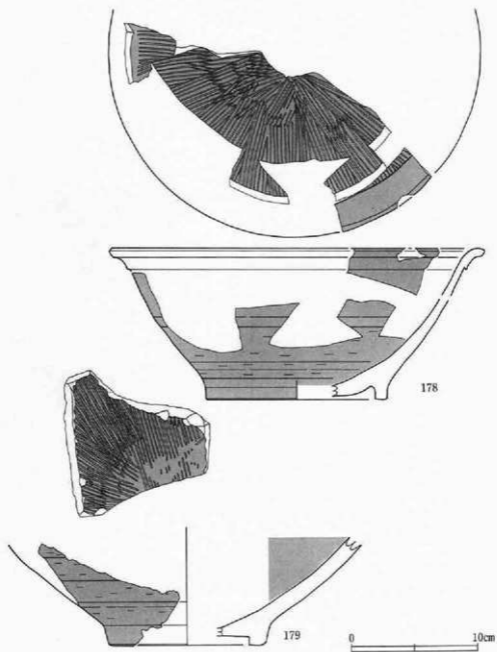
番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	釉 薬・絵 付	製 作 地	年 代	備 考
			口 徑	高 心	底 徑					
172	甗 鉢	H-19表土	—	(7.2)	13.3	赤 褐色	鉄 胎	肥 前?	不 明	
173	甗 鉢	2号壙穴底面	13.2	6.4	5.9	灰 色	鉄 胎	不 明	不 明	
174	甗 鉢	2号壙穴底面	28.3	(6.5)	—	暗 赤褐色	鉄 胎	不 明	不 明	

第69図 陶磁器実測図(35)



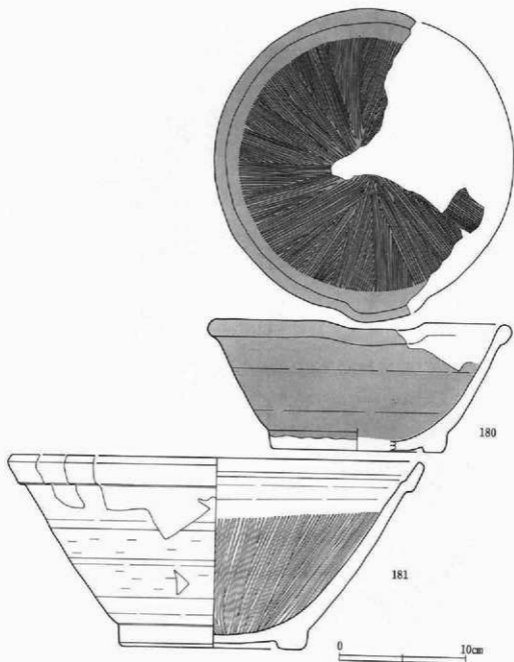
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考
			口径	高さ	底径					
175	撰鉢	4号溝埋土	27.7	13.2	11.3	灰白色	鉄釉	白岩	1771 ~19c	
176	撰鉢	2号池底埋	34.2	15.0	14.6	残黄褐色 ~灰白色	鉄釉	白岩	1771 ~19c	
177	撰鉢	H-18表土	36.2	17.0	12.9	灰白色	鉄釉	白岩	1771 ~19c	

第70図 陶磁器実測図(36)



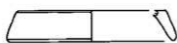
番号	器種	出土位置	法 量 (cm)		胎 土	釉薬・繪付	製作地	年代	備 考	
			口径	高さ						底径
178	撰鉢	了尊院埋土 文-24表土	29.2	(12.1)	14.3	赤褐色	鉄釉	不明	不明	
179	撰鉢	G-23表土	-	(8.1)	12.5	橙 色	鉄釉	不明	不明	

第71図 陶磁器実測図(37)



番号	器種	出土位置	法量(cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考	
			口径	高さ	底径						
180	椀	鉢	1号建物上面	22.3	10.3	13.5	浅黄棕色	敷軸	不明	20c?	火熱を受けている
181	椀	鉢	1号建物上面	31.9	15.3	14.8	灰色	なし	不明	不明	火熱を受けている

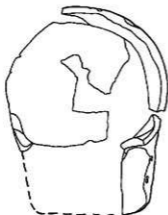
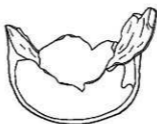
第72図 陶磁器実測図(38)



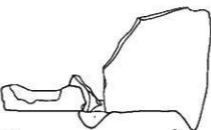
182



183



184

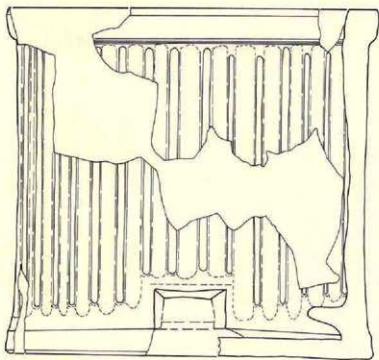


185

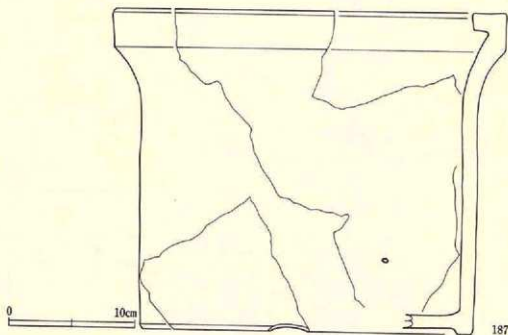
0 10cm

番号	器種	出土位置	法量(cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考	
			口径	高さ	底径						
182	煮	?	Pit240環式 (2号環式)	13.2	2.5	5.9	赤褐色	なし	不明	不明	内面へタミダキ
183	煮	地?	2号環式遺跡	10.6	(3.1)	-	黄褐色	なし	不明	不明	
184	煮	炉	2号環式遺跡	-	(7.1)	-	にじみ褐色	なし	不明	不明	
185	煮	炉	1号環式遺跡	-	(10.1)	-	橙褐色	なし	不明	不明	
186	七	瀬?	1号池2層	29.4	27.8	28.6	灰褐色	なし	不明	不明	
187	七	瀬	1号池2層	32.3	25.6	27.9	赤褐色	なし	不明	不明	

第73図 陶磁器実測図(39)



186



187

第74图 陶磁器实测图(40)

(3) 漆 器 (第75図、写真図版54)

201～203は椀である。201、202は内面に赤漆、外面に黒漆が塗られている。203は内外面赤漆である。202、203に比べて201は、高台が高く器厚が厚く古い形態を有している。202、203は19世紀代、201は18世紀代の年代が考えられる。204、205は蓋である。共に内面は赤漆、外面は黒漆である。205は赤漆と銀泥で富士山を描いている。204は高台内に穿孔が4つある。なおこの蓋は5号建物の北東隅の柱穴から出土しており、年代は5号建物の年代である17世紀前半に近いものと考えられる。205は20世紀代のもと考えられる。206は皿である。内面の中央が赤漆で、その周りと外面は黒漆である。20世紀代のものであろう。

(4) 木 製 品 (第76～92図、写真図版54、55、56、57、58、59、60)

207、208は下駄である。207は台と歯を別に作り組み合わせる構造下駄で、歯を台に装着した際にその接合部が台の表面に露呈する「露卯下駄」である。208は一木造りの下駄である。歯が斜めに擦り減っており、かなり使い込んだものである。右の足に履いていたようである。これらの下駄は出土した5号池の年代観から、概ね18世紀代のもと思われる。

209は鉢である。内面には工具痕が残っており、仕上げはあまり丁寧ではない。練り鉢といったような用途と思われる。出土した5号池の年代観から18世紀代のもと思われる。

201は何らかの農具の柄である。長さから考えて斧の柄などの可能性が高い。これも5号池の出土で18世紀代のもと思われる。

211は鉤状の製品である。小原徳精氏によると、堆肥を引っ掛けて引きずるための農具に形状が似るといふ。これも5号池の出土で18世紀代の可能性が高い。

212は鞆の台である。5号池の出土で18世紀代の可能性が高い。

213は木桶の桶の部分である。半分に欠損している。5号池の出土で18世紀代の可能性が高い。

214～216は桶の側板である。214は把手の部分である。214、215は5号池の出土で18世紀代の可能性が高い。216は2号竪穴遺構の出土で、2号竪穴の年代観から19世紀代の可能性が高い。

217、218は樽の蓋板である。218には「叶」の焼印がみられる。217は5号池の出土で18世紀代、218は2号竪穴の出土で19世紀代の可能性が高い。

220～223は桶の底板である。220～222は2号竪穴の出土で19世紀代のものの可能性が高い。

224はD-24の14号建物内に埋設されていた桶である。14号建物に伴うものかどうかは不明である。

225は鍋類の蓋である。7号池の出土であり、7号池の年代観から20世紀代のもの可能性が

高い。

226～230はへらの類である。227は小原徳精氏によると味噌を盛り付けたりする「味噌べら」に形態が類似しているという。228、229はしゃもじ、230はしゃくしである。226、228は2号竪穴の出土で19世紀代、227、229、230は7号池の出土で20世紀以降のものの可能性が高い。

231は串状の木製品である。232は先端が尖った棒状の製品であるが用途は不明である。共に2号竪穴の出土であり19世紀代のものの可能性が高い。

233～252は箸である。233～250は両端がやや細くなっている。251、252は片方だけが尖っている。すべて2号竪穴の出土であり19世紀代のものの可能性が高い。

253は独楽である。半分に欠損している。出土した3号池の廃絶年代は明治時代と推定され、この独楽もそれ以前のものと考えられる。

254は墨書がある板である。表面には「湯田村白木野小原□□□」、裏面には「大荒沢本人出ス」と書かれている。荷札と思われる。年代は20世紀のものと考えられる。

253は紋章が彫りこまれた板材である。釘穴の痕跡がみられ、何らかのものの部品と思われる。裏面が一部炭化しており火熱を受けたことを示している。なおこの紋章は小原家の家紋とは異なるものであるという。年代は出土した2号池が廃絶された昭和14年頃より以前のものである。

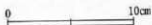
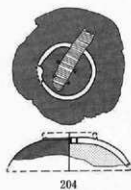
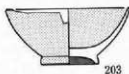
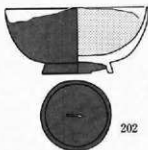
256は用途不明の木製品である。先端部が太くなっており天秤棒の可能性もあるが断定できない。5号池から出土したことにより18世紀代のものと思われる。

257～266はくさびである。すべて5号池の出土で一括して廃棄されたものと思われる。建物を解体した際に不要なくさびを廃棄したのであろうか。18世紀代のものの可能性が高い。

266～269、271は板材である。266～269には釘穴がみられる。共に5号池の出土で18世紀代のものの可能性が高い。

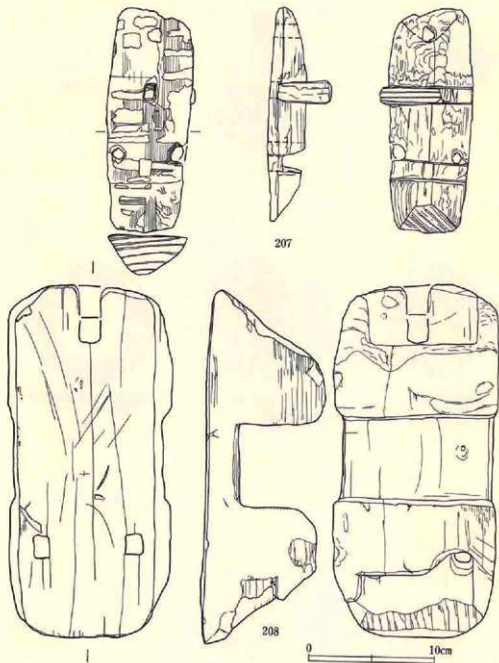
270は杭である。上端は斜めになっている。5号池から出土で18世紀代のものの可能性が高い。

272～274は柱材である。いずれも柱根のみの残存である。272はC-22の Pit262、273はG-18の Pit143、274はD-21の Pit261からの出土である。いずれの柱穴もそれを使用した建物を組みなかった。272、273は下端部を面取りしている。274は八角形の断面の柱である。このような多角形の柱は土間の独立柱に多くみられるものであるが、もしこの274が土間の独立柱だとすると、検出された母屋群の位置関係から曲り屋、中門造りといったプランの母屋を想定せざるをえない。しかし、この柱の他に母屋の建物から曲り部が出ていたと推定させるものは何も無く、その様に結論づけることは危険であろう。



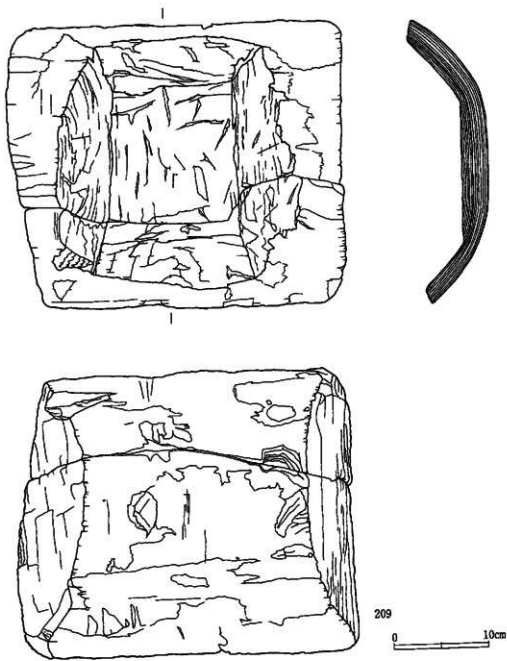
番号	器種	出土位置	法量(cm)			器種	胎裏・絵付	製作地	年代	備考
			口径	高さ	底径					
201	漆器 碗	3号池底面	—	(7.3)	5.6	ブナ 属	赤漆 黒漆			
202	漆器 碗	2号堀穴底面	11.4	5.2	5.6	ブナ 属	赤漆 黒漆			底面に赤漆で「一」と書いてある。
203	漆器 碗	2号堀穴底面	9.9	4.6	4.6	ブナ 属	赤漆 黒漆			
204	漆器 蓋	PA210堀土 (5号建物)	—	(2.9)	—	ブナ 属	赤漆 黒漆			上面に穿孔が4つある。
205	漆器 蓋	7号池底面	5.8	2.6	11.1	ブナ 属	赤漆 黒漆			
206	漆器 皿	7号池埋土	9.9	1.3	6.2	ブナ 属	赤漆 黒漆			

第75図 漆器実測図



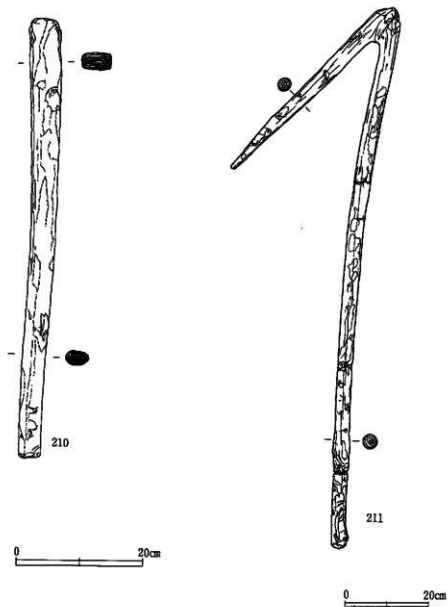
番号	品 種	出土位置	法 量 (cm)			樹 種	備 考	保存処理 整理番号
			最大長	最大幅	厚さ			
207	下 駄	5号池底面	17.5	6.6	5.6	コナラ属		25
208	下 駄	6号池底面	28.0	11.9	3.7	モクレン属		26

第76図 木製品実測図(1)



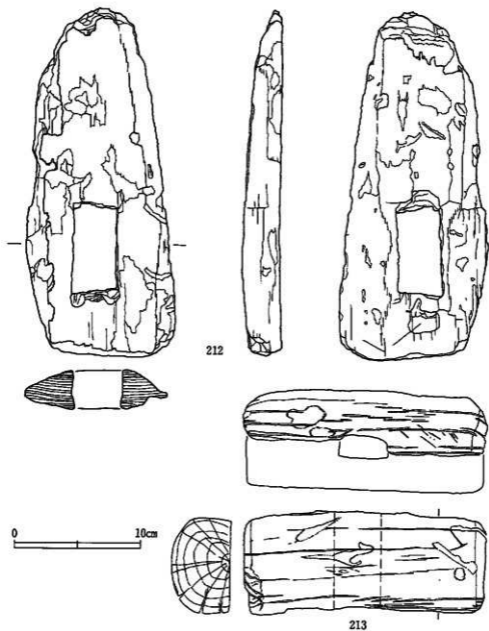
番号	品 種	出土位置	法 量 (cm)			構 造	備 考	保存処理 整理番号
			最大長	最大幅	厚さ			
209	鉢	5号地底面	35.2	30.0	2.9	モクレン属		20

第77図 木製品実測図(2)



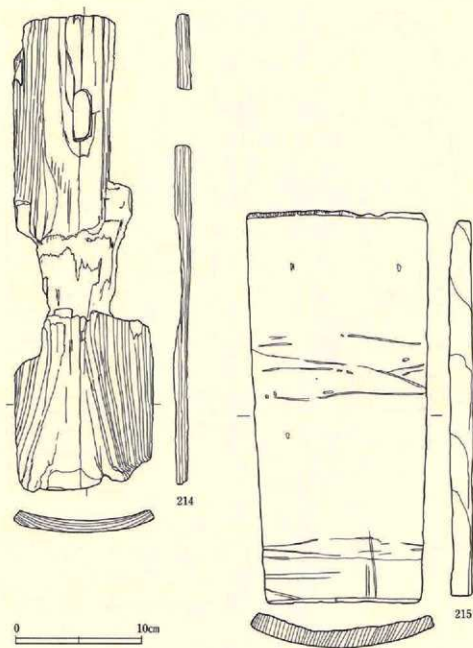
番号	品名	出土位置	法量 (cm)			種類	備考	保存 場所 番号
			最大長	最大幅	厚さ			
210	柄	5号池原圃	70.4	4.2	3.1	カエデ属		30
211	不明	5号池原圃	132.2	4.0	4.1	ブナ属		29

第78図 木製品実測図(3)



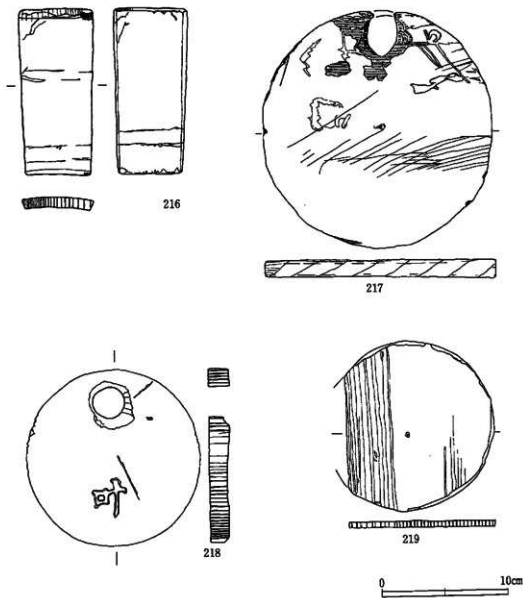
番号	品 種	出土位置	法 量 (cm)			樹 種	備 考	保存処理 整理番号
			最大長	最大幅	厚さ			
212	くわ台	5号池底面	27.5	11.3	3.0	コナラ属		28
213	木 桶	5号池底面	18.9	7.6	—	リュウブ	半分欠損	27

第79図 木製品実測図(4)



番号	品 種	出土位置	法 量 (cm)			樹 種	備 考	保存処理 整理番号
			最大長	最大幅	厚さ			
214	横 割 板	5号池底面	38.1	11.3	0.9	スギ		21
215	横 割 板	5号池底面	31.2	13.9	1.3	スギ		9

第80図 木製品実測図(5)



番号	品名	出土位置	法 量 (cm)			樹 種	備 考	保存処理 施地番号
			最大径	最大幅	厚さ			
216	桶 側 板	2号墓穴底面	13.2	5.6	0.8	ヒノキ属		2
217	桶 蓋 板	5号陪塚面	19.0	—	1.3	スギ		24
218	桶 蓋 板	2号墓穴底面	14.0	—	1.7	スギ		6
219	桶 底 板	2号墓穴底面	13.6	—	0.5	スギ		4

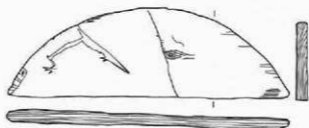
第81図 木製品実測図(6)



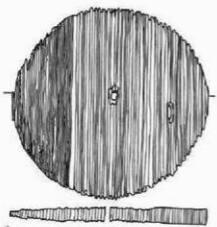
220



221



222



223

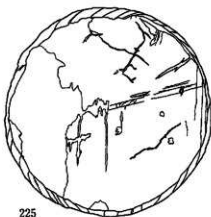
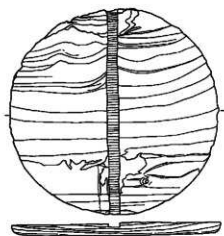


224

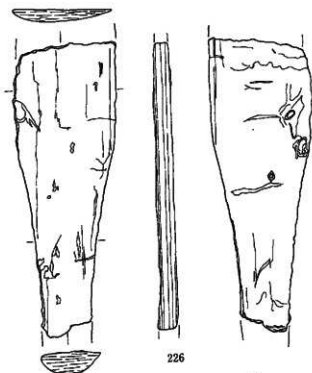


番号	品 種	出土位置	法 量 (cm)			樹 種	備 考	保存処理 整理番号
			最大長	最大幅	厚さ			
220	楯 底 板	2号塚穴底面	12.6	—	0.7	アスナロ		1
221	楯 底 板	2号塚穴底面	9.8	—	0.8	スギ		9
222	楯 底 板	2号塚穴底面	22.4	—	0.9	スギ		13
223	楯 底 板	14号建物礎石 棟(13-24)	15.2	—	1.0	スギ		—
224	楯	14号建物礎石 棟(13-24)	30.6	36.4	1.4	スギ		—

第82図 木製品実測図(7)



225

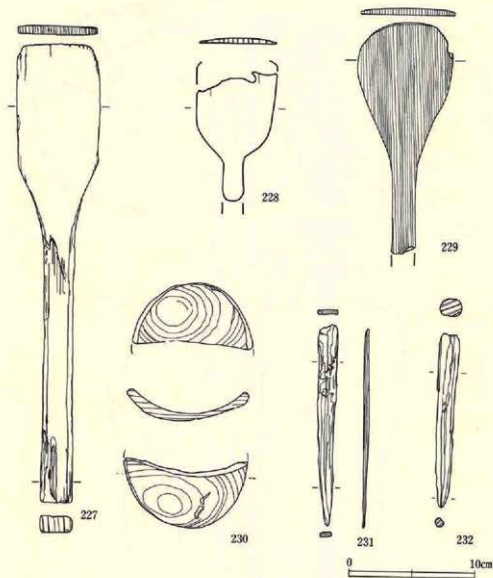


226

0 10cm

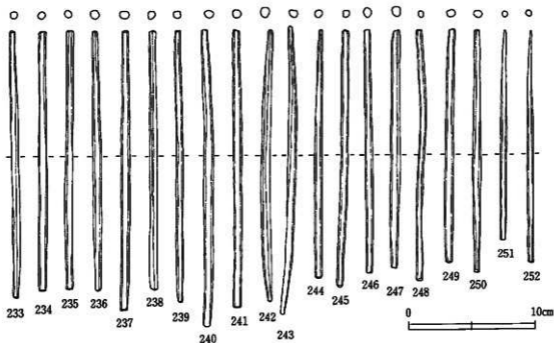
番号	品名	出土位置	法量 (cm)			樹種	備考	保存処理 整理番号
			最大長	最大幅	厚さ			
225	圓蓋	7号地壇土中	16.8	—	0.9	スギ		5
226	へら	2号塚穴裏側	22.5	8.2	1.7	カエデ属	先端部と柄部欠損	7

第83図 木製品実測図(8)



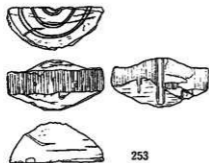
番号	品 種	出土位置	法 量 (cm)			樹 種	備 考	保存処理 整理番号
			最大長	最大幅	厚さ			
227	へ ら	7号池埋土	36.5	6.8	1.4	コナラ属		—
228	しゃもじ	2号整穴遺面	(9.8)	6.1	0.4	ブナ属	先端部と柄部欠損	16
229	しゃもじ	7号池埋土	(16.3)	7.6	0.6	カエデ属	柄部欠損	10
230	しゃくし	7号池埋土	—	9.3	0.7	モクレン属	柄部欠損	11
231	串 ?	2号整穴遺面	(15.5)	1.5	0.4	アスナロ	頭部欠損	26
232	不 明	2号整穴遺面	(13.5)	1.6	1.4	マツ属		12

第84図 木製品実測図(9)



番号	品 種	出土位置	法 量 (cm)			樹 種	備 考	保存位置 整理番号
			最大長	最大幅	厚さ			
233	は し	2号塚穴底面	21.2	—	0.6	ヒノキ属	—	
234	は し	2号塚穴底面	20.5	—	0.6	ヒノキ属	—	
235	は し	2号塚穴底面	20.6	—	0.6	ヒノキ属	—	
236	は し	2号塚穴底面	20.6	—	0.7	ヒノキ属	—	
237	は し	2号塚穴底面	22.3	—	0.7	ヒノキ属	—	
238	は し	2号塚穴底面	20.6	—	0.6	ヒノキ属	—	
239	は し	2号塚穴底面	21.6	—	0.6	ヒノキ属	—	
240	は し	2号塚穴底面	23.6	—	0.8	ヒノキ属	—	
241	は し	2号塚穴底面	22.2	—	0.7	ヒノキ属	—	
242	は し	2号塚穴底面	21.7	—	0.7	ヒノキ属	—	
243	は し	2号塚穴底面	22.9	—	0.7	ヒノキ属	—	
244	は し	2号塚穴底面	19.8	—	0.6	ヒノキ属	—	
245	は し	2号塚穴底面	20.5	—	0.6	ヒノキ属	—	
246	は し	2号塚穴底面	19.4	—	0.6	ヒノキ属	—	
247	は し	2号塚穴底面	19.0	—	0.7	ヒノキ属	—	
248	は し	2号塚穴底面	20.0	—	0.5	ヒノキ属	—	
248	は し	2号塚穴底面	19.7	—	0.7	ヒノキ属	—	
250	は し	2号塚穴底面	19.4	—	0.7	ヒノキ属	—	
251	は し	2号塚穴底面	16.7	—	0.5	ヒノキ属	—	
252	は し	2号塚穴底面	18.5	—	0.5	ヒノキ属	—	

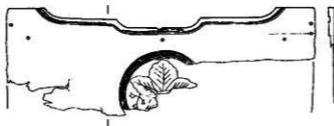
第85図 木製品実測図(10)



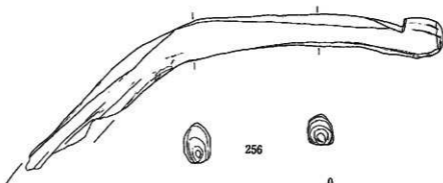
253



254



255

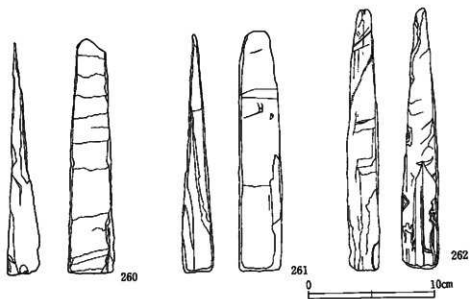
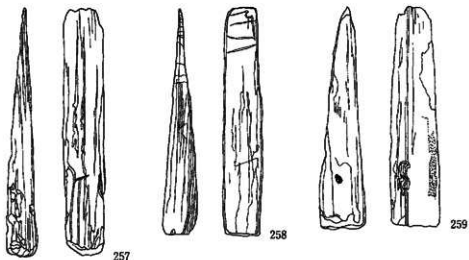


256



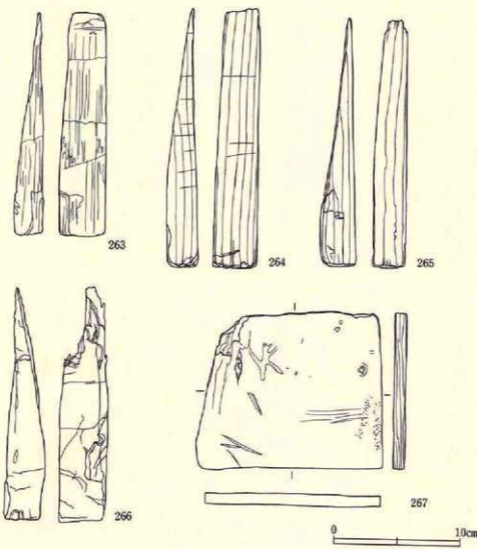
番号	品類	出土位置	法量 (cm)			材質	備考	保存処理 整理番号
			最大長	最大幅	厚さ			
253	独	3号池底面	4.2	7.7	—	カエデ属	半分欠損	3
254	栴	7号池底面	13.3	3.4	0.7	スギ	表に「湯田村合本野小原□□□」裏に「大寛永本人出入」	8
255	不	2号池底面	(6.0)	24.3	0.5	マツ属	一部炭化している	—
256	不	5号池底面	(35.9)	3.1	2.1	ハイノキ属	欠損	23

第86図 木製品実測図(11)



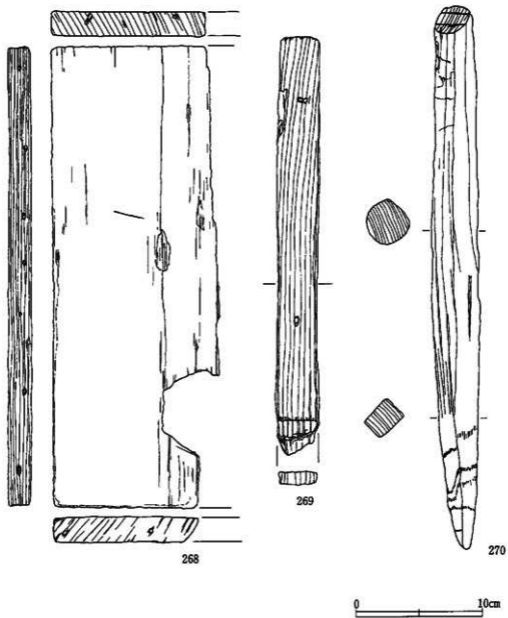
番号	品 種	出土位置	法 量 (cm)			樹 種	備 考	保存状態 発掘番号
			最大長	最大幅	厚さ			
257	くさび	5号池底面	19.7	3.3	—	クリ		—
258	くさび	5号池底面	18.2	3.1	—	クリ		—
259	くさび	5号池底面	17.7	3.9	—	クリ		—
260	くさび	5号池底面	18.7	3.6	—	クリ		—
261	くさび	5号池底面	19.1	3.4	—	クリ		—
262	くさび	5号池底面	20.9	2.9	—	クリ		—

第87図 木製品実測図(12)



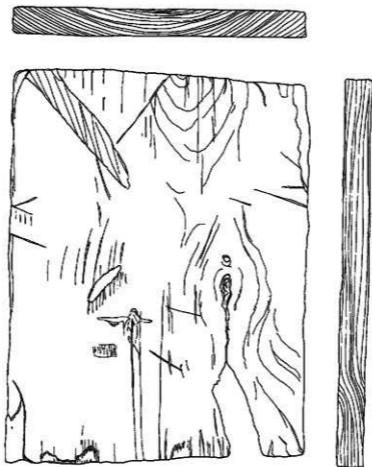
番号	品 種	出土位置	法 量 (cm)			樹 種	備 考	保存処理 整理番号
			最大長	最大幅	厚さ			
263	くさび	5号池底面	17.9	3.7		クリ		—
264	くさび	5号池底面	20.8	3.4		クリ		—
265	くさび	5号池底面	19.8	2.6		クリ		—
266	くさび	5号池底面	18.9	3.8		クリ		—
267	板 材	5号池底面	12.3	14.8	0.8	モクレン属	釘穴あり	14

第88図 木製品実測図(13)



番号	品 種	出土位置	技 量 (cm)			樹 種	備 考	保存処理 整理番号	
			最大長	最大幅	厚さ				
268	板	材	5号地底面	36.4	(13.2)	2.0	コナラ属	釘穴あり	18
269	板	材	5号地底面	(33.2)	3.2	1.0	スギ	釘穴あり	—
270	杖		5号地底面	43.8	3.7	3.0	タリ		17

第09図 木製品実測図(14)

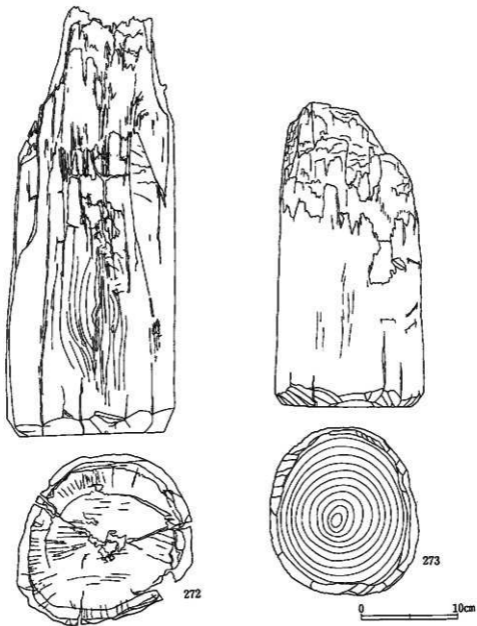


271



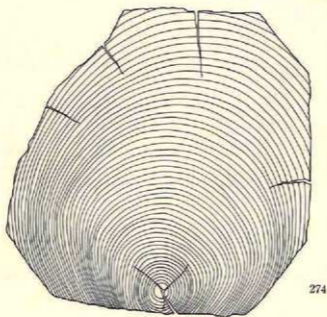
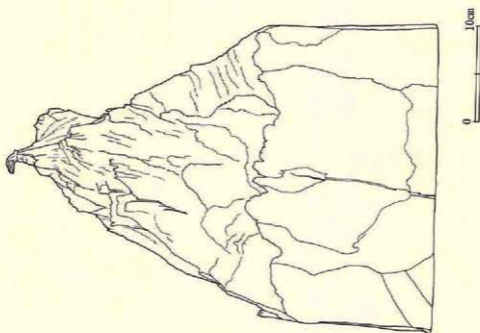
番号	品 種	出土位置	法 定 (cm)			樹 種	備 考	保存処理 番号
			最大長	最大幅	厚さ			
271	板 材	5号池底面	31.2	23.2	2.1	クリ		19

第90図 木製品実測図(15)



番号	品名	出土位置	寸法 (cm)			樹種	備考	保存処理 整理番号
			最大長	最大幅	厚さ			
272	柱材	F1202 (C-22)	(43.9)	17.1	—	クリ		—
273	柱材	F1143 (G-18)	(31.7)	16.1	—	クリ		—

第31図 木製品実測図(16)



番号	品 種	出土位置	法 量 (cm)			樹 種	備 考	保存処理 整理番号
			最大長	最大幅	厚さ			
274	柱 材	Plr261 (D-21)	(44.0)	30.5	—	クリ		—

第92図 木製品実測図(17)

(5) 銭貨 (第93～97図、写真図版61、62、63、64)

銭貨は近世のものと同治以降のものに分けられる。近世のものが33点、同治以降のものが9点の出土である。

a. 近世の銭貨

301～308は1636～1659年鑄造の古寛永である。309～331は1668年以降鑄造の新寛永である。309、310は1668～1672年鑄造の背に「文」の字を持ついわゆる文銭である。316、317は1738～1745年の秋田藩による鑄造の秋田銭である。329～331は鉄銭である。332は1768年初鑄の寛永通寶の四文銭である。裏面の波の数は21である。333は1863年初鑄の文久永寶である。

b. 同治以降の貨幣

334は同治10年の半銭銅貨、335、336は同治10年の一銭銅貨である。この三枚の貨幣は7号池の底面に重ねて置かれていたものである。337は大正9年の一銭銅貨である。338は昭和15年の十銭アルミ貨である。表面の腐食が著しい。339は昭和17年の一銭アルミ貨である。340は昭和19年の十銭スズ貨である。341は昭和28年の10円銅貨、342は昭和31年の50円ニッケル貨である。

(6) 金属製品 (第98～100図、写真図版65)

銭貨を除いた金属製品は鉄製品、銅製品が合わせて15点出土している。

343は槍である。小原徳精氏によると1号建物の長押にかけてあったもので、昭和39年に1号建物が焼失した時そのまま取り出さなかったものであるという。この槍がどのような経緯で小原家の所有になっていたのか不明である。またその製造年代も不明である。

344は鉄である。半分は欠損している。7号池からの出土で同治以降のものと思われる。

345、346は鉄製品であるが、その器種は不明である。出土した2号竪穴の年代から19世紀代のものの可能性が高い。

347はしゃくし、348、349はさじで共に銅製である。350も銅製品で、上端が環状になっており先端は尖っている。これらの製品は2号竪穴遺構からの出土で19世紀代のものの可能性が高い。

351はPit201(12号建物)から出土の銅製品である。片方の端の内側はえぐれている。どのような用途の製品であるか不明である。またその年代も推定する手掛かりが無い。

352はかんざしである。銅製で上端に耳かきがついている。玉が装着される部分に隆帯が作られている。全体が曲がっているのは使用者が使いやすいように曲げたのであろう。17号溝からの出土であり、18～19世紀代のものと考えられる。

353、354は煙管で、銅製である。小泉弘の煙管の変遷に照らし合わせると、353はそのⅢ～Ⅳ

にあてはまり17世紀後半～18世紀前半、354はVIにあてはまり19世紀代以降の年代が考えられる。これらの年代観はそれぞれの出土した遺構の推定年代と矛盾しない。

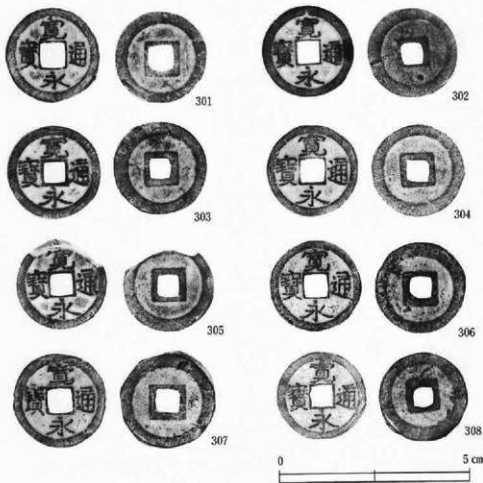
355～357は11号溝から出土した不明銅製品である。356は飾り紙の座金の可能性がある。355は銅物である。357は銅板に穴をあけたものである。11号溝の推定年代から、これらの遺物は18世紀代のものである可能性が高い。

(7) ガラス製品 (第101図、写真図版66)

ガラス製品は5点出土しているが、いずれも明治以降のものである。

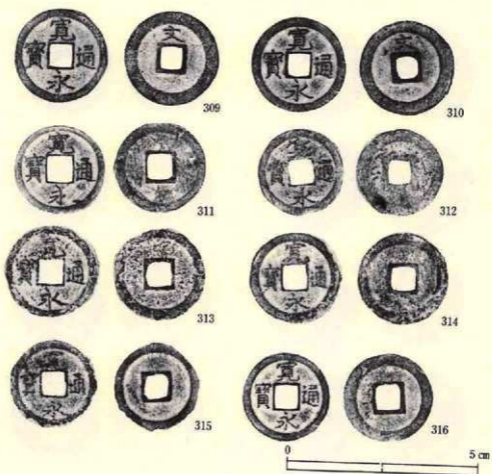
358、359は目薬のびんで358は「大學目薬」「參天堂薬房」、359は「大島目薬」「精銜水」の陽刻文字がある。360は粒薬のびんで「賣丹」の陽刻文字がある。

361、362はビールびんである。上げ底で色調は黒褐色を呈する。口縁部は欠けているがコルク栓のものと思われる。明治時代のものであろう。



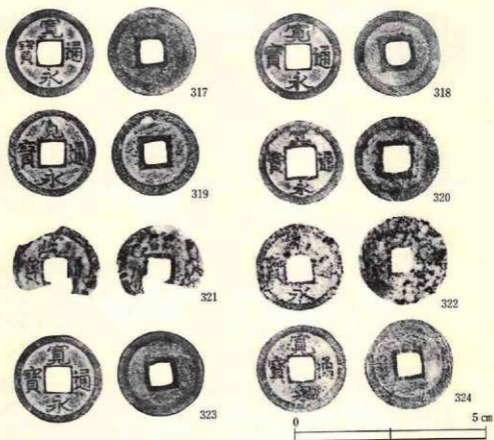
番号	種類	出土位置	直径(mm)	重さ(g)	初鋳年代	備考
301	寛永通寶(古)	11号講理土	24	2.09	1636	
302	寛永通寶(古)	7号池底面	24	2.90	〃	
303	寛永通寶(古)	Pr266底面	25	2.92	〃	
304	寛永通寶(古)	11号講理土	24	2.58	〃	
305	寛永通寶(古)	1号池2層	24	2.53	〃	
306	寛永通寶(古)	Pr256埋土(4号建物)	24	2.88	〃	
307	寛永通寶(古)	Pr266底面	25	2.88	〃	
308	寛永通寶(古)	2号塹穴底面	23	3.66	〃	

第93図 錢貨実測図(1)



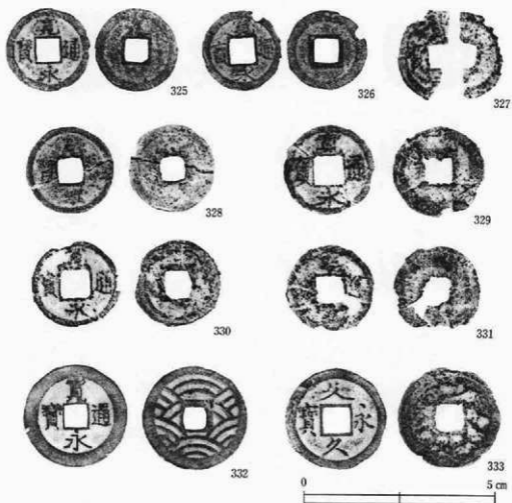
番号	種類	出土位置	直径(mm)	重さ(g)	初鑄年代	備考
309	寛永通寶 (文銭)	2号壑穴底面	25	3.31	寛文8年 1668	背文
310	寛永通寶 (文銭)	1号池2層	25	3.01	寛文8年 1668	背文
311	寛永通寶	2号壑穴底面	24	1.49	享保11年 1726	
312	寛永通寶	2号壑穴底面	22	2.33	享保11年 1726	
313	寛永通寶	1号建物上面	25	2.28	享保11年 1726	
314	寛永通寶	11号溝埋土	24	2.15	元文元年 1737	
315	寛永通寶	F-19表土	23	2.00	元文元年 1737	
316	寛永通寶	2号壑穴底面	23	2.34	元文2年 1738	秋田銭

第94図 錢貨実測図(2)



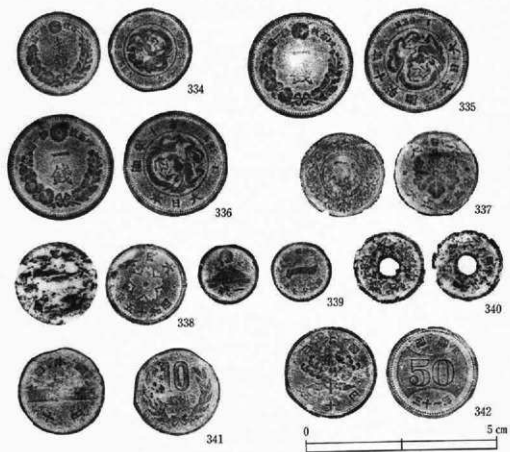
番号	種類	出土位置	直径(mm)	重量(g)	初鋳年代	備考
317	寛永通寶	2号堀穴底面	23	2.42	元文2年 1738	秋田銭
318	寛永通寶	P19279埋土	23	2.24		
319	寛永通寶	7号池底面	23	1.03		
320	寛永通寶	1号池底面	22	1.83		割食
321	寛永通寶	P19279埋土	23	2.18		腐食大
322	寛永通寶	1号建物上面	23	2.40		
323	寛永通寶	1号建物上面	23	2.18		
324	寛永通寶	1号建物上面	23	2.77		

第95図 銭貨実測図(3)



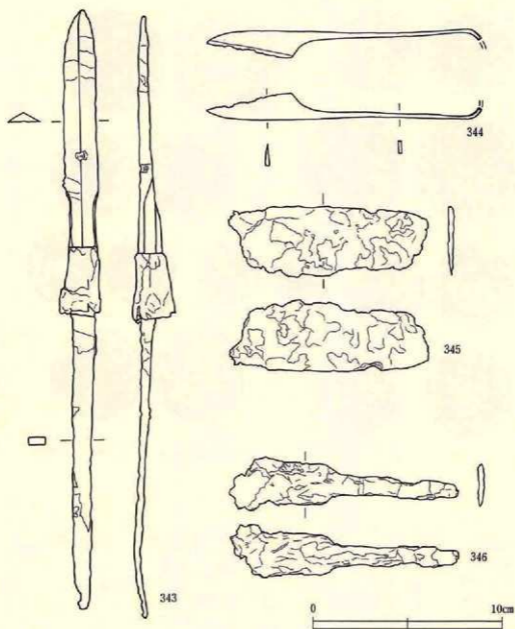
番号	種類	出土位置	直径(mm)	重さ(g)	初鋳年代	備考
325	寛永通寶	2号壑穴底面	22	1.58		
326	寛永通寶	1号池底面	21	1.24		
327	寛永通寶	G-19表土	?	1.28		欠損
328	寛永通寶	1号池2層	23	1.87		
329	寛永通寶	2号壑穴底面	24	1.82		鉄銭
330	寛永通寶	4号溝底面	24	1.43		鉄銭腐食大
331	寛永通寶	4号溝底面	23	1.06		鉄銭腐食大
332	寛永通寶	1号建物敷地層	27	4.25	明和5年 1768	21波四文銭
333	文久永寛	1号建物上面	26	2.80	文久3年 1863	

第96図 錢貨実測図(4)



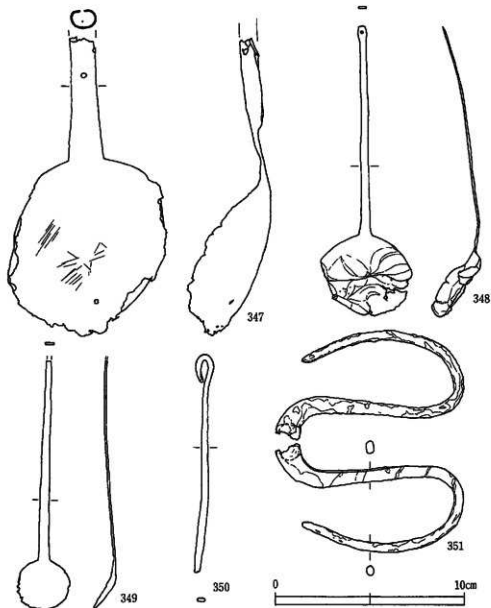
番号	種類	出土位置	直径(mm)	重さ(g)	初鋳年代	備考
334	半銭	7号池底面	22	3.41	明治10年 1877	
335	一銭銅貨	7号池底面	27	6.74	明治10年 1877	
336	一銭銅貨	7号池底面	28	6.88	明治10年 1877	
337	一銭銅貨	1号建物上面	22	2.94	大正9年 1919	
338	十銭アルミ貨	1号建物上面	21	1.19	昭和15年 1940	腐食大
339	一銭アルミ貨	1号池2層	16	0.64	昭和17年 1942	
340	十銭スズ貨	1号建物上面	19	2.29	昭和19年 1944	腐食大
341	十円銅貨	1号池2層	23	4.19	昭和28年 1963	
342	五十円ニッケル貨	1号池2層	24	4.94	昭和31年 1966	

第97図 銭貨実測図(5)



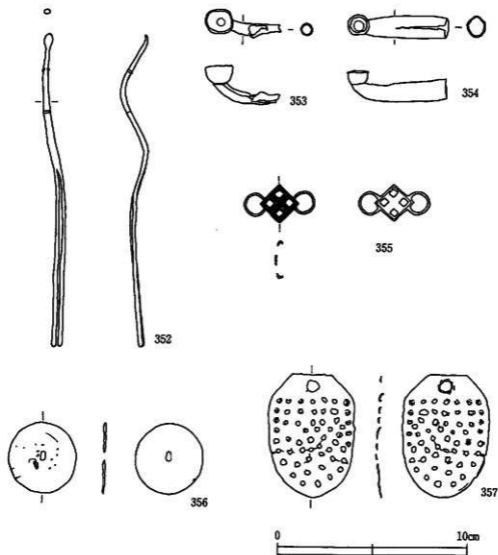
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			金属の種類	備考
			最大長	最大幅	厚さ		
343	槍先	1号建物上面	31.9	1.9	0.6	鉄	火熱を受けている。
344	はさみ	7号埋土	14.3	1.3	0.2	鉄	半分欠損
345	不明	2号竪穴底面	10.5	3.2	0.2	鉄	
346	不明	2号竪穴底面	12.0	2.2	0.2	鉄	

第98図 金属製品実測図(1)



番号	器 種	出土位置	測 量 (cm)			金属の種類	備 考
			最大長	最大幅	厚さ		
347	しゃくし	2号墓穴底面	15.6	8.1	0.1	銅	
348	きじ	2号墓穴底面	15.2	4.5	0.1	銅	
349	きじ	2号墓穴底面	13.2	2.7	0.1	銅	柄の先端部欠損
350	不 明	2号墓穴底面	11.5	0.4	0.3	銅	
351	不 明	F(201)墓土 (12号遺物)	10.3	1.3	0.5	銅	

第99図 金属製品実測図(2)



番号	器名	出土位置	法量 (cm)			金属の種類	備考
			最大長	最大幅	厚さ		
352	かんざし	17号溝墓面	16.7	0.5	0.3	銅	
353	煙管	11号溝埋土	3.9	1.2	—	銅	
354	煙管	7号池埋土	5.3	1.2	—	銅	
355	不明	11号溝埋土	3.6	1.9	0.1	銅	
356	不明	11号溝埋土	3.6	—	0.1	銅	
357	不明	11号溝埋土	5.4	4.3	0.1	銅	

第100図 金属製品実測図(3)



358



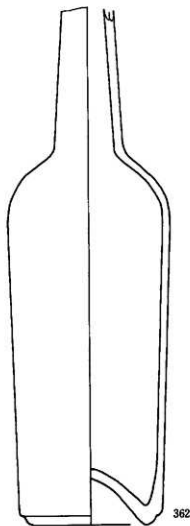
359



360



361



362



番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			年 代	備 考
			最大長	最大幅	厚さ		
358	目薬びん	1号雑物上面	5.8	1.6	2.7	明治以降	
359	目薬びん	G-21表土	5.3	1.6	2.1	明治以降	
360	薬びん	H-19表土	(5.2)	—	—	明治以降	
361	ビールびん	H-21表土	(3.5)	—	7.2	明治以降	
362	ビールびん	1号雑物上面	(27.6)	—	6.9	明治以降	

第101図 ガラス製品実測図

(8) 石製品 (第102～107図、写真図版66、67、68)

石製品は砥石、石板、硯、石臼、線刻のある石、墨書のある石、こうがい出土した。363～375は砥石である。いずれも石質は緑色凝灰岩である。365、372は一面のみの使用である。369は数状の条線がみられる。371は片面に凹が三つみられ特殊な用途が考えられる。時代はそれぞれの出土遺構の推定年代から求められ、363～367は2号竪穴遺構から出土したことにより19世紀代、368～371は1号建物の整地層から出土したことにより1893年以前、372は5号建物のPit 264から出土したことにより17世紀代、373、374はそれぞれ1号池、7号池から出土したことにより20世紀の年代の可能性が考えられる。

376は石板で明治以降のものであろうが、2号竪穴から出土したものであるため、明治の初年のもので考えられる。

377、378は硯である。377は裏面に「白木野 小原徳松」と線刻されている。小原徳精氏によると小原徳松は徳精氏の祖父で、慶応年間に生まれ昭和4年に死んだ人であるという。この硯は2号建物のPit 240から出土しており、2号建物の廃絶時に柱穴に入りこんだ可能性が考えられる。そのことから裏の年代は明治の初年と考えられる。線刻された文字は稚拙であり、小原徳松が少年時代に刻んだことが想像される。378の時代は不明である。

379は線刻のある石である。片面は中央部を平らに削ってそこに山や川のような風景が線刻されており、さらにそれを囲むように線刻がなされている。もう一方の面には全体を二つに区画するように太く線刻され、その上に無秩序な線刻がなされている。側面には線刻が巡り、4箇所に挟りがみられる。この製品は1号建物の整地層からの出土であり確実に1893年よりは以前のものであるが、近世のものかどうかは不明である。

380は墨書のある石である。扁平な石に「ナムアミ……」と書いてあり、何らかの宗教儀礼に用いたものであろう。

381はこうがいである。中程で欠損しており、2号竪穴からの出土であることから19世紀代のものと考えられる。

382は石臼である。下臼の目のパターンは8分割である。1号建物の上面からの出土で1964年の火災の際の火熱を受けており表面は非常に脆くなっている。このようにこの石臼の下限年代は1964年であることから、上限年代もそれほど上がるとは考えられない。

(9) 土製品 (第108図、写真図版69)

383は鳥形の土製品である。雀をかたどったものと思われる。型おこしであり裏面には指紋が

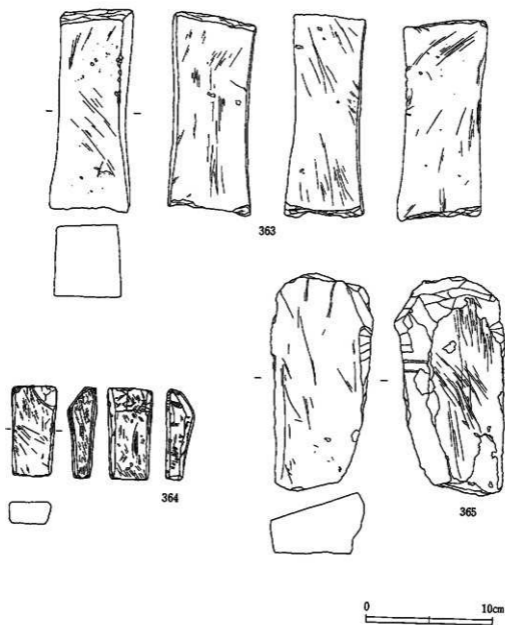
みられる。型に押しつける際についたものであろう。1号池からの出土であるが、近世のものと思われる。384は細片であるが383に類似したものと思われる。

385は魚などを焼くときに用いる「ハサミクシ⁽²⁾」の押さえの土製の輪である。

(10) 縄文時代の石器 (第108図、写真図版69)

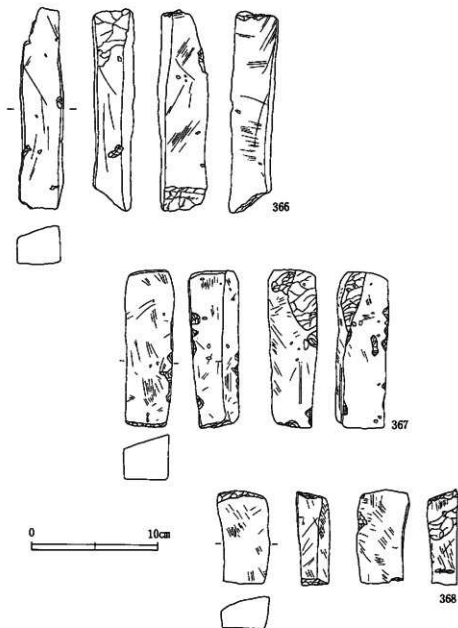
386～390は縄文時代の石器である。

386、387は石鏃である。調査区東側のG-66、69の出土である。388は石匙である。1号建築物の整地層中から出土した。389も石匙と思われる。390は石篋である。これらの石器の出土から付近に縄文時代の遺跡の存在が推定される。



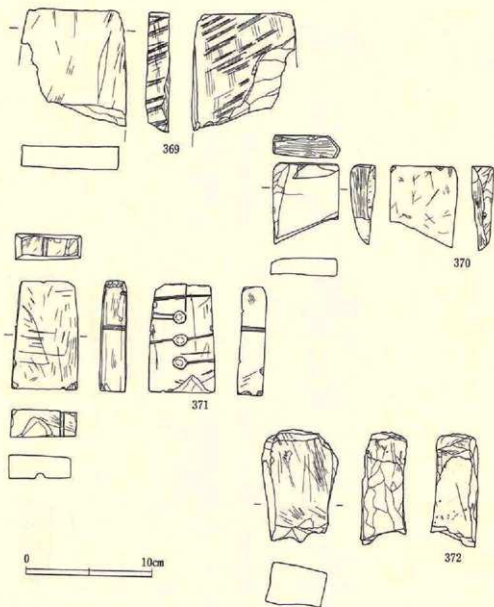
番号	器種	出土位置	法量 (cm)			石質	備考
			最大長	最大幅	厚さ		
363	磁石	2号壺穴底面	15.8	5.8	5.3	綠色凝灰岩	
364	磁石	2号壺穴底面	(7.3)	3.4	2.3	綠色凝灰岩	欠損
365	磁石	2号壺穴底面	17.1	7.9	4.7	綠色凝灰岩	

第102圖 石製品実測図(1)



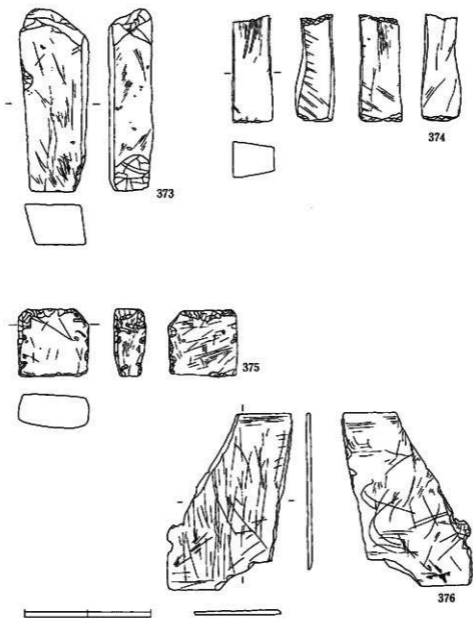
番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			石 質	備 考
			最大長	最大幅	厚さ		
366	砥 石	2号墓穴底面	16.0	3.5	2.8	綠色凝灰岩	
367	砥 石	2号墓穴底面	12.5	3.5	3.5	綠色凝灰岩	
368	砥 石	1号墓穴底面	(7.3)	3.7	2.8	綠色凝灰岩	欠損

第103図 石製品実測図(2)



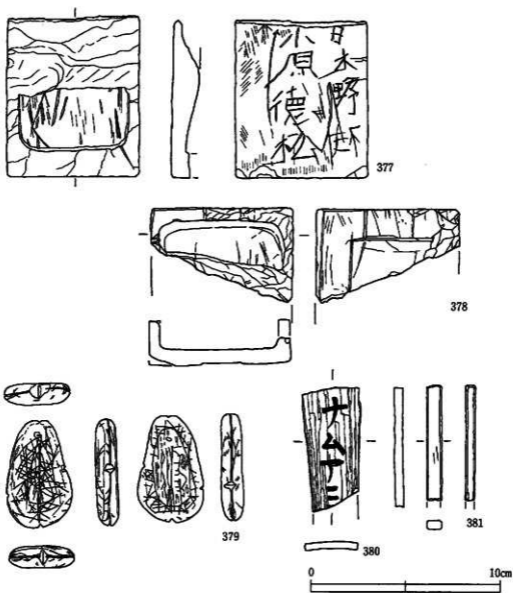
番号	種類	出土位置	法 量 (cm)			石 質	備 考
			最大長	最大幅	厚さ		
369	砥 石	1号建物敷地層	(9.2)	7.7	1.8	緑色凝灰岩	欠損
370	砥 石	1号建物敷地層	(6.2)	5.3	1.2	緑色凝灰岩	欠損
371	砥 石	1号建物敷地層	8.6	5.3	2.1	緑色凝灰岩	
372	砥 石	Plz264出土 (3号建物)	8.8	6.0	3.2	緑色凝灰岩	欠損

第104図 石製品実測図(3)



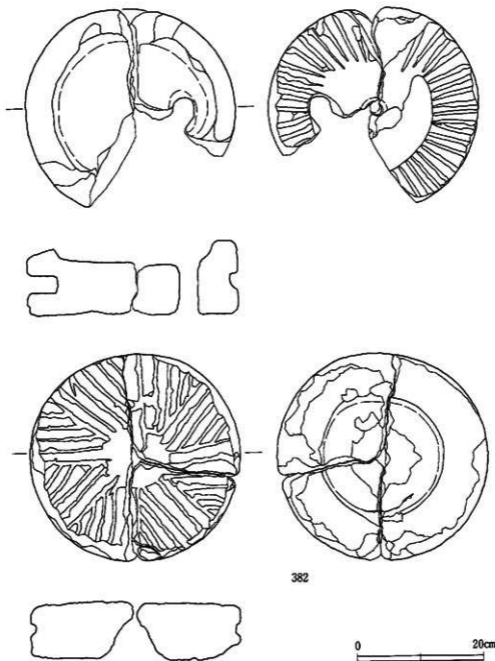
番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			石 質	備 考
			最大長	最大幅	厚さ		
373	磁 石	1号池2層	14.3	4.6	3.2	緑色凝灰岩	
374	磁 石	7号池埋土	(8.3)	3.3	2.7	緑色凝灰岩	欠損
375	磁 石	G-18埋土	5.3	5.6	2.4	緑色凝灰岩	欠損
376	石 板	2号堀穴底面	14.1	(8.5)	0.4	粘板岩	明治以降

第105図 石製品実測図(4)



番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			石 質	備 考
			最大長	最大幅	厚さ		
377	硯	F10340層土 2号建物	(8.3)	6.9	1.3	凝灰岩	欠損、裏面に線刻
378	硯	H-16表土	(5.0)	7.3	0.7	流文岩	欠損
379	線刻石	1号建物敷地層 (F-23)	5.7	3.4	1.1		
380	墨書した石	G-17表土	(6.3)	2.7	0.5		欠損 墨書あり
381	こうがい	2号墓穴底面	(6.0)	0.8	0.5		欠損

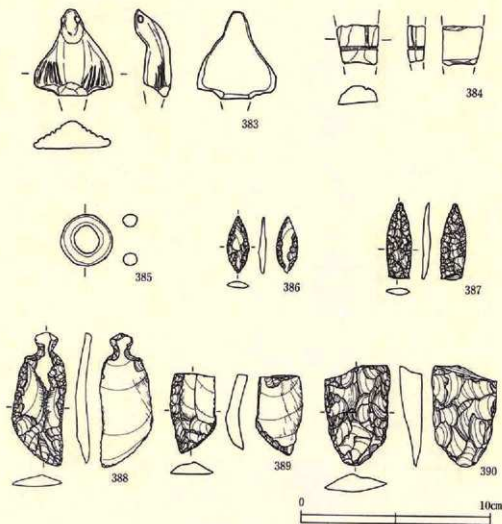
第106図 石製品実測図(5)



382

番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			石 質	備 考
			最大長	最大幅	厚さ		
382	石 う ず	1号建物上面	32.6(下)	—	9.9(下)		火跡を受けている

第107図 石製品実測図(6)



番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			石 質	備 考
			最大長	最大幅	厚さ		
383	土製鳥形	1号池2層	(4.5)	3.1	1.3	—	欠損
384	土製鳥形?	1号池2層	(1.8)	2.0	0.8	—	欠損
385	土製の輪	G-66表土	(2.6)	—	0.6	—	
386	石 鏃	G-66 1層	2.9	1.2	0.5	珪質凝灰質泥岩	
387	石 鏃	G-69 1層	4.0	1.3	0.4	珪質凝灰質泥岩	
388	石 鏃	1号建物敷地層	(7.0)	2.6	0.6	珪質凝灰質泥岩	
389	石 鏃?	1号建物敷地層	(4.1)	2.3	0.7	珪質凝灰質泥岩	欠損
390	石 ベラ	C-73表土	(5.1)	3.1	0.9	珪質凝灰質泥岩	欠損

第108図 土製品、縄文時代の石器実測図

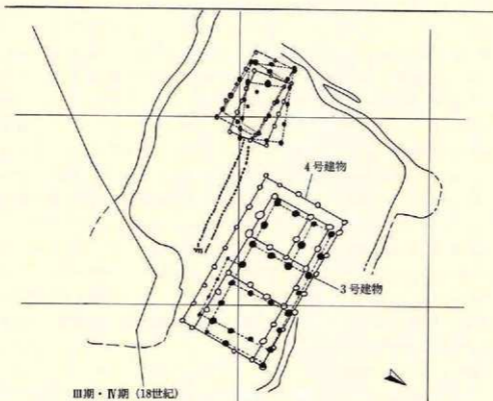
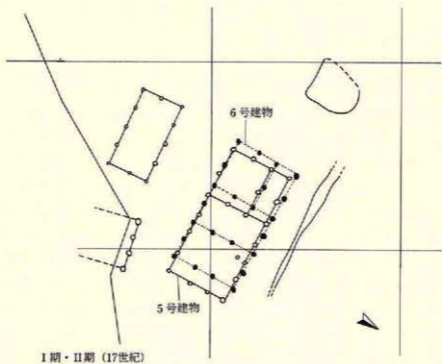
3. ま と め

(1) 屋敷跡の変遷について

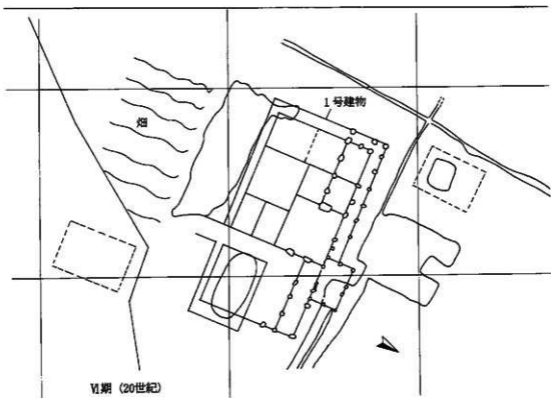
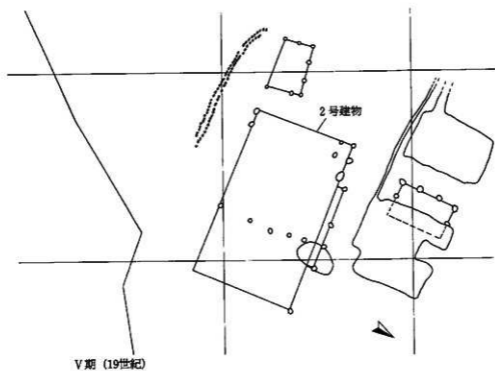
調査区西側で検出された屋敷跡は17世紀前半から平成3年(1991)まで350年以上連続して営まれたものである。現在の当主は小原通美氏であるが、この小原家の先祖が生活を代々営んだのがこの屋敷跡である。この350年以上の間に母屋は7回建て替えられたことが今回の発掘調査で明らかになった。これらの母屋はほぼ同じ場所に建て替えられたため、重複している柱穴も多くその変遷を知ることができた。そしてこの母屋に付属する建物や溝、池、竪穴遺構なども多く検出された。しかし、これらの遺構が母屋と重複している場合は、その母屋との関係がわかるものもあるが、その遺構がどの母屋に伴うものであるのか判別するのは非常に困難である。特に掘立柱建物はその性質上、出土遺物からその時期を判定できる例は少なく、また遺物の出土量が多い溝や池も推定できるのは廃絶年代のみで、遺構の年代観からも母屋と同時期の遺構を判別するのは困難である。また建築年代が異なる母屋と付属屋が同じ屋敷内にあるのは今日でも普通に見られることであり、発掘調査の成果のみで付属屋や他の施設を含めた屋敷の変遷を知るには不可能である。よって、ここでは屋敷の変遷について推定される点を述べるに留めたい。

その前に母屋の変遷について触れておきたい。各母屋の推定年代は事実記載中に述べてあるがもう一度まとめると、5号建物・17世紀前半、6号建物・17世紀後半、4号建物・18世紀前半、3号建物・18世紀後半、2号建物・18世紀末～1893年、1号建物・1893～1964年、今回報告の対象としなかった1号建物の次に建てられた母屋は1964～1991年ということになる。5号建物から3号建物までは掘立柱建物で、間取りは5号建物が「広間型三間取り」が完全に成立する前の下手の部屋と中央の部屋が完全に別れていない形をしている。6～3号建物は典型的な「広間型三間取り」の間取りを呈している。1、2号建物は礎石建であり、2号建物の間取りははっきりしないが1号建物と共に、西和賀地方に一般的にみられるジョイと呼ばれる部屋とガイドコロと呼ばれる部屋が食い違って配置される間取りと考えられる。このように間取りの面で掘立柱建物と礎石建物には大きな違いがみられ、この両者には系統的な違いがあることが推定される。この点については別稿で触れることにする。ここでは屋敷跡の変遷を考える尺度として、5号建物の時期をⅠ期、6号建物はⅡ期、4号建物はⅢ期、3号建物はⅣ期、2号建物はⅤ期、1号建物はⅥ期とする。

Ⅵ期の1号建物に伴う遺構は1号、7号池、1号、2号、15号、16号溝、「にわ」跡、2号池とそれを覆う建物である。また調査区域外のA-22付近に付属屋があったことが小原徳精氏の



第109図 屋敷跡の変遷図(1)



第110図 歴敷跡の変遷図(2)

話からわかっている。19号建物はVI期以降のものである。

V期の2号建物に伴う遺構は、縮小前の1号池、3号池、2号竪穴遺構、付属屋としては13号、15号建物、他に3号、4号杭列の可能性が考えられる。3号池、2号竪穴は明治の初年頃に廃絶されたものなので、この時期の遺構であることは確実である。12号、15号建物をこの時期と考えたのは、次に述べるIV期に4号池、4号、17号溝が伴うものと考えられ、屋敷の範囲がこれらの池、溝の内側であった可能性が高く、これより外の12号、13号建物はIV期以降と推定されるためである。また他の付属屋の柱穴中には根がための石が全くみられないのに、12号と15号建物には根がための石がみられ、この点も他の付属屋より新しいと考えられる要素である。15号建物と1号池が重複しているのはこのV期の途中で1号池が構築されたためと考えられる。3号、4号杭列は柵、塀の類と考えられるが、これをこの時期と考えたのは、この杭列だと2号建物の入口付近が開放され、西側では12号建物がちょうど納まる所まで伸びているためである。この杭列は「にわ」跡より古く、8～11号建物より新しいので重複関係からもV期と考えるのが妥当であろう。

IV期の3号建物に伴う遺構は、4号池、4号溝、17号溝、1号、2号杭列のいずれか、11号建物、9号か10号かいずれかの建物の可能性が考えられる。そしてIII期の可能性も高いが5号池、9号溝の可能性も考えられる。4号池、4、17号溝は一体の施設と考えられ、4、17号溝の出土遺物から考えられる廃絶年代からこの期に納めた。1、2号杭列は3号建物の入口付近で終わっておりこの期の可能性が高いと考えられる。8～11号建物は1、2号杭列とぎりぎり重ならないように建てられており、そのことから1、2号杭列と同時期のものと考え、この建物の中で最も新しい11号建物と次の9号か10号建物のいずれかがIV期に納まると考えた。5号池、9号溝は出土遺物から考えて4、17号溝より廃絶年代が若干古い感じもあるが一応この期の納まるかもしれない。だがその場合、1号、2号杭列との間が狭い感じは否めない。1号2号杭列は冬期間のみの施設の可能性も考えられよう。

III期の4号建物に伴う遺構は、4号池、4号溝、17号溝、5号池、9号溝、11号溝、8号建物、9号、10号建物のいずれか、1号、2号杭列のいずれかの可能性が考えられる。4号池、4号、17号溝を含んだのはこれら施設がIV期のみの短い期間の使用とは考え難いからである。

I期、II期はほぼ17世紀代の時期を想定しているが、17世紀代とは推定できてもその前半、後半に明確に分けられる遺構はほとんどないので、この両期についてはまとめて述べる。I、II期の5号建物、6号建物に伴う遺構は、13号建物、3号竪穴遺構、6号溝の可能性が考えられる。これらの遺構からは17世紀代の遺物が出土しており、それ以降の時期には下らないと考えられる。18号建物は5号池との前後関係ははっきりしないが、5号池より古い場合はこの時期に納まる可能性がある。

以上、各期ごとに伴う遺構を考えてみたが、推測の上に推測を重ねたもので、誤りも多いと思われる、一つの考え方として提示したと考えていただきたい。また、いずれの時期にも当てはめることのできない遺構が多くあるが、可能性として14号建物、16号建物はⅠ～Ⅳ期のいずれかに当てはまると考えられる。7号建物、17号建物は他の遺構から距離も離れ、主軸方位も大きく異なり、この屋敷跡には直接伴わない建物の可能性も考えられる。しかし時期は屋敷跡のいずれかの期と同時期のものであろう。多くの土坑についてはその時期を考えるのは非常に困難である。

(2) 出土陶磁器の時期別の構成について

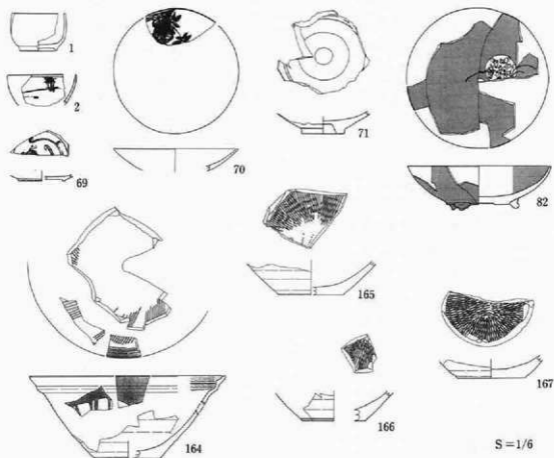
今回の調査で検出された屋敷跡は小原家の先祖が代々営んできたものであり、出土した遺物も基本的には小原家の先祖が使用していたものであろう。つまり今回の出土遺物は数代にわたっているが一軒の家で使用していた器物とすることができる。小原家は藩政時代は組頭を務めた家であり、中間よりは上であるがまず一般的な自作農とすることができ、藩政時代の平均的な地方農民の物質文化を知る上で、非常に有効な資料になり得るものであろう。ここでは最も出土量が多かった陶磁器について時期別に分類し、その器種構成や産地の種類等について考えてみたい。分類するにあたっての時期区分は、あまり細かく分けても、当てはめることのできないものが多くなるので、概ね一世紀ごとに区分することにした。現在、近世遺跡ではその時代の尺度として肥前陶磁の編年¹⁷⁾が最も多用されており、今回もこの時期区分を利用して、最初の時期は17世紀の初めから1690年代、次は肥前陶磁の大橋編年Ⅳ期¹⁸⁾の1690～1780年代、次は大橋編年のⅤ期を含む1780～19世紀代とした。本遺跡では20世紀以降のものも多く出土しているが、ここでは割愛した。

a. 17世紀初～1690年代の陶磁器

後述する18、19世紀代に比べるとその出土量は非常に少ないものである。明産の染め付が1点で他は肥前産のものである。この出土量の少なさは、肥前磁器が国内にまだ広く流通していなかったこと、近隣に窯がなかったことに起因するのであろう。陶磁器はまだまだ庶民にとっては手に入れ難いものであったと言える。磁器は碗が2点に対して、中型以上の皿が4点と割合多いのが特徴的である。その他は播鉢でどれも卸し目が無くなるほど使い込まれている。

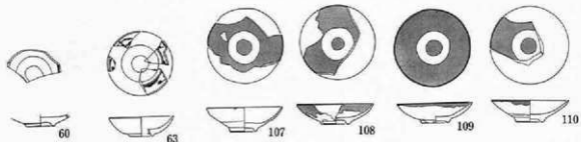
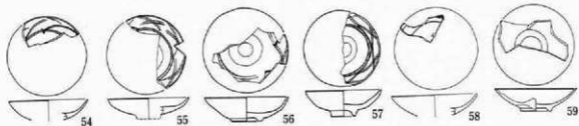
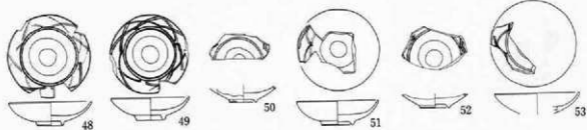
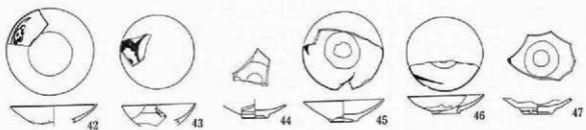
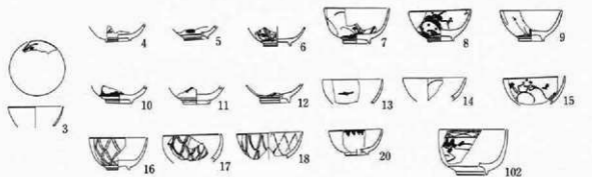
b. 1690～1780年代の陶磁器

肥前磁器の国内市場の拡大に伴い、本遺跡でも1690年代までのものに比べると格段に多量の肥前磁器がみられる。その中心を占めるのは波佐見窯等で製作された日常雑器の碗と小皿である。またこれらの磁器と並んで肥前陶器の銅緑釉の小皿が多量にみられる。これらのものと共に身の深い中皿や、割合に高級品と思われる墨弾きの技法の中皿、大皿も出土している。日常



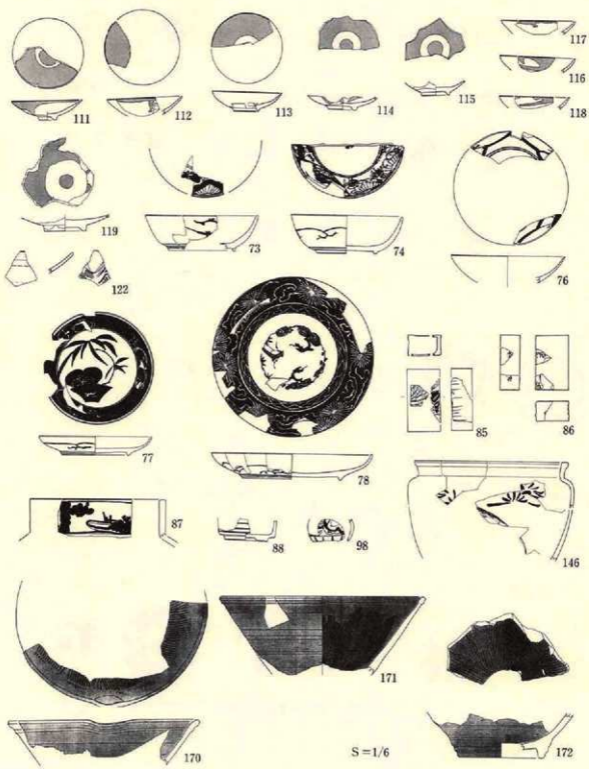
第111図 17世紀初～1690年代の陶磁器

的な容器以外にも水滴や火入れ、六角大壺もみられることが注目される。銅緑釉の小皿以外の陶器では唐津の刷毛目皿、二彩手の壺がある。また摺鉢は肥前産のものと、産地は不明だが出土遺構から18世紀代と考えられるもの(171)がみられる。以上のようにこの時期の陶磁器は不明のものを除くと全て肥前産であり、北東北地方の窯業が一般化する前は、ほとんどが肥前産の陶磁器で占められていたことがわかる。この肥前陶磁が本遺跡に運ばれたルートは、地理的な状況や次の時期に秋田産の白岩焼が多量に運ばれていることを考え合わせると、秋田の土崎港に陸揚げされたものが、雄物川をさかのぼり、そこから本遺跡周辺にもたらされた可能性が高い。この様に本遺跡の陶磁器の様相は他の岩手県内での一般的な情況より、日本海側での情況に類似していると考えられる。



S=1/6

第112図 1690～1780年代の陶磁器(1)

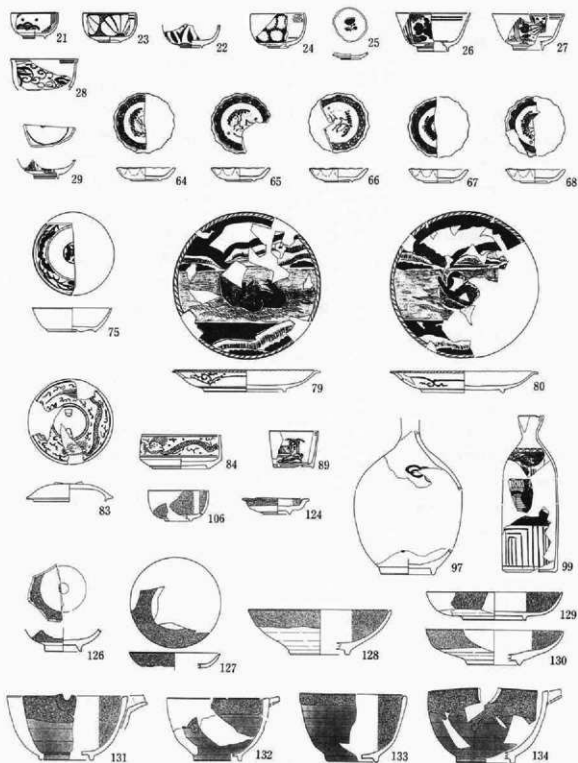


第113図 1690～1780年代の陶磁器(2)

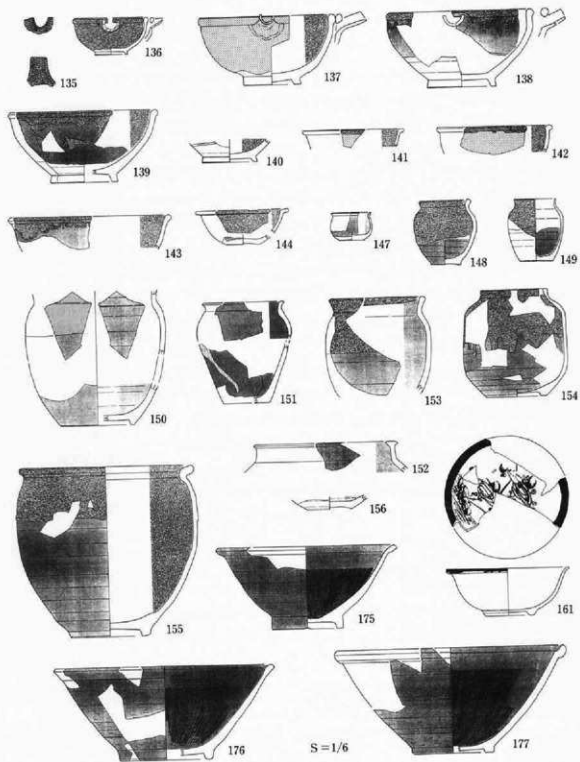
c. 1780～19世紀代の陶磁器

肥前産の磁器もかなりみられるが、これと合わせて白岩産の陶器と19世紀の中以降になると山形平清水産の磁器と白化粧の陶胎染付けがみられるようになる。肥前産の磁器では碗、皿、そば猪口、段重がある。平清水産の磁器には碗、小皿、徳利がある。白岩産の陶器には小物は少なく、身の深い中皿、片口鉢、甕、播鉢がみられる。これらの数をみると前代の1690～1780年代に比べると碗と小皿の数が非常に少ないのが目立つが、これは製造年代が1690～1780年代でも1780年代以降にも使われ続けたものが多かったためと解釈することができる。実際に1964年の1号建物の火災面から18世紀後半の肥前産の皿が出土しており、これなどは200年近く伝世されていたことになる。このように陶磁器には伝世され使用された年代の幅がかなり広い場合があり、その解釈にはかなりの注意が必要となる。今回出土した陶磁器の中に割れたものを漆で接いでいるものが何点かみられ、現在の感覚では想像できないほど陶磁器を大切に使用していることを示しており、そのことから陶磁器が長期間使用されていたことが推定される。よって図に示した時期別の陶磁器は、その時期の器種構成を完全に表しているのではないことを理解しなければならない。

この時期になると肥前産の陶磁器に加え、東北地方在地の窯の製品も多くみられるようになる。その中で最も量が多いのが秋田県角館町の白岩窯の陶器である。白岩窯の陶器の編年はほとんどなされていないのが現状であり、そのため白岩窯の製品と考えられるものには、白岩窯の創始の1771年から廃窯の1900年の間の年代を与えた。本遺跡で白岩焼が多量に出土したことは、白岩焼の販路が藩境を越えて近隣の地域に及んでいたことを示している。本遺跡から白岩窯まではおよそ50kmほど隔たっているが、遠く肥前からさえ陶磁器が運ばれてくるのであるからこの距離は全く問題にはならないだろう。この白岩窯の開窯により本遺跡周辺では前代に比べるとかなり陶器を手に入れ易くなり、使用する器種のバラエティーも増えたといえよう。



第114図 1780～19世紀代の陶磁器(1)



第115図 1780～19世紀代の陶磁器(2)

(3) 発掘調査以外で得られた知見

本遺跡の所在する湯田町白木野地区は、毎年1月19日に行われる厄払い人形祭りであり有名な地区である。以前はこれに類似する祭りは湯田町内各地区で行われたらしいが、現在まで続いているのは白木野地区のみである。これは本遺跡の元地権者である小原徳精氏の努力による所が大きい。氏は厄払い人形祭りの継承と共に、新田郷創作グループの代表として厄払い人形の民芸品化も行い好評を博している。今回調査した屋敷跡はこの小原家の先祖が生活を営んだ跡であり、この先祖の人々も厄払い人形祭りを毎年行っていたことが想像される。

小原徳精氏の話によると小原家の屋号は「徳助」と言い、先祖は現在の北上市和賀町方面から移って来たと言いつづられており、「兄弟が二人で和賀から移って来て、兄は神社(和賀から持ってきた)を祭って白木野に住みつき、弟はさらに秋田方面に行った」ということになっているという。この和賀から移ってきた理由などについては伝わっていないが、小原家の出自を考える上では参考になりそうな話である。この話に出てくる神社は屋敷跡の東側の山にある正一位稲荷大明神社のことである。この神社が和賀から移されて来たものかどうか判断できないが、安永7年(1778)の沢内通の神社の書留¹¹⁹には「稲荷明神 白木野村徳助上ノ山ニ有」と記されており、この時期には確実にこの神社が存在していたことがわかる。またこの神社の罫口(写真22)には「奉納 澤内上白木野村 別当徳助 寛政三年亥年九月吉日」と刻まれている。また祭壇には木製の狐と、観音開きの箱の中に観音像に似た赤や黄色で彩色された像(写真22)が祀られており、その背面に「寛政十年十月吉日 仙北平鹿郡赤坂村本明院」と墨書されている。これは赤坂村の本明院という修験がこの像を作ったという意味の墨書であろう。仙北平鹿郡赤坂村は現在の秋田県横手市赤坂のことと考えられ¹²⁰、この様な宗教の分野まで秋田領との関係があったことを示す資料である。

小原徳精氏によると小原家にはかなりの量の古い書き物があつたが、1964年の火災の際にそれらを失ってしまったという。その中で唯一、沢内年代記の白木野本のみが残されている。これは火事の前年頃に沢内村教育委員会で沢内年代記の現代語訳を編集するため、資料として小原家から借りていったために焼失を免れたものである。「沢内年代記」は西和賀地方の様々な事柄を記した年代記であるが、幾つかの異本、写本があり白木野本はその一つである。文政元年(1818)までの内容は他の写本と同じ内容であるが、それ以降は終わりの弘化4年(1847)まで独自の文章が記されている¹²¹。この文中に「組頭徳助」とみられ、小原家が藩政時代に五人組の組頭を務めていたことがわかる。今後この白木野本の文章や、他の文献資料、民俗資料と今回の発掘調査で得られた成果を加えて考察を深めていく必要がある。

引用参考文献

- (1) 秋田県教育委員会 1973 「秋田県の民家」
- (2) 秋田県教育委員会 1980 「鶴岡城跡発掘調査報告書」秋田県文化財調査報告書第95集
- (3) 岩手県教育委員会 1978 「岩手の古民家」
- (4) 岩手県教育委員会 1980 「平和街道」岩手県歴史の道調査報告書
- (5) 岩手県教育委員会 1982 「東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XIV」岩手県文化財調査報告書第54集
- (6) 大橋康二・西田宏子監修 1988 「古伊万里」別冊太陽No63 平凡社
- (7) 大橋康二 1989 「肥前陶磁」考古学ライブラリー55 ニューサイエンス社
- (8) 小倉 強 1955 「東北の民家」相模書房
- (9) 上ノ国町教育委員会 1987 「上ノ国漁港遺跡」昭和58・60年度調査報告書
- 00 旧芝離宮庭園調査団 1988 「宮芝離宮庭園」
- 00 九州陶磁文化館 1984 「国内出土の肥前陶磁」
- 00 古泉 弘 1987 「江戸の考古学」考古学ライブラリー48 ニューサイエンス社
- 00 佐久間光平・本田泰貴 1990 「東北地方における近世家業と陶磁器をめぐる問題」東北大学埋蔵文化財調査年報3、第IV章研究編
- 04 沢内村史編纂委員会 1991 「沢内村史上巻」
- 05 新堀区四谷三丁目遺跡調査団 1991 「四谷三丁目遺跡」
- 06 芹沢長介他 1981 「日本やきもの集成1北海道、東北、関東」平凡社
- 07 都立学校遺跡調査会 1990 「白鷺」都立白鷺高校内埋蔵文化財発掘調査報告書
- 08 平凡社 1980 「秋田県の地名」
- 08 真砂遺跡調査会 1987 「真砂遺跡」
- 08 宮沢智士 1965 「民家普請における職人についての一考察」日本建築学会論文報告集第109号
- 00 宮本善太郎編 1979 「図録民具の基礎知識」柏書房
- 00 雄山閣 1985 「江戸時代を揺る」季刊考古学13号
- 00 湯田町史編纂委員会 1979 「湯田町史」

湯田町白木町II遺跡出土材の樹種

高橋 利彦 (木工会「ゆい」)

1. 試料

試料は47点で、漆器・桶・樽・しゃもじ・箸などの日用品や農具・建築材と推定されている木製品・加工材である。その所属年代は17世紀?から20世紀とされ、18・19世紀とされているものが多い(表1)。

2. 方法

剃刀の刃を用いて試料の木口・柀目・板目の3面の徒手切片を作製、ガム・クロラル(Gum Chloral)で封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。同時に顕微鏡写真図版(図版1~4)も作製した。なお作製したプレパラートはすべて木工会「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料の中には劣化が進んでいるため確実な同定ができず類似種としたものもあったが、以下の11種類 [分類群 (Taxon) をさす。ここでは属・亜属・節・種の異なった階級の分類単位を総称している。]に同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、()のついた試料番号は類似種としたものを示している。また各 Taxon の科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」(1989)にしたがいが、一般的性質などについては「木の事典 第1巻~第17巻」(1979~1982)も参考にした。

・マツ属複雑管束亜属の一種 (*Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.) マツ科 No.32, 55.

早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はなく樹脂道が認められる。放射組織は仮道管、柔細胞とエピセリウム細胞よりなり、仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。分野壁孔は窓状。放射組織は単列、1~15細胞高のものと樹脂道をもつ紡錘形のものがある。

複雑管束亜属 (いわゆる二葉松類) には、クロマツ (*Pinus thunbergii*)・アカマツ (*P. densiflora*) と琉球列島特産のリウキユウマツ (*P. luchuensis*) の3種がある。アカマツは北海道南部から九州に、クロマツは本州から琉球に分布するが暖地の海沿いに多く生育し、また古くから砂防林として植栽されてきた。材は重硬で強度が大きく、保存性は中程度であるが耐水性に優れる。建築・土木・建具・器具・家具材など広い用途が知られている。

・スギ (*Cryptomeria japonica*) スギ科 No14, 15, 17, 18, 19, 21, 22, 23, 24 a, 24 b, 25, 69.

早材部から晩材部への移行はやや急で、年輪界は明瞭。樹脂細胞はほぼ晩材部に限って認められ、樹脂道はない。放射仮道管はなく、分野壁孔はスギ型(Taxodioid)で2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

スギは本州・四国・九州に自生する常緑高木で、また各地で植栽・植林される。国内では現在ヒノキに次ぐ植林面積をもち、長寿の木としても知られる。材は軽軟で割裂性は大きく、加工は容易、保存性は中程度である。建築・土木・樽桶類・舟材など各種の用途がある。

・ヒノキ属の一種 (*Chamaecyparis* sp.) ヒノキ科 No16, 33.

早材部から晩材部への移行は緩やか~やや急で、晩材部の幅は狭く、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管はなく、分野壁孔はヒノキ型(Cupressoid)で1~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。

ヒノキ属にはヒノキ (*Chamaecyparis obtusa*) とサワラ (*C. pisifera*) の2種がある。ヒノキは本州(福島県以南)・四国・九州に分布し、また各地で植栽される常緑高木で、国内では現在植林面積第1位の重要樹種である。材はやや軽軟で加工は容易、割裂性は大きい強度・保存性は高い。建築・器具材など各種の用途が知られている。サワラは本州(岩手県以南)・九州に自生し、また植栽される高木で多くの園芸品種がある。材は軽軟で割裂性は大きく、加工も容易、強度的にはヒノキに劣るが、耐水性が高いため樽や桶にするほか各種の用途がある。

・アスナロ (*Thujaopsis dolabrata*) ヒノキ科 No20, 31.

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射仮道管はなく、分野壁孔は小型でスギ型~ヒノキ型で1~6個。放射組織は単列、1~15細胞高。

アスナロは本州・四国・九州に分布する日本特産の常緑高木で、時に植栽される。北海道(渡島半島以南)・本州北部には変種ヒノキアスナロ(ヒバ) (*T. dolabrata* var. *hondai*) がある。材はやや軽軟で保存性高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・ブナ属の一種 (*Fagus* sp.) ブナ科 No1, 2, 3, 4, 5, 6, 11, 28.

散孔材で管孔は単独または放射方向に2~3個が複合、横断面では角張った楕円形~多角形、分布密度は高い。道管は単穿孔および段(bar)数が10前後の階段穿孔をもつ。放射組織は同性~異性III型、単列・数細胞高のものから複合組織まである。柔組織は短接線状および散在状。

年輪界は明瞭～やや不明瞭。

ブナ属にはブナ (*Fagus crenata*) とイヌブナ (*F. japonica*) の2種がある。ブナは北海道南西部(黒松内低地帯以南)・本州・四国・九州に、イヌブナは本州(岩手県以南)・四国・九州の主として太平洋側に分布する。イヌブナのほうがブナより低標高地から生育し、またブナのような大群落をつくることはない。ブナは日本の冷温帯落葉樹林を代表する樹木で、かつては東日本の山地に広く生育していた。材はやや重硬で、強度は大きい加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。木地・器具・家具・薪炭材などの用途があったが、最近では各種の用途に用いられている。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科 No. 7, 12, 27, 68,

環孔材で孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では楕円形、小道管は管壁はやや薄く、横断面では多角形、ともに単独。単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。

放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合組織よりなる。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

コナラ節は、コナラ亜属(落葉ナラ類)の中で果実(いわゆるドングリ)が1年目に熟するグループで、カシワ (*Quercus dentata*)・ミズナラ (*Q. crispula*)・コナラ (*Q. serrata*)・ナラガシワ (*Q. aliena*) といくつかの変・品種を含む。ミズナラ・カシワ・コナラは北海道・本州・四国・九州に、ナラガシワは本州(岩手・秋田県以南)・四国・九州に分布する。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・櫛材などの用途が知られる。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No. 63, 70, 71, 72, 73, 74,

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では円形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜(放射)方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単(～2)列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、櫛木や海苔粗朶などの用途が知られている。

・モクレン属の一種 (*Magnolia* sp.) モクレン科 No 8, 9, 30, (67).

散孔材で管壁はやや薄く、横断面では角張った楕円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性II型、1～2細胞幅、1～40細胞高。年輪界は明瞭。No67は劣化が進んで上記の特徴が十分確認できないため類似種とした。

モクレン属はホオノキ (*Magnolia obovata*)・コブシ (*M. praecocissima*) など5種が自生する。ホオノキ・コブシは北海道から九州の適潤～湿性地に生育するが、コブシは西日本にはやや少ない。ホオノキの材は軽軟で、割裂性が大きく、加工は極めて容易で欠点が少ないことから、器具・建築・家具・建具材などのほか、指物・木地・下駄歯・刃物鞘など特殊な用途が知られている。また木炭は金・銀・銅・漆器の研磨に用いられた。コブシの材はホノノキに似るがやや硬く、ホオノキより劣るものとされホオノキに準じた使われ方をする。

・カエデ属の一種 (*Acer* sp.) カエデ科 No10, (26), 29, 53.

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独および2～3個が複合する。道管は単穿孔をもち、壁孔は対列～交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～40細胞高。柔組織は周囲状または随伴散在状。年輪界はやや不明瞭。No26は道管内壁のらせん肥厚が確認できなかったが、劣化による消失と判断し類似種とした。

カエデ属は、イロハモミジ (*Acer palmatum*) やハウチワカエデ (*A. japonicum*) など26種が自生し、また多くの品種があり植栽されることも多い。属としては琉球を除くほぼ全土に分布する落葉高木～低木である。一般に材はやや重硬・強韌で、加工はやや困難、保存性は中程度である。器具・家具・建築・装飾・旋作・薪炭材などに用いられる。

・リョウブ (*Clethra barbinervis*) リョウブ科 No13.

散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独でやや疎らに配列する。道管は階段穿孔をもち、段は多数。放射組織は異性II型、1～7細胞幅、1～50細胞高。柔組織は短接線状～散在状。年輪界はやや明瞭。

リョウブは北海道(渡島半島)・本州・四国・九州の主として陽好地に生育する落葉小高木である。材はやや重硬で割裂しにくく、加工はやや困難、器具・旋作・玩具・薪炭材などに用いられる。

・ハイノキ属の一種 (*Symplocos* sp.) ハイノキ科 No56.

散孔材で、横断面では多角形～角張った楕円形、ほとんど単独。道管は階段穿孔をもち、段

は多数。放射組織は異性Ⅱ～Ⅰ型、1～3細胞幅、1～20細胞高であるが時に上下に連結する。年輪界はやや不明瞭。

ハイノキ属には、常緑性のハイノキ節 [ハイノキ (*Symplocos myrtaea*)・クロバイ (*S. prunifolia*) など] と、落葉性のサワフタギ節 [サワフタギ (*S. chinensis* forma *pilosa*)・タンナサワフタギ (*S. coreana*) など] がある。サワフタギを除いては関東地方以西に分布する。サワフタギは北海道から九州までの山野に普通な小高木で、材は重硬・強韌で割れにくく、各種工具の柄などの器具・旋作・薪炭材などに用いられる。

以上の同定結果を出土遺構や推定される用途・所属年代とともに一覧表で示す (表1)。

4. 考察

試料の推定されている所属年代は17世紀?～20世紀と幅があり、また年代不明のものもあるがひとまず一括してその用途別の樹種構成をみると、各用途に応じた樹種 (材質) の選択が行われているようである (表2)。また、スギが対象となった試料47点中13点と多く用いられていることも指摘できよう。スギの多用は、この地域が地理的には岩手県に属するものの文化的・経済的には秋田県側とより深く結び付いているとされることから、「秋田スギ」の存在と関係するものかもしれない。

桶・樽類としたものは側板・底板・蓋12点があるがスギ (10点) が多く、ヒノキ属・アスナロ (各1点) のいずれも針葉樹が用いられていた。これはこれらの針葉樹が割裂性に優れることから選択的に用いられたためと思うが、中でも割裂性に優れるスギ (遠山1976) が多用されていることはこの表れであろう。また、この他の用途でも鍋蓋・荷札・板材¹⁾といった薄い板にスギが用いられていることや、同じ針葉樹でも割裂性の劣るマツ材がこうした薄板に用いられていないこともこうした見方を支持しているように思う。

漆器は椀・蓋・皿の3器種6点が同定されたがいずれもブナ属が用いられていた。へら類としたものは形・大きさが (そしておそらく用途も) 様々であるが、これらに用いられているブナ属 (ブナ)・モクレン属 (ホオノキ)・カエデ属 (イタヤカエデ) はいずれも現在でも同じ用途の材料として用いられている樹種である。ただコナラ節のへら (No27) では、食品などを扱った場合には大道具に詰まって残り衛生上の問題も発生する懸念もある。また、用途はわからないがその大きさ・形からみて、片手で扱うにはほぼ限界に近い形状をしているように思う。ところで、しゃくしとされるNo30もへら類に分類したが²⁾、これは板から柄 (持ち手) の部分を削り出した他の4点とは異なり、加工技法上は刳物に分類されているものである。今回の試料の中にはもう1点刳物があり (鉢, No9)、ともにモクレン属が用いられている³⁾。所属年代が18世

紀 (No.9) と19～20世紀 (No.30) と異なっているが、羽物に準じた技法で作られたであろう一木作りの下駄 (No.8) もまたモクレン属製であるのは単なる偶然の一致にすぎないのだろうか。

掘立性と杭にはともにクリが用いられていた。耐朽性の点でクリに優る樹種は筆者にも思いつかず、同じ理由でクリが選択されたものであろう。この他例数が少ないため表ではその他に一括したものも、硬さ・粘り・強度・加工性などそれぞれの樹種の特長を捉えた上での選択があったものと推測している⁴⁾。

〈注〉

1) 板枠はスギ (No.69) の他に広葉樹製のもの3点がある。モクレン属類似種 (No.67) は (モクレン属に間違いなければ広葉樹としてはかなり軽軟でしかも割裂性の大きな材となるが) スギとほぼ同じ厚さであるが、コナラ節 (No.68)・クリ (No.63) 製のものとはともにスギ製板の2倍の厚さがある。重硬材で厚手の板を作っていることから強度上の要請があつてこの厚さにしたものかもしれないが、少なくとも薄手の板が必要な場合にはそれらの重硬材を用いることはなかったものと考えている。

2) シャもじはしゃくしの女房詞 (文字ことば) に由来すると理解していたため表2ではへら類としたが、本文中でも述べているように加工技法からみると別としたほうがよかつたのかもしれない。

3) No.9の鉢はNo.30のしゃくしと比較すると、大きさの違いによるのかも知れないが加工がいかにも稚拙という印象を受ける。No.9の方が1世紀あるいはその以上も古いと推定されていることから、この間の利器の発達の影響が表れているのかも知れない。

4) 箸は20点、くさびは10点の試料の中からそれぞれ1点を任意に選び出して同定対象としたが、残りの試料の同定結果を検討することにより、こうした見方が妥当なものか否かが判断できるであろう。

引用文献

平井信二 1979～1982 「木の事典 第1巻～第17巻」、かねえ書房。

佐竹義輔・原 寛・夏理俊次・富成忠夫 (編) 1989 「日本の野生植物 木本 I・II」、平凡社、321・305pp。

遠山富太郎 1976 「杉のきた道 日本人の暮らしを支えて」、中谷新書、215pp。

表1 白木野II遺跡出土材の樹種

試料番号	出土遺構	用途	年代	樹種
1	3号池底面	漆塗碗	18c	ブナ属の一種
2	2号竪穴底面	漆塗碗	19c	ブナ属の一種
3	2号竪穴底面	漆塗碗	19c	ブナ属の一種
4	Pit210埋土	漆塗蓋	17c?	ブナ属の一種
5	7号池底面	漆塗蓋	明治	ブナ属の一種
6	7号池埋土	漆塗皿	明治	ブナ属の一種
7	5号池底面	下駄	18c	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
8	5号池底面	下駄	18c	モクレン属の一種
9	5号池底面	鉢	18c	モクレン属の一種
10	5号池底面	柄	18c	カエデ属の一種
11	5号池底面		18c	ブナ属の一種
12	5号池底面	敷台	18c	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
13	5号池底面	木箱	18c	リュウブ
14	5号池底面	桶側板	18c	スギ
15	5号池底面	桶側板	18c	スギ
16	2号竪穴底面	桶側板	19c	ヒノキ属の一種
17	5号池底面	樽蓋	18c	スギ
18	2号竪穴底面	樽蓋	19c	スギ
19	2号竪穴底面	桶底板	19c	スギ
20	2号竪穴底面	桶底板	19c	アスナロ
21	2号竪穴底面	桶底板	19c	スギ
22	2号竪穴底面	桶底板	19c	スギ
23	14号建物	桶底板		スギ
24 a	14号建物	桶側板		スギ
24 b	14号建物	桶底板		スギ
25	7号池埋土	鍋蓋	明治以降	スギ
26	2号竪穴底面	へら	19c	カエデ属類似種
27	7号池埋土	へら	明治以降	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
28	2号竪穴底面	しゃもじ	19c	ブナ属の一種
29	7号池埋土	しゃもじ	明治以降	カエデ属の一種
30	7号池埋土	しゃくし	明治以降	モクレン属の一種
31	2号竪穴底面	串?	19c	アスナロ
32	2号竪穴底面		19c	マツ属複雑管束亜属の一種
33	2号竪穴底面	箸	19c	ヒノキ属の一種
53	5号池底面	独索	19c	カエデ属の一種

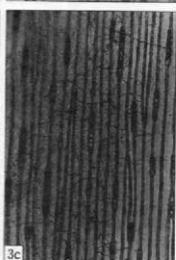
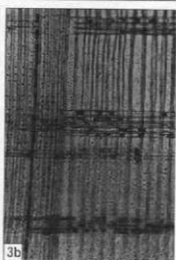
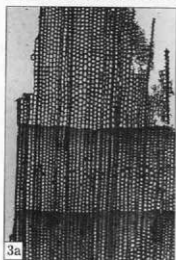
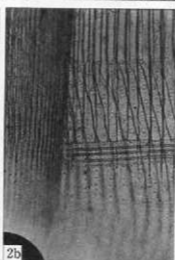
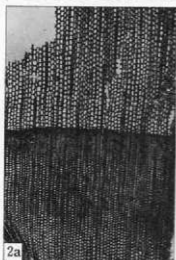
表1 (続き)

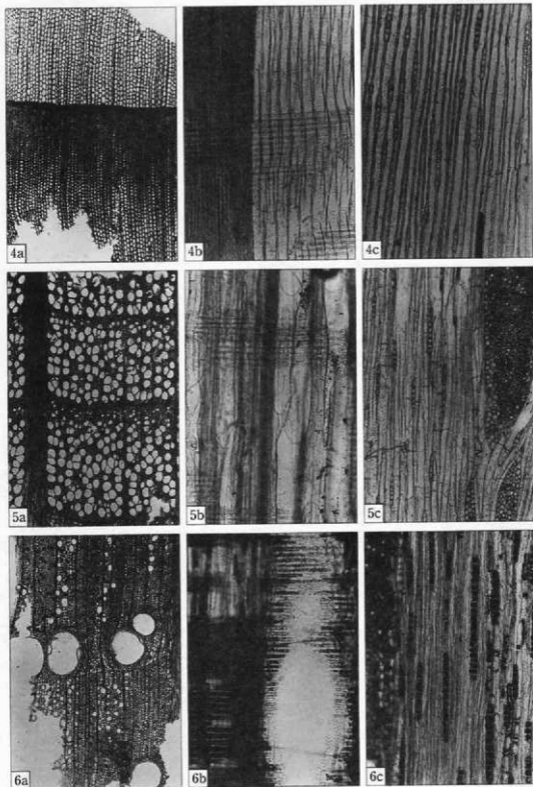
試料番号	出土遺構	用途	年代	樹種
54	7号池底面	荷札	20c	スギ
55	2号池底面		20c	マツ属複維管束亜属の一種
56	5号池底面		18c	ハイノキ属の一種
63	5号池底面	くさび	18c	クリ
67	5号池底面	板材	18c	モクレン属類似種
68	5号池底面	板材	18c	コナラ属コナラ亜属コナラ節の一種
69	5号池底面	板材	18c	スギ
70	5号池底面	杭	18c	クリ
71	5号池底面	板材	18c	クリ
72	Pit262	柱		クリ
73	Pit143	柱		クリ
74	Pit261	柱		クリ

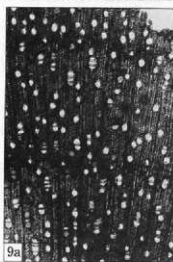
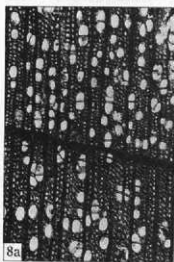
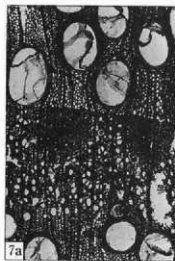
表2 白木野II遺跡出土材の主な用途別樹種構成

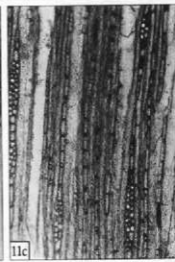
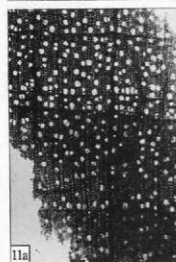
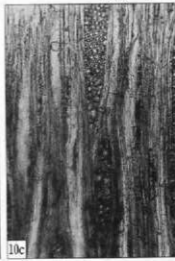
種類\用途	桶・樽	漆器	へら類	板	柱・杭	下駄	その他	合計
複維管束亜属							2	2
スギ	10			1			2	13
アスナロ	1						1	2
ヒノキ属	1						1	2
ブナ属		6	1				1	8
コナラ節			1	1		1	1	4
クリ				1	4		1	6
モクレン属*			1	1		1	1	4
カエデ属*			2				2	4
リョウブ							1	1
ハイノキ属							1	1
合計	12	6	5	4	4	2	14	47

*：類似種各1点を含む。









写 真 图 版



写真図版 1 調査区西側屋敷跡



磁器 1-15



磁器 16-29



磁器 42-51



磁器 52-63

写真图版3 出土陶磁器



磁器 64-73



磁器 74-75、87、90、97

写真図版4 出土陶磁器



磁器 77、78



磁器 79、82

写真图版5 出土陶磁器



陶器 107-115、119



陶器 134、137、148

写真図版6 出土陶磁器



調査区遠景 (E→)



調査区東側



調査区西側



調査前状況 (E→)

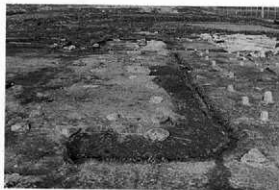


調査前状況 (W→)



基本層序 (G-53-54)

写真図版7 遺構(1)



1号建物 (E→)



1号建物 (W→)



1号建物残跡



1号建物「にわ」跡断面



1号建物 (昭和38年頃)



写真図版8 遺構(2)



2号建物 Pit 70断面



2号建物 Pit 68断面



2号建物 1号烧土



1号烧土断面



2号建物 2号烧土



3号建物 Pit 220

写真图版9 遺構(3)



3号建物 Pit 19



3号建物 Pit 38



3号建物 (W→)



3号建物 (E→)



4号建物 (W→)



4号建物 (E→)

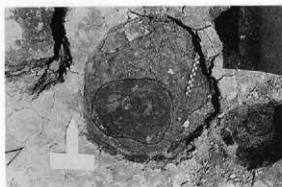
写真図版10 遺構(4)



4号建物 Pit 49



4号建物 Pit 37



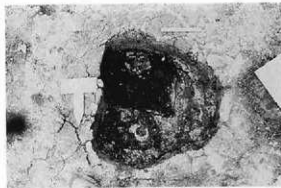
4号建物 Pit 25



5号建物 (W→)



5号建物 Pit 210



5号建物 Pit 215



6号建物 (W→)



6号建物 (E→)



7号建物 (N→)



8号建物 (W→)



9号建物 (W→)



10号建物 (W→)

写真図版12 遺構(6)



11号建物 (W→)



12号建物 (W→)



13号建物 (E→)



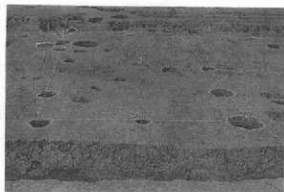
14号建物 (S→)



14号建物 埋設桶



15号建物 (N→)



16号建物 (S→)



17号建物 (N→)



18号建物 (E→)



19号建物 (W→)



1号池断面 (W→)



1号池完掘 (S→)

写真図版14 遺構(8)



1号池土留め (W→)



1号池土留め (E→)



2号、3号池断面 (N→)



3号池断面 (N→)



3号、4号池断面 (S→)



2号、3号、4号池 空撮 (S→)



5号池断面 (W→)



5号池完掘 (E→)



5号池完掘 (E→)



7号池完掘 (E→)



1号溝断面 (E→)



1号溝完掘 (E→)

写真図版16 遺構(10)



2号溝完掘 (S→)



3号溝断面 (E→)



3号、8号溝、1号、2号、3号、4号坑列



3号、8号溝、1号、2号、3号、4号坑列



4号、5号溝 (N→)



4号、5号溝 (S→)



6号沟断面 (E→)



6号沟完掘 (E→)



9号沟断面 (W→)



9号沟断面 (W→)



9号沟完掘 (E→)



10号沟断面 (S→)

写真图版18 遺構(12)



11号、12号溝断面 (E→)



11、12号溝完撮 (E→)



13号溝断面 (S→)



14号、15号、16号溝断面 (W→)



14号、15号、16号溝完撮 (E→)



17号溝かんざし出土状況



1号竖穴遺構断面 (S→)



1号竖穴遺構完掘 (E→)



2号竖穴遺構断面 (E→)



2号竖穴遺構遺物出土状況



2号竖穴遺構遺物出土状況



2号竖穴遺構遺物出土状況



3号竖穴遺構断面 (N→)



3号竖穴遺構断面 (W→)



3号竖穴遺構、15号土坑断面 (W→)



3号竖穴遺構、15号土坑完掘



1号土坑断面 (N→)



1号土坑完掘 (N→)



2号土坑断面 (N→)



2号土坑完掘 (N→)



3号土坑断面 (N→)



3号土坑完掘 (E→)



6号土坑完掘 (N→)



6号土坑完掘 (S→)



6号土坑断面(N→)



7号土坑完掘(S→)



8号土坑断面(N→)



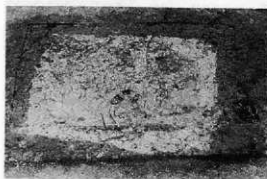
8号土坑完掘(N→)



9号土坑完掘(N→)



9号土坑断面(N→)



11号土坑確認



11号土坑断面 (N→)



12号土坑断面 (S→)



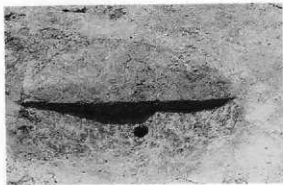
12号土坑完掘 (S→)



13号土坑断面 (W→)



13号土坑完掘 (W→)



14号土坑断面 (W→)



14号土坑完掘 (W→)



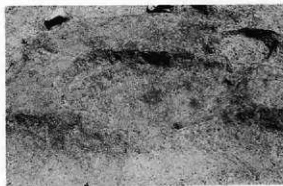
16号土坑断面 (N→)



16号土坑完掘 (N→)



17号土坑断面 (W→)



17号土坑完掘 (E→)



19号土坑断面 (E→)



19号土坑完掘 (S→)



20号土坑断面 (W→)



20号土坑完掘 (N→)



21号土坑断面 (N→)



21号土坑断面 (N→)



23号土坑完掘 (W→)



23号土坑断面 (S→)



24号土坑完掘 (S→)



24号土坑断面 (S→)



Pit 261柱根



G-17墨書石出土狀況



防空壕跡（北側）



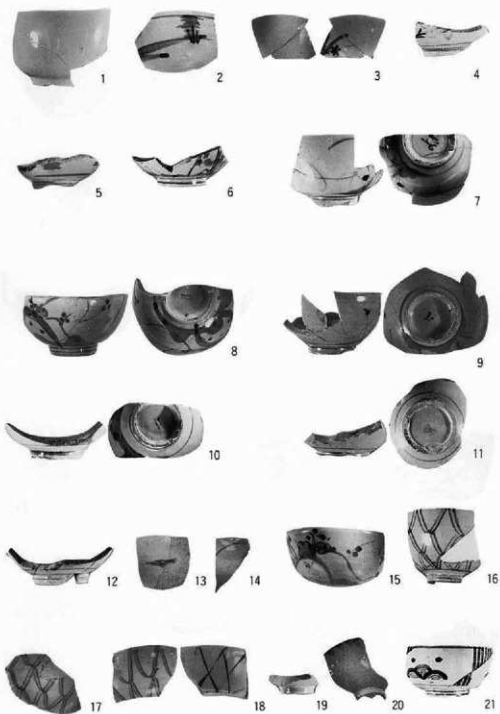
防空壕跡（西側）



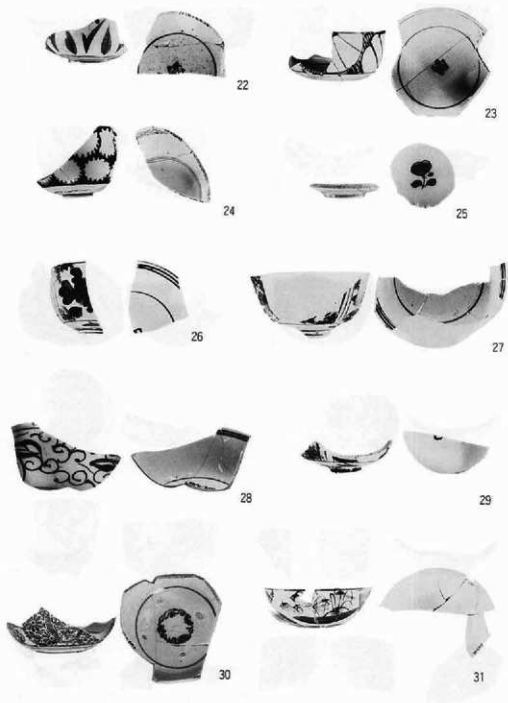
白木野正一位稲荷大明神社銅口



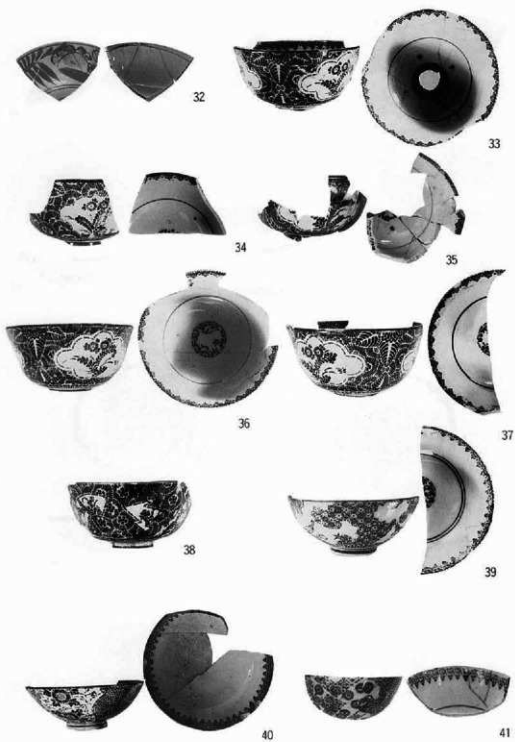
白木野正一位稲荷大明神社神像



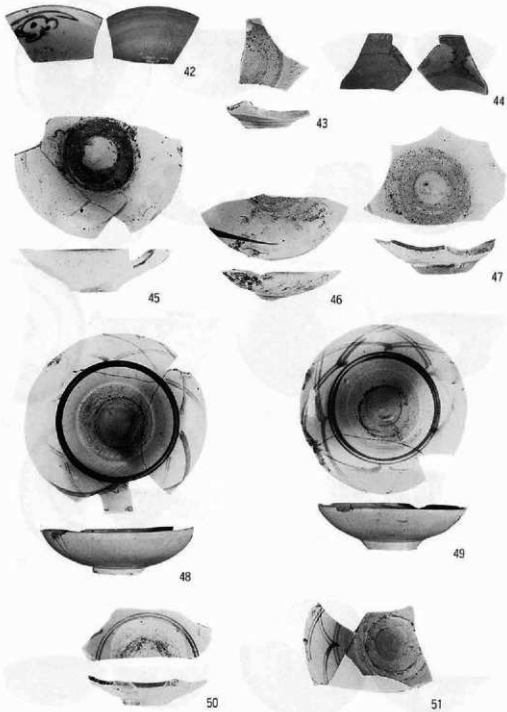
写真図版29 遺物(1)



写真図版30 遺物(2)



写真图版31 遺物(3)



写真図版32 遺物(4)



52



53



54



55



56



57



58



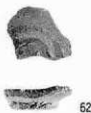
59



60



61

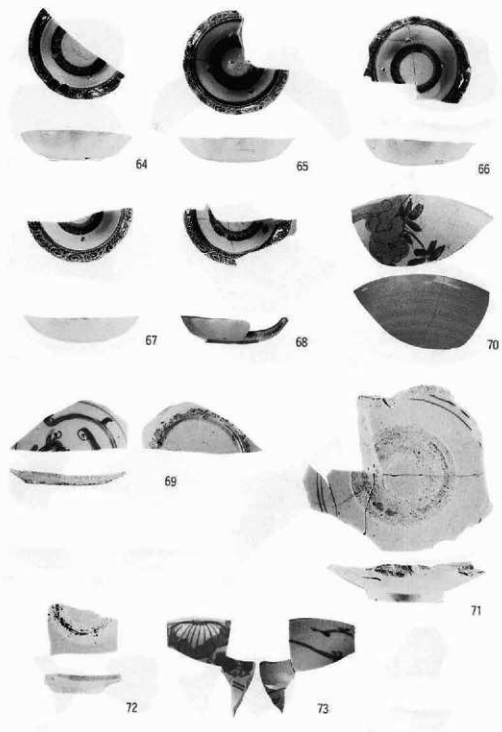


62

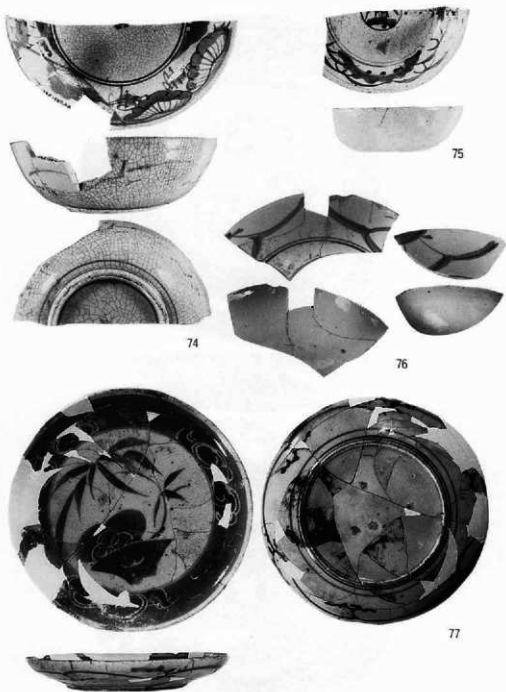


63

写真図版33 遺物(5)



写真図版34 遺物(6)



写真図版35 遺物(7)



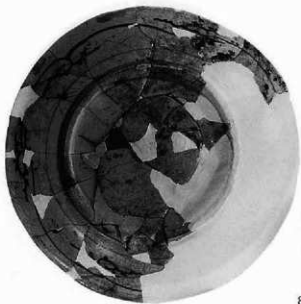
78

写真図版36 遺物(8)



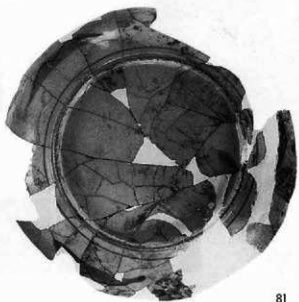
79

写真図版37 遺物(9)



80

写真図版38 遺物(10)



81

写真図版39 遺物(11)



86



83



84

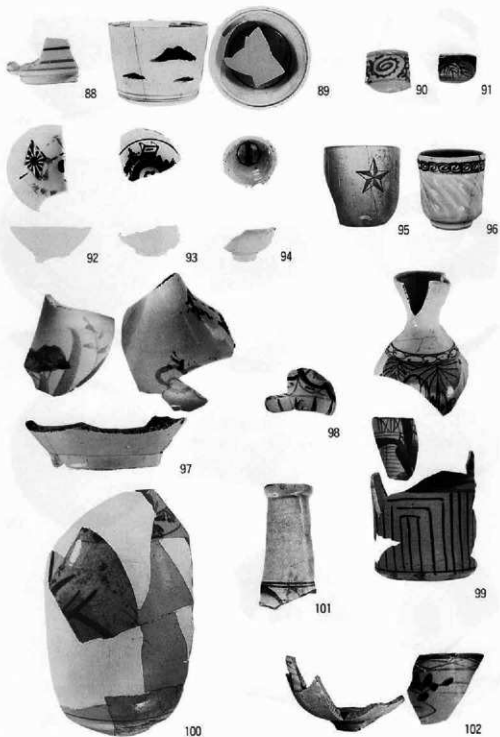


85

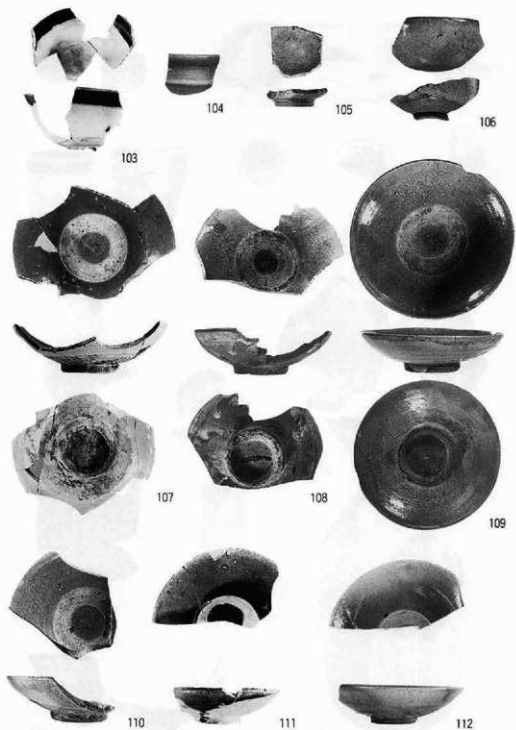


87

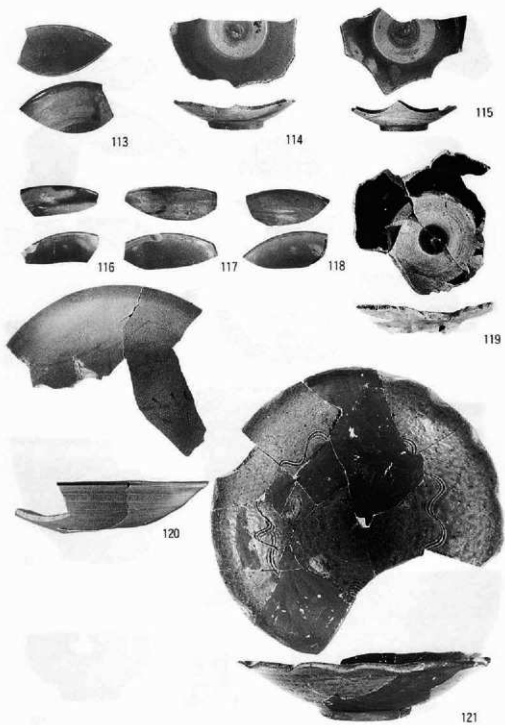
写真図版40 遺物(12)



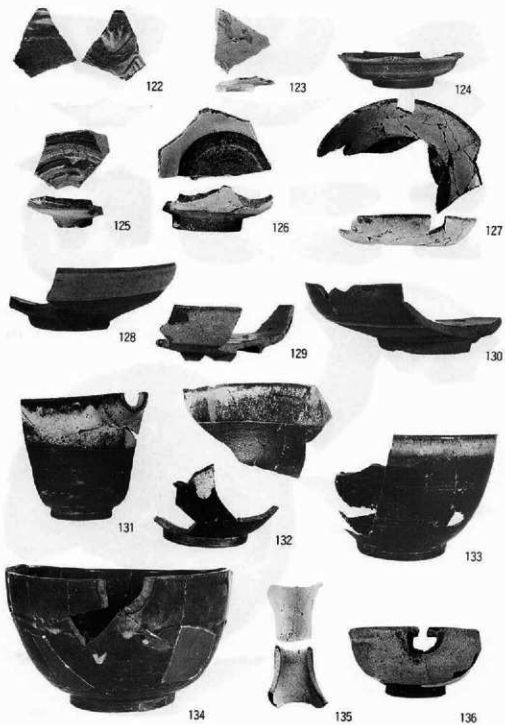
写真図版41 遺物(13)



写真図版42 遺物(14)



写真图版43 遺物(15)



写真図版44 遺物(16)



137



138



139



140



141



142



143



144



145

写真図版45 遺物(17)



147



148



146



149



150



151



152

写真図版46 遺物(18)



153



154



155



156



158



157



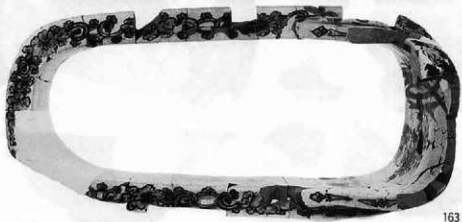
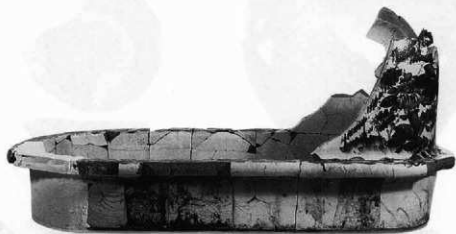
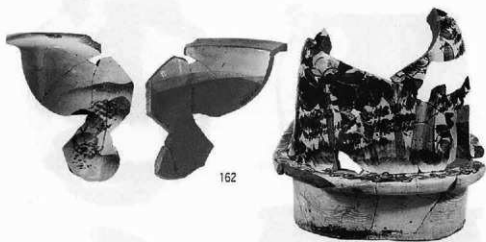
159



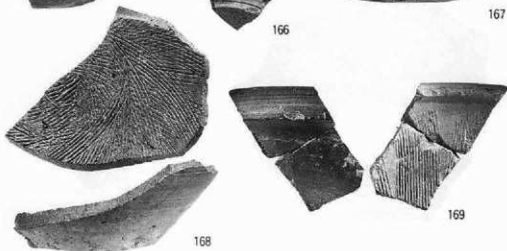
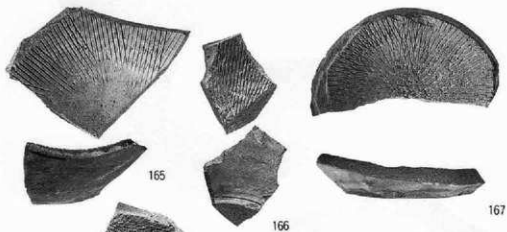
160

161

写真図版47 遺物(19)



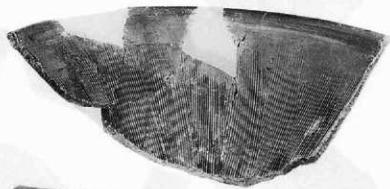
写真図版48 遺物(20)



写真図版49 遺物(21)



170



171

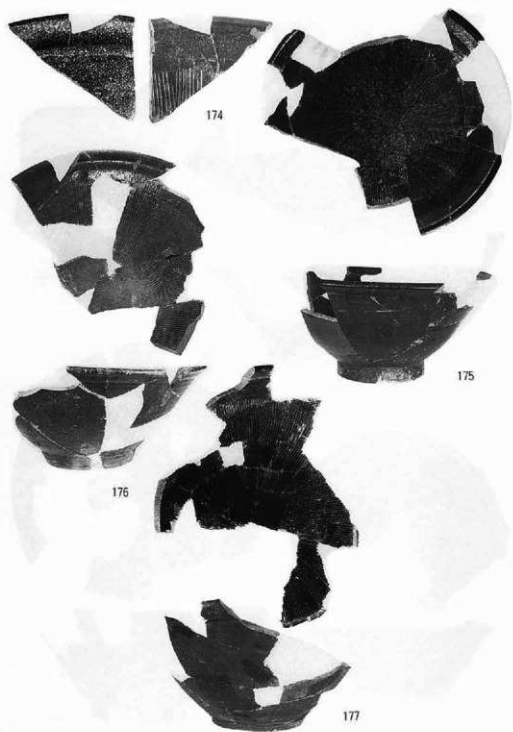


172

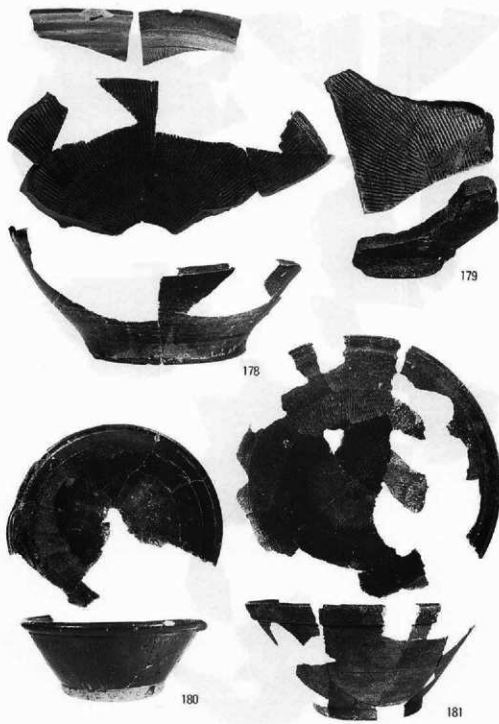


173

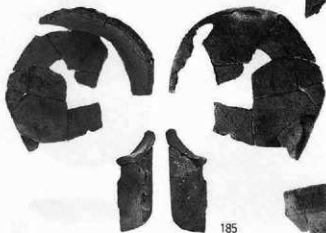
写真図版50 遺物(22)



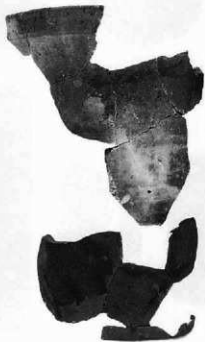
写真図版51 遺物(23)



写真图版52 遗物(24)



184



186

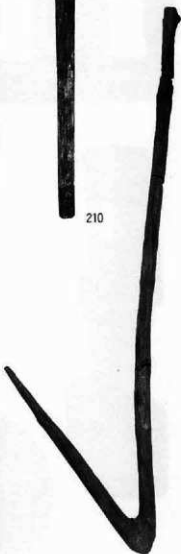
写真図版53 遺物(25)



写真図版54 遺物(26)



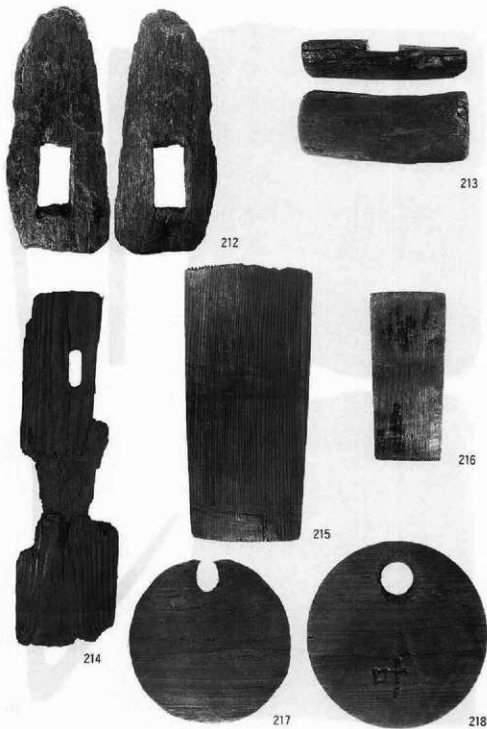
210



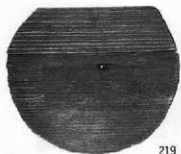
211

209

写真図版55 遺物(27)



写真図版56 遺物(28)



219



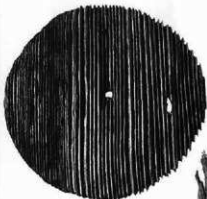
220



221



222



223

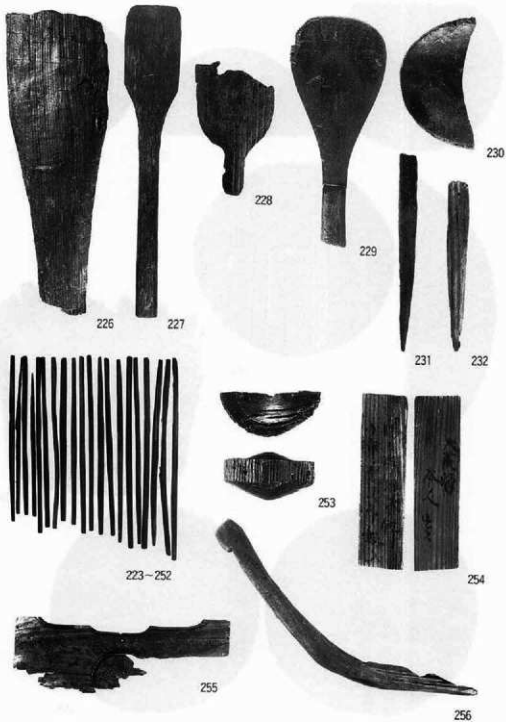


224

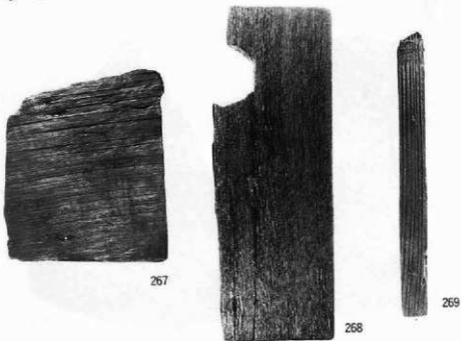
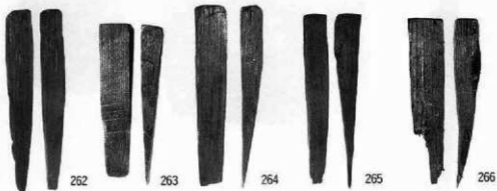
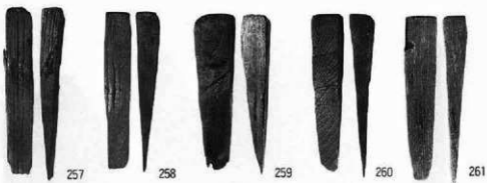


225

写真図版57 遺物(29)



写真图版58 遺物(30)



写真図版59 遺物(31)



270



271



272



273



274

写真図版60 遺物(32)



301



302



303



304



305



306



307



308



309



310

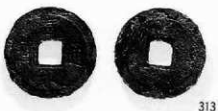
写真図版61 遺物(33)



311



312



313



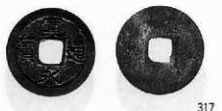
314



315



316



317



318



319



320

写真図版62 遺物(34)



321



322



323



324



325



326



327



328



329



330



331

写真図版63 遺物(35)



写真図版64 遺物(36)



写真図版65 遺物(37)



358



360



359



362



361

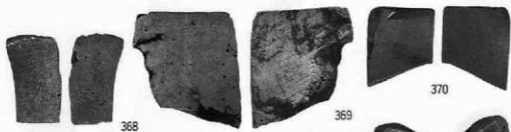


363



364

写真図版66 遺物(38)



写真図版67 遺物(39)



376



377



378



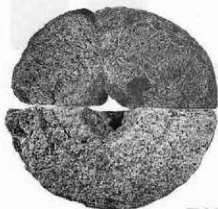
379



380



381



382

写真図版68 遺物(40)



383



384



385



386



387



388



389

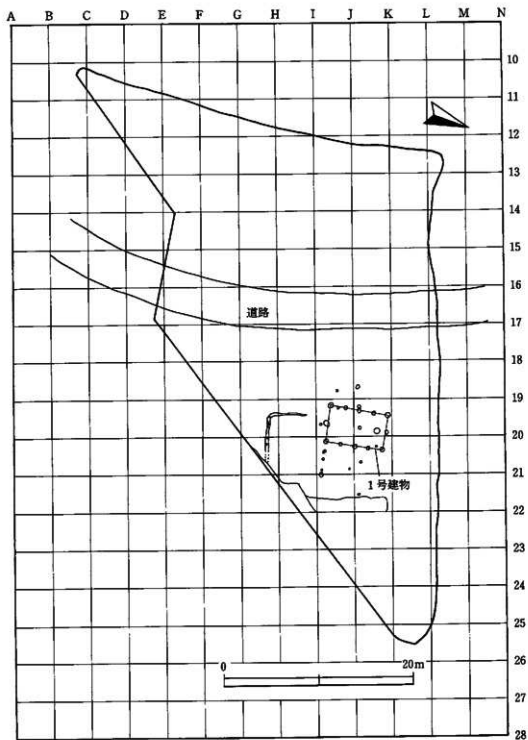


390

写真図版69 遺物(41)

VI. 白木野Ⅲ遺跡

遺跡台帳番号	MD57-2350
調査略号	SKⅢ-92
調査面積	1,300㎡
調査期間	平成4年10月1日～10月29日
整理期間	平成5年2月1日～3月31日
調査担当者	羽柴直人・鎌田精造
整理担当者	羽柴直人・鎌田精造



第1図 白木野Ⅲ遺跡グリッド・遺構配置図

1. 検出された遺構

本遺跡から検出された遺構は、建物跡が1棟のみである。

1号建物（第2図、写真図版2）

〔位置〕 I-19、20、J-19、20に位置する。

〔重複〕 なし

〔規模〕 延床面積は23.9㎡（約7坪）である。

〔平面形式〕 掘立柱建物である。2間×4間の直屋である。間仕切りはみられない。

〔建物方位〕 桁行きの軸方向はN-9-Wである。

〔柱穴・礎石〕 各柱穴の規模は観察表に記してある。柱の根がために用いた石がみられるものはない。掘り方の平面形は丸形のものが多い。

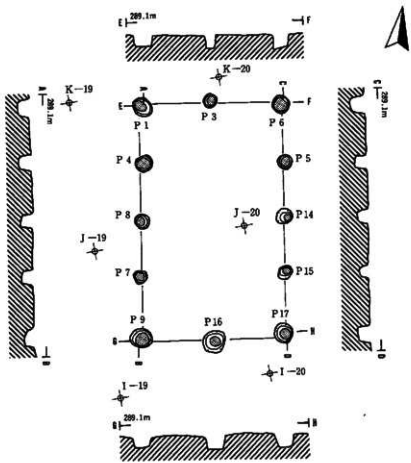
〔柱間寸法〕 桁行きは5尺（約151cm）梁行きは6尺（約180cm）である。

〔出土遺物〕 なし

〔付属施設〕 なし

〔建物の性格〕 規模から考えて小屋と思われる。

〔年代〕 柱穴の埋土の状況から考えてごく近年のものと思われる。



1号建物柱穴観察表

番号	径cm	深きcm	備	考
1	50.0	32.5	柱痕あり	
3	35.5	37.6	〃	
4	45.0	30.7	〃	
5	40.0	39.9	〃	
6	45.5	36.3	〃	
7	35.0	29.2	〃	
8	40.0	27.8	〃	
9	60.0	27.3	〃	
14	40.5	28.9	〃	
15	35.0	25.0	〃	
16	55.5	35.4	〃	
17	50.0	37.3	〃	

第2図 1号建物

2. 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は陶磁器13点、石製品2点、縄文時代の石器1点である。以下各器種毎にその特徴を述べていくが、法量や出土位置など一応のデータは観察表中に記している。文中では個々の遺物についてあまり細かく触れていない点もある。なお文中で言う遺物の年代というのは、その製作年代のことを言っている。

(1) 磁器 (第3図、写真図版3)

6点出土している。1は肥前産の碗で1690～1780年代のものである。2も肥前産の可能性が高い。3は型紙刷りの碗で明治以降のものである。産地は不明である。4は肥前産の皿で1690～1780年代のものである。見込みは蛇の目軸刺ぎである。5、6は銅板印刷の皿で明治以降のものである。

(2) 陶器 (第3・4図、写真図版3・4)

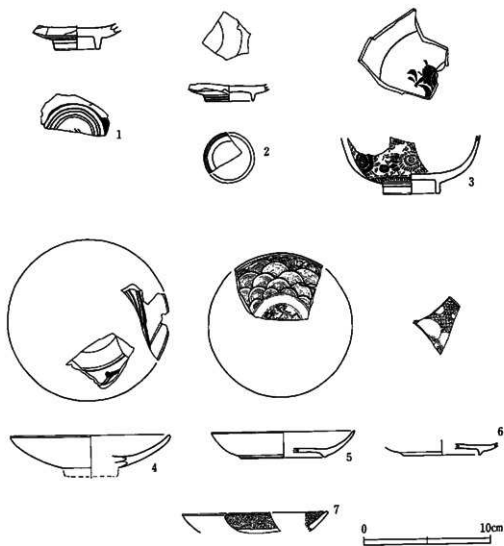
7点出土している。7は白岩産の皿で白釉がかけられている。8は見込み蛇の目軸刺ぎの皿で、深緑色の種別不能の釉がかけられている。産地年代は不明である。9、10、11は白岩産の鉢である。いずれも外面下半は鉄釉、内面と外面上半は白釉がかけられている。12、13は楕鉢である共に内外面鉄釉がかけられている。産地年代は不明である。

(3) 石製品 (第5図、写真図版4)

石製品は砥石と硯が各1点出土した。砥石は裏表両面が使われている。石質は緑色凝灰岩である。硯は欠損している。時代は不明である。

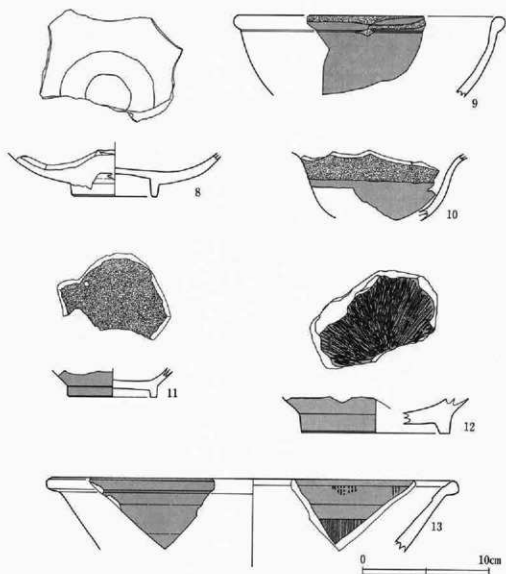
(4) 縄文時代の石器 (第5図、写真図版4)

16は縄文時代の石器で石匙である。盛土中からの出土なので土と共に運ばれてきたものであろう。



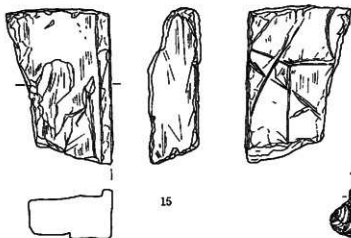
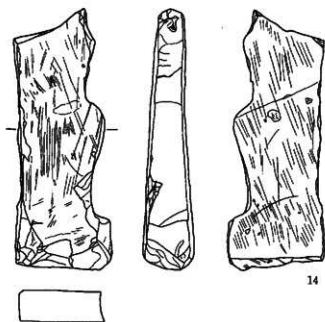
番号	器 種	出土位置	法 量 (cm)			胎 土	釉薬・胎付	製作地	年 代	備 考
			口径	高さ	底径					
1	磁器碗	I-17 I層	—	(1.3)	3.7	灰 白 色	胎付(青色)	肥前	1690~1780	
2	磁器碗	I-17 I層	—	(1.1)	3.6	白 色	染付(褐色)	肥前?	不明	
3	磁器碗	G-12 I層	—	(4.5)	4.4	白 色	胎付 (コバルト)	不明	明治以降	
4	磁器皿	I-19 I層 I-21 I層	12.8	(2.7)	—	白 色	染付(暗緑色)	肥前	1690~1780	
5	磁器皿	G-13 I層	5.7	2.1	3.4	白色ガラス質	刷印 (クローム)	不明	明治以降	
6	磁器皿	G-19 I層	—	(0.4)	3.1	白色ガラス質	刷印 (青色)	不明	明治以降	
7	陶器皿	I-17 I層	11.6	(1.5)	—	浅黄褐色	白粉(空色)	白岩	1771~19C	

第3図 陶磁器実測図(1)



番号	器種	出土位置	法量 (cm)			胎土	釉薬・絵付	製作地	年代	備考
			口径	高さ	底径					
8	陶器 皿	J-21田層	—	(3.4)	6.8	橙色～灰色	深緑色の釉	不明	不明	
9	陶器 鉢	H-17田層	21.5	(6.4)	—	灰色	白釉(青白色) 鉄釉	白岩	1771～19C	内面白釉
10	陶器 鉢	J-12田層	—	(5.1)	—	灰色	白釉(紫色) 鉄釉	白岩	1771～19C	内面白釉
11	陶器 鉢	G-17田層	—	(2.1)	7.1	灰色	鉄釉 白釉(青白色)	白岩	1771～19C	内面白釉
12	磁器 鉢	I-19田層	—	—	11.8	淡黄褐色	鉄釉	不明	不明	
13	磁器 鉢	H-19田層	32.8	(5.8)	—	灰色	鉄釉	不明	不明	

第4図 陶磁器実測図(2)



番号	部 種	出土位置	法 量 (cm)			石 質	備 考
			最大長	最大幅	厚さ		
14	磁 石	H-17II層	13.9	5.0	1.7	綠色凝灰岩	
15	礫	H-17I層	(8.0)	(5.5)	2.5		欠損
16	石 匙	J-16I層	2.6	2.6	0.5	鉄 石 英	

第5図 石製品実測図

3. ま と め

本遺跡で出土した陶磁器は近世から近代にかけてのものであるが産地は肥前産、白岩産のものがみられ、白木野II遺跡の陶磁器と類似した様相を呈している。これらの陶磁器は本遺跡の近辺から紛れ込んできたものと思われる。縄文時代の石匙も耕作土からの出土であり付近からの紛れ込みと考えられる。

検出された掘立柱建物は埋土の状況や、使用されている柱間寸法から考えてごく新しいものと考えられる。付近の人の話では、近年まで小屋などは掘立柱が普通であったということである。この遺構もそのような民俗資料として貴重なものといえよう。

写 真 图 版



調査前（東側）

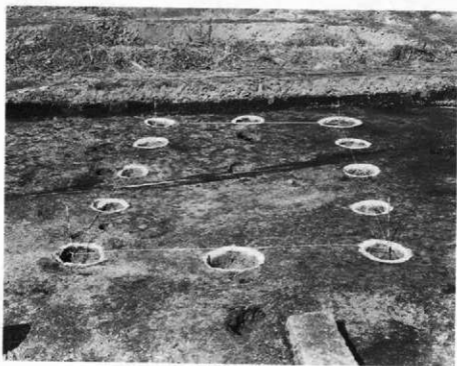


基本土層（東側）

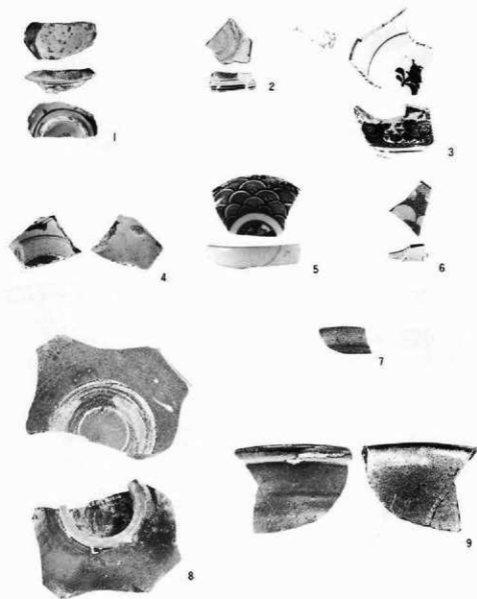
写真図版 1



I号建物 柱根



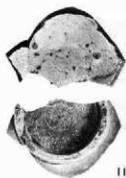
I号建物 N→



写真図版3 遺物(1)



10



11



12



13



14



15



16

写真図版4 遺物(2)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	高橋重實				
副所長	高橋敬明				
〔管理課〕					
管理課長	澤田寛		嘱託	吉田十次	
主事	佐藤理恵		〃	野崎他夫	
〃	久保田幸恵				
〔調査課〕					
調査課長	鈴木恵治		文化調査員	松本建速	
補佐	三浦謙一		〃	笹平克子	
〃	高橋與右衛門		〃	花坂政博	
主任	菊池強一		〃	佐々木昭彦	
〃	渡辺洋一		〃	金濱田宏	
〃	高橋正之		〃	濱阿部勝雅	
〃	工藤利幸		〃	星羽直人	
〃	中川重紀		〃	羽高木晃	
〃	佐々木清義		〃	高村上田精	
〃	高斎藤孝		〃	村鎌田哲	
〃	千川貞行		〃	鎌柳業樹	
〃	川鈴木格		〃	柳千高	
〃	伊東充		〃	高瀬佐藤	
〃	吉藤邦敏		〃	佐稲垣博	
〃	斎藤明		〃	神橋一宏	
〃	高橋治		〃	高小酒勉	
〃	小酒井宗		〃	鎌田のり子	
〃	小山内透		〃	平澤昭太郎	
〃			〃		
〔資料課〕					
資料課長	村松義夫				
文化調査員	駒嶺高				

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第200集

白木野 I・II・III 遺跡発掘調査報告書

東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査

印刷 平成 6 年 3 月 25 日

発行 平成 6 年 3 月 31 日

発行 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020 盛岡市下飯岡11-185

電話 (0196) 38-9001~2

印刷 株式会社 杜陵印刷

〒020-01 盛岡市みたけ二丁目22-50

電話 (0196) 41-8000①
